

少子高齢社会における
サラリーマンの生活・就業スタイルの多様化に関する研究

平成15年3月

財団法人 シニアプラン開発機構

はじめに

財団法人シニアプラン開発機構はサラリーマンの生活と生きがい、およびサラリーマン生活のベースとなる企業の雇用諸制度に関する各種の調査研究を行なっている。

21世紀の高齢社会を迎え、サラリーマンが終生にわたり、その持てる能力を活かし、いきいきと主体的に生活できる基盤作りを検討していくことの意義は大きいと考え、そのような観点から少子高齢社会におけるサラリーマンの生活・就業スタイルの多様化に関する研究を立ち上げることにした。

現在、少子化・高齢化の急速な進展、雇用環境の変動の局面の中で、サラリーマンの生活・就業スタイルも大きな変化の時期にきていると言えよう。

サラリーマンの生活・就業スタイルの変化を考える場合、高齢化、長寿化の中で仕事と家庭、社会活動、その他のプライベートな生活をバランス良く調和させたライフコース形成、男女共同参画社会の進展の中で夫婦における仕事と家族役割の調整・調和、雇用制度・慣行の変化による働き方の多様化、柔軟化、定年制度の変容など、就業・生活に関わる新しい可能性が言われる。

そして、これらがサラリーマンの生活・就業スタイルをどう変化させていくのか、就業面の変化と生活面の変化は相互にどのように影響するのか、そのような変化の中でサラリーマンが生きがいを持ち、多様性を享受するためにはどのような条件が必要なのかなど、多くの論点がある。

当研究ではこれらの論点を踏まえ、就業と生活の変化を双方向的に考察し、それらの変化と生きがいとの関係を考え、そのような変化が生きがいあるものとなる条件を探るべく取組みを行なった。

当財団では過去10年間において「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」を実施したが、そこでの知見より時代環境の変化とともに生活と生きがいの多様化が予測された。当研究では、そのような生活面、就業面の多様化が具体的にどのように進んでいくかを、より実態的に検証することを意図したものである。

併せて21世紀におけるサラリーマンの生活の在り方を考える上でのパラダイム構築の一助になれば幸いである。

最後に当研究、調査に多大なご協力頂いた方々に改めて感謝の辞を捧げる次第である。

平成15年3月

財団法人シニアプラン開発機構

「少子高齢社会におけるサラリーマンの生活・就業スタイルの多様化に関する研究」
研究会メンバー

- 座長：前田 信彦 立命館大学産業社会学部 助教授
- 副座長：安藤 究 鹿児島国際大学福祉社会学部 助教授
- 藤本 隆史 上智大学大学院博士後期課程（文学研究科）
- 池田 心豪 東京工業大学大学院博士後期課程（社会理工学研究科）
- 佐藤 仁之 厚生年金基金連合会 上席調査役
- 正木 祐司 財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員
- 田村 健一 財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員
- 吉岡 徹翁 財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員

目次

はじめに

目次

第1部 研究の概要	1
1. 研究の目的と枠組み	3
2. 調査・分析の枠組み	4
第2部 要約と示唆	9
第3部 生活と就業の側面	19
第1章 仕事・会社との関係	21
(執筆：東京工業大学大学院博士後期課程 池田心豪)	
第2章 夫婦・家庭との関係	47
(執筆：鹿児島国際大学福祉社会学部 助教授 安藤 究)	
第3章 地域・社会との関係	63
(執筆：上智大学大学院博士後期課程 藤本隆史)	
第4章 引退形成との関係	81
(執筆：立命館大学産業社会学部 助教授 前田信彦)	
第5章 生きがいとの関係	99
(執筆：財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員 正木祐司)	
第4部 調査結果の分析	135
(執筆：財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員 田村健一)	
(執筆：財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員 吉岡徹翁)	
調査データ	177

第1部 研究の概要

1. 研究の目的と枠組み

2. 調査・分析の枠組み

第1部 研究の概要

1. 研究の目的と枠組み

(1) 研究の目的

当研究における目的は、21世紀社会におけるサラリーマンの生活面、就業面の多様化の方向を分析し、そのような傾向が自己実現性、生きがい度の高いものとなるかを検証することである。

当財団では過去10年間（平成3～13年）において「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」を実施、その知見より時代環境の変化とともに生活と生きがいの多様化が予測された。当研究では、そのような生活面、就業面の多様化が具体的にどのような形で認められるのか、また、生きがいとの関係はどうなっているのかという点を、より実態的に検証することを意図するものである。

わが国では周知の通り、少子化、高齢化が急速に進展、また、近年における雇用環境の変化などと相俟って社会・経済状況も大きな変動の局面を迎えようとしている。サラリーマンの生活・就業スタイルの変化もそのような文脈の中で見るべきものと考えられよう。そして、変化の方向として、長寿化に伴ない、より長くなる壮年期を前提とした「仕事、家庭、その他の活動を並列できる多様なライフコースの選択」の可能性、夫婦の新しい役割像に基づく「仕事と家庭責任の調和と夫婦のコンビネーション」の可能性が考えられる。

当研究では、このような可能性を検証するとともに、生活・就業スタイルの多様化が自己実現性、生きがい度の高いものとなるかを検証するものである。

(2) 研究の枠組み

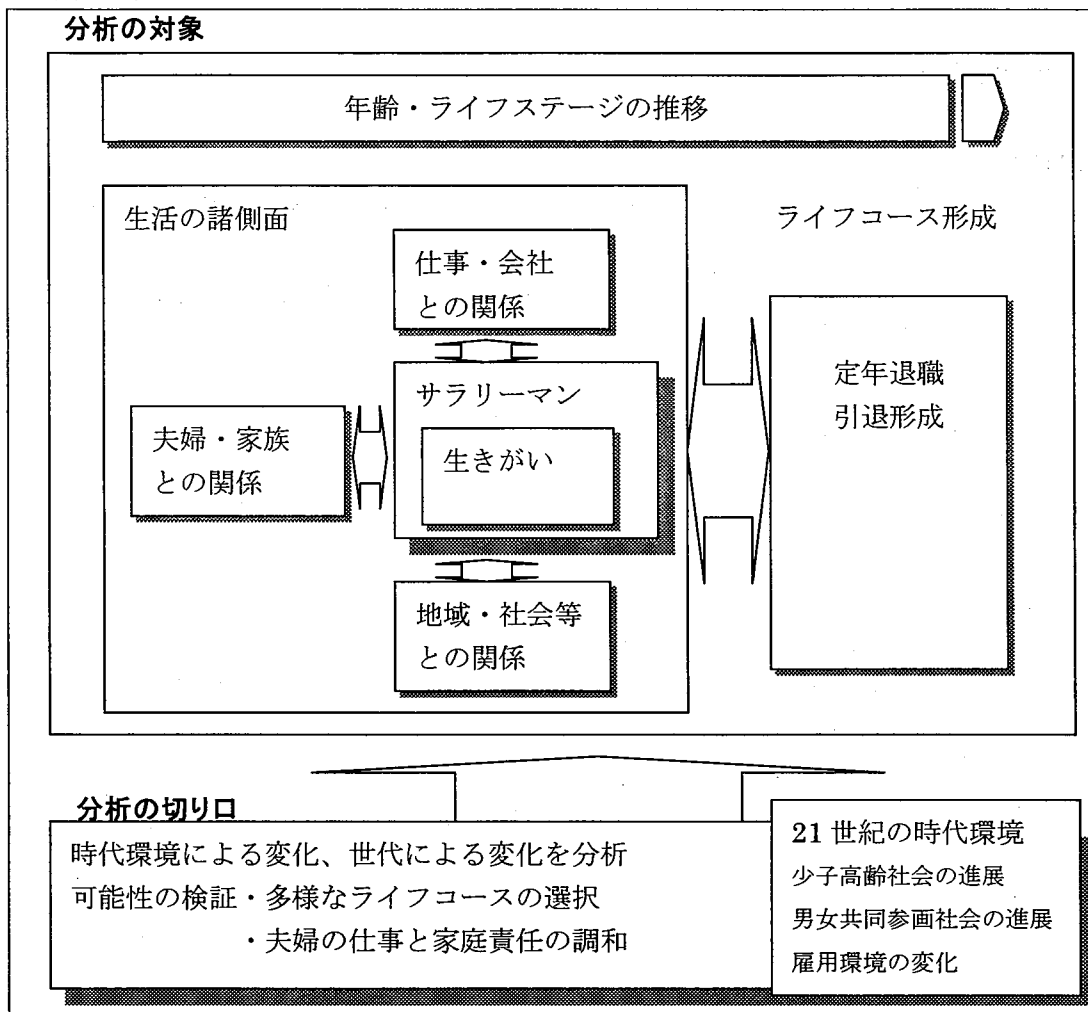
サラリーマンの生活・就業スタイルの多様化を考えるにあたり、まず、「生活の諸側面」における実態を見ていくこととしたい。具体的には、「仕事・会社」との関係、「夫婦・家族」との関係、「地域・社会等」との関係である。それぞれの年代、ライフステージにおけるこれらとの関係が、時代とともにどのように変わっているのか、世代による変化が見られるかという点を見ていきたい。

また、サラリーマンの場合、「定年退職」ということが一つのポイントとなると考えられる。定年は仕事・会社面のみならず、生活全般の大きな転換点と考えられてきた。しかし、雇用環境も大きく変わり、また、高齢化、長寿化とともに定年後は人生の余禄ではなく、新たな人生の展開であるとも言われる。そこで、このような定年期の実態を見る。また、定年期形成のみでなく、より広くライフコース形成という枠組みを視野に、時代による変化、世代による違いを見ることとしたい。

また、以上の生活面、就業面の変化、定年期の変化と「生きがい」との関係を見ていきたい。生きがいとの関係を見ることで、そのような生活面、就業面の変化、あるいは定年期の在り様の変化が個々人において、どのように評価されているかを知る手がかりとなると考える。

そして、21世紀における少子高齢社会、男女共同参画社会の進展、雇用環境の変化という状況において、定年退職と引退形成の意味付け、夫婦の家族役割、生活における仕事のウェイト付けの面などにおける変化と生きがいとの関係を考察する枠組みとしたい。

<研究の枠組み>



2. 調査・分析の枠組み

(1) 調査の枠組み

当研究は、「サラリーマンの生活と就業スタイルの多様化に関する調査」（平成15年実施）および「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」第1回～3回（平成3年、8年、13年実施）の調査結果に基づく。

「サラリーマンの生活と就業スタイルの多様化に関する調査」（以下、生活・就業スタイル調査）は就業面、家族面、社会活動面をより詳しく聞いており、生活諸側面の実態をより細かく見ることができる。対象は35～69歳の就業者を中心とする男性とその配偶者とした。男性と女性では同じ就業者といってもかなり意識・態度の傾向に違いがあることが予測されるため（注）、より伝統的タイプである男性就業者とその配偶者の仕事と家庭、その他の場の変化を分析するという観点から組み合わせを限定した。従って、女性就業者に関する分析は次の機会に行うこととしたい。

注) 生きがい調査では、幾つかの点において男女の顕著な傾向の違いが認められた（第3回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査2002年）

また居住地は1都3県（東京、神奈川、埼玉、千葉）に限った。これは新しい動きが都市部により顕在化しているのではないかと考え、今後の全国的動きを占う上で先行指標になるのではないかと考えたためである。

一方、「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」（以下、生きがい調査）は平成3年を起点とする10年間における5年毎の3時点調査であり、その間の生活と生きがいの傾向変化を追跡することができる。対象は35～74歳の就業者を中心とした男女とその配偶者で、全国の厚生年金基金の加入者および受給者より抽出されている。

当研究では、これらの調査結果を分析することで、生活諸側面の変化の相互関係を把握し、あわせて、時代、世代における変化を把握することを意図する。

生きがい調査と生活・就業スタイル調査の枠組みは以下の通りである。

調査	実施時期	枠組み
生活・就業スタイル調査	平成15年	35～69歳の就業者を中心とした男性およびその配偶者を調査。（合計約1,600人） 仕事・会社、家族関係、社会活動等の意識、実態調査。 仕事・会社、家族、社会活動をより詳しく聞いており、生活諸側面の実態をより細かく見ることができる。
生きがい調査（第1～3回）	平成3年 8年 13年	35～74歳の就業者を中心とした男女およびその配偶者を調査。（3回合計約16,700人） 生きがいと、仕事・会社、定年退職、家庭（夫婦関係が中心）等の生活面についての意識調査。 10年間における3時点調査であり時代差が把握できる。

*調査の詳細についてはP.137以降を参照。

(2)分析の枠組み

生活諸側面（仕事・会社面、夫婦・家庭面、地域・社会面）の変化およびその相互の関係を時代別、世代別に見るとともに、定年期を中心としたライフコース形成の変化、生きがいとの関係を見るなかで多様化と個人の選択可能性、個人化傾向等との関係を分析する枠組みとしたい。

①仕事・会社面

仕事・会社に対する意識・態度、仕事や職場で重視すること、会社や仕事における習慣、望ましい職業キャリア観、家族の期待等をもとに仕事・会社の生活全体における位置付けを分析する。

②夫婦・家庭面

夫婦間のコミュニケーション、行動における関係、世代間関係（親子関係、祖父母と孫との関係）、および家族との紐帯、家族への満足度、家族観を通じ、習慣、価値観の変化を分析する。

③地域・社会面

仕事・会社面、家庭面以外の側面である。地域・社会活動の団体への帰属、活動、活動に対する考え等をもとに生活全体における位置付けを分析する。

④定年期を中心としたライフコース形成

従来、定年は生活面全般における大きな転換点とされてきたが、雇用制度の変化、高齢化の中でその意味するところも変わりつつあると考えられる。定年期あるいは定年移行期をそれのみ論ずることには自ずと限界があろう。

そこで、ライフコース形成の文脈の中での定年移行期の位置付けをはかり、仕事、家庭、地域・社会活動等のウエイトの置き方の動きを見ていきたい。上記①～③が生活諸側面を横断的に俯瞰するのに対し、ライフコースを縦断的に俯瞰し、その形成における選択可能性の広がりを検証する。

⑤生きがいの関係

生活の諸側面、ライフコース形成、引退形成の変化と生きがいの関係を見ていき、可能となる生活スタイル、就業スタイルが生きがいを感じられるものであるのかということ进行分析する。

既述の生きがい調査においても、人は何らかの形で生活環境との折り合いを見出そうとするものであるが、それがうまくいっているかどうかの評価が生きがいの持ち方に影響することが示唆されている。生活・就業スタイルの多様化において、それが享受され、生きがいを感じられるものであるかを検証する。

21世紀における生活・就業スタイルの多様化を考える上でポイントとなるのは、より若い世代が今後、どのようなライフコース形成を行ない、その文脈の中でどのような引退形成を行っていくかということであると考ええる。

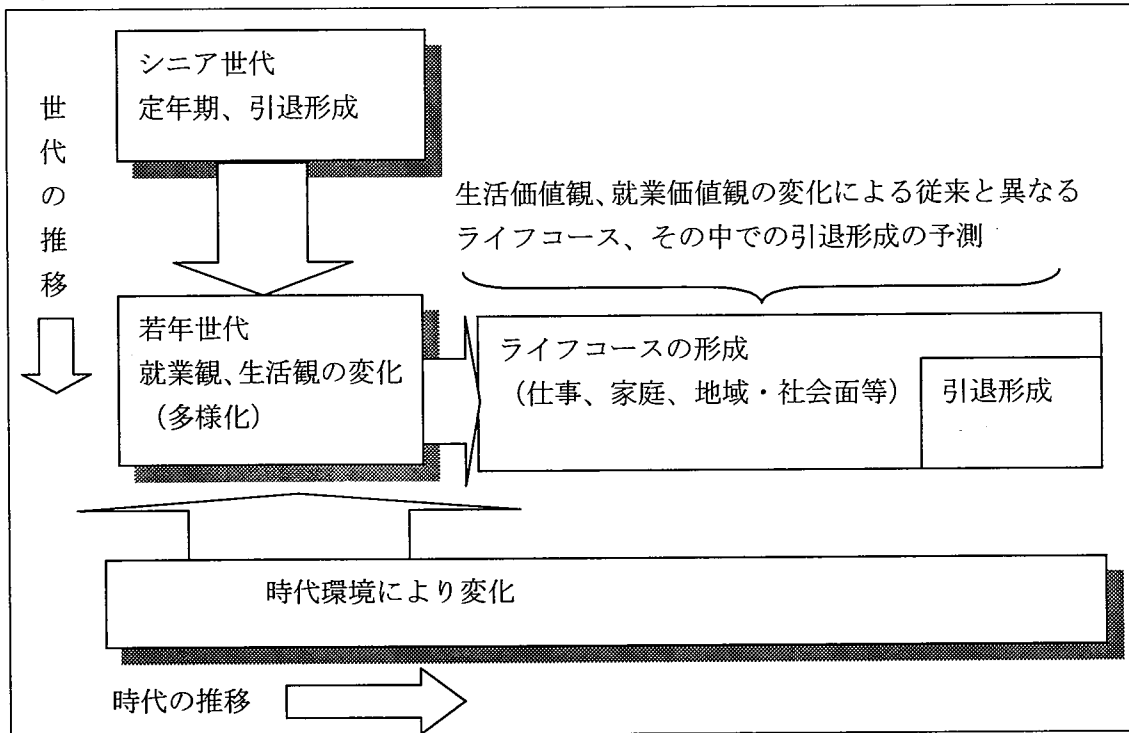
従って、既に定年期、引退形成期を迎えたシニア世代の現状を把握するとともに、若年世代が持つ生活価値観、就業価値観に注目し、生活諸側面の傾向、定年、引退に関する意識・態度を見る中で、シニア世代との違いを把握し、ライフコース形成、引退形成の在り方を予測することを分析の視点としたい。

より長くなる壮年期、生活・就業面の多様性、選択肢の増加を勘案するならば、定年期、引退形成期の取組みだけを考えるのではなく、より若い時期から、より広くライフコース全体の形成を考え、その中で就業、家庭、地域・社会活動などを組み立て、そのような文脈の中で、引退形成を考えていく必要があると思われる。

生きがい調査においても、時代による環境変化が生活面に大きな影響を与えることを前提に、少子高齢社会、男女共同参画社会の進展、雇用環境の変化という21世紀の社会情勢において、「より長くなる壮年期、就業人生を前提に、仕事、家庭、その他の活動をバランス良く並列させた自己実現性の高いライフコースの形成」、また、それを実現するための「仕事と家庭責任における夫婦のコンビネーション」の重要性が示唆された。

このような知見も踏まえ、当研究では生活の実態面に焦点をあて、そのような生活と就業の再構築の可能性を検証するとともに、それが自己実現性と生きがい度の高い人生を可能とするものとなるかを見ていきたいと考える。

<ライフコースの形成、引退形成の予測>



第2部 要約と示唆

第2部 要約と示唆

1. 会社・仕事との関係

日本のサラリーマンの生活スタイルは、終身雇用のもとで生活のあらゆる面を会社に依存した会社主義的なものであったが、近年、終身雇用と年功序列を柱とする日本型雇用慣行の動揺や生活意識の変化により、会社に依存しない価値志向が広がりつつある。ここでは昨今のサラリーマンの会社とのかかわり方を再検討しながら、今後定年を迎える現役層が持つ定年後の生活と就業への展望を明らかにする。

分析と知見

会社とのかかわり方は、会社主義的な「全面関与型」・「出世志向型」と脱会社主義的な「限定関与型」・「自立志向型」の4つに類型化することができる。

a. 全面関与型

自分の会社に尽くしたいと考えていたり、職業生活の様々な面において会社との一体感が強いことを特徴とする。望む職業キャリアは一企業管理職コースであり、労働条件については成果主義も支持し、今の会社に勤めつづけることを前提に経済的な生活設計をしている。

定年後の生活では、企業年金を主な生計の手段として期待し、雇用延長や出向先への転籍などにより企業に留まって好きな仕事をして働き続けるとの展望が示されている。しかし、定年後に人的交流や情報量が減ることに不安を感じている反面、定年後の社会参加への意欲が見られる。したがって、定年後は会社に留まることが難しい場合にも、会社の代わりとなる社会参加の場をもつことが求められると考える。

b. 出世志向型

多少無理しても出世したいという意識が強く、会社との一体感よりも個人の地位達成が前面に出ているところに特徴がある。重視する労働条件は賃金や社会的評価の高さと成果主義的な処遇であり、キャリアについても管理職コースを志向している。

定年後の生活では、全面関与型と同様に、雇用延長か出向先に転籍することにより企業に留まることが望み、そうでなければ再就職して好きな仕事をして働き続けるとの展望をもっている。地位達成への志向性が高い出世志向型にとって定年退職は「生きがいの喪失」や「所属・肩書きの喪失」などアイデンティティの危機を伴う経験である。したがって、定年後に会社で相応の地位を保障できない場合にも、社会生活の様々な場面で指導者やアドバイザーとしての役割を担うことがアクティブ・エイジングにつながると考える。

c. 限定関与型

会社に勤めつづけられるか不安をもっており、会社へのコミットメントが低い。しかし、会社から自立できるほどの自信はなく、会社と「つかず離れず」の関係を維持し、働き方についても明確な志向をもたず、曖昧な姿勢をもっている。

定年後の生活に対して経済的不安をもっている一方で、経済的にゆとりのある生活を望んでもいる。しかし、主たる生計の手段として当てにしている収入源はなく、再就職や簡単な仕事をし

ながら仕事を続けるとの展望を持ちながらも再就職に不安を感じている。したがって、再就職支援を初め、今後もっとも支援が必要とされる層である。

d. 自立志向型

脱サラへの志向性や、どの会社でも通用する職業能力があるとの自信があり、会社に依存していない意識を特徴とする。重視する労働条件は、成果主義的な処遇と勤め先が変わっても通用する職業能力が身につくことであり、複数企業型キャリアか雇用後に独立する職業キャリアを望んでいる。

定年後の生活については、会社からの離脱は不安を伴う経験ではなく、新しい事業を始めたり、再就職したりして新たな生活へと踏み出すきっかけとして前向きにとらえている。定年後の生計も現役時代と変わらず就労による収入を考えている。したがって、自立志向型には、独立・開業支援や再就職のための情報提供などにより、新しい仕事への移行をスムーズに行えるよう支援することが重要である。

示唆

会社との関わり方の4類型のなかで定年後の見通しが最も暗かったのは、限定関与型である。会社に全面的に依存することもなく、自立もできない、会社との曖昧な関係を維持している。このため、労働条件やキャリアにおいても曖昧な姿勢を示しているが、これは、外部労働市場で通用する職業能力や資格を蓄積していないことが、会社から自立できない要因となっていると考えられる。この曖昧さは、定年後の生活設計にも表れており、働き方についても明確な志向をもたず、会社に定年まで勤め続けることができる不安のみが高い。この層は、勤務先での自主退職が多い層であり、定年後の就業については再就職や新しい事業を展望しており、自立的な志向性もあることから、限定関与型の自立支援が、定年後の就業支援の重要な課題になると考えられる。

2. 夫婦・家庭との関係

サラリーマンの生活・就業スタイルの変化の方向として、長寿化に伴い、より長くなる壮年期を前提とした「仕事と家庭、その他の活動を並列できる多様なライフコースの選択」の可能性、夫婦の新しい役割像に基づく「仕事と家庭責任の調和と夫婦の役割りの共有」の可能性が考えられる。ここでは「生活」の中で大きな位置を占める「家族」領域、特に夫婦関係と親子関係（子供との関係）について概観する。

分析と知見

a. 「団塊の世代」夫婦の親密性認知

①「団塊の世代」の夫婦の親密性認知得点は、全体的に他のコーホート（プレ団塊世代、ポスト団塊世代）よりも点数が低い。（例外は2001年の第3回の調査における「ポスト団塊」の妻）（注）この特徴は、特に夫において顕著であり、それは加齢効果ではなく、コーホート効果や何らかのキャリア上の位置（例えば職業キャリア）と時代効果の相互作用などを考慮する必要がある。

「団塊の世代」に関しては、男性の職業生活におけるユニークさや女性の家族領域におけるユニークさは指摘されていたものの、「団塊の世代」の男性の家族領域における特徴は十分には検

討がおこなわれてこなかったもので、ここでの知見は、さらに今後調査をして深めていくべきである。

b. 夫婦の親密性得点と社会活動および生活基盤領域(認知)

- ①家族領域内の夫婦の親密性認知は、家族外領域と密接に関連しており、夫婦ともに、家族外領域の社会的活動を行なうことは、それぞれの夫婦の親密性認知得点を高める方向に作用することが伺える。
- ②生活の基盤領域(認知)との関連では、夫婦ともに、低い親密性認知は、「自分の居場所がない」と感じていることの結果であるといえる。

c. 親子関係の行動レベル

- ①親と子(高校生以下)の一緒に行う活動は、活動の種類に関わらず、母親の方が父親よりも活動頻度が高く、子育ての担い手は依然として母親が中心である。
- ②男性の「働き方」は、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動(知識や技能を教える等)においては、余暇活動と有意な関連がやや見られるだけで、全体的にはあまり関連していない。
- ③母親については、「働き方」も含めた母親の生活スタイルが違いをもたらすのは、必ずしも毎日行われるわけではない余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動においてであり、母親の雇用の形態は、母親の子どもとの日常的な接触に有意な違いをもたらしていない。また、母親が専業主婦である場合でも、フルタイムで働く場合行動レベルにおける大きな違いはなく、親子関係の決定的な妨げとなっていない。したがって、「働く母親」と「働く父親」の子どもと一緒に活動する頻度の差は、「働く母親」の努力の存在が伺える。

示唆

「夫婦の親密性」という「私」(プライベート)領域に「公」(パブリック)が直接介入することは技術的にも倫理的にも困難であるが、家族外領域での活動が親密性の高い認知と関連し、「居場所がない」という感覚が親密性の低い認知と関連していることは、「自分の居場所」の確保につながる可能性のある社会的活動を、容易に行えるような社会的環境を検討・用意する価値を示唆する。

また、親子の関係の分析からは、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動を父親が増大させることが、母親のこれらの活動項目のみならず、日常的な接触も増大させる可能性が得られている。従って、子どもとの接触頻度が総体的に増加することが親子関係にとってプラスとなるならば、「父親の育児・子育てへの参加」は、父親自身の子どもの関係の向上だけでなく、母親と子どもの関係の向上にも寄与する可能性があるという点において、積極的に支持されるべきである。

3. 地域・社会との関係

仕事や職場に対するコミットメントが低下しているといわれている中で、家庭・家族のほかにそれを埋める生活領域として、地域や社会活動は重要な位置を占めるようになっていられるが、現状では、社会活動の参加率は全体として1割強である。ここでは、社会活動への参加の規定要因

を探り、活動の実態を見るとともに、社会活動に参加するうえでの障害などについても検討する。

分析と知見

a. 社会活動参加の規定要因

- ①サラリーマンにとって社会活動は、一般的に高齢（定年前後）になり時間的あるいは経済的、精神的余裕ができたところで実際に参加しているが、女性の配偶者にとっては子どもを通じた（半強制的な）親同士の活動が中心である。また、定期的な参加の継続には、配偶者間の理解がベースとなっている。
- ②郡部ではもともと社会関係がより密であり、社会活動に参加する機会も多い。そのため、市部では高齢になってから参加の割合が高まるのに対し、郡部でも高齢になると割合は高まるが、市部に比べると若年から高い割合を示す。また、若年から社会活動に参加することで地域・社会との関わりを持つことは、社会生活の職場からの移行をスムーズなものとすると考えられる。社会参加を、地域や社会を単なる居住空間としてだけでなく、社会関係を含めた生活の場としてとらえ、個人の関心や時間的、経済的、精神的許容量などを勘案しながら、個人のライフコースに応じた社会生活のバランスを考えていく必要がある。

b. 社会活動参加の障害

- ①社会活動への参加の障害となっているのは、「時間がない」「きっかけがつかめない」ということである。
時間の点については、参加の形式による解決が考えられる。必ずしも定期的に参加するというのではなく、普段は活動についての情報を共有するだけで、重要なイベントのみに参加するということも可能である。
- ②社会活動には、しがらみや義務感など、特に精神的に負担のかかるものであるというイメージがある。
参加者が限られる中においては、自発性を促進するような気軽に利用、参加できるものであることが、その裾野を広げるという点で望ましい。それには、そのような情報を共有する場が必要であると考ええる。

示唆

社会活動を活性化するというときに、伝統的な地域共同体での相互扶助的な関係を再構築するというよりは、それぞれの関心を共有するような形での社会関係の活性化が進み、今後は環境や福祉、教育など様々な分野において NPO などを通じた社会活動が広がっていくものと考えられる。

社会活動に参加することは、気軽に楽しめる趣味的な面もあるが、働く場を職場から地域・社会へ移行するという面もある。企業で働くこと以外に、自分の労力によって社会に何かを還元し、また自分自身もその活動を通じて成長する機会がそれによって得られるであろう。

4. 引退形成との関係

我が国の場合、終身雇用を前提としていた時代においては、生涯勤め上げた会社からの定年退職は、同時に「労働」からの引退を意味していたともいえる。しかし近年、日本的雇用慣行が変化する中で、中高年層をとりまく労働市場の変容、あるいは高齢期の就業意欲の高まりなどによって、中高年にとっての「定年」を契機とした職業キャリアの形成は大きく変化しつつある。ここでは、定年を契機として、中年期から高齢期にかけてのライフステージを、第二のキャリア形成期として位置づけ、定年後においてもライフスタイルとの調整をはかりながら生活・職業キャリアを形成する制度の可能性を探る。

分析と知見① 「生きがい調査」から(注)

a. 定年のタイミングと定年後の職業キャリアの分析

- ①1991年以降10年間に、定年年齢が50歳代から60歳代へと遅れている。
- ②1991年以降10年間に、定年後は労働市場から完全引退する割合が高まっている。
- ③1991年以降10年間に、雇用延長は減少している。

このような傾向は、(1)55歳から60歳定年へと定年年齢(タイミング)が遅れるようになった(2)雇用環境が悪化したため、雇用延長をできる企業が減少した、といった要因によるところが大きいと考えられるが、いずれにしても「失われた10年」という経済的な不況期において、中高年労働者の定年後はかなり厳しい雇用情勢であったことが伺える。

b. 定年への意味づけと定年後の職業キャリアの分析

- ①1991年-2001年の10年間に、定年の意味が変化している。特に「組織や肩書きがなくなる」あるいは「接触する人や情報が減る」といった否定的な意味づけが減少している。
- ②逆にこの10年間に、定年を「自由な時間が増え自分を取り戻す」「新しい人生が開ける」として捉えるような新しい価値志向が生まれている。
- ③ボランティア就業型は、「経済的に苦しくなる」というイメージが減少し、逆に「新しい人生が開ける」という項目が増えている。
- ④独立開業・自営型は、定年退職にもっとも肯定的であり、とりわけ「時間が増えて自分を取り戻す」「新しい人生が開ける」という意識が強まっている。

分析と知見② 「生活・就業スタイル調査」から

a. 定年後のキャリア志向とその規定要因の分析

- ①都市圏居住の30歳代後半から50歳代にかけての中年男性についてみると、定年退職後の生活・職業キャリアの志向は「雇用延長・出向型」、「完全引退型」、「独立・開業・自営型」が比較的多い。「ボランティア就業型」や「ボランティア参加活動型」は10%程度であるが、全国サンプルの60歳代男性に比べると高い水準である。
- ②「学歴」別のキャリア形成をみると、学歴が高いほど、定年後は転職によって別会社に就職する志向がみられ、低学歴層では、定年後は労働市場から完全に引退したいという志向がみられる。また、高学歴ほどNPOやNGOなどのボランティア活動・地域貢献に関わりたいとする志向も強いが、低学歴層はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をしたいという傾向が見られ

る。

- ③「職種」別のキャリア形成をみると、「雇用延長型」や「転職型」は専門・技術職に多い。また、「ボランティア活動型」は技能・サービス職で少なく、管理職や専門・技術職などのホワイトカラー層で多くなる。逆に「ボランティア就業型」は専門・技術職で少なく、技能・サービス職に多い。つまりホワイトカラー層ほど NPO などのボランティア活動への志向が強く、ブルーカラー層ではシルバー人材センターなどのボランティア就業への志向が強まるといえる。
- ④キャリア形成に及ぼす経済的要因についてみると、収入の高いほど「完全引退」や「ボランティア活動型」を選ぶ傾向がみられる。またローンがある家計状況では、定年後は労働市場から離れることなく、なんらかの形で働き続ける志向をもっている。つまり、定年後のキャリア形成は、現在の年収やローンの有無といった経済的要因に大きく左右される。

b. 中年期の職業キャリアの志向と定年後のキャリア形成

- ①中年期に「独立・開業志向」を持つ者ほど、定年後は「ボランティア活動型」を志向する傾向がみられる。
- ②会社から離れての独立・開業は、「起業家精神（アントレプレナーシップ）」のあらわれともいえるが、そのようなメンタリティーは NPO や NGO のようなボランティア活動型のキャリア形成を促すことが推測できる。

c. アンペイドワークと定年後のキャリア形成の分析

- ①アンペイドワークへの評価をみると、最も得点の高いのは「独立・開業型」であり、次いで「転職型」、「雇用延長型」となっている。逆に「ボランティア活動型」や「ボランティア就業型」は低い得点となっている。
- ②独立・開業志向の者は、アンペイドワークを、「（賃金を得る）仕事」として捉えることによって、働くことをより定義し、またそれを自分の仕事として位置づけるような志向を持っている。
- ③独立・開業志向の者は、「働くこと」を広く定義づけていることから、その背景にある「起業家精神（アントレプレナーシップ）」は、高齢期の働き方の意味の変化や、働き方の多様化、あるいは多様な生活・職業キャリアの展開を促す契機となることが推測できる。

示唆

高齢者は、従来の会社人間にみられたような「定年＝引退＝孤独で寂しい老後」といったイメージではなく、むしろ定年を長い人生の中でのキャリアを形成していく中での一つの通過点としてとらえ、会社から離れて自由な人生を送るための再出発のためのライフ・イベントとして捉え始めているのではないかと思われる。

今後の高齢者の生活・職業キャリアを考える上で、重要な政策的インプリケーションのひとつは、雇用（会社で雇われて働くこと）だけが仕事ではなく、NPOや起業家などのもう一つの（オルタナティブな）働き方を、制度的にも積極的に位置づけるということであり、加えて、中年期から高齢期にかけての新たなライフスタイルに応じた、多様な働き方を可能にするような制度が必要であろう。

我が国においては、高齢者の「雇用延長」が政策的にも展開されつつあるが、働き方や働くことの意味をより包括的に捉え直し、企業で雇用される働き方のみならず、アクティブ・エイジングを前提とした多様なキャリア形成を支援する必要があると考える。

5. 生きがいとの関係

サラリーマンの生活・就業スタイルの多様化を考えるにあたり、生活諸側面（仕事・会社面、夫婦・家庭面、地域・社会面）の変化および定年期を中心としたライフコース形成の変化を見てきた。ここでは、それらと生きがいとの関係を見るとともに、時代変化の中で、あるいは世代推移の中で、生きがいの持ち方、生きがいと生活諸側面、ライフコース形成の関係がどのように変化しているかを見ていく。

分析と知見① -「生きがい調査」から(注)

a. 生きがいの概念

- ① 生きがい構成要素は個人の精神的、心理的欲求と関係し、「生活のほりあいや活力」のような生活規律的なもの、「心の安らぎや気晴らし」のような安定的なもの、「自分の可能性の実現」のような達成的なもの、「役立ちや評価を得ていること」のような対人親和的、有用感を得るものなど幅広い内容を持つ。このような要素の集合が生きがいを形成すると言える。
- ② 生きがいの意味として、どの要素を重視するかは個人により異なる。しかし、生活の実態面において人はこれらの要素のそれぞれを多少なりとも「家庭」「仕事・会社」「世間・社会」等の生活の諸側面から取得している。
- ③ 生きがいの有無には、生活の諸側面から生きがい構成要素を取得できているかということが関係する。生きがいを持っていない人は取得の場として、生活の主要な場である「家庭」を選択する割合が低く、「どこにもない」を選択する割合が高い。

分析と知見② -「生きがい調査」「生活・就業スタイル調査」から

a. 生活の諸側面、ライフコース形成

- ① 生活諸側面における満足感が高年齢層で高く、若年齢層で低い。どの年齢層でも「家族の理解・愛情」「健康」「仲間・友人」の満足感が高く、「近隣」「社会の役に立つ」の満足感が低い。3時点では全体的に直近の2001年が一番低い。「仕事」「近隣」「社会の役に立つ」が96年以降下がり続けている。また、自由時間の過ごし方の傾向も96年で大きく変わり、仕事、会社中心の生活からの転換が感じられる。
- ② ライフコース形成については若年齢層に定年前の退職の希望が強く、特にキャリアの節目で意識されるようである。今の会社を退職した後の仕事については、全体として「再雇用や勤務延長で今の会社に勤める」「別の企業に再就職」「職業生活から引退」の3つが高い。若年齢層では「自分で事業や商売」「わからない」も多い。3時点を見ると「引退」が増えており、依然、40～50代のミドルと呼ばれる層では仕事、会社を中心とした生活形成が窺えるが、時代変化の中で仕事、会社の求心力が薄れているようである。

b. 生きがい有無と生活面の傾向、ライフコース形成の傾向

- ① 生きがいを持っている人の傾向は生活満足感が高く、ライフコース形成においても希望と実際の乖離が小さい。希望を実現できること、あるいは希望と実際の折り合いをつけることができることが影響すると考えられる。
- ② 生きがいを持っている人の割合は年齢が上がるるとともに高くなる傾向が見られるが、これは、

年齢が高くなると日々の生活面の関係だけでなく、自身が形成してきた人生、ライフコースの意味の重要性が増し、これへの評価が生きがいに影響するようである。

示唆

終身雇用制度の終焉が言われ、雇用慣行も変わろうとしている。また、一方で少子高齢社会の進展が言われ、性、年齢を超えた様々な形での社会参加が言及され、より自己実現の高いライフコース形成が説かれている。そのような中で男性就業者も従来の仕事、会社を中心としたライフコース形成から、一方で転職、起業を視野に置き、また、家族役割、社会活動などを実現させるライフコースの選択可能性もでてきた。しかし、その選択可能性は自己の取組みの努力を要するものであり、自己実現を図っていくためには、それ相応の取組み、またサポートする体制も必要であると考ええる。

(注) シニアプラン開発機構 1992年第1回調査、1997年第2回調査、2002年第3回調査「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」

第3部 生活と就業の側面

第1章 仕事・会社との関係

第2章 夫婦・家庭との関係

第3章 地域・社会との関係

第4章 引退形成との関係

第5章 生きがいとの関係

第3部 生活と就業の側面

第1章 会社・仕事との関係

会社とのかかわり方と定年退職後の生活 ― 現役層に着目して

池田心豪(東京工業大学大学院)

I はじめに

「会社人間」とも呼ばれるように、会社組織への強い一体感は日本のサラリーマンの大きな特徴とされてきた。そして、こうした会社へのコミットメントは、仕事での貢献意欲が高いということのみならず、生活のあらゆる面で会社に依存し、会社での仕事や上司・同僚とのつき合いを最優先する、会社主義的な生活スタイルをも意味していた。

そうであるならば、今後の定年退職のあり方を展望するときも、「会社とのかかわり方」は重要な観点である。会社主義的なサラリーマンにとって、定年退職という会社からの離脱がもたらす諸々の断絶は生活全体にかかわるからだ。

しかし、近年ではこうした会社とのかかわり方にも変化が生じている。その大きな要因の一つが日本型雇用慣行の動揺である。これまでは、長期雇用（終身雇用）と年功制を柱とする雇用慣行のもと、一つの企業に定着した働き方がサラリーマンの主流であった。ところが、長引く不況のなか、倒産や人員整理（リストラ）、賃金の削減、成果主義の導入などにより、一つの会社に定着し安定した生活を送ることは期待できにくくなっている。

またもう一つの要因として、生活意識の変化も見逃せない。現代では、経済的な豊かさや社会的評価の高い地位の獲得よりも、ゆとりのある生活や「自分らしい生き方」を求める価値志向が広がりつつある。このため、生活の力点も仕事中心ではなくなり、会社で出世することへの志向性は減退しつつある。自分の生活を会社に捧げて出世しても、それが充実した職業生活を意味するとは限らなくなってきたのである。

そこで本章では、昨今のサラリーマンの会社とのかかわり方を再検討しながら、今後定年を迎える現役層がもつ定年後の生活と就業への展望を明らかにしたい。

まず、Ⅱでは「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」（以下では「生きがい調査」と略す）のデータから「会社とのかかわり方」についての意識を取り上げ、定年後の生活への展望との関係を明らかにする。またⅢにおいて、「サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査」（以下では「生活・就業スタイル調査」と略す）のデータから、「生きがい調査」における「会社とのかかわり方」意識を、労働条件や職業キャリアの観点から肉付けすることでより具体的な実態を把握する。さらに、職業生活の習慣から会社とのかかわり方と定年後の働き方への展望を明らかにしたい。

Ⅱ 会社とのかかわり方の意識と定年後の生活への展望 — 「生きがい調査」より

1. コーホート別にみた「会社とのかかわり方」— クロス集計から

まずクロス集計により、コーホート別に会社とのかかわり方の推移を見てみよう。「生きがい調査」では、第2回調査（1996年）と第3回調査（2001年）において、会社や仕事とのかかわり方を、仕事への意味づけ、会社への忠誠、出世への志向性、会社の外とのかかわり、会社への評価の観点から重層的に取り上げている。

図1は、仕事への意味づけをコーホート別にクロス集計したものである。年長のコーホートほど「仕事で自己実現」が高いのに対し、若いコーホートほど「仕事は生計の手段」が高い。そして、1937-41年生まれのコーホートを境に、若いコーホートほど「仕事は生計の手段」が「仕事で自己実現」を大きく上回っている。これまで日本のサラリーマンについては、「仕事が趣味」と言われるほどその高い勤労意欲が指摘されてきた。しかし、若年層では、仕事を生計の手段として割り切る意識が広がっているのである。

図2は会社への忠誠をコーホート別に示している。「自分の会社に尽くしたい」は年長のコーホートほど高いが、若いコーホートでも70%ある。コーホートによる差はあるものの、日本では依然として会社への忠誠心が高い水準で維持されている。これに対し、「脱サラを考えたことがある・脱サラしたい」は、若いコーホートほど高く57-61年生まれのコーホートでは約40%ある。開業率が廃業率を下回る近年では、独立・自営の増加が一つの課題となっているが、若年層の独立支援がこの課題の克服につながると考えられる。

図3は出世への志向性をコーホート別に示している。年長のコーホートほど「多少無理しても出世したい」が高く、若いコーホートほど「出世よりも興味のある仕事に専念したい」が高い。しかし、コーホートを問わず「出世よりも興味ある仕事」が「多少無理しても出世したい」を上回っており、出世志向は全体的に低い。現代の日本では、物質的な豊かさや社会的評価の高い地位の獲得よりも自分らしい生き方を追求する価値志向が広がりつつあるが、仕事に関しても同じことがあてはまっていると見えよう。

図4は会社の外とのかかわり方を三つの側面から扱っている。「仕事のためには個人の生活を犠牲することがあってもやむを得ない」も「上司や同僚とは仕事を離れてもつき合いたい」も、年長のコーホートほど高いが、若いコーホートでは大きく減少している。日本のサラリーマンがもつ勤労意欲の高さや会社へのコミットメントの深さは、会社での仕事が生活全体の中心にあることを意味していた。しかしながら、若年層ではこうした価値志向が減退し、仕事と私生活を区別する意識が広がっていることがうかがえる。

「どの会社でも十分通用する職業能力がある」は、1937年生まれ以前のコーホートで著しく高く、1942年生まれ以後のコーホートでは急激に低くなっている。日本では主として個々の会社の内部で職業能力開発を行ってきたため、一つの会社で蓄積された職業能力のなかには、その会社から離れてしまうと評価が難しいものが少なくない。したがって、この自己能力評価の差には、定年後に出向や再就職を経験し、別の企業でも自身の職業能力が通用するとの自信を得た高齢層と、まだ会社において自分の職業能力の社会的通用性に自信がもてない中年層という、年齢効果が働いていると考えられる。

図 1. 仕事への意味づけ (生年別)

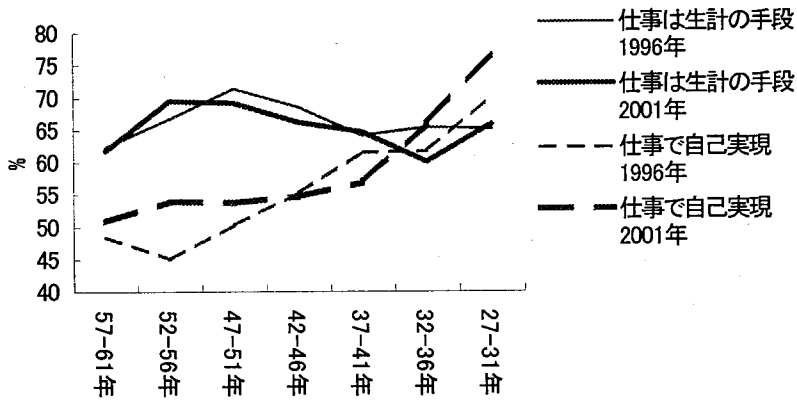


図 2. 会社への忠誠 (生年別)

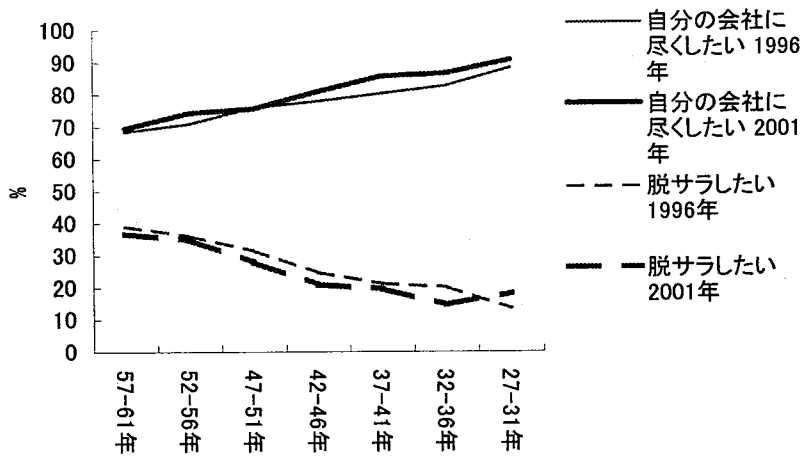


図 3. 出世への志向性 (生年別)

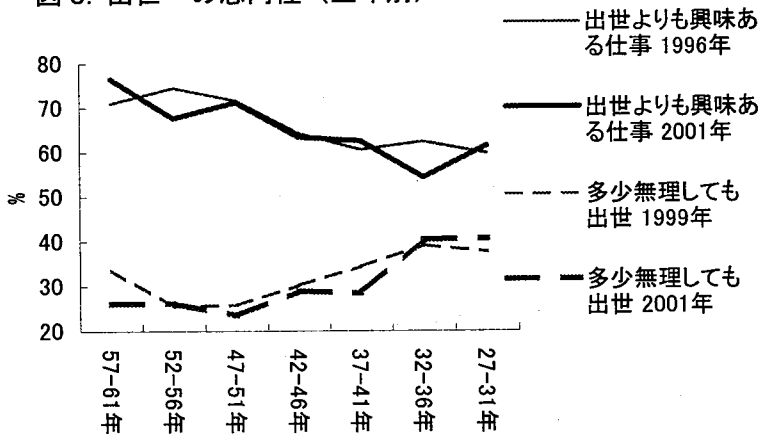


図4. 会社の外とのかかわり方（生年別）

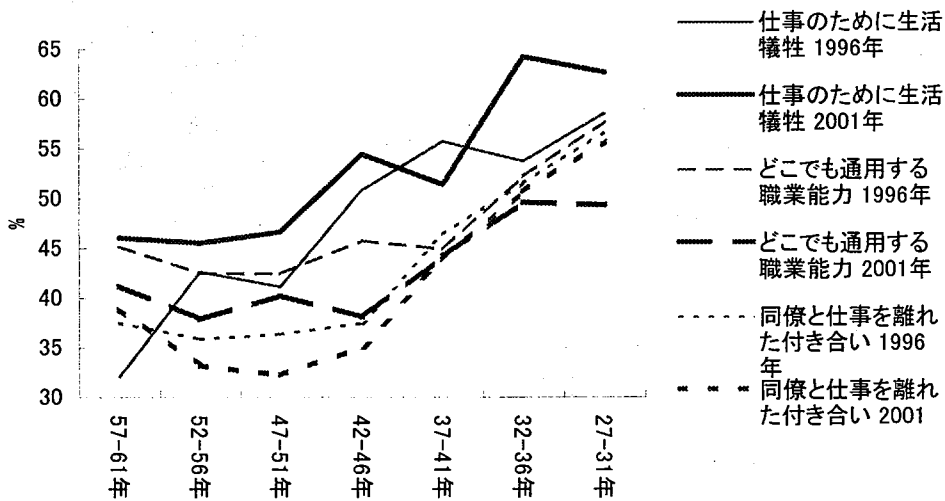
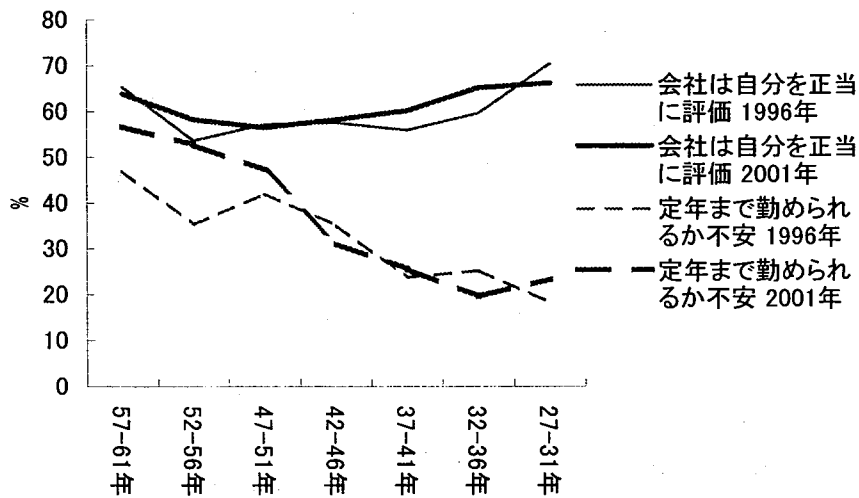


図5. 会社への評価（生年別）



最後に、会社への評価をまとめたのが図5である。どのコーホートでも約60%が「会社は自分を正に評価している(していた)」と考えており、評価に関する会社への信頼感は安定している。しかしながら、「定年まで会社に勤められるかどうか不安だ(だった)」については若いコーホートほど高い。別の意識でも若年層ほど会社へのコミットメントが低い傾向が見られるが、そこにはこうした勤続不安も関係していると考えられる。

どの意識についても、1996年と2001年でコーホートごとの結果が大きく変わっていないことを考えると、会社や仕事とのかかわり方の変化は、年齢効果よりもコーホート効果によるものと考えられる。そうであるなら、現在の若年層が年齢を重ねて定年を迎える頃になっても、よほどのことがない限り、会社とのかかわり方に大きな変化が生じるとは考えにくい。この意味で、定年後の生活を展望するとき、会社とのかかわり方は安定的な変数であると考えられる。

2. 会社とのかかわり方の構造

2-1. 会社とのかかわり方の4類型 — 主成分分析による類型化

クロス集計で見たように、サラリーマンの会社とのかかわり方は若いコーホートを中心に様々な次元で変化してきている。では、こうした変化のなかでサラリーマンの会社とのかかわり方はどのような構造を形成しているのだろうか。

表1は、前述の会社とのかかわり方13項目を主成分分析によりまとめたものである。1996年調査でも2001年調査でも、固有値1以上の主成分は4つあり、主成分負荷量についても同じような結果が得られた。したがって、ここでの結果は相対的に安定した構造を示していると言える。

第1主成分は、「自分の会社には尽くしたい」、「会社は自分を正当に評価している(していた)」、「上司や同僚とは仕事を離れてもつき合いたい」、「会社は定年後の社員へのめんどろみもよい」、「仕事の中でこそ自己実現が図れる」、「仕事のためには個人の生活を犠牲にすることがあってもやむをえない」がプラスに高い。つまり、この主成分は、仕事を生活の何よりも重視し、アイデンティティや人間関係などの面でも会社に一体化している、いわゆる「会社人間」に相当する。ここではこれを「全面関与型」と呼ぼう。

第2主成分の特徴は、何よりも「仕事をするからには多少無理しても出世したい」がプラスに高く、「出世よりも興味のある仕事に専念したい」がマイナスに高いことにある。そこで、これを「出世志向型」と呼ぶことにする。また、全面関与型同様、「仕事のためには個人の生活を犠牲にすることがあってもやむを得ない」もプラスに高い。さらに「自分の会社には尽くしたい」や「仕事のなかでこそ自己実現が図れる」の主成分負荷量もプラスである。この意味で、この出世志向型も「会社人間」に近い。しかしながら、会社との一体化よりも個人の地位達成が前面に出ているところにこの出世志向型の特徴はある。

以上の二つは、会社主義的な特徴を示す意識であるが、第3主成分と第4主成分は異なる様相を呈している。どちらも「脱サラを考えたことがある・脱サラしたい」の主成分負荷量がプラスに高い。この意味で第3・第4主成分は脱会社主義的である。

表1. 「会社とのかかわり方」の因子構造(主成分分析)

	全面関与型		出世志向型		限定関与型		自立志向型	
	1996	2001	1996	2001	1996	2001	1996	2001
自分の会社には尽くしたい	.645	.673	.225	.133	-.175	-.018	-.035	-.146
会社は自分を正当に評価	.667	.600	.006	-.031	-.144	-.211	.038	.050
仕事を離れたつき合い	.627	.585	.124	.044	.054	-.103	-.031	-.044
会社は定年後もめんどろみもよい	.584	.522	-.079	-.075	.001	-.180	-.228	-.251
仕事でこそ自己実現	.549	.591	.255	.189	-.184	-.136	.114	.072
仕事のためには生活犠牲	.408	.556	.576	.376	.016	.188	.052	.024
多少無理しても出世	.209	.277	.818	.806	.010	.057	.072	.100
出世よりも興味ある仕事	.111	.041	-.760	-.827	.243	.209	.210	.157
定年まで勤められるか不安	-.073	-.036	.005	-.087	.766	.794	.007	.001
仕事は生計の手段	-.074	-.256	-.157	.008	.501	.501	-.082	.104
脱サラを考えたことがある	-.166	-.115	.085	-.088	.481	.374	.546	.597
どこでも通用する職業能力	.268	.304	-.020	.077	-.239	-.345	.586	.526
定年後は脱会社	-.204	-.167	-.069	-.026	.008	.029	.675	.700
固有値	2.905	2.941	1.333	1.343	1.239	1.202	1.043	1.03
分散寄与率	22.343	22.623	10.251	10.327	9.53	9.246	8.019	7.923
N	1549	2809	1549	2809	1549	2809	1549	2809

回転法: ヴァリマックス回転

表 2. 「会社とのかかわり方」の基本統計量(現役のみ)

		平均値	標準偏差	N
全面関与型	1996年	-.178	.935	792
	2001年	-.100	1.002	1662
出世志向型	1996年	-.038	.987	792
	2001年	-.089	.974	1662
限定関与型	1996年	.140	.997	792
	2001年	.159	.979	1662
自立志向型	1996年	.098	.971	792
	2001年	.068	1.011	1662

しかし、同じように脱会社主義的であっても、両者には明確な違いがある。「どの会社でも十分通用する職業能力がある」について、第3主成分はマイナスに高いが、第4主成分はプラスに高い。また第3主成分は「定年まで会社に勤められるかどうか不安だ(だった)」と「仕事は生計を立てるための手段に過ぎない」がプラスに高いが、第4主成分は「定年後は会社の世話になりたくない」の負荷量がプラスに高い。つまり、第4主成分は会社に依存しない、自立的な働き方をポジティブに志向しているが、第3主成分は、会社主義的ではない一方で、会社から自立もできない曖昧さがある。そこで第4主成分を「自立志向型」と呼び、第3主成分を「全面関与型」に対して「限定関与型」と呼ぶことにしたい。

表2にあるように、現役層においては、全体的な傾向として全面関与型と出世志向型について否定的な傾向が強く、限定関与型と自立志向型については肯定的な傾向が強い。つまり、会社主義的な志向性よりも脱会社主義的な志向性が近年のサラリーマンでは主流を占めているのである。

2-2. 会社とのかかわり方の規定要因 — 重回帰分析を用いて

では、こうした会社とのかかわり方は、それぞれどのような人々によって志向されているのだろうか。本章は今後の定年退職のあり方に焦点を当てているため、ここからは分析対象を現役層に限定して分析していきたい。

表3は、4類型のそれぞれについて重回帰分析を行った結果である。最近の傾向を把握するため、1996年の結果と比較しつつ、主として2001年の結果に着目したい。

説明変数には、性別、年齢、学歴、本人の収入に加えて、就業に関わる属性として、勤務先の規模(人数)、週当たりの労働時間、職種を取り上げた。これまでも日本型雇用慣行を実行してきたのは主として大企業であったことを踏まえれば、勤務先の規模は会社とのかかわり方を規定する重要な要因である。また労働時間が長ければ、結果として会社以外に生活の場がなくなってしまうことにもなる。さらに、外部労働市場が相対的に未発達な日本では、どの職種でも一つの企業で蓄積した職業能力を別の企業でも生かせるわけではない。それゆえ、職種もまた会社とのかかわり方を規定する重要な要因の一つである。

4類型のそれぞれについての分析結果を相互に比較してみると、まず年齢が高いほど出世志向的であるのに対し、年齢が低いほど限定関与的か自立志向的である。クロス集計結果に表れているように、1996年から2001年にかけてコーホートごとの会社とのかかわり方が大きく変わっていないことを踏まえれば、若年層の限定関与志向と自立志向は年齢効果というよりもコーホート効果と解釈できる。

表 3. 「会社とのかかわり方」の規定要因(重回帰分析・現役のみ)

	全面関与型		出世志向型		限定関与型		自立志向型	
	1996	2001	1996	2001	1996	2001	1996	2001
性別	-.019	.081***	.162**	.079***	.111***	.065**	.062	.027
年齢	-.007	-.021	.065*	.121***	-.134***	-.125***	-.120***	-.112***
学歴	-.043	.015	.002	.098***	-.044	-.024	.111***	.122***
本人収入	.067	.100***	.133***	.032	-.125***	-.164***	.016	-.010
勤務先規模	.079**	.052**	.006	-.010	-.075**	-.031	-.029	-.074***
労働時間	.012	.041*	.069**	.065***	-.038	.047*	.032	.054**
職種								
専門技術職	-.001	.042	-.010	-.047	.026	-.052*	.093**	.079**
管理職	.085	.189***	.169**	.122**	-.103	-.055	-.064	.111**
事務職	-.109*	-.001	.060	.080*	-.039	-.011	-.045	.056
販売職	.020	-.021	.002	.019	-.018	-.013	-.020	.008
サービス職	-.007	.037	-.067*	-.014	-.033	-.022	.032	.040
R2	.045	.094	.116	.066	.076	.067	.055	.054
adj-R2	.032	.088	.103	.060	.063	.061	.041	.048
F 値	3.344***	15.652***	9.301***	10.562***	5.868***	10.795***	4.112***	8.536***
N	792	1662	792	1662	792	1662	792	1662

*** 1%水準で有意 ** 5%水準で有意 * 10%水準で有意 職種は「技能職」を基準としたダミー変数。

また、年収や勤務先の規模、職種によっても会社とのかかわり方は異なる。まず、年収が高いほど全面関与的であるのに対し、年収が低いほど限定関与的である。ここから、賃金が会社へのコミットメントのインセンティブとして大きく作用しているものと考えられる。また管理職ほど全面関与的か出世志向的である。職場での地位の高さも会社へのコミットメントを生み出す要因になっているようである。さらに勤務先の規模が大きいほど全面関与的であるのに対し、規模が小さいほど自立志向的である。大企業のみならず中小企業においてもモデル（規範）として定着していた日本型雇用慣行であるが、実際に日本型雇用を期待できる層では依然として会社主義も維持されているのに対し、そうでない層では「会社離れ」が起きていると考えられる。この意味で、「モデルとしての日本型雇用慣行」への信仰は崩れつつあるようである。

このように、日本のサラリーマンの会社とのかかわり方の現状は、会社主義的な層と脱会社主義的な層に分化し、両者が共存している。そして、前述のように、主流なかかわり方は、若年層を中心に脱会社主義へとシフトしている。

しかしながら、同じように脱会社主義的な限定関与型と自立志向型であっても、学歴が高いほど、専門技術職であるほど自立志向型であることは見逃せない。

つまり、会社主義を拒否しても、会社に依存せず自立できるためには、学歴や専門技術など、外部労働市場で通用する資源を蓄積していることが重要な条件となっているのである。裏を返せば、限定関与型が会社と「つかず離れず」の関係であるのは、そうした資源を蓄積していないことによると考えられる。

3. 会社とのかかわり方と定年後の生活

3-1. 定年後の就業希望と予想

日本ではこれまでも定年後にすぐ職業生活から引退するのではなく、何らかの形で働き続ける人々が多かった。そして、その主たる要因としても、日本のサラリーマンの会社主義的な性向が指摘されてきた。

では、会社とのかかわり方が変化しつつある近年、定年後の就業について人々はどのような意識をもっているのだろうか。限定関与型や自立志向型のような脱会社主義の広がりにより、定年後の就業のあり方はどのように変わるのだろうか。（定年後のキャリア形成そのものの詳細については第4章を参照。）

表4は会社とのかかわり方の4類型と定年後の就業希望との相関係数である。ここでも分析対象は、まだ定年を迎えていない現役層に限定している。表にあるように、どの会社とのかかわり方も「職業生活から引退したい」と有意な正の相関を示していない。なかでも、全面関与型と限定関与型は負の相関を示している。つまり、全面関与型のような「会社人間」でなくても、定年退職と同時に職業生活から引退しようとは考えていない。むしろ、会社とのかかわり方によって変わるの、定年後の働き方への志向性である。

全面関与型と出世志向型は、「再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める」（雇用延長）や「出向先に転籍する」と正の相関がある。つまり、この二つのタイプは定年後もそれまで勤めてきた企業の内部で働き続けることを望んでいる。先に全面関与型と出世志向型はいわゆる「会社人間」に相当すると述べたが、定年後の就業先を会社に求める点でも、やはり会社主義的である。

これら二つに対し、限定関与型と自立志向型は、定年後の就業先を会社の外に求めている。限定関与型は「シルバー人材センターなどで簡単な仕事をしたい」（簡単な仕事）と正の相関があり、自立志向型は「別の企業に再就職したい」（再就職）や「自分で事業や商売を始めたい」（新しい事業）と正の相関がある。限定関与型も自立志向型もともに「脱サラを考えたことがある・脱サラしたい」ことを特徴とするが、特に自立志向型は定年退職を独立のきっかけとして明確に意識している。また自立志向型は「定年後は会社の世話になりたくない」という意識を特徴としているように、「雇用延長」とは負の相関を示している。

では、実際に定年後に自分はどのように就業すると予想しているのだろうか。表5は会社とのかかわり方と定年後の就業予想の相関係数である。

まず就業希望と同様に、ここでも「職業生活から引退する」と予想している意識類型はなく、全面関与型と出世志向型、限定関与型は負の相関を示している。また全面関与型は「雇用延長」や「出向先に転籍」により企業に留まると考えおり、希望と予想の間のギャップが小さい。自立志向型も「再就職」や「新しい事業」をすると予想しており、やはり希望と予想の間にギャップ

表4. 「会社とのかかわり方」と「定年後の就業希望」の相関係数

		全面関与型	出世志向型	限定関与型	自立志向型
職業生活から引退	1996年	-.028	-.067	-.104**	.014
	2001年	-.080**	-.044	-.061*	.018
雇用延長	1996年	.119**	.083**	-.033	-.224**
	2001年	.159**	.057*	-.003	-.307**
出向先に転籍	1996年	.040	.001	.036	-.056
	2001年	.062*	.061*	-.036	-.025
再就職	1996年	-.045	.010	.028	.052
	2001年	-.051*	.021	.041	.069**
新しい事業	1996年	-.063	.040	.099**	.247**
	2001年	.007	.024	.028	.301**
家業を手伝う	1996年	-.020	-.024	-.019	.009
	2001年	.019	.024	.003	.026
簡単な仕事	1996年	-.001	-.021	.053	-.086*
	2001年	-.044	-.069**	.050*	-.078**

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

表 5. 「会社とのかかわり方」と「定年後の就業予想」の相関係数

		全面関与型	出世志向型	限定関与型	自立志向型
職業生活から引退	1996年	-.036	-.070	-.095**	-.044
	2001年	-.085**	-.076**	-.067*	-.046
雇用延長	1996年	.159**	.057	-.037	-.160**
	2001年	.145**	-.003	-.038	-.216**
出向先に転籍	1996年	.063	.068	.032	-.062
	2001年	.088**	.107**	-.016	-.066*
再就職	1996年	-.064	.001	.064	.097
	2001年	-.040	.058*	.083**	.081**
新しい事業	1996年	-.019	.034	.054	.179**
	2001年	.001	.030	-.008	.281**
家業を手伝う	1996年	-.043	-.010	-.004	.019
	2001年	.001	.029	.005	.005
簡単な仕事	1996年	-.067	.001	.040	-.026
	2001年	-.034	-.034	.058*	-.020

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

が小さい。両者でこうしたギャップが小さい背後には、次のような要因があると考えられる。まず、全面関与型が勤める会社には、定年後の再雇用制度や雇用延長制度が整っているところが多いと考えられる。また、自立志向型では高い学歴や専門技術をもっているなど、再就職や新たな事業に必要な資源が備わっているものと考えられる。

これに対して、出世志向型は「出向先に転籍」との間には希望でも予想でも正の相関があるが、予想では「雇用延長」との間に有意な相関はなく、代わって「再就職」と正の相関が生じている。すでに述べたように出世志向型にとって、会社は一体感を得る対象というよりも地位達成の場という意味合いの方が強い。そうであるなら、雇用延長を望む場合も、単なる雇用保障だけでなく相応の地位を望むだろう。しかし、実際に定年後に社内で相応の地位が保障されないときは、出向先に転籍するか、別の企業に再就職をすることが現実的な選択であると考えているのではないだろうか。

また限定関与型は、希望では「簡単な仕事」だけと正の相関があったが、予想ではこれに加えて「再就職」とも正の相関が生じている。ここには後段詳述するように、定年後の経済的不安が関わっていると考えられる。

このように、会社とのかかわり方が脱会社主義的になっても、人々が定年退職と同時に職業生活から引退しようとするようにはならない。そうではなく、定年後に働く（働きたい）場所が会社とのかかわり方によって異なるのである。

3-2. 定年後の生計の手段

どのような会社とのかかわり方であれ、定年後も働き続けることへの志向性は高い。しかし、その要因には自発的な勤労意欲の高さだけでなく、経済的な問題もあるだろう。とりわけ老齢年金の財源不足が問題になっている昨今では、定年後の経済的基盤の確保は生活の重要な課題である。そこで、定年後の生計の手段について、どのような収入源を当てにしているのか探ることにしたい。

表 6 は、「会社とのかかわり方」の 4 類型と定年後の生計の手段との相関係数を示したものである。まず、どのようなかかわり方も公的年金と正の相関がないことを確認したい。1996 年には全面関与型と正の相関があったが、2001 年で有意な相関はなくなっている。また自立志向型は 1996 年も 2001 年も負の相関を示している。少子高齢化とともに、公的年金制度の改革が議論されているが、会社主義であるか脱会社主義かを問わず公的年金は生計の手段としては信頼されてい

表 6. 「会社とのかかわり方」と「定年後の生計の手段」の相関係数

		全面関与型	出世志向型	限定関与型	自立志向型
公的年金	1996年	.067*	.019	-.085**	-.068*
	2001年	.015	.016	.002	-.070**
企業年金	1996年	.102**	.005	-.095**	-.031
	2001年	.146**	.046	-.081**	-.060*
退職金	1996年	.016	.055	-.035	.007
	2001年	.064**	.015	.013	-.018
保険金や個人年金	1996年	.023	-.046	.024	.029
	2001年	-.002	-.037	.018	.022
預貯金の取りくずし	1996年	.038	-.025	.015	-.068
	2001年	-.027	-.023	.025	.022
就労による収入	1996年	.014	.013	.098**	.117**
	2001年	.023	.072**	.022	.049**
子どもからの経済的支援	1996年	.013	.024	-.002	.008
	2001年	-.010	-.035	.027	.046

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

いようである。では公的年金が当てにならないのであれば、どのような手段で生計を立てようと考えているのだろうか。

全面関与型にとって主たる生計の手段は企業年金である。全面関与型の特徴の一つに、「会社は定年後の社員のめんどうみもよい」という会社への評価があったが、企業年金への信頼は1996年から2001年にかけて強まっている。また2001年では退職金との間にも有意な相関が出ている。全面関与型は、定年後の生計についても会社からの保障を当てにしているのである。もちろん昨今は、退職金や企業年金を切り詰めざるを得ない企業も少なくない。それにもかかわらず、全面関与型が会社による経済的保障を当てにできる背後には、勤務先規模が大きいほど全面関与的であることから、会社の規模への信頼感が根強くあるものと考えられる。

これに対し、限定関与型と自立志向型は企業年金を当てにしていない。自立志向型の主たる経済的基盤は定年後も就労による収入である。この層は、現役である今も定年後についても会社に依存しない働き方への志向性を特徴とする。そして、定年後の生計についても、企業年金や退職金のような会社からの経済的保障に頼ることなく、自分で働いて収入を得ようとする意思が明確に表れている。

ところが限定関与型は、企業年金には頼らないとしながらも、それに代替する主たる収入源はない。1996年には「就労による収入」と正の相関があったが、2001年で有意な相関はなくなっている。この層は会社への全面的な依存は拒否しながらも、会社から自立するわけでもない曖昧さを特徴とするが、こうした姿勢が定年後の生計にも表れている。

出世志向型は自立志向型同様に、「就労による収入」を主たる生計の手段と考えている。この層の定年後の就業希望は「雇用延長」か「出向先に転籍」であり、また就業予想は「出向先に転籍」か「再就職」であったが、出世志向型の特徴を考えれば、この層は定年後についても経済的報酬の高い仕事を望むと考えられる。そうであるならば、生計の手段として「就労による収入」を当てにすることも当然と言えよう。

3-3. 定年後に望む生活と生活不安

ここまで見たように、会社とのかかわり方が変わっても、定年後にすぐ職業生活から引退しようとするわけではない。また出世志向型や自立志向型は、定年後も生計の手段として働くことを志向していた。

それでは、就業に限らず、今の現役層が望む定年後の生活とはどのようなものだろうか。また、逆に定年後の生活にどのような不安をもっているだろうか。表7は会社とのかかわり方と定年後に望む生活との相関係数である。また表8は、会社とのかかわり方と定年後の生活不安の相関係数である。この二つを併せて見ることにより、ポジティブな面とネガティブな面の両方から定年後の生活について現役層がもっている展望をとらえよう。

全面関与型は、「好きな仕事を続ける生活」や、「知識や経験を活かす生活」や、「社会のために役立つ生活」(社会貢献)を望んでおり、定年退職により「今までの人的交流や情報量が減る」ことへの不安を感じている。このように全面関与型は、定年後も社会参加へと向かう志向性が大きい。全面関与的な「会社人間」については、「定年退職して会社から離れてしまったら何をしたらよいかわからずに時間をもてあます」と考えられがちであるが、実際は、定年退職による人的交流や情報量の減少に不安を感じつつも、定年後の生活について前向きな展望をもっていることがわかる。

むしろ、定年退職により「何をしたらよいかわからず時間をもて余す」のは出世志向型である。出世志向型も「好きな仕事を続ける生活」を望んでいるが、その意味合いは全面関与型と異なる。出世志向型は、「好きな仕事」と同時に「経済的にゆとりのある生活」も望んでいるが、その裏側で定年退職により「生活のほりや生きがいがなくなる」ことや「所属や肩書きがなくなる」こと、「時間をもてあます」ことへの不安をもっている。つまり、地位の維持・達成への志向性が、定年後の生活への展望にも反映されている。したがって、出世志向型が望む「好きな仕事」や「経済的ゆとり」も、こうした地位の表れとしての意味合いが強いと考えられる。

表7. 「会社とのかかわり方」と「定年後に望む生活」の相関係数

		全面関与型	出世志向型	限定関与型	自立志向型
健康に恵まれた生活	1996年	.058	.044	-.032	-.042
	2001年	.052*	.011	-.038	-.111**
時間のゆとり	1996年	-.013	.023	.026	-.010
	2001年	-.003	-.029	-.011	.031
経済的ゆとり	1996年	-.070*	.068*	.124**	-.049
	2001年	-.068**	.080**	.093**	-.078**
精神的ゆとり	1996年	.013	-.019	.035	.075*
	2001年	-.045	-.047	.022	.040
夫婦・家族の関係	1996年	.034	-.056	-.032	.002
	2001年	.081**	.055*	-.001	-.034
友人や仲間とのつきあい	1996年	-.025	-.046	-.018	.005
	2001年	-.002	-.062**	.009	-.004
好きな趣味	1996年	.035	-.027	-.008	-.048
	2001年	-.064**	-.077**	-.050*	.027
好きな仕事	1996年	.070*	.074*	-.036	.011
	2001年	.057**	.050*	-.008	.055**
知識や経験を活かす	1996年	.012	.003	-.122**	.148**
	2001年	.070**	.037	-.046	.094**
自然とのふれあい	1996年	-.008	-.013	.042	-.011
	2001年	-.013	-.021	.021	.026
社会貢献	1996年	.000	-.022	-.050	.059
	2001年	.066**	.010	-.033	-.006

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

表 8. 「会社とのかかわり方」と「定年後の生活不安」の相関係数

		全面関与型	出世志向型	限定関与型	自立志向型
生計維持の困難	1996年	-.118**	-.025	.271**	-.026
	2001年	-.095**	-.021	.236**	-.047*
住宅の問題	1996年	-.080*	-.008	.053	.016
	2001年	-.137**	.006	.124**	-.001
自分や配偶者の健康	1996年	.030	.015	.038	-.013
	2001年	.083**	-.016	.035	-.025
配偶者や親の介護	1996年	.003	-.043	.039	-.004
	2001年	.030	-.050*	.040	.019
配偶者に先立たれる	1996年	.006	.015	.088**	-.033
	2001年	.035	-.018	-.006	-.040
再就職の問題	1996年	-.017	.088**	.098**	.020
	2001年	-.016	.042	.135**	-.039
家族との人間関係悪化	1996年	.004	.001	.042	-.033
	2001年	-.026	.021	-.008	.011
生きがいの喪失	1996年	.020	.140**	.077*	-.066*
	2001年	.028	.057**	.029	-.070**
所属・肩書きの喪失	1996年	.137**	.140**	.048	-.038
	2001年	.034	.055*	.016	-.030
人的交流や情報量の減少	1996年	.087**	.164**	-.039	-.036
	2001年	.086**	.041	-.023	-.030
情報化への遅れ	1996年	-.013	.034	.001	-.011
	2001年	-.021	.026	.081**	-.009
社会から取り残される	1996年	-.022	.083*	.054	.025
	2001年	.027	.040	.077**	.000
時間をもてあます	1996年	-.022	.118**	.016	-.049
	2001年	.032	.128**	.000	-.053
地域社会にとけこめない	1996年	-.036	.042	.065*	-.039
	2001年	-.015	.013	.023	.023
特に不安なし	1996年	.034	-.047	-.097**	.036
	2001年	.002	.003	-.118**	.030

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

限定関与型も出世志向型と同様に「経済的にゆとりのある生活」を望んでいる。しかし、すでに見たように年取が低いほど限定関与的であり、ここで示されているように定年後の生活について「生計維持の困難」や「住宅の問題」といった経済的な不安もある。さらに「再就職の問題」に不安をもっている点でも定年後の経済的な見通しは暗い。したがって、限定関与型が求める「経済的ゆとり」は、出世志向型と異なり、定年後の経済的不安を反映したものであると言える。

また、自立志向型も全面関与型と同様に「好きな仕事を続ける」ことや「知識や経験を生かす」ことを望んでいる。自立志向型の人々は、現役である今から会社に依存しない志向性をもっているため、定年後についても主たる不安要素はなく、現役からの延長で前向きな展望をもっているものと考えられる。

Ⅲ 職業生活の習慣からみた会社とのかかわり方 — 「生活・就業スタイル調査」より

1. 会社とのかかわり方についての意識と習慣

「生きがい調査」では、会社とのかかわり方をサラリーマンの意識に着目して明らかにした。しかしながら、意識と実際の行動との間にギャップがある可能性もある。

会社に依存しない意識が広がりつつあっても、実際に転職や独立が増えているわけではない。また人員削減により一人当たりの仕事量が増え、正規従業員においては労働時間が長くなりつつある近年では、仕事以外の生活を犠牲にせざるをえないケースも少なくない。意識のうえでは脱会社主義が進んでいても、実際の生活習慣は、必ずしも脱会社主義が進んでいるとは言えないことも多いのである。また逆に、生活習慣のある面では脱会社主義的であっても、意識のうえでは会社主義が色濃いこともある。

そこで、以下では「生活・就業スタイル調査」のデータを用いることで、「生きがい調査」の「会社とのかかわり方」意識に加えて、「望ましい労働条件」・「望ましい職業キャリア」・「職業生活習慣」・「周囲の人々の影響」を取り上げて「会社とのかかわり方」に肉付けをし、また「会社とのかかわり方」意識を規定する生活習慣を明らかにしたい。

2. 会社とのかかわり方と働き方についての意識

2-1. 会社とのかかわり方の諸類型 — 「生きがい調査」との比較

まず、「生きがい調査」で取り上げたトピックについて、「生活・就業スタイル調査」でも同様の分析を行い、二つの調査結果から同じことが言えるか検討しよう。まずは、会社とのかかわり方の諸類型について検討したい。

表9は、「会社とのかかわり方」意識について、「生きがい調査」と同じ質問の結果を主成分分析によってまとめたものである。ここでは固有値1以上の主成分が5つ抽出された。各質問項目の主成分負荷量も「生きがい調査」とはやや異なっている。こうした違いは「生活・就業スタイル調査」のサンプルが都市圏の男性に限定されていることによると考えられる。それでもなお、それぞれの主成分の特徴をみると、二つの調査は多くの部分で似通った結果を共有している。そこで相違点を踏まえつつも、「生きがい調査」と似通った傾向をもつ主成分には同調査と同じネーミングを採用したい。

表9. 会社とのかかわり方の因子構造(主成分分析)

	全面関与型	出世志向型	自立志向型	自己実現型	限定関与型
仕事を離れたつき合い	.666	.065	.133	.038	-.030
会社は定年後の面倒見よい	.537	-.027	-.447	-.173	-.140
会社は自分を正當に評価	.490	-.050	-.170	.211	-.148
自分の会社に尽くしたい	.580	.177	-.128	.204	-.006
仕事のためには個人の生活犠牲	.460	.393	.084	.157	.247
多様無理しても出世	.229	.799	.115	.069	.140
出世より興味ある仕事	.078	-.826	.181	-.020	.260
どこでも通用する職業能力	.358	.029	.627	-.054	-.362
定年後は脱会社	-.236	.013	.619	.091	.058
脱サラしたい	-.004	-.072	.606	-.229	.244
仕事でこそ自己実現	.229	.207	.050	.665	.061
仕事は生計の手段	-.059	.056	.084	-.769	.118
定年後まで勤められるか不安	-.096	-.032	.106	-.080	.870
固有値	2.481	1.564	1.205	1.031	1.004
分散寄与率	19.088	12.03	9.27	7.931	7.724
N	823	823	823	823	823

回転法: ヴァリマックス回転

第1主成分は、「上司や同僚とは仕事を離れてもつき合いたい」、「会社は定年後の社員へのめんどうみもよい」、「会社は自分を正当に評価している」、「自分の会社に尽くしたい」、「仕事のためには個人の生活を犠牲にすることがあってもやむを得ない」が高い。つまり、第1主成分は、「生きがい調査」の「全面関与型」と近似しており、この主成分もまた「全面関与型」と呼ぶことができる。しかしながら、「生きがい調査」と異なり、「どの会社でも十分通用する職業能力がある」も高く、自身の職業能力を高く評価している。つまり、この調査の対象では、会社への全面的な関与が高い自己能力評価をも生み出している。

第2主成分は、「仕事をするからには多少無理しても出世したい」がプラスに高く、「出世よりも興味がある仕事に専念したい」がマイナスに高い。したがって、この主成分は「生きがい調査」と同様に「出世志向型」と呼ぶことにする。

第3主成分は、「定年後は会社の世話になりたくない」、「どの会社でも十分通用する職業能力がある」、「脱サラを考えたことがある・脱サラしたい」が高い。つまり、この主成分は「生きがい調査」の「自立志向型」に相当する。

第4主成分は、この調査で独自に抽出された意識であり、「仕事でこそ自己実現が図れる」がプラスに高く、「仕事は生計を立てるための手段に過ぎない」がマイナスに高い。そこでこの意識を「自己実現型」と呼ぶことにする。「生きがい調査」では、この「仕事でこそ自己実現」は全面関与型の特徴であった。この意味で、この自己実現型は、全面関与型から分化したものと位置づけられる。しかし他方で、後に詳述するが、この自己実現型は脱会社主義的な特性ももちあわせている。

第5主成分は、「定年まで会社に勤められるかどうか不安だ(だった)」だけが高い。この点で、この主成分も「生きがい調査」の4類型とは異なった傾向をもつ意識である。しかし、後に明らかになるが、定年後の生活への展望に表れる諸傾向をも踏まえるならば、この意識は「限定関与型」と同型であることがわかる。そこで、この意識もまた「限定関与型」と呼ぶことにし、「生きがい調査」における「限定関与型」のエッセンスがより鮮明に出現したものと位置づけることにしたい。

このように、「生活・就業スタイル調査」で得られた5つの主成分のうち、4つの主成分については「生きがい調査」における会社とのかかわり方の4類型と似通った特徴を見て取ることができる。

2-2. 会社とのかかわり方と定年後の就業・生計の手段

では、こうした会社とのかかわり方の諸類型は、定年後の生活への展望についても「生きがい調査」と同様の傾向を示すだろうか。ここでの問題関心は職業生活のあり方にあるため、「定年後の就業希望・予想」と「定年後の生計の手段」について検討したい。なお、「生きがい調査」同様、以下の分析は現役層に限定している。

表10は、「会社とのかかわり方」の5類型と「定年後の就業希望・就業予想」との相関係数である。質問は「生きがい調査」と同じであるが、選択肢に新たに「NPO・NGO やボランティア団体で、地域や社会のために働く」(ボランティア・ワーク)を追加している。

まず、「生きがい調査」と同様に、どのような「会社とのかかわり方」も「職業生活からの引退」には結びついていないことを確認しておきたい。そこで、働き方について見ると、全面関与型と出世志向型は希望において「雇用延長」と正の相関があるが、予想ではどの働き方とも有意な正相関はない。「生きがい調査」の全面関与型は「雇用延長」や「出向先に転籍」と予想していた。また出世志向型は再就職すると予想していた。「生きがい調査」と「生活・就業スタイル調査」で

表 10. 「会社とのかかわり方」と「定年後の就業」の相関係数

		全面関与型	出世志向型	自立志向型	自己実現型	限定関与型
職業生活から引退	希望	-.090*	-.102*	.020	-.072	-.075
	予想	-.007	-.124**	.014	-.013	-.080
雇用延長	希望	.111**	.111**	.205**	.027	-.093
	予想	.080	.080	-.160**	-.031	-.110**
出向・転籍	希望	.025	.018	-.183**	.034	.054
	予想	.062	.000	-.083*	.008	.065
再就職	希望	-.113**	.011	.023	-.015	.036
	予想	-.082	.030	.055	.057	.050
新しい事業	希望	.061	.036	.268**	-.015	.042
	予想	.038	.035	.237**	.007	-.022
家業の手伝い	希望	.033	-.013	-.027	.072	.024
	予想	.000	-.015	-.031	.042	.034
簡単な仕事	希望	-.046	-.012	-.074	-.042	.096*
	予想	-.038	-.002	-.040	-.079	.084*
ボランティア・ワーク	希望	.054	-.004	.101*	.103	.020
	予想	.069	.022	.015	.093*	.027

** 1%水準で有意

* 5%水準で有意

調査対象が異なることがこうした相違の一因と思われるが、ここでは二つの調査結果の相違点よりも共通点に着目し、全面関与型と出世志向型が変わらず雇用延長を望んでいることを強調したい。「生活・就業スタイル調査」でも全面関与型と出世志向型は、定年後も会社に留まり続けることを志向しているのである。

自立志向型は、「生きがい調査」と同様に「新しい事業」を希望したそうだと予想している。また今回新たに追加した「ボランティア・ワーク」も希望している。自立志向型においては、NPOやNGOに再就職したり、そうした組織を立ち上げたりすることも定年後の働き方の一つとなりうることが示唆されよう。もちろん予想においては「ボランティア・ワーク」と有意な相関はない。しかし、その背景には、自己実現型のように仕事のやりがいを突出して重視する場合を除けば、NPO自体が就業先として未成熟なことが要因にあると考えられる。近年ボランティア・ワークが急速に発展し就業先としても重要性を増しつつあることを考えれば、近い将来には予想においてもボランティア・ワークが有力な選択肢として浮上してくることは十分にありうる。

限定関与型は「簡単な仕事」を希望し、またそうだと予想している。「生きがい調査」でも限定関与型は同様の希望と予想をしていた。「生活・就業スタイル調査」では「定年まで勤め続けることができるか不安」のみが高く、「生きがい調査」の「限定関与型」とはやや異なっているが、定年後の就業について同じ傾向が見られることから、二つの調査で抽出された「限定関与型」のエッセンスは同じと考えてよいだろう。

次に「定年後の生計の手段」と「会社とのかかわり方」の相関関係を見よう(表11)。まず、「生きがい調査」同様、ここでも「公的年金」を当てにしている層はいない。

全面関与型は、「生きがい調査」同様、企業年金を当てにしている。しかし他方では、「生きがい調査」と異なり、「個人年金」や「就労による収入」なども考えており、全面関与型の収入源は多様化している。ここには、「生活・就業スタイル調査」の対象が東京とその周辺であり、全国的に他の地域と比べて、多くの就業先が期待できることや、個人年金について様々な情報を得やすいことが関係していると考えられる。

表 11.「会社とのかかわり方」と「定年後の生計の手段」の相関係数

	全面関与型	出世志向型	自立志向型	自己実現型	限定関与型
公的年金	-0.09	.023	-.077	-.060	-.099*
企業年金	.089*	.085*	-.051	.026	-.055
退職金	-.061	-.011	-.017	-.005	-.003
個人年金	.105*	-.070	.002	.027	-.003
預貯金	.014	-.033	-.035	.026	.040
就労による収入	.097*	.018	.085*	.018	.021
子ども等からの支援	.004	-.008	.034	-.011	-.028

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

出世志向型も、全面関与型同様に「企業年金」を主たる生計の手段と考えている。「生きがい調査」では「就労による収入」と正の相関があったが、ここでは有意な相関はなくなっている。定年後の就業予想でも、「生活・就業スタイル調査」では出世志向型と「再就職」の間に有意な相関がなくなっているように、生計を立てるために定年後も働き続けなければならない必要性は、ここでの出世志向層にはないようである。

自立志向型は、「生きがい調査」と同じく、「就労による収入」を主たる生計の手段と考えている。「生きがい調査」の自立志向層と同様、現役である今から会社に依存しない働き方を志向しているこの層は、定年後も変わらずに働き続け、自分の稼得で生計を立てることを当然と考えている。

限定関与型は、どの収入源とも正の相関がない。「生きがい調査」での結果を考察した際、会社に全面的に依存することも会社から自立することもできない、限定関与型の曖昧さが定年後の生計にも表れていると述べたが、同じことがここでもあてはまる。

ここまで見てきたように、「生活・就業スタイル調査」における「会社とのかかわり方」は、「生きがい調査」と異なる面があるものの、核となる部分は共通していると考えることができる。したがって、現在のサラリーマンの会社とのかかわり方を「全面関与型」・「出世志向型」・「限定関与型」・「自立志向型」の4類型で理解することは、理論的な軸として有効であろう。もちろん、ここでの「自己実現型」のように、調査によっては異なる意識類型も取り出されるが、それも前述のように4類型のある面が突出して現れたヴァリエーションとして理解することができるのである。

2-3. 会社とのかかわり方と望ましい働き方

ここでは、「生活・就業スタイル調査」で新たに設けた質問項目のうち、「労働条件」と「職業キャリア」を取り上げ、それぞれの会社とのかかわり方がどのような働き方を望ましいと考えているのか、明らかにしたい。

調査に当たり、労働条件について、3系列8項目から成る選択肢を設定した。第1系列は日本型雇用慣行の柱となる項目で、長期的な雇用保障（終身雇用）と年功的な処遇（年功制）である。このうち、年功制については対極である成果主義を選択肢にした。第2系列は、日本型雇用慣行から派生的に取り出される条件として、福利厚生、職業能力開発、職場の人間関係、労働時間を取り上げた。そして、職業能力開発と労働時間については、近年議論的になっている「外部労働市場でも通用する職業能力」（職業能力の社会的通用性）と「生活スタイルに合った労働時間」を選択肢とした。この選択肢は、それぞれ「会社とのかかわり方」意識における「どの会社でも十分通用する職業能力がある」と「仕事のためには個人の生活を犠牲にすることがあってもやむを得ない」にも対応している。第3系列は、労働意欲の源泉となる賃金、社会的評価、仕事内容を取り上げた。このうち賃金と社会的評価は「出世志向」に対応するインセンティブであり、自分の興味や能力に適した仕事内容は脱出世志向に対応したインセンティブとして位置づけられる。

表 12 は、「重視する労働条件」と「会社とのかかわり方」の相関係数である。

日本型雇用慣行の柱となっている雇用保障と処遇については、全面関与型と出世志向型、自立志向型で成果主義が支持されており、出世志向型が雇用保障を重視するのに対し、全面関与型と自立志向型は雇用保障を重視していない。出世志向型が雇用保障と成果主義を重視し、自立志向型が雇用保障を重視せず成果主義を支持していることは、それぞれの特徴をよく物語っている。また、全面関与型が雇用保障を重視せず成果主義を支持するについては、ここでの全面関与型が「どの会社でも通用する職業能力がある」も高いことを反映していると考えられる。しかし、実際に勤め先が変わっても通用する職業能力を習得できることは重視しておらず、会社への定着という基本的な姿勢は一貫している。

「職業能力の社会的通用性」は自立志向型と正の相関があり、「どの会社でも十分通用する職業能力がある」ことを反映した結果となっている。また「賃金・社会的評価」は出世志向型と正の相関があり、「仕事内容」は出世志向型と負の相関がある。これらの結果は、分析軸を構築した際の対応関係にあてはまっている。また「仕事内容」は自己実現型と正の相関があり、ここで言われている「自己実現」が興味のある仕事に従事することでなされるものであることがわかる。限定関与型は、どの労働条件とも有意な相関はなく、ここでも曖昧な姿勢がうかがえる。

次に「望ましい職業キャリア」と「会社とのかかわり方」の相関を見よう（表 13）。職業キャリアについては、雇用型キャリアと独立・自営型キャリアを区別し、雇用型キャリアについては、一つの企業でキャリアを形成するパターンと複数の企業でキャリア形成するパターンの軸と、管理職になるコースと専門家になるコースの軸を設けた。また独立・自営型キャリアについては、雇用されて働いた後に独立するパターンと最初から独立するパターンを軸とした。

全面関与型は「一企業管理職コース」と正の相関がある。また出世志向型も「一企業管理職コース」と高い正の相関をもっている。両者がいわゆる「会社人間」に相当することがここでも示されている。しかし他方で、出世志向型は「複数企業管理職コース」とも正の相関があり、管理職一般への志向性が高いことも示されている。

表 12. 「会社とのかかわり方」と「重視する労働条件」の相関係数

	全面関与型	出世志向型	自立志向型	自己実現型	限定関与型
雇用保障	-.116**	.092*	-.164**	-.049	.019
成果主義	.131**	.177**	.146**	.041	.047
人間関係・雰囲気	.055	-.164**	-.066	.005	.018
福利厚生	.056	-.054	-.033	-.126**	.072
職業能力の社会的通用性	.028	.072	.138**	.033	-.026
勤務時間	-.054	-.083*	.001	-.085*	.034
賃金・社会的評価	-.065	.145**	.002	-.058	-.027
仕事内容	.032	-.110**	.016	.165**	-.071

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

表 13. 「会社とのかかわり方」と「望ましい職業キャリア」の相関関係

	全面関与型	出世志向型	自立志向型	自己実現型	限定関与型
一企業管理職	.158**	.212**	-.109**	.052	-.092*
一企業専門家	-.037	-.007	-.161**	.023	.068
複数企業管理職	-.018	.083*	.112**	-.035	-.035
複数企業専門家	.033	-.109**	.143**	.099*	.001
雇用後独立	-.021	-.024	.195**	-.054	.044
最初から独立	-.045	-.043	-.084*	-.028	.013

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

自立志向型は、管理職コースであれ専門家コースであれ、複数企業型キャリアへの志向性が高く、また「雇用後に独立」への志向性もある。しかし、「最初から独立」とは負の相関があり、会社でのキャリアを生かしながら、会社から自立したキャリアを志向していることがうかがえる。自己実現型は、「複数企業専門家コース」を望んでいる。自己実現型は自分の興味や能力に合った仕事内容を重視していたが、こうした仕事内容を重視する意識が専門家コースへの志向性と結びついていると考えられる。また自分の興味や能力に合う仕事であれば一つの企業にこだわらない意識があることがわかる。限定関与型は特定の職業キャリアとの関連はなく、ここでも曖昧な姿勢を示している。

3. 職業生活の習慣と会社とのかかわり方

3-1. 職業生活の習慣 — 本人の習慣と周囲の状況に着目して

ここまでは、主として意識に着目して近年のサラリーマンの「会社とのかかわり方」を考察してきた。そこで明らかになったのは、従来の会社主義的なかかわり方から脱会社主義的なかかわり方へとサラリーマンの価値志向がシフトしていることであった。そして、「生活・就業スタイル調査」により、労働条件やキャリア形成の観点からも、この点について肉付けを行ってきた。

しかし、実際の生活習慣についてはどうだろうか。意識のうえでは脱会社主義的であっても実際は会社主義的であったり、その逆であったりするものもあるだろう。そして、習慣は職業生活のなかで職業能力や社会的ネットワークなどの資源を調達し活用する実際の過程であることを考えれば、意識以上に重要な要素である。そこで、ここでは職業生活の習慣から「会社とのかかわり方」の意識を分析することにしたい。分析に当たり、二つの次元をもうけている。一つは本人の生活習慣であり、もう一つは周囲の人々の状況である。

まず本人の生活習慣について、職業生活の経済的側面（生活設計）・社会関係的側面（人間関係）・心理的側面（アイデンティティ）のそれぞれについて会社への依存度を測定した。経済的側面については肯定的な回答ほど会社への依存度を高くし、社会関係的側面と心理的側面については、肯定的な回答ほど会社への依存度が低くなるように質問文を構成した。そして、会社への依存度と関連する象徴的な生活習慣として「仕事のための生活」・「自己啓発型能力開発」・「転職・独立準備」を取り上げた。「仕事のための生活」は、「会社とのかかわり方」の意識における「仕事のためには個人の生活を犠牲にすることがあってもやむを得ない」に対応している。「自己啓発型能力開発」は、「会社とのかかわり方」の意識における「どの会社でも十分通用する職業能力がある」と対応している。「転職・独立準備」は、「脱サラを考えたことがある・脱サラしたい」に対応している。

表 14 は、職業生活の習慣の規定要因である。説明変数には、「生きがい調査」で用いた変数に加えて、組織への定着度を示す「転職回数」と「勤続年数」を加えている。会社への経済的な依存度を示す「勤続型生活設計」は、転職回数が少ないほど、勤続年数が長いほど行われている。つまり、会社への定着度が高いほど、会社への経済的な依存度は高まっている。脱会社主義的な社会関係を示す「会社以外の付き合い」は、勤務先規模が小さいほど、サービス職ほど高まっている。アイデンティティの面での脱会社性を示す「会社以外の誇り」については、有意な規定要因は得られなかった。

「仕事のための生活」については、学歴が低いほど、週当たりの労働時間が長いほどあてはまっている。「自己啓発型能力開発」については、専門技術職ほどあてはまり、販売職ほどあてはまらない。「転職・独立準備」については、転職回数が多いほど、専門技術職ほど、管理職ほどあてはまっている。

表 14. 「職業生活の習慣」の規定要因(重回帰分析)

	勤続型 生活設計	会社以外の つき合い	会社以外の 誇り	仕事のみ の生活	自己啓発型 能力開発	転職・独立 準備
年齢	.047	-.025	.015	.005	.058	-.094
学歴	-.043	.026	.010	-.132*	.058	.096
本人収入	.040	-.071	.011	.019	-.003	-.066
転職回数	-.112*	.076	-.004	-.024	.066	.163**
勤続年数	.168**	.076	.052	.003	-.065	-.097
勤務先規模	.027	-.106*	-.073	.049	-.072	-.002
労働時間	-.006	-.045	-.004	.125**	.034	.012
職種						
専門・技術職	-.001	-.064	.036	.009	.156**	.122*
管理職	.028	-.059	.075	.050	.125	.152*
事務職	.024	.030	-.021	.044	-.024	.064
販売職	.002	-.033	.051	.014	-.088*	.058
サービス職	-.038	-.096*	-.045	.058	-.053	.009
R2	.088	.045	.021	.033	.084	.095
adj-R2	.066	.023	-.002	.011	.063	.073
F 値	4.129**	2.031*	.912	1.478	3.948**	4.483**
N	529	527	528	528	527	528

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意 職種は「技能職」を基準としたダミー変数。

次に、周囲の人々の状況をとらえるため、とりわけ近い存在である家族と勤務先の同僚、勤務先以外でつき合っている友人を取り上げた。表 15 はそれぞれの規定要因である。年齢が高いほど、収入が多いほど、勤続への家族の期待は高い。年齢が高いほど家族は職業生活の変化を望まないし、収入が多ければ家族の期待も現状維持的になるものと考えられる。逆に年齢が低いほど、収入が低いほど、勤務先での自主退職が多くなっている。また転職回数が多かったり、管理職であったりするほど勤務先での自主退職は多い。勤務先以外の友人の転職は年齢が低いほど多い。

表 15. 「周囲の人々の状況」の規定要因(重回帰分析)

	家族の期待	勤務先の自主退職	友人の転職
年齢	.108*	-.189**	-.165**
教育年数	-.044	-.019	.017
本人収入	.112*	-.224**	-.045
転職回数	-.039	.143**	.053
勤続年数	.029	-.072	.036
勤務先規模	.080	.022	-.023
労働時間	-.025	.031	.082
職種			
専門・技術職	-.095	.069	-.007
管理職	-.080	.147**	-.019
事務職	.051	.024	-.053
販売職	-.055	.040	.056
サービス職	-.062	.055	.007
R2	.075	.158	.051
adj-R2	.053	.138	.029
F 値	3.460**	8.031**	2.304**
N	528	528	527

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意 職種は「技能職」を基準としたダミー変数。

3-2. 職業生活の習慣からみた会社とのかかわり方

では、意識のうえでの「会社とのかかわり方」は、どのような生活習慣に規定されているのだろうか。表 16 は会社とのかかわり方の意識を職業生活の習慣から説明した分析結果である。

まず、属性の「会社とのかかわり方」への効果を見ると、学歴が低いほど、年収が高いほど、勤続年数が短いほど、労働時間が長いほど全面関与的であり、管理職ほど出世志向的である。また年齢が低いほど、転職回数が短いほど限定関与的である。年収が高いほど全面関与的であること、管理職ほど出世志向的であること、年齢が低いほど限定関与的であることは、「生きがい調査」でも同様の結果であった。また「生きがい調査」では、2001年において労働時間が長いほど全面関与的であることに有意傾向が見られたが、「生活・就業スタイル調査」でははっきりと正の効果が見られている。したがって、これらの要因は会社とのかかわり方を有力に規定していると言える。

次に生活習慣から「会社とのかかわり方」を見ると次のような傾向がある。まず勤続型生活設計をしているほど、会社以外の誇りをもっているほど、自己啓発型能力開発をしているほど全面関与的である。また、仕事のための生活をしているほど、勤務先以外の友人で転職する人が多いほど出世志向的である。さらに、勤続型生活設計をしていないほど、自己啓発型能力開発を行っているほど、転職・独立の準備をしているほど自立志向的である。会社以外の誇りをもっているほど、自己啓発型能力開発を行っているほど、転職・独立の準備をしていないほど自己実現的である。最後に、勤務先で自主退職する同僚が多いほど限定関与的である。

表 16. 職業生活の習慣からみた会社とのかかわり方(重回帰分析)

	全面関与型	出世志向型	自立志向型	自己実現型	限定関与型
年齢	.049	.023	-.044	-.020	-.175**
教育年数	-.144**	-.023	.010	.113*	-.046
本人収入	.159**	.099	.058	.064	-.105
転職回数	-.068	.002	.043	-.008	-.163**
勤続年数	-.185**	-.104	.012	-.003	-.046
勤務先規模	-.004	-.037	-.049	-.068	.069
週労働時間	.127**	-.011	.060	.055	.030
職種					
専門・技術職	-.009	.061	.071	.006	-.071
管理職	-.022	.241**	.056	.012	.044
事務職	-.063	.024	.016	-.046	-.075
販売職	-.045	.058	.000	.027	.075
サービス職	-.004	-.039	.028	-.017	.008
会社以外のつき合い	-.040	-.040	.048	-.078	.062
勤続型生活設計	.139**	.083	-.143**	-.049	.001
会社以外の誇り	.136**	-.040	-.008	.110*	-.080
自己啓発型能力開発	.147**	-.044	.151**	.110*	-.024
仕事のための生活	.066	.186**	.055	.057	.070
転職・独立準備	-.069	.018	.314**	-.141**	.025
家族の期待	.033	.092	-.072	.027	.001
勤務先での自主退職	.041	.044	.012	.008	.120*
友人の転職	-.036	.093*	.047	.006	.022
R2	.150	.150	.296	.082	.149
adj-R2	.113	.113	.265	.043	.113
F 値	4.097**	4.077**	9.743**	2.085**	4.070**
N	509	509	509	509	509

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意 職種は「技能職」を基準としたダミー変数。

こうした結果から、次のようなことがわかる。会社への全面的なコミットメントと会社からの自立を分かち大きな要因として、生活設計という経済的な要因が働いている。そして、自立志向型は、経済的な側面だけでなく、あらゆる面で自立的な生活習慣をもっており、この習慣が自立的な意識を生み出すという一貫性をもっている。また、「生きがい調査」においては、労働時間が長いほど出世志向的であったが、ここでの結果から、単に労働時間の長さと言うよりも、仕事以外のことは何もしない生活スタイルが出世志向に結びついていることがわかる。さらに、限定関与型がもつ曖昧さの背後には、勤務先の定着率の低さという要因がある。すなわち、会社への限定関与的なかわり方は、会社への定着を期待できない環境要因によって生み出される面が強いと考えられるのだ。

しかし、他の会社とのかかわり方については、意識と行動との間に若干のずれもある。例えば、「会社以外の誇り」をもっていることは、もっとも会社主義的な全面関与型の意識をも生み出している。また、自己実現型は、職業キャリアについて「複数企業専門家コース」を志向していたが、転職・独立の準備はしていない。さらに、転職する友人が多いことは、出世志向的な意識を生み出す要因となっている。つまり、必ずしも会社主義的な行動が会社主義的な意識と結びついているわけではないのである。

4. 職業生活の習慣と定年後の就業

会社とのかかわり方の意識と職業生活の習慣とは、自立志向型のように一貫しているものもあるが、多くの場合は若干のずれを含んでいる。では、生活習慣から定年後の就業について展望するとき、それぞれの習慣がどのような働き方と結びついているだろうか。

表 17 は、職業生活の習慣と定年後の就業の相関係数である。「勤続型生活設計」は、希望でも予想でも「雇用延長」・「出向先に転籍」と正の相関がある。ここには、当然のことながら、全面関与型の意識が反映されていると考えられる。「会社以外の誇り」をもっている人は、「新しい事業」を始めることを希望し、またそのようになると予想している。また「ボランティア・ワーク」を希望している。ここには当然のことながら自立志向型の意識が反映されていると考えられる。しかし、同時に「雇用延長」も望んでおり、全面関与型の意識も反映されている。「仕事のみ的人生」は、「雇用延長」を望んでいるが、ここには出世志向型の意識が反映されていると考えられる。「転職・独立準備」は、「新しい事業」を望み実際にそうなると予想しているが、ここには自立志向型の意識が反映されていると考えられる。また予想においては「再就職」とも正の相関があるが、これは「新しい事業」に準ずる選択肢として理解することができる。

さて、ここで注目したいのは、「自己啓発型能力開発」である。この生活習慣は全面関与型、自立志向型、自己実現志向型の3つに対して正の効果をもっていた。しかし、定年後の就業との関係では、希望と予想の両方で「新しい事業」と正の相関があり、また予想において「ボランティア・ワーク」と正の相関があるが、全面関与型の特徴である「雇用延長」とは有意な相関がない。

「新しい事業」については自立志向型の意識が反映されていると考えられるが、「ボランティア・ワーク」をすると予想している意識類型はなかった。そこで、詳細な分析は今後の課題としつつも、差し当たり次のように解釈したい。全面関与型や自己実現型のうち自己啓発型能力開発に積極的な層は、自発的に蓄積した職業能力をボランティア・ワークに活用しようと考えているのではないだろうか。実際、「生きがい調査」では、全面関与型において定年後に知識や経験を生かすことや社会貢献への意識が高まっていた。もちろん、定年後にボランティア・ワークを希望する自立志向型についてもこのことはあてはまる。つまり、定年後の就業を能力発揮の一機会ととらえるならば、現役のときに自己啓発的に蓄積した職業能力をボランティア・ワークで生かすとい

表 17. 「職業生活の習慣」と「定年後の就業」の相関係数

		勤続型生活設計	会社以外のつき合い	会社以外の誇り
職業生活から引退	希望	-.053	.032	.006
	予想	-.041	.014	.036
雇用延長	希望	.153**	-.036	.093*
	予想	.164**	-.017	.059
出向先に転籍	希望	.088*	-.066	-.028
	予想	.095*	-.099*	-.007
再就職	希望	-.041	-.031	-.099*
	予想	-.008	-.006	-.052
新しい事業	希望	-.068	.067	.099*
	予想	-.126**	.067	.103*
家業の手伝い	希望	-.027	.000	-.005
	予想	-.035	.003	.031
簡単な仕事	希望	.008	.012	-.093*
	予想	.009	.021	-.068
ボランティア・ワーク	希望	-.006	-.038	.082*
	予想	.016	-.027	.078

		仕事みの生活	自己啓発的職業能力開発	転職・独立準備
職業生活から引退	希望	-.105*	-.033	-.041
	予想	-.044	-.023	-.035
雇用延長	希望	.083*	-.010	-.182**
	予想	.041	-.075	-.174**
出向先に転籍	希望	.049	-.026	-.042
	予想	.019	-.002	-.038
再就職	希望	.011	.053	.049
	予想	-.013	.057	.090*
新しい事業	希望	-.016	.145**	.283**
	予想	.000	.179**	.276**
家業の手伝い	希望	.015	-.027	-.021
	予想	-.010	-.045	-.024
簡単な仕事	希望	.055	-.175	-.096*
	予想	-.009	-.061	-.062
ボランティア・ワーク	希望	-.088*	.062	.052
	予想	-.072	.101*	.047

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

う働き方も十分にありうるのである。

表 18 は、周囲の人々の状況と定年後の就業の相関係数である。勤続への家族の期待が高いほど、定年後も雇用延長を望み、またそうなると予想している。つまり、雇用延長への志向性には、前述の経済的問題と家族の期待が大きく関係していると考えられる。

これに対し、勤務先に自主退職する人が多いほど、「再就職」や「新しい事業」を希望し、またそうなると予想している。「勤務先の自主退職」は、勤続不安の高い限定関与型を生み出す要因であったが、他方でこのような定着率の低い職場は、定年後の働き方について自立的な展望をも生み出している。したがって、限定関与的に会社にとどまる層が自立できるような支援を確立していくことが定年後の就業支援の重要な課題になると考えられる。

表18 「周囲の人々の状況」と「定年後の就業」の相関係数

		家族の期待	勤務先での自主退職	友人の転職
職業生活から引退	希望	-.066	-.076	-.098*
	予想	-.017	-.073	-.002
雇用延長	希望	.160**	-.101	.013
	予想	.114**	-.133**	-.049
出向・転籍	希望	.046	-.081	-.045
	予想	.076	-.074	-.029
再就職	希望	-.063	.118**	.007
	予想	-.032	.091*	.003
新しい事業	希望	-.078	.154**	.082
	予想	-.083*	.143**	.057
家業の手伝い	希望	.013	-.080	-.031
	予想	-.050	-.005	-.011
簡単な仕事	希望	.061	-.022	.008
	予想	-.036	-.015	.007
ボランティア・ワーク	希望	-.036	-.032	-.021
	予想	-.007	-.044	-.043

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

IV おわりに — 要約と示唆

本章は、会社とのかかわり方に着目し、その変化をとらえながら現役サラリーマンがもっている定年後の就業と生活への展望を明らかにしてきた。

まず、「生きがい調査」のデータから、昨今のサラリーマンにおける会社とのかかわり方は、会社主義的な「全面関与型」と「出世志向型」、及び脱会社主義的な「限定関与型」と「自立志向型」に類別できることが明らかとなった。さらに「生活・就業スタイル調査」では自分の能力や興味にあった仕事内容を重視する「自己実現型」も取り出された。しかし、自己実現型は会社主義と脱会社主義の中間形態と位置づけられるため、理論的な類型の枠組としては、「全面関与型」・「出世志向型」・「限定関与型」・「自立志向型」の4つが有効と考えられる。

そして、現在の現役サラリーマンにおいて、主流な会社とのかかわり方は会社主義的な「全面関与型」・「出世志向型」から脱会社主義的な「限定関与型」・「自立志向型」にシフトしている。このとき、若年ほど脱会社主義的であるが、1996年と2001年でコーホートごとの意識に大きな変化がないことから、若年層の脱会社主義は年齢効果というよりもコーホート効果と考えることができる。したがって、これらの会社とのかかわり方は、年齢を重ねても比較的変わりにくい、世代的に安定した変数とみなしてよいだろう。

全面関与型は、自分の会社に尽くしたいと考えていたり、会社の上司や同僚と仕事を離れてもつき合いたいと考えていたりするなど、職業生活の様々な面において会社との一体感が強いことを特徴とする。この意識は、年収が高いほど、勤務先の規模が大きいほど、管理職であるほどあてはまっている。とりわけ、年収の効果は「生きがい調査」のみならず「生活・就業スタイル調査」でも現れており、賃金の高さが会社へのコミットメントへの有力なインセンティブになっていると考えられる。また全面関与型は、望ましい職業キャリアとして一企業管理職コースを志向しており、この点でも会社への定着志向は高い。

出世志向型は、多少無理しても出世したいという意識が強く、会社との一体感よりも個人の地位達成が前面に出ているところに特徴がある。年齢が高いほど、学歴が高いほど、労働時間が長

いほど、管理職であるほどあてはまっている。とりわけ管理職であることは「生活・就業スタイル調査」でもあてはまっており、社内での地位の高さが出世志向と結びついている。また出世志向型は賃金や社会的評価が高いことや成果主義的な処遇を労働条件として重視し、職業キャリアについては管理職コースを望んでいる。この点でも地位達成志向がみられる。

自立志向型は、脱サラへの志向性があり、どの会社でも通用する職業能力があるとの自己評価しており、会社に依存していないことを特徴とする。この意識は、学歴が高いほど、専門技術職ほどあてはまっている。ここから、会社に依存しない自立した働き方を志向するためには、相応の資源を備えていることが条件となっているものと考えられる。また自立志向型は、労働条件について、成果主義的な処遇や労働条件として勤め先が変わっても通用する職業能力が身につくことを重視し、複数企業型キャリアか雇用後に独立する職業キャリアを望んでいる。この点でも、自立志向型の姿勢は一貫している。

限定関与型は、会社に勤めつづけられるか不安をもっており、会社へのコミットメントが低い。しかし、会社から自立できるほどの自信はなく、会社と「つかず離れず」の関係を保っている。このため、労働条件やキャリアについても曖昧な姿勢がうかがえる。この意識は、年収が低いほどあてはまることから、全面関与型とは逆に賃金の低さが会社へのコミットメントの低さに結びついている。また自立志向型のように外部労働市場で通用する職業能力や資格を蓄積していないことが、会社から自立しきれない要因の一つにあると考えられる。したがって、脱会社主義的な働き方を展望する際に、自立志向型と同じ意味での「自己責任」を限定関与的な層にもあてはめることには無理があるのである。

こうした会社とのかかわり方は、定年後の生活への展望にも反映されている。全面関与型は、企業年金を主な生計の手段として期待し、雇用延長や出向先への転籍などにより企業に留まって好きな仕事を続けるとの展望をもっている。また、全面関与型では知識や経験を生かしたり、社会貢献したりすることへの意識も高まっており、人的交流や情報量の減少に不安をもっている反面、社会参加への意欲が見られる。したがって、会社に留まることが難しい場合にも、会社の代わりとなる社会参加の場を提供することが、全面関与型の前向きな定年退職を支援することになるだろう。

出世志向型は、就労による収入を主な生計の手段として期待しているが、働き方については全面関与型と同様に、雇用延長か出向先への転籍により企業に留まることを望み、そうでなければ再就職して、好きな仕事を続けるとの展望をもっている。地位達成への志向性が高い出世志向型にとって定年退職は「生きがいの喪失」や「所属・肩書きの喪失」などアイデンティティの危機を伴う経験であり、この喪失感を埋めるために働き続けるものと考えられる。したがって、定年後に会社で相応の地位を保障できない場合にも、社会生活の様々な場面で指導者やアドバイザーとしての役割を担うことが出世志向型にとってのアクティブ・エイジングにつながるだろう。

自立志向型にとって、定年退職という会社からの離脱は不安を伴う経験ではなく、新しい事業を始めたり、再就職したりして新たな生活へと踏み出すきっかけとして前向きにとらえられている。定年後の生計も現役のときと変わらず就労による収入を考えている。したがって、自立志向型には、独立・開業支援や再就職のための情報提供などにより、新しい仕事にスムーズに移行できるよう支援することが重要である。

今回の分析結果で、定年後の見通しが最も暗かったのは限定関与型である。この層は、定年後の生活について、経済的なゆとりを望んでいる裏で経済的不安ももっている。しかし、主たる生計の手段として当てにしている収入源はなく、再就職や簡単な仕事をしながら仕事を続けるとの展望を持ちながらも再就職に不安を感じている。したがって、限定関与型は、再就職支援を初め、

今後もっとも支援が必要な層と言えよう。

さらに、「生活・就業スタイル調査」では、会社とのかかわり方について職業生活の習慣からアプローチした。その結果、今の会社にずっと勤めつづけることを前提に経済的な生活設計をしているか否かが、全面関与型と自立志向型で大きく異なるところであった。また、出世志向型では生活のなかで仕事以外のことはほとんど何もしなかったり、自立志向型は自己啓発的な職業能力開発や転職・独立準備を行っていたりするなど、会社とのかかわり方における生活習慣と意識は多くの部分で重なっている。

しかし、意識のうえでの会社とのかかわり方と実際の生活習慣の間にはずれも見られた。このうち、自己啓発型職業能力開発の習慣をもつ意味では脱会社主義的であるにもかかわらず意識は全面関与型であるというずれは積極的に評価することができる。全面関与型の定年後の就業機会を広げる可能性を含んでいるからだ。自己啓発型職業能力開発を行っている層のなかには、定年後にボランティア・ワークで働くとの就業予想が芽生えつつあるが、この働き方は全面関与型にとって会社以外の場での社会参加や能力発揮の機会となりうるのである。また勤務先に自主退職する者が多い層ほど限定関与的であるが、この層は定年後の就業については再就職や新しい事業を展望しており、自立的な志向性もある。ここから、限定関与型の自立支援が定年後の就業支援の重要な課題になると考えられる。

会社とのかかわり方から定年後の生活を展望するとき、少子高齢社会の本格的な到来を迎える日本において、高齢期の多様な働き方の構築が重要であることがわかる。

第2章 夫婦・家庭との関係 夫婦・親子関係と生活・就業スタイル

安藤 究(鹿児島国際大学助教授)

はじめに

本章は、我々の「生活」の中で大きな位置を占める「家族」領域の諸相を概観することで、「生活と就業スタイル」という、本プロジェクトの主題の検討材料を提出することを目的とする。

「家族」は、多くの人を経験する社会的領域である。マクロなレベルでの「政治」や「経済」に比べると、「家族」は身近な世界であり、経験を通じた了解が容易である。それゆえ、「家族とは、当然～というものだ」といった、「自明」な家族一般像も形成されやすい。他方、我々一人一人の生活は実際には異なっており、ある人にとって「当たり前」な家族のスタイルが、別の人にとっては必ずしも「当たり前」ではない可能性がある。我々が自分達の経験にもとづいて獲得した一般的家族像には、経験に根ざしているが故の確かさと、経験を基にしているが故の特殊性の両面がある。

個人の経験に基づく家族像の特徴(確信性と特殊性)によって、現実には家族が変化している場合にも、我々はその変化を認識せず、「当たり前」な家族のイメージに囚われ続ける危険性があるだろう。この危険性には、家族に関する政策を考える上では、特に留意する必要があると思われる。

調査データにもとづいて「家族」を見ることには、個々人の経験が相対化されるため、個別の経験に基づく家族像の特徴(確信と特殊性)から生じる危険性を小さくするというメリットがある。本章では、調査データにもとづいて、「家族」領域のなかで、夫婦関係と親子関係(子どもとの関係)について概観したい。

使用するデータは、夫婦関係については、これまでシニアプラン開発機構がおこなってきた3回の「生きがい調査」(第1回1991年、第2回1996年、第3回2001年)の結果を用いる。親子関係(対象者の子どもとの関係)に関しては、従来の「生きがい調査」には質問項目が含まれていなかったため、別途行われた「生活と就業スタイル調査」のデータを使用する。

これらのデータの収集方法等については別の箇所ですく詳しく述べられているので、ここでは省略する。

1. 夫婦の親密性認知とコーホート～「団塊の世代」をめぐって

(a)何故「団塊の世代」か？

3回にわたって行われた「生きがい調査」における夫婦関係に関するデータは、すでに各回の報告書で基本的な分析がおこなわれている。第3回の報告書では、過去3回の調査で共通して用いられている質問項目をもとにして、夫婦の親密性認知(第3回報告書では「親密度」とネーミングされている)に関する尺度が作成され、3つの調査時点間の変化や、夫婦の就業形態・世帯構成・健康度・経済状態・自由時間との関連が検討されている(西村, 2002)。

本稿では、西村の報告で用いられた夫婦の親密性認知尺度を用いて、「団塊の世代」を中心とした、コーホート間の相違について検討してみたい。その理由は、「団塊の世代」およびその前後のコーホートが、戦後日本の家族変動の中で、大きな影響を及ぼしたと考えられているからである。

第二次世界大戦後の日本の家族変動に関しては、大きく見ると二つの段階があったと指摘され

ている(落合, 1997 ; 目黒, 1999)。第1の段階は、戦後から1970年代半ばまでに進行した「近代家族」の普及という家族変動であり、第2段階は、その一般化した「近代家族」というスタイルに揺らぎが生じる局面である。第2段階の変化の基本的性格については、社会の基礎的単位が家族から個人に変化していると解釈する枠組み(Meguro, 1992)が有力である。

「団塊の世代」及びその前後のコーホートは、この2つの段階の転回点に家族形成をおこなっていった。落合によれば、このグループは「ニューファミリー」と呼ばれた<新しい>スタイルの夫婦関係の中心的担い手であり、学生紛争を身近に経験したことから、戦後の日本社会に文化的に存続していた「イエ」制度的な要素に対して反発した。そのため、家族形成期には「友達のような対等な夫婦」を理想として、女性は、戦後直後のアメリカ社会の夫婦をモデルとした「専業主婦」になる割合が高かったが、理想と現実のギャップから、子育てが終了した時期から脱専業主婦化を進行させていった(落合, 1997)。

アメリカでは、ベビーブーマーという人口学的に特殊なコーホートが、学生運動を経験し、その後も特色のある家族キャリアを発達させていったことが指摘されている(Wilhelm, 1998)。それゆえ、日本でも、人口学的に特殊な性格を持つ「団塊の世代」が、「ニューファミリー」という形で家族形成時に示した特殊性を、その後の家族生活においても保持しているかどうかを検討する意義はあるだろう。特に、「団塊の世代」の男性に関しては、「仕事」に対する態度等のユニークさはしばしば指摘されてきたものの、家族領域に関しては、量的なデータを用いて十分な検討が行われてきたとは言いがたい。

また、先に触れたように、すでに第3回調査の報告書において、夫婦の就業形態・世帯構成・健康度・経済状態・自由時間との関連が検討されている。そこで本章では、家族と家族外領域との関係・「社会の中の家族の位置付け」という視点の重要性に鑑みて、夫婦の親密性認知と社会的活動、および生活の基盤となる領域(認知)との関係を検討する。

(b)方法

夫婦親密感認知に関する尺度作成は、西村の作業に従い(西村, 2002)、3回の調査すべてに含まれている質問項目を用いた。本人票と配偶者票では、基本的には同じ質問項目が含まれているものの、例えば、本人票では「自分は配偶者を理解している」という質問文が、配偶者票では「配偶者は私を理解している」となっている場合もある。すなわち、本人票では夫婦関係における本人の能動性を測定しているのに対して、配偶者票では受動性を測定している質問項目が幾つか含まれている、ということである。

この非対称性自体は問題とならないが、本人票と配偶者票にそれぞれ男性と女性が交じり合っているため、そのまま分析すると、「夫の能動性」と「妻の受動性」の組み合わせと、「夫の受動性」と「妻の能動性」の組み合わせが、分析結果に混在することとなる。本稿ではこの非対称性を考慮して、本人票では男性に、配偶者票では女性に限定して分析をおこなった(〔西村, 2002〕でも同様な制限が加えられている)。

分析に使用した具体的な質問項目は、「自分は配偶者を頼りにしている」(配偶者票では「配偶者は私を頼りにしてくれている」)、「自分は配偶者を理解している」(「配偶者は私を理解している」)、「自分は配偶者を愛している」(「配偶者は私を愛している」)、「共通の趣味がある」(配偶者票も同じ)、「対話がある」(配偶者票も同じ)、「よく一緒に出かける」(配偶者票も同じ)、「配偶者の独自の趣味や行動を尊重している」(配偶者票も同じ)、「自分は配偶者を助けている」(配偶者票も同じ)、の7つである。それぞれ、「まったくその通り」・「まあそのとおり」・「あまりそうでない」・「まったく違う」という回答を4~1とコードした。

この7つの項目に関して因子分析を行ったところ(主因子法)、各回の調査ですべて、一つの次元上にあることが確認された(表は省略)。7つの質問項目の内的一貫性に関しては、第1回調査では、Cronbachの α 係数は0.806(夫)・0.844(妻)、第2回調査では0.783(夫)・0.841(妻)、第3回調査では0.799(夫)・0.853(妻)であり、7つの項目を加算して、親密性認知得点として用いる。

「団塊の世代」は、狭義には1947-49年出生コーホートを指すが、3つの調査時点の間隔が5年であることから、本稿では1947-51年出生コーホートを「団塊の世代」の作業定義とする。したがって、本稿における「団塊の世代」は、第1回調査時点(1991年)で40-44歳、第2回調査時点(1991年)で45歳-49歳、第3回調査時点(2001年)で50-54歳である。この「団塊の世代」と比較するために、「プレ団塊世代」を1932-36年出生コーホート、「ポスト団塊世代」を1957-61年出生コーホートとする。「プレ団塊世代」は、第1回調査時点では55-59歳、第2回調査時点で60-64歳、第3回調査時点で65-69歳である。「ポスト団塊世代」は、第1回調査時点では30-34歳、第2回調査時点で35-39歳、第3回調査時点で40-44歳である。ただし、第1回調査時点では、30-34歳の男性はサンプルには含まれていない。

社会的活動は、近隣交際・集団参加・集団参加における役員経験(過去と現在)・社会サービス活動を測定する。近隣交際は、「ほとんどつきあいはない」「顔が合えば挨拶をする」「たまには立ち話をする」「互いに訪問したり、何かを一緒にする」「お互いの事情がわかり、困った時に相談したり助け合う」を、1-5とコードした。

集団参加に関しては、「趣味やスポーツの集団」「学習・教養の集団」「職場関係の集団」「旧職場関係の集団」「PTAや青少年団体等の集団」「難病や障害児の家族会等」「町内会や自治会等」「老人クラブ等」「消費者団体やNPO等」「宗教団体・政治団体」「その他」というグループに参加しているかどうかを問い、参加している数を足しあげた。過去と現在の役員経験は、上記の集団において役員を経験した数を足しあげた。役員経験の測定は、より強いコミットメントでの集団参加を捉えるためである。

社会サービス活動は、地域活動やボランティアといった社会貢献の活動頻度を測定した。「参加していない」「以前に参加したことがある」「ときどき参加している」「定期的に参加している」を1-4とコードした。

認知された生活の基盤となる領域は、幾つかの生活や社交の項目の場が、「家庭」「仕事・会社」「地域・近隣」「個人的友人」「世間・社会」「その他」「どこにもない」のどの領域にあるかを尋ね、選択された領域に1とコードした。そして、各領域が選択された数を足しあげて、その領域の生活基盤得点とした。具体的な生活や社交の項目は、「生活にはりあいや活力をもたらしてくれるところ」「リズムやメリハリをもたらしてくれるところ」「心のやすらぎや気晴らしを感じる場所」「喜びや満足感が感じる場所」「人生観や価値観に影響を与える場所」「生活の目標や目的となる場所」「自分自身を向上させている場所」「自分の可能性を実現したり、何かをやり遂げたと感じる場所」「自分が役立っていると感じたり評価を得ている場所」である。

(c)結果

第1回調査における夫の親密性認知得点の最小値と最大値は7.0と28.0で、平均値は21.2、標準偏差は3.34であった。妻の得点の最小値と最大値は7.0と28.0、平均値は21.1、標準偏差は3.92であった。第2回調査における夫の親密性認知得点の最小値と最大値は8.0と28.0、平均値は21.5、標準偏差は3.22であり、妻の得点の最小値と最大値は7.0と28.0、平均値は21.1、標準偏差は3.8であった。第2回調査における夫の親密性認知得点の最小値と最大値は8.0と28.0、平均値は21.5、標準偏差は3.22であり、妻の得点の最小値と最大値は7.0と28.0、平均値は21.1、

標準偏差は 3.8 であった。第 3 回調査では、夫の親密性認知得点の最小値と最大値は 7.0 と 28.0、平均値は 21.6、標準偏差は 3.36 であり、妻の得点の最小値と最大値は 7.0 と 28.0、平均値は 20.9、標準偏差は 4.0 であった。

「団塊の世代」と「プレ団塊世代」「ポスト団塊世代」で夫婦の親密性認知得点に差があるかどうかを見るために、一元配置分析を行った。その結果は表 2-1・2、図 2-1・2 に示してある。

夫に関しては、第 1 回調査では「団塊の世代」と「プレ団塊世代」の間に、統計的に有意な平均親密性認知得点の差はないが（先述の通り、第 1 回調査時点では「ポスト団塊」世代はサンプルに含まれていない）、第 2 回・第 3 回調査時点では、ともに、「団塊世代」が「プレ団塊世代」「ポスト団塊世代」に対して、統計的に有意に平均親密性認知得点が低くなっている。

また、1991 年から 2001 の 10 年の間における、「プレ団塊世代」「ポスト団塊世代」の平均親密性認知得点の変動と「団塊の世代」の平均親密性認知得点の変動を比べると、「団塊の世代」のそれが相対的に小さい（図 2-1 参照）。これは、「プレ団塊世代」「ポスト団塊世代」では加齢 (aging) が平均親密性認知得点に及ぼす影響が考えられるのに対して、「団塊の世代」では、3 回の調査時点間では、加齢は平均親密性認知得点にほとんど影響を及ぼしていないことを示す。したがって、他の年齢層と比べると相対的に低い「団塊の世代」の夫の親密性認知に関しては、他の規定要因、すなわちコーホート効果や、職業キャリア上の位置と時代効果の交互作用などを考えていく必要があるだろう。

妻に関しては、第 1 回調査と第 2 回調査では、夫の場合と同様に、「団塊の世代」の平均親密性認知得点が、「プレ団塊世代」「ポスト団塊世代」のそれよりも有意に低い。第 3 回調査では、「プレ団塊」の平均得点よりも「団塊の世代」の平均得点が低いが、「ポスト団塊世代」の平均はさらに低くなっている。「ポスト団塊世代」と「団塊の世代」の妻は、第 1 回調査の 1991 年から第 2 回の 1996 年にかけては、ともに平均得点が上昇し、第 2 回調査から第 3 回調査 (2001 年) にかけて下降しているが、「ポスト団塊世代」の下降の度合いが著しく大きい。

「プレ団塊世代」では、3 回の調査の間に一貫して平均得点が低下しており、加齢効果を伺うことが出来るだろう。しかし「ポスト団塊世代」と「団塊の世代」では違ったパターンとなっていること、また、2 つの異なる出生コーホートで同様なパターンが見られたことは、単純な家族周期段階効果などを仮定することには注意が必要であることを示すであろう。

表 2-1 夫婦の親密性認知と「世代」(夫)

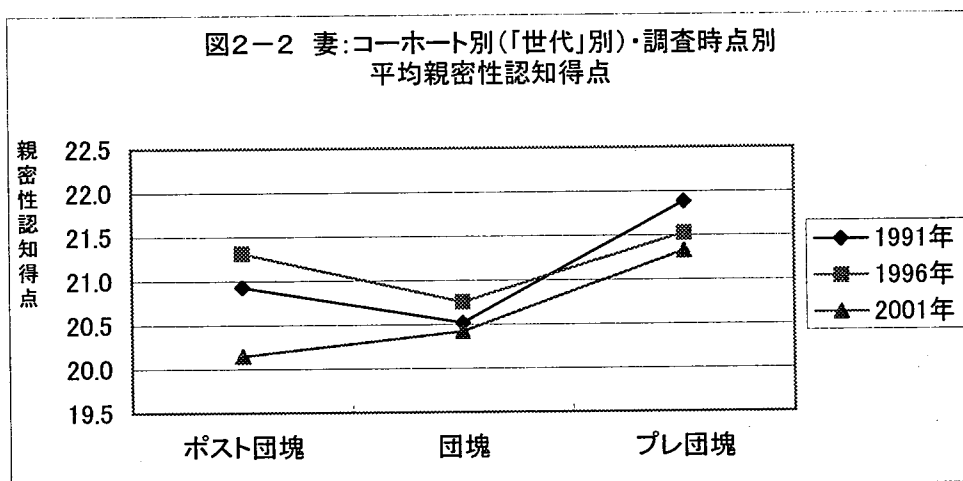
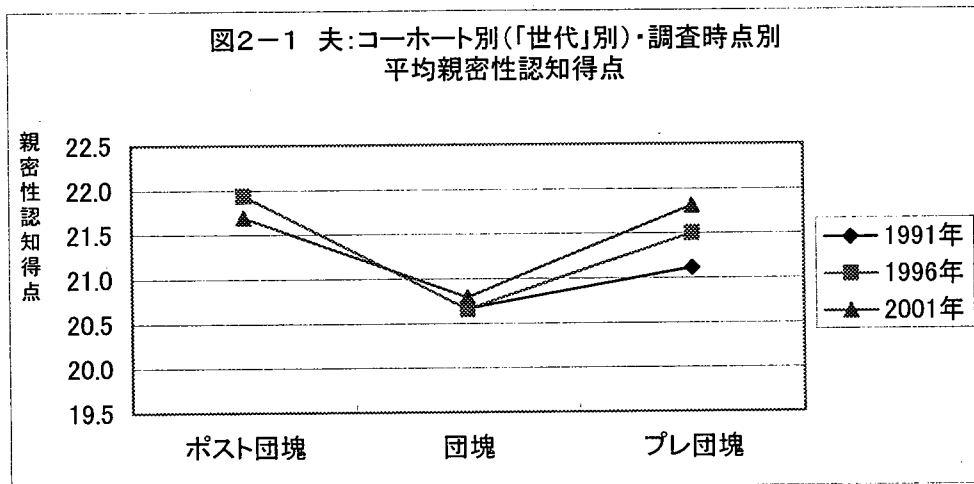
夫	1991年	1996年	2001年
ポスト団塊		21.9	21.7
団塊	20.7	20.7	20.8
プレ団塊	21.1	21.5	21.8
F値	2.786	9.046	8.326
	N.S(p<.1)	p<.001	p<.001

(一元配置分析:セル内の数値は親密性認知得点の平均値)

表 2-2 夫婦の親密性認知と「世代」(妻)

妻	1991年	1996年	2001年
ポスト団塊	20.9	21.3	20.1
団塊	20.5	20.8	20.4
プレ団塊	21.9	21.5	21.3
F値	9.923	3.406	4.538
	P<.001	p<.05	p<.05

(一元配置分析:セル内の数値は親密性認知得点の平均値)



妻の場合にも、1991年から2001にかけての10年間の「団塊の世代」の平均得点の変動は小さい。また、相対的に見ると、「団塊の世代」の夫と妻の平均得点にはそれ程大きな差はなく、第3回調査の「ポスト団塊世代」の妻を例外として、総じて親密性認知得点の平均が低くなっている。

表2-3・4は、夫と妻それぞれの、親密性認知得点と社会的活動の関連を分析した結果である(1996年の第2回調査では集団活動や社会サービス活動に関する質問項目が調査票に含まれていない)。1991年の第1回調査では、親密性認知得点は各活動とすべて正の相関を示している。家族外領域での社会的活動を活発に行っていると、親密性認知得点が高くなる傾向が観察される、ということである。この傾向は2001年の第3回調査でも基本的には同じで、過去の集団役員の経験との間に有意な関連が見られなかったことのみが例外である。1996年の第2回調査における唯一の社会的活動項目である近隣交際でも、親密性認知得点との間に正の相関が認められおり、3回の調査を通じて、夫の家族外領域の社会的活動は、夫の夫婦関係の親密性認知得点を高める方向に作用する可能性が示唆されている。

妻に関しても、夫同様の傾向が見られる。妻の場合も、測定されている項目に関しては、第3回調査の過去の役員経験項目を除いて、親密性認知得点との間に正の相関が認められる。したがって、夫にしる妻にしる、家族外領域における社会的活動は、夫婦の親密性認識を高める可能性があると考えることが出来るだろう。

表 2-3 夫：親密性認知得点と社会的活動の相関(ピアソンの相関係数)

	1991年	1996年	2001年
夫:近隣交際	0.110 ***	0.097 ***	0.135 ***
N	2128	2062	2028
夫:集団参加	0.189 ***	—	0.114 ***
N	2128	—	2028
夫:集団役員経験(現在)	0.155 ***	—	0.047 *
N	2128	—	2028
夫:集団役員経験(過去)	0.109 ***	—	0.017
N	2128	—	2028
夫:社会サービス	0.132 ***	—	0.093 ***
N	2093	—	1827

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 2-4 妻：親密性認知得点と社会的活動の相関(ピアソンの相関係数)

	1991年	1996年	2001年
妻:近隣交際	0.088 ***	0.125 ***	0.094 ***
N	2099	2015	1988
妻:集団参加	0.139 ***	—	0.069 **
N	2099	—	1988
妻:集団役員経験(現在)	—	—	0.086 ***
N	—	—	1988
妻:集団役員経験(過去)	—	—	0.032
N	—	—	1988
妻:社会サービス	0.116 ***	—	0.093 ***
N	2058	—	1807

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 2-5・6 は、夫と妻のそれぞれの、親密性認知度と生活の基盤と認識される領域との関連をみたものである。夫の親密性認知得点と正の相関が認められるのは、1991年(第1回調査)では「家庭基盤得点」「地域・近隣基盤得点」「世間・社会」、1996年(第2回調査)では「家庭基盤得点」、2001年(第3回調査)では「家庭基盤得点」「地域・近隣基盤得点」である。調査時点で多少の違いはあるが、総じて、「家庭基盤得点」との相関が顕著で、次に「地域・近隣基盤得点」との相関が大きくなっている。「家庭」を基盤とする回答と夫婦の親密性認知が正の相関を示すのは不思議ではないが、「地域・近隣」という回答の間にも正の相関が認められたことは、男性が近代社会における女性の典型的な社会的空間にコミットすることが、夫婦の親密性認知を高める方向に作用する可能性があるかと解釈できるだろう。

逆に負の相関が認められるのは、第1回調査では「仕事基盤得点」「<その他の領域>得点」「<どこにもない>得点」、第2回調査では「<その他の領域>得点」「<どこにもない>得点」、第3回調査では「<その他の領域>得点」「<どこにもない>得点」である。

3回の調査を通じて安定して負の関連が見られるのは「<その他の領域>得点」「<どこにもない>得点」であり、特に、「<どこにもない>得点」との関連が顕著である。「どこにも自分の居場所がない」からこそ、「家庭」という領域の中の夫婦関係に関しても、親密性の認知が低くなるのであろう。

妻の親密性認知得点と正の相関が認められたのは、1991年(第1回調査)では「家庭基盤得点」「地域・近隣基盤得点」「世間・社会」、1996年(第2回調査)では「家庭基盤得点」、2001年(第3回調査)では「家庭基盤得点」「地域・近隣基盤得点」である。3回の調査を通じて安定して顕著な関連が認められたのは「家庭基盤得点」であり、「地域・近隣基盤得点」は、有意な関連は認

表 2-5 夫：親密性認知得点と生活の基盤領域（認知）の相関（ピアソンの相関係数）

	1991年	1996年	2001年
夫:家庭基盤得点	0.226 ***	0.248 ***	0.264 ***
N	2128	2062	2028
夫:仕事基盤得点	-0.044 *	-0.023	-0.035
N	2128	2062	2028
夫:地域・近隣基盤得点	0.104 ***	0.026	0.076 **
N	2128	2062	2028
夫:友人基盤得点	-0.026	0.002	-0.027
N	2128	2062	2028
夫:世間・社会	0.043 *	0.001	0.029
N	2128	2062	2028
夫:<その他の領域>得点	-0.060 **	-0.097 ***	-0.082 ***
N	2128	2062	2028
夫:<どこにもない>得点	-0.128 ***	-0.142 ***	-0.173 ***
N	2128	2062	2028

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 2-6 妻：親密性認知得点と生活の基盤領域（認知）の相関（ピアソンの相関係数）

	1991年	1996年	2001年
妻:家庭基盤得点	0.317 ***	0.320 ***	0.319 ***
N	2099	2015	1988
妻:仕事基盤得点	-0.058 **	-0.013	-0.048 *
N	2099	2015	1988
妻:地域・近隣基盤得点	0.083 ***	0.034	0.053 *
N	2099	2015	1988
妻:友人基盤得点	0.023	-0.050 *	0.006
N	2099	2015	1988
妻:世間・社会	0.049 *	0.012	-0.012
N	2099	2015	1988
妻:<その他の領域>得点	-0.028	-0.067 **	-0.043
N	2099	2015	1988
妻:<どこにもない>得点	-0.242 ***	-0.231 ***	-0.226 ***
N	2099	2015	1988

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

められるものの、それ程安定してははっきりと認められたわけではない。認知された生活の基盤となる領域は、9つの生活や社交の項目それぞれに対して2つまで選ぶことになっており、「家庭」と「地域・近隣」という回答は排他的ではない（「家庭」を選んだから「地域・近隣」を選ばないということではない）。したがって、女性の場合、近代における女性の典型的な社会空間にコミットすることが、必ずしも夫婦の親密性認知を高めるわけではない、という可能性が示唆されているのではなかろうか。

有意な負の相関が認められるのは、第1回調査では「仕事基盤得点」「<どこにもない>得点」、第2回調査では「友人基盤得点」「<その他の領域>得点」「<どこにもない>得点」、第3回調査では「仕事基盤得点」「<どこにもない>得点」である。3回の調査を通じて安定してははっきりとした負の相関が認められるのは「<どこにもない>得点」であり、夫の場合と同様に、「自分の居場所がない」が故に、夫婦関係に関しても、低い親密性の認知となるのであろう。

夫婦の親密性認知に関して、小括しておく。夫や妻の親密性認知の変化の背景については、歴史的イベントの影響（バブル絶頂時からバブル崩壊）や、加齢(aging)にともなう変化が指摘されている(西村, 2002)。しかし、特定の出生コーホートは、必ずしもこうした全体的な特徴と一致しない

可能性もある。本稿では、戦後の日本社会に大きな影響を与えたとされるコーホート、すなわち「団塊の世代」に焦点を当てて分析をおこなった。

「団塊の世代」と「プレ団塊世代」「ポスト団塊世代」の夫婦の親密性認知得点を比較すると、「団塊の世代」の夫と妻は、全体的には、他のコーホートよりも点数が低く(例外は2001年の第3回の調査における「ポスト団塊」の妻)、3回にわたっての調査における点数のばらつきも小さい。この特徴は、特に夫において顕著である。3回の調査が1991年、1996年、2001年と10年の幅をもって行われていること、「プレ団塊世代」「ポスト団塊世代」の夫と妻の親密性認知得点は調査時点間での変動が観察されることから、「団塊の世代」の低い親密性認知得点に関しては、加齢効果ではなく、コーホート効果や、何らかのキャリア上の位置(例えば職業キャリア)と時代効果の交互作用などを考慮する必要があるだろう。「団塊の世代」に関しては、男性の職業生活におけるユニークさや女性の家族領域におけるユニークさは指摘されていたものの、「団塊の世代」の男性の家族領域における特徴は十分には検討がおこなわれてこなかったため、ここでの知見は、さらに今後調査をして深めていくべきである。「団塊の世代」のリタイアは間近に迫っており、リタイア後の生活において家族領域の比重が高まるのが、容易に推定できるからである。

親密性認知得点と社会的活動、および生活の基盤領域(認知)との関連は、家族領域内の夫婦の親密性認知が、家族外領域と密接に関連していることを示す。親密性認知得点と社会的活動の関連を検討すると、夫婦ともに、家族外領域の社会的活動が、それぞれの夫婦の親密性認知得点を高める方向に作用する可能性が示唆された。また、生活の基盤領域(認知)との関連からは、夫婦ともに、低い親密性認知は、「自分の居場所がない」と感じていることの結果である可能性が示唆された。

「夫婦の親密性」という「私」(プライベート)領域に「公」(パブリック)が直接介入することは技術的にも倫理的にも困難であるが、家族外領域での活動が親密性の高い認知と関連し、「居場所がない」という感覚が親密性の低い認知と関連していることは、「自分の居場所」の確保につながる可能性のある社会的活動を、容易に行えるような社会的環境を検討・用意する意義を示しているのではなかろうか。

2. 親子関係

(a) サンプルの概要

先に述べたように、親子関係についての質問項目は「生きがい調査」には含まれていないので、別途行われた「生活と就業スタイル調査」のデータを使用する。

まず、「生活と就業スタイル調査」データにおける、家族形成期の基本的なイベントの概要を見ておく。男性の婚姻上の地位は、未婚が7.2%(63人)、有配偶者が90.2%(787人)(初婚80.8%、再婚3.9%、初婚・再婚不明5.5%)、離死別が2.6%(23人)である。女性に関しては、男性標本の配偶者に調査をおこなっているため、すべて「妻」という地位にある。

現在の婚姻が初婚である場合、平均初婚年齢は男性が28.1歳(標準偏差3.8)、女性が26.1(標準偏差7.1)となっている。出生コーホートによる傾向の違いの有無を検討するために、1963-67年出生コーホート(35歳-39歳)、1946-50年出生コーホート(50-54歳)、1933-37年出生コーホート(65-69歳)を設定し、コーホート別の初婚年齢の四分位数と平均初婚年齢を算出した。表2-7がその結果である。どのコーホートでも、男性標本の25%が結婚を経験する年齢、50%が結婚を経験する年齢、75%が結婚を経験する年齢に大きな違いはなく、また、出生コーホートによる有意な平均初婚年齢の違いは見られなかった。分析に用いている標本は高学歴に偏りがあるので、夫の教育程度別に平均初婚年齢を検討したのが表2-8である。その結果、夫に関しては、高学

表 2-7 コーホート別初婚年齢の四分位数と平均初婚年齢(一元配置分析)

		25%	50%	75%	平均	F値
夫	35-39歳(1963-67年出生)	25	27	30	27.5	2.36(N.S)
	50-54歳(1946-50年出生)	25	28	31	28.8	
	65-69歳(1933-37年出生)	26	27	30	28.0	
妻	35-39歳(1963-67年出生)	23	25	28	25.7	1.38(N.S)
	50-54歳(1946-50年出生)	22	24	27	25.0	
	65-69歳(1933-37年出生)	24	25	27	25.9	

表 2-8 夫の教育程度別平均初婚年齢

	夫: 平均値	夫: 標準偏差	妻: 平均値	妻: 標準偏差
低(夫の教育程度)	27.5	4.10	26.7	11.05
中(夫の教育程度)	27.6	3.81	25.6	7.00
高(夫の教育程度)	28.6	3.61	26.3	6.15
F値	7.34		1.09	
	p<.001		(N.S)	

表 2-9 コーホートと教育程度(男性)

		低	中	高	
35-39歳(1963-67年出生)	度数	6	65	67	138
	%	4.3	47.1	48.6	100.0
50-54歳(1946-50年出生)	度数	7	44	52	103
	%	6.8	42.7	50.5	100.0
65-69歳(1933-37年出生)	度数	27	60	47	134
	%	20.1	44.8	35.1	100.0
計	度数	40	169	166	375
	%	10.7	45.1	44.3	100.0

カイ二乗値 22.19 p<.001

歴者の平均初婚年齢は有意に高かった(妻の教育程度に関する情報ないので、配偶者の夫の教育程度で検討したが、有意な平均初婚年齢の違いはなかった)。この3つの出生コーホートと教育程度の間関係をみたのが表 2-9 である。一般に晩婚化の進行が指摘されるにも関わらず本標本ではそれが認められないのは、この表に示されるように、どのコーホートでも高学歴者に偏りがあることによる可能性があるだろう。

次に第1子出生についてみると、男性の第1子出生年齢の平均は 30.2 歳(標準偏差は 4.15)、女性の第1子出生年齢の平均は 28.2 歳(標準偏差は 7.68)であった。コーホート別の第1子出生年齢の四分位数と第1子出生年齢の平均は、表 2-10 に示される通りである。夫に関しては、「団塊の世代」を含む 1946-50 年出生コーホートで有意に第1子出生年齢の平均がやや高く、このコーホートの第1子出生を経験する年齢の四分位数のばらつきは、他のコーホートよりもばらつきが大きくなっている。妻に関しては、コーホート間に第1子出生年齢の平均に有意な差はなく、第1子出生年齢の四分位数でも、50%が第1子出生を経験するまでの年齢では 1946-50 年出生コーホートがやや低くなっているが、75%が経験する年齢ではその差は小さくなっている。

表 2-10 コーホート別第 1 子出生年齢の四分位数と平均第 1 子出生年齢(一元配置分析)

		25%	50%	75%	平均	F値
夫	35-39歳(1963-67年出生)	27	29	32	29.7	3.64(p<.05)
	50-54歳(1946-50年出生)	27	31	34	31.1	
	65-69歳(1933-37年出生)	28	29	32	29.8	
妻	35-39歳(1963-67年出生)	25	28	30	27.8	1.24(N.S)
	50-54歳(1946-50年出生)	24	26	29	26.8	
	65-69歳(1933-37年出生)	25	27	29	27.3	

(b)親子関係

高校生以下の子どもがいる対象者に、子どもと一緒にいること(親子関係の行動レベル)と、子どもとの関係の認知(親子関係の認知レベル)を尋ねた。その結果が表 2-11 と表 2-12 である。行動レベルの質問項目では、日常的な接触(「一緒に夕食をとる」)・余暇活動(「一緒にスポーツやゲーム・趣味を楽しむ」)・家の外での同伴行動(「一緒に外出する」)・(親の)道具的機能活動(「知識や技能を教える」)のすべてにおいて、母親の方が父親よりも行動頻度が高かった。「高校生以下の子どもと行うこと」ということで、ここで分析の対象となっているのは今回の標本の中では若年層が中心となることを考えると、性別役割分業にもとづいた子育ての仕方に変化が見られることが期待されたが、「夫と妻がともに子育てをおこなう」という姿は、分析結果からは明確には浮かび上がってこない。むしろ、依然として、「現実の子育ての主役は妻=母」ということである。

このような傾向は、親子関係の認知レベルでも観察される。「好きなことをよくわかっている」「子どもの仲のいい友達の名前はほとんど知っている」「子どもに信頼されている」「子どもの将来の夢についてよく知っている」という各項目に対して、「そう思う」「大体そう思う」という肯定的な回答の比率は母親の方が父親よりも高い。特に、「友達の名前」という、子どもの現実の世界に関する認知項目に関しては、圧倒的に母親の方が肯定的な回答を行っており、行動レベルの親子関係項目の結果と同様に、現実の子育ての主たるエージェントが母親であることが示されているだろう。

表 2-11 子どもと一緒にいること(高校生以下)

	一緒に夕食		一緒に趣味等		一緒に外出		教える(勉強等)	
	父(%)	母(%)	父(%)	母(%)	父(%)	母(%)	父(%)	母(%)
ほぼ毎日	30.7	90.4	4.9	17.4	2.3	14.4	3.6	22.4
週に3~4回	23.5	5.6	7.8	9.0	2.0	9.4	3.9	15.4
週に1~2回	40.5	2.3	33.0	27.1	45.9	41.1	26.1	26.4
月に1~2回	2.6	0.7	23.9	19.7	29.5	21.7	31.4	14.4
年に数回	2.0	0.0	20.3	18.4	17.0	11.4	21.9	15.7
全くなかった	0.7	1.0	10.1	8.4	3.3	2.0	13.1	5.7
合計人数	306人	301人	306人	299人	305人	299人	306人	299人

表 2-12 子どもとの関係(高校生以下)

	好きなことを理解		友達の名前を把握		信頼されている		将来の夢を把握	
	父(%)	母(%)	父(%)	母(%)	父(%)	母(%)	父(%)	母(%)
そう思う	21.6	45.5	7.8	45.5	21.5	34.08	8.4	21.36
大体そう思う	65.6	53.2	35.8	44.9	62.9	59.24	42.2	51.46
あまりそう思わない	12.8	1.0	43.3	9.0	14.6	6.37	42.2	24.60
そう思わない	0.0	0.3	13.1	0.6	0.9	0.32	7.2	2.59
合計人数	320人	312人	321人	312人	321人	314人	320人	309人

表2-13は、親子関係に影響を及ぼす可能性が考えられる項目と、父親の行動レベルでの親子関係の相関をみたものである。相関関係を検討した項目では、職種は、専門・管理職を1とコードし、それ以外を0とコードした。従業員規模は、「1~29人」「30から99人」「100~299人」「300~999人」「1000人以上」を1~5とコードした。性別役割分業意識は、「男は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という意見に対して、「賛成」「やや賛成」「やや反対」「反対」を4~1とコードした。

父親の場合、「一緒に夕食をとる」という子どもとの日常的な接触は、容易に予想されるように、男性の「働き方」に関わる項目と有意な相関を示す。大企業に勤め、労働時間・通勤時間が長い男性は、子どもとの日常的な接触が小さくなる。余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動に関しては、男性の働き方は、余暇活動と有意な関連がやや見られるだけで、全体的には、あまり関連していない。これらの活動と強く関連しているのは子どもの年齢であり、長子にしても末子にしても、年齢が上がるとともに、父親とこうした活動を一緒にする度合いは小さくなる。

単純集計の結果と同様に、父親は子どもの生活にあまり係わり合いがない姿が浮かび上がってくる。行動レベルの親子関係に対して父親の「働き方」が影響を及ぼすのは、日常的な接触が主で、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動に関しては、父親の「働き方」はあまり影響を及ぼしていない。「仕事」と「家族」という2つの大きな社会的領域の間には、例えば「仕事」の領域の比重が高まれば「家族」の領域の比重が低下するといった相互作用が想定されるが、この想定に反して、父親の働き方が子どもとの余暇活動等と関連を持っていないのは、そもそも全体的に父親が子どもとの係わり合いが小さいことによる可能性があるだろう。

表2-13 父親：行動レベルの親子関係との相関

	一緒に 夕食	一緒に 趣味等	一緒に 外出	え 勉 強 な ど を 教
教育程度	-0.177 **	0.025	0.011	0.042
N	242	242	242	242
本人年収	-0.022	-0.001	-0.052	-0.066
N	248	248	248	248
職種(専門・管理職)	0.052	-0.002	0.060	-0.072
N	241	241	241	241
労働時間(週単位)	-0.211 **	-0.035	-0.052	0.065
N	237	237	237	237
従業員規模	-0.333 ***	-0.140 *	-0.031	-0.121
N	242	242	242	242
通勤時間	-0.282 ***	-0.145 *	-0.038	-0.049
N	242	242	242	242
勤続年数	0.024	-0.137 *	0.005	-0.022
N	243	243	243	243
長子年齢	-0.051	-0.468 ***	-0.523 ***	-0.224 ***
N	248	248	248	248
末子年齢	-0.104	-0.561 ***	-0.559 ***	-0.324 ***
N	191	191	191	191
性別役割分業意識	-0.048	0.094	-0.022	-0.023
N	246	246	246	246

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表2-14 母親：行動レベルの親子関係との相関

	一緒に夕食	一緒に趣味等	一緒に外出	勉強などを教える
就業の有無	-0.029	-0.182 **	-0.263 ***	-0.207 **
N	251	251	250	250
職種(専門職・非専門職)	-0.143	0.048	-0.019	-0.026
N	128	128	127	128
世帯年収	-0.032	-0.230 ***	-0.164 **	-0.182 **
N	251	251	250	250
長子年齢	-0.148 *	-0.624 ***	-0.616 ***	-0.548 ***
N	251	251	250	250
末子年齢	-0.217 **	-0.557 ***	-0.542 ***	-0.571 ***
N	197	197	196	196
性別役割分業意識	-0.024	0.076	0.191 **	0.097
N	250	250	249	249

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

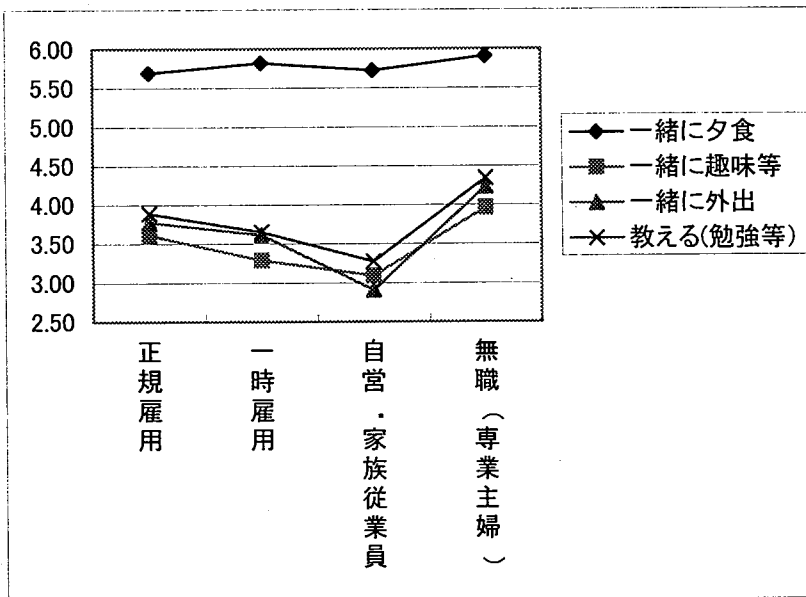
母親の場合、「一緒に夕食をとる」という子どもとの日常的な接触と、専業主婦かどうかという妻の生活スタイル(「就業・非就業」)には有意な関連が見られず、子どもの成長のみが有意な関連を示した。それに対して、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動に関しては、妻の生活スタイル(「就業・非就業」)が、子どもの年齢とともに、有意な関連を示した。仕事を持っている女性は、これらの行動レベルの親子関係項目に関しては、専業主婦の女性よりも、活動の頻度が小さくなる。また、父親の場合と同様に、これらの親子関係項目に関してより強い相関を示すのは子どもの年齢であり、子どもが成長するのにしたがって子どもの社会的世界が広がり、その拡大した社会的世界中で、親との接触が低下することを示していると思われる。

母親の就業が親子関係に及ぼす影響を検討するために、さらに、母親の就業形態を細かく分類して、子どもと行う活動の頻度との関連をみたのが表2-15と図2-3である。

表2-15 母親の就業形態と親子関係(行動頻度)

		平均値	標準偏差	F値	
一緒に夕食	正規雇用	5.69	0.89	1.495	n.s
	一時雇用	5.82	0.58		
	自営・家族従業員	5.73	0.65		
	無職(専業主婦)	5.91	0.50		
一緒に趣味等	正規雇用	3.61	1.66	4.645	**
	一時雇用	3.29	1.41		
	自営・家族従業員	3.09	1.51		
	無職(専業主婦)	3.96	1.52		
一緒に外出	正規雇用	3.78	1.31	8.512	***
	一時雇用	3.62	1.13		
	自営・家族従業員	2.91	0.70		
	無職(専業主婦)	4.23	1.22		
教える(勉強等)	正規雇用	3.89	1.69	5.370	**
	一時雇用	3.65	1.42		
	自営・家族従業員	3.27	1.42		
	無職(専業主婦)	4.34	1.50		

図2-3 母親の就業形態と親子関係(行動頻度)



「一緒に夕食をとる」という子どもとの日常的な接触に関しては、やはり、雇用上の地位による有意な差は見られなかった。母親が専業主婦であろうとも、どのような形態(正規雇用・一時雇用(パート・派遣・嘱託)・自営・家族従業員)で働いていても、子どもとの日常的な接触頻度には大きな違いはないということである。それに対して、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動に関しては、雇用上の地位によって有意な差が認められたが、ここで興味深いのは、専業主婦とフルタイムで雇用されている女性の間には大きな差がないということである。これらの3つの項目における活動頻度は専業主婦の女性で最も高くなっているが、2番目に高いのはフルタイムで働いている女性である。有意な活動頻度の差は、専業主婦と自営・家族従業員という形で働いている女性の間で見られた(Tukey法による多重比較、表は省略)。

「一緒に夕食をとる」という日常的接触に関して、女性の雇用上の地位による違いが見られなかったのは、性別役割分業規範によって、「夕食の準備」を女性がすることが多いからであろう。余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動において、フルタイムで働いている女性の活動が2番目に高いのは、これらの活動が休日におこなうことが可能な種類のものであり、「普段は仕事で忙しいので、休日に子どもとの活動を補う」という努力を正規雇用の女性が行っている可能性が示唆されるのではなかろうか。このような解釈に基づけば、自営・家族従業員という形で働いている女性で、これらの活動頻度をもっとも小さいことも理解可能である。すなわち、学校が休みのときに自営業は必ずしも休日であるとは限らず、子どもと母親の活動可能な時間にずれが生じている結果ではないか、ということである。

最後に、父親が子どもと一緒に活動を行う頻度と、母親が子どもと一緒に活動をする頻度との関係のみておく。表2-16では、父親の子どもとの活動頻度と母親の子どもとの活動頻度はトレードオフではなく、父親の子どもとの係わり合いが高まると、母親のそれも高まることが示されている。

表 2-16 父親と母親の子どもと行う活動の相関(行動頻度)

		母親			
		一緒に夕食	一緒に趣味等	一緒に外出	勉強などを教える
父親	一緒に夕食	0.279 *** 222	0.106 222	0.027 221	0.083 221
	一緒に趣味等	0.213 ** 222	0.435 *** 222	0.370 *** 221	0.389 *** 221
	一緒に外出	0.272 *** 222	0.425 *** 222	0.443 *** 221	0.408 *** 221
	勉強などを教える	0.138 * 222	0.191 ** 222	0.184 ** 221	0.322 *** 221

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

上段はピアソンの相関係数 下段は実数

興味深いのは、父親の日常的な子どもとの接触（「一緒に夕食」）の増大が母親の子どもとの活動に及ぼす影響は、母親の子どもとの日常的な接触の領域に限られるのに対し、必ずしも毎日行うというわけでもない性格の活動、すなわち、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動を父親が増大させることが、母親のこれらの活動項目のみならず、日常的な接触も増大させる可能性があるということである。もし子どもとの接触頻度が総体的に増加することが親子関係にとってプラスとなるならば、父親が休日などにこうした種類の活動をおこなうことは、父親自身の子どもの関係の向上に寄与するだけでなく、母親の子育てにも寄与する可能性がある、ということである。

ここでの議論をまとめれば、次のようになる。子どもと一緒に活動は、活動の種類に関わらず、母親の方が父親よりも活動頻度が高く、子育ての担い手は依然として母親が中心であることが窺われる。大企業に勤め、労働時間・通勤時間が長い男性は、子どもとの日常的な接触が小さくなるが、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動に関しては、男性の「働き方」は、余暇活動と有意な関連がやや見られるだけで、全体的には、あまり関連していない。一方、母親が専業主婦であるかどうか、また、正規雇用、一時雇用、自営・家族従業員という雇用形態は、母親の子どもとの日常的な接触に有意な違いをもたらしていない。「働き方」も含めた母親の生活スタイルの違いをもたらすのは、必ずしも毎日行われるわけではない、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動においてである。しかし、その場合においても、専業主婦とフルタイムで雇用されている母親の違いはあまりなく、有意な差がみられるのは、専業主婦と自営・家族従業員の母親との間である。したがって、女性の雇用労働と親子関係に関してメディアでしばしば流通する言説（「女性が家庭の外で働くようになると、子どもとは放っておかれる」といった類のもの）は、本データからは支持されない。

本データから浮かび上がるのは、「働く母親の頑張り」である。フルタイムで働く場合にも、専業主婦の母親との間に、行動レベルにおける大きな違いはない。「フルタイムで働く」ということが、行動レベルでの親子関係の決定的な妨げとなっていないということであり、したがって、「働く母親」と「働く父親」の子どもと一緒に活動する頻度の差は、「働く母親」の努力の存在を示唆するであろう。父親が子どもと一緒に活動を行う頻度と、母親が子どもと一緒に活動をする頻度

との関係の分析からは、余暇活動・家の外での同伴行動・(親の)道具的機能活動を父親が増大させることが、母親のこれらの活動項目のみならず、日常的な接触も増大させる可能性が得られている。したがって、子どもとの接触頻度が総体的に増加することが親子関係にとってプラスとなるならば、「父親の育児・子育てへの参加」は、父親自身の子どもとの関係の向上だけでなく、母親と子どもとの関係の向上にも寄与する可能性があるという点において、積極的に支持されるべきであろう。

参考文献

- Meguro, Y. (1992). "Between the Welfare and Economic Institutions: Japanese Families in Transitions," *International Journal of Japanese Sociology*, 1, pp.35-46
- 目黒依子, (1999). 「日本の家族の『近代性』」 目黒依子・渡辺秀樹編『講座社会学 2 家族』東京大学出版会, pp.1-19
- 西村純一, (2002) 「夫婦関係と生きがい」 シニアプラン開発機構『第三回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査～サラリーマンシニアを中心として～』, pp.85-105
- 落合恵美子 (1997). 『21世紀家族へ (新版)』有斐閣
- Wilhelm, B. 1998, "Changes in Cohabitation across Cohorts: The Influence of Political Activism," *Social Forces*; 77, 1, Sept, pp.289-313

第3章 地域・社会との関係

藤本隆史(上智大学大学院)

不安定な社会・経済状況の中であって、人々は社会の中で生活の場をどのように位置づけているのだろうか。特に定年を迎えて仕事から離れると、中心となる生活の場は職場から家庭や地域・社会へと移っていく。しかし、特に男性サラリーマンの場合について一般によく聞かれるのは、退職してから自分の居場所を見つけるのに苦労するということである。退職した男性が家庭にいることを「粗大ゴミ」や「濡れ落ち葉」などという言葉で揶揄されることもあったが、そのようなことになるのは退職にいたるまでに家族と向き合う機会を十分に持ってこなかったためである。

同じことは、地域や社会との関わり方にも言えるだろう。退職して、さあ何か始めようと思っても、何から始めればいいのか分からず、また何かの活動に参加しようと思っても、新たな人間関係を構築するのも億劫で、結局、家でごろごろするなどになってしまう。退職にいたるまでの過程を含め、職場からの生活の場の移行をスムーズにするためにも、ライフコースを通じて地域や社会とある程度関わりを持っておく必要があるだろう。

以前と比べて、仕事や職場に対するコミットメントが低下しているといわれている中で、家庭・家族のほかにそれを埋める生活領域として、地域や社会活動は重要な位置を占めるようになると思われるが、現状では、社会活動の参加率は全体として1割強で伸びていない(表1)。しかし、現在社会活動に参加していない人でも、条件によっては参加してもよいと考えている人は多い(表2)。

本章では、社会活動への参加の規定要因を探り、活動の実態を見るとともに、社会活動に参加するうえでの障害などについても検討する。

表1 社会活動参加状況

	定期的に参加している	ときどき参加している	以前に参加したことがある	参加していない	無回答	標本数
1991年	12.1	12.4	9.8	62.1	3.7	3087
2001年	12.3	11.6	9.7	55.9	10.4	3200

表2 社会活動不参加者の今後の活動意向

	積極的に参加したい	条件によっては参加してもよい	参加するつもりはない	わからない	無回答	標本数
1991年	6.5	60.1	9.7	22.1	1.5	2100
2001年	7.2	60.0	11.4	19.8	1.5	2219

1. 社会活動参加の規定要因

(1) 社会活動の参加状況と回答者の属性との関係

まず社会活動への参加状況について、「生きがい調査」の回答者の属性との関連からその規定要因を調べる。「生きがい調査」において、社会活動についての質問項目は第1回調査(1991年)

でも取り上げられているが、第1回調査には年収や暮らし向きに関する質問が入っていないため、ここでは第3回調査（2001年）のデータを中心に示すこととする。

表3のクロス集計表は、社会活動への参加状況と回答者の属性の関係を見たものである。

年齢別で割合の高いのは65歳以上の高齢層である。現役とOBで分けてみても、OBの参加の割合が高い。やはり、高齢になり、退職前後に活動を始める人が多いということを示している。

表3 属性別 社会活動参加状況

		定期的に参加 している	ときどき参加 している	以前に参加し たことがある	参加してい ない	標本数
年齢	35-44歳	6.7	11.5	13.4	68.4	643
	45-54歳	9.3	9.5	12.9	68.3	706
	55-64歳	12.5	13.2	8.3	66.1	760
	65-74歳	25.8	17.6	8.8	47.8	693
現役		8.2	11.1	12.3	68.3	1774
OB		22.7	16.1	8.5	52.7	1087
性別	男性	15.1	13.1	10.5	61.4	2121
	女性	9.8	12.6	12.0	65.6	715
配偶者あり		15.2	13.9	10.9	60.1	2330
配偶者なし		7.7	9.1	10.9	72.3	495
(配偶者票)	主婦	18.4	12.6	14.1	55.0	868
	正規の社員・従業員	8.0	14.2	17.9	59.9	162
	派遣・嘱託・パート	16.6	12.3	14.6	56.5	513
都市規模	東京都23区・ 政令指定都市	11.7	10.0	9.4	69.0	802
	その他の市	13.6	13.5	11.0	62.0	1747
	郡部	22.8	19.3	13.6	44.3	228
学歴	大学・大学院	11.2	11.8	10.5	66.5	1178
	その他	15.6	13.8	11.1	59.6	1689
居住年数	5年未満	8.9	10.9	10.9	69.4	304
	10年未満	7.7	10.5	11.1	70.7	324
	20年未満	13.0	9.8	11.9	65.3	530
	30年未満	11.8	14.3	10.3	63.6	610
	30年以上	18.4	15.0	10.4	56.1	1058
健康状態	非常に健康	20.3	15.3	10.0	54.3	300
	まあ健康	13.1	12.9	10.9	63.1	1482
	日常生活に支障 はない程度	12.8	12.7	10.4	64.1	818
	日常生活に制 限、病気がち・ 療養中	11.5	9.5	15.5	63.5	148
世帯年収	600万円未満	17.2	14.4	9.8	58.7	1096
	800万円未満	11.3	12.0	12.0	64.6	565
	1000万円未満	12.8	14.6	10.7	61.9	431
	1000万円以上	10.3	9.7	11.8	68.3	621
暮らし向き	とても楽だ	17.2	13.4	11.3	58.1	186
	少し楽だ	14.3	13.7	9.2	62.8	1582
	苦しい	12.0	11.7	14.0	62.4	874
	とても苦しい	10.0	12.5	11.3	66.3	80
自由時間	十分にある	21.5	13.9	9.9	54.7	548
	まあまあ	15.4	14.4	10.5	59.6	1226
	不十分である	8.0	11.0	11.7	69.2	1008
	まったくない	1.5	9.0	14.9	74.6	67

性別では、男性の参加の割合が女性よりも高い。男女の年齢構成はほぼ一致しているが、男性の93.6%が配偶者がいるのに対して、女性は47.8%で、未婚が36.7%であることが関係しているのかもしれない。また世帯構成では、男性の47.1%が「自分たち夫婦（または自分）と未婚の子」で、「自分たち夫婦だけ」が27.7%なのに対して、女性は25.1%が「ひとり暮らし」であり、28.4%が「自分たち夫婦（または自分）と親」となっており、社会関係を広げる機会が少ないと考えられる。配偶者の有無については、配偶者がいる人のほうが参加の割合が高くなっている。なお、未婚（シングル）女性についての分析は、「第3回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」報告書の第Ⅱ部・第3章「女性の生きがいと生活」を参照されたい。

配偶者票について、女性の就業状態別に示したが、専業主婦（無職）と派遣・嘱託・パートの参加の割合が高く、正規の社員・従業員の割合はそれらに比べると低い。社会活動の主要な担い手として専業主婦があげられることが多いが、専業でなくともパートや派遣など非正規就業の場合でも同じくらいの割合で参加している。柔軟な働き方と社会活動は両立性が高いということかもしれない。

都市規模は、郡部（より小規模）で参加の割合が高い傾向が見られる。これは、より小規模であるほど昔ながらの共同体が継続していて、地域活動も盛んであるということの表れであると思われる。

学歴に関しては、「大卒以上（大学・大学院）」と「それ以外」に分類して示した。「それ以外」には、小学校から新制短大、専門学校・専修学校などが含まれるが、それぞれ大きな傾向の違いは見られない。ただし、年齢とともに学歴が低くなる傾向があり、年齢との負の相関があることに留意しなければならない。

居住年数は長いほうが社会活動への参加の割合も高い。居住年数が長いほうが地域社会とのつながりも強くなり、当然の結果であるといえる。

健康状態は、健康な人ほど参加する割合が高い傾向が見られる。特に高齢になると、健康であることが活動に参加する重要な要素となることが考えられる。社会福祉的な観点からすれば、健康でなくなったときにその人は社会活動によって支えられる立場となる。高齢者というと、福祉サービスを受ける対象として捉えられることが多いが、比較的健康な高齢者が増えていることから、社会活動の重要な担い手として見なされるようになってきている。

世帯収入については、収入が低い方が参加の割合が高い傾向があるが、これは高齢者の属性を反映したものであると考えられる。これに対して、暮らし向きは「楽である」とするほうが参加の割合が若干高い。やはりある程度の経済的な余裕がなければ、参加することは難しいであろう。

最後に自由時間であるが、十分にある人のほうが活動に参加する割合が高くなっている。しかし後述するように、自由時間が十分にあっても社会活動に参加している人の割合自体は低い。しかも、まったく関心がないならまだしも、表2に示したように、条件さえ合えば参加したいと考えている人は多い。社会活動への参加者を増やすには、そのような人たちを取り込む方策が必要である。

(2) 社会活動参加の規定要因

上記の属性変数と社会活動参加状況の相関係数を示しておく（表4）。すべて1%水準で統計的に有意な関係となっている。これらの変数を使ってロジスティック回帰分析を行う。属性変数どうしの関係を取り除くことによって、それぞれの変数の社会活動参加状況（参加しているかどうか）に対する相対的な影響力の検出を試みる。ただし、「現役・OB」と年齢は相関が高い（.771）ため、「現役・OB」変数はモデルに投入しない。

表4 社会活動参加状況と属性の相関係数

	年齢	現役・OB	性別	配偶者の有無	都市規模	学歴	居住年数	健康状態	世帯年収	暮らし向き	自由時間
活動参加状況	.209**	.214**	.057**	.105**	-.104**	-.071**	.123**	.056**	.102**	.052**	.150**

1) **p < .01

2) 「活動参加状況」は「定期的に参加している」「ときどき参加している」が「1」、「以前に参加したことがある」「参加していない」が「0」。
 「都市規模」は、「東京都23区・政令指定都市」「その他の市」が「1」、「郡部」が「0」。「学歴」は「大卒以上」が「1」、その他が「0」。
 「健康状態」、「世帯年収」、「暮らし向き」、「自由時間」は正の相関でプラスの向きになるように値を入れ替えた。

表5がロジスティック回帰分析の結果である。まず第3回調査のデータ全体の結果を見ると、学歴と性別以外のすべての係数が統計的に有意となっている。相対的な影響力を比べると、配偶者の有無、都市規模、健康状態などの順となっている。つまり、配偶者がいる、郡部に住む、健康な人は社会活動に参加している確率が高いということになる。

表5 社会活動参加の規程要因（ロジスティック回帰分析）

	全体		35-44歳		45-54歳		55-64歳		65-74歳	
	回帰係数	Exp (B)	回帰係数	Exp (B)	回帰係数	Exp (B)	回帰係数	Exp (B)	回帰係数	Exp (B)
年齢	0.024 **	1.024								
性別	0.194	1.214	-0.031	0.969	0.740 *	2.095	0.213	1.238	-0.028	0.973
配偶者の有無	0.769 **	2.157	0.775 *	2.170	0.949 *	2.584	0.964 **	2.622	0.611 *	1.842
学歴	-0.150	0.860	0.174	1.190	-0.449 *	0.638	-0.422 *	0.656	-0.214	0.807
居住年数	0.121 **	1.129	0.103	1.109	0.237 **	1.268	0.211 **	1.234	0.041	1.042
都市規模	-0.726 **	0.484	-1.025 **	0.359	-0.606 +	0.546	-0.915 **	0.400	-0.401	0.670
健康状態	0.287 **	0.750	0.107	0.899	0.191	0.826	0.170	0.843	0.486 **	0.615
自由時間	0.153 *	1.165	0.319 +	1.376	0.170	1.185	0.106	1.112	0.084	1.088
世帯収入	0.096 **	1.101	-0.063	0.938	-0.072	0.931	0.149 **	1.161	0.079	1.082
暮らし向き	0.164 *	1.178	0.038	1.039	0.001	1.001	0.349 *	1.417	0.054	1.055
定数	-3.515		-1.922		-2.704		-3.491		-0.259	
-2対数尤度	2757.593		555.315		601.607		738.291		812.649	
χ ² 乗	206.388 **	(df=10)	23.545 **	(df=9)	35.663 **	(df=9)	48.26 **	(df=9)	30.387 **	(df=9)
N	2567		603		652		695		617	

+p < .10, *p < .05, **p < .01

今度は年齢カテゴリーでデータを区切って分析すると、35-44歳では配偶者の有無と都市規模そして自由時間のみが有意となった。自由時間は10%未満の有意傾向であるが、自由時間が十分にあるかどうか参加に影響しているようだ。45-54歳では性別、配偶者の有無、学歴、居住年数、都市規模が有意であり、居住年数など年齢の効果が出始める。55-64歳では配偶者の有無、学歴、居住年数、都市規模、世帯収入、暮らし向きが有意であり、経済的な状況の影響が特徴的である。65-74歳では配偶者の有無と健康状態のみが統計的に有意であり、健康であることが重要な要因となっている。

総じて影響力を保ったのは配偶者の有無と都市規模（64-74歳を除く）である。属性別のクロス表のところでも述べたように、配偶者がいることによる社会関係の広がり社会活動への参加の要因としても重要であることが示唆される。また、配偶者との関係において、社会活動に参加することについての互いの理解が必要となる。表6は、回答者本人と配偶者に対して、配偶者との関係について「互いに独自の趣味や行動を尊重すること」が、自分自身にとってどの程度大切かたずねた項目を、社会活動の参加状況で見たものである。回答者本人が社会活動に参加している場合、「とても大切」と回答する割合は59.5%と最も高い。配偶者の回答についても同じことが言えるが、本人の意識ほどははっきりはしていない。一緒に行動するわけではないが、理解が得られること、また理解が得られていると感じることが大切なのであろう。

表6 互いに独自の趣味や行動を尊重すること（配偶者との関係）

		定期的に参加 している	ときどき参加 している	以前に参加し たことがある	参加してい ない	標本数
本人	とても大切	59.5	52.4	42.8	49.4	1161
	やや大切	35.0	42.9	50.8	43.2	979
	わからない	4.3	3.2	6.0	5.7	119
	あまり大切ではない	1.1	1.6	0.4	1.7	33
配偶者	とても大切	56.8	50.2	48.5	52.2	1156
	やや大切	38.5	46.2	47.3	41.6	938
	わからない	3.5	2.7	3.8	4.5	89
	あまり大切ではない	1.2	1.0	0.4	1.7	31

次に都市規模による違いであるが、郡部ではもともと社会関係がより密であり、社会活動に参加する機会も多いと考えられる。表7を見ると、近隣との交流も市部に比べるとより活発であることがわかる。「互いに訪問したり、何かを一緒にする」や「お互いの事情がわかり、困ったときに相談したり助け合う」など相互扶助的な関係の割合が、市部に比べて高くなっている。表8で都市規模別の所属団体・グループの種類を見ると、「町内会・自治会や防災・防犯協会」に所属している割合が33.5%と高い。また、いずれの団体・グループに所属していない割合がもっとも低い。

表7 都市規模別 近隣関係

	東京23区・ 政令指定都市	その他の市	郡部
ほとんどつきあいはない	8.9	5.4	2.0
顔が合えば挨拶をする	51.0	44.0	31.0
たまには立ち話をする	29.7	34.7	34.9
互いに訪問したり、何かを一緒にする	6.7	9.9	18.0
お互いの事情がわかり、困ったときに相談したり助け合う	3.8	6.0	14.1

表8 都市規模別 所属団体・グループの種類

	東京23区・ 政令指定都市	その他の市	郡部
趣味やスポーツのクラブ・サークル	38.6	38.4	43.0
学習・研究の会や教養教室	12.4	9.9	9.2
職場・職域関係の団体・グループ	20.3	20.7	23.9
定年退職者の会など、旧職場の集まり	16.3	18.1	19.1
P T A ・ 父 母 会 や 子 供 会 ・ 青 少 年 団 体	2.6	5.6	7.6
難病や障害児・者を持つ家族の会	0.2	0.7	1.2
町内会・自治会や防災・防犯協会	14.3	21.4	33.5
老人クラブや地域の同好会	4.9	5.9	10.4
消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	4.8	3.6	6.0
宗教団体・政治団体	3.1	4.0	4.0
その他	5.8	3.6	6.4
いずれもない	34.6	30.4	22.7

さらに、都市規模別の社会活動参加状況を年齢カテゴリー別に見てみると（表 9）、「定期的に参加している」そして「ときどき参加している」割合が若年層においても高くなっている。定年前後になってから地域に入り始めるのではなく、ライフコースを通して地域との関わりをもち、社会活動にも参加している人が比較的多いということである。

表 9 年齢別 都市規模別 社会活動参加状況

		35-44歳	45-54歳	55-64歳	65-74歳
定期的に参加している	東京23区・政令指定都市	4.2	6.9	10.8	24.6
	その他の市	7.1	9.7	12.3	24.8
	郡部	14.0	17.5	22.8	34.4
ときどき参加している	東京23区・政令指定都市	8.9	7.4	7.4	16.4
	その他の市	11.4	9.7	14.3	18.3
	郡部	22.0	15.8	22.8	16.4
以前に参加したことがある	東京23区・政令指定都市	10.5	9.4	9.3	7.2
	その他の市	15.0	13.6	7.2	9.3
	郡部	12.0	19.3	12.3	11.5
参加していない	東京23区・政令指定都市	76.3	76.2	72.5	51.8
	その他の市	66.5	67.0	66.3	47.6
	郡部	52.0	47.4	42.1	37.7

(3) 配偶者の社会活動

ここで、配偶者票を女性に限って社会活動の参加状況を見ておく。社会活動の主要な担い手として主婦があげられるが、表 2 で見たように、その参加の割合は比較的高く、専業主婦であっても派遣・嘱託・パートなど非正規の従業員でも割合に差はない。

年齢別（範囲が本人票とは異なる）に見てみると（表 10）、専業主婦は 24-44 歳では 10% を下回るが比較的高年齢で割合が高く、一方、契約・派遣・パートなどは 55-64 歳で専業主婦より割合が低い。専業主婦の場合、若年では子育てなど家庭のことに専念し、子どもの独立など自分の時間を持つようになって社会活動にも参加するということだろうか。

表 10 年齢別 配偶者の社会活動参加状況

		24-44	45-54	55-64	65-86
専業主婦	定期的に参加している	9.6	15.1	24.8	26.0
	ときどき参加している	12.4	11.3	14.2	11.0
	以前に参加したことがある	13.9	13.4	15.9	10.2
	参加していない	64.1	60.2	45.0	52.8
契約・派遣・パートなど	定期的に参加している	15.5	17.3	16.1	23.1
	ときどき参加している	18.6	8.9	9.8	15.4
	以前に参加したことがある	13.7	16.4	13.4	7.7
	参加していない	52.2	57.3	60.7	53.8

次に、配偶者の所属団体について、年齢別に割合の高い上位 3 位までを比べてみる（ここには社会活動に参加していない人も含まれる）（表 11）。24-44 歳では、専業主婦も契約・派遣・パートなども第 1 位は「PTA など（PTA・父母会や子供会・青少年の団体・グループ）」で、約

半数の人が所属している。他の年齢カテゴリーでは「趣味やスポーツ（趣味やスポーツのクラブ・サークル）」が第1位であり、24-44歳でも第2位を占める。

専業主婦と契約・派遣・パートなどで他に共通しているのは、「町内会など（町内会・自治会や防災・防犯協会）」の順位がすべての年齢層で高いことであり、PTAにしても多少、義務的な所属の印象を受ける。

専業主婦と契約・派遣・パートなどで異なるのは、専業主婦では高年齢で「学習・教養（学習・研究の会や教養教室）」が上位に入っているのに対して、契約・派遣・パートなどは「職場関係（職場・職域関係の団体・グループ）」が入っていることである。

表 11 年齢別 配偶者の所属団体

		24-44	45-54	54-64	65-86
専業主婦	第1位	PTAなど 48.8	趣味やスポーツ 45.5	趣味やスポーツ 61.6	趣味やスポーツ 54.6
	第2位	趣味やスポーツ 30.2	町内会など 18.5	学習・教養 26.7	町内会など 21.3
	第3位	町内会など 16.7	PTAなど 17.5	町内会など 24.2	学習・教養 17.0
	いずれもない	27.1	29.6	16.0	17.7
契約・派遣・パートなど	第1位	PTAなど 50.6	趣味やスポーツ 44.4	趣味やスポーツ 50.0	
	第2位	趣味やスポーツ 39.6	町内会など 25.9	職場関係 25.9	
	第3位	職場関係／町内会など 19.5	職場関係 20.6	町内会など 17.2	
	いずれもない	19.5	26.3	20.7	

*契約・派遣・パートの65-86歳はサンプル数が15と少ないため省略した。

今度は、配偶者が参加している社会活動の種類について、年齢別に比較した（表 12）。所属団体と同様に、専業主婦も契約・派遣・パートなども24-44歳では「児童・青少年の世話役（児童や青少年活動の世話役としての活動）」が上位に入っている。

また、「地域のイベント（地域のイベントや“村おこし”の活動）」や「地域の生活環境を守る（地域の生活環境を守る活動）」、「社会福祉活動（障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動）」がほとんどの年齢層で共通して上位に入っており、順位に違いがあるものの両者の傾向は類似している。

表 12 年齢別 配偶者の社会活動参加分野

		24-44	45-54	54-64	65-86
専業主婦	第1位	児童・青少年の世話役 36.4	社会福祉活動 30.6	社会福祉活動 35.6	地域の生活環境を守る 42.6
	第2位	地域の生活環境を守る 23.6	地域のイベント 26.5	地域のイベント 33.9	趣味や学習 36.2
	第3位	地域のイベント 18.2	地域の生活環境を守る 22.4	地域の生活環境を守る 25.4	社会福祉活動 31.9
契約・派遣・パートなど	第1位	地域の生活環境を守る 41.8	地域の生活環境を守る 39.0	趣味や学習／社会福祉活動 37.9	
	第2位	児童・青少年の世話役 29.1	社会福祉活動 30.5	地域のイベント 24.1	
	第3位	地域のイベント 18.2	地域のイベント／児童・青少年の世話役 23.7	—	

*契約・派遣・パートの65-86歳はサンプル数が5と少ないため省略した。

社会活動への参加理由についても、専業主婦も契約・派遣・パートなどの両者の傾向に違いはあまりなく、すべての年齢カテゴリーで「地域や社会に貢献したい」が第1位になっている(表13)。若年では「身近な人に誘われた」が上位に入っているが、高年齢になると「生活にはりあいを持たせたい」がそれに取って代わっている。若年でよりも高齢でのほうが自発的に参加しているようだ。

これは若年では、もちろん最初のきっかけとして人から誘われるということもあるが、PTAなど場合によっては半強制的な参加を求められる活動に参加しているということもその理由として考えられる。このような女性の配偶者の社会活動への参加状況は、後に見るように、参加の態度あるいは意識に影響を与えているように思われる。

表13. 年齢別 配偶者の社会活動参加理由

		24-44	45-54	54-64	65-86
専業主婦	第1位	地域や社会に貢献 41.8	地域や社会に貢献 51.0	地域や社会に貢献 46.6	地域や社会に貢献 56.5
	第2位	身近な人に誘われた 32.7	身近な人に誘われた/友人や仲間を増やす 30.6	生活にはりあいを果たす 31.4	知識や経験を活かす 34.8
	第3位	友人や仲間を増やす 27.3	—	友人や仲間を増やす 30.5	生活にはりあいを果たす 32.6
契約・派遣・パートなど	第1位	地域や社会に貢献 50.9	地域や社会に貢献 57.6	地域や社会に貢献 72.4	
	第2位	身近な人に誘われた 25.5	友人や仲間を増やす 27.1	知識や経験を活かす 48.3	
	第3位	知識や経験を活かす 20.0	身近な人に誘われた 20.3	生活にはりあいを果たす 37.9	

*契約・派遣・パートの65-86歳はサンプル数が5と少ないため省略した。

2. 社会活動参加の実態

これまでは、「生きがい調査」の第3回(2001年)のデータを中心に、社会活動の参加状況を回答者の属性からその規定要因を探り、年齢、配偶者との関係、都市規模について考察を行った。

ここでは、首都圏で行った「生活・就業スタイル調査」のデータを使って、社会活動に対する意識や態度などについて検討を加える。ただし、社会活動に参加しているサンプル数が少ないため、本人票と配偶者票の比較を中心に行う。

(1) 社会に役立つ活動に対する考え方

生活・就業スタイル調査では、社会活動への参加の有無にかかわらず、社会に役立つ活動に対する考え方をたずねている。表14は、社会活動の参加状況別に、本人票と配偶者票の双方について、それらの考え方の分布を見たものである。

本人の場合、総じて「社会のためになること」の割合が高いが、定期的に参加している人は「気軽にできること」と「強制されないこと」の割合は最も低く、他の項目(「市民として当然」と「その他」を除いて)では最も割合が高くなっている。すでにある程度以上、活動にかかわっているため、参加の形態よりも、それによって何が得られるのかに対する意識が高いものと思われる。参加していない人は、逆に「気軽にできること」や「強制されないこと」などの割合が高く、参加することによる自分への負担に対する懸念が感じられる。

表 14 社会活動参加状況と社会に役立つ活動の考え

		定期的に参加 している	ときどき参加 している	以前に参加し ていたことが ある	参加していな い	標本数
本人	知識や能力の向上	26.9	19.6	19.3	13.9	144
	楽しいこと	38.9	37.4	36.4	34.4	304
	社会のためになること	60.2	59.8	54.5	53.1	470
	多くの人と知り合えること	34.3	28.0	19.3	20.5	197
	気軽にできること	24.1	44.9	44.3	52.9	405
	市民として当然	8.3	9.3	5.7	1.8	34
	強制されないこと	30.6	38.3	44.3	45.8	366
	責任をもってやりとおすこと	38.9	24.3	28.4	30.1	259
	その他	0.9	2.8	2.3	1.3	13
	配偶者	知識や能力の向上	18.9	18.2	20.4	9.9
楽しいこと		47.2	40.9	47.3	44.9	321
社会のためになること		43.4	42.4	38.7	36.9	274
多くの人と知り合えること		31.1	36.4	28.0	27.2	204
気軽にできること		47.2	57.2	49.5	52.1	366
市民として当然		1.9	4.5	3.2	2.5	19
強制されないこと		42.5	42.4	41.9	45.4	314
責任をもってやりとおすこと		39.6	33.3	35.5	33.5	246
その他		2.8	0.0	1.1	0.4	6

配偶者の場合は、本人ほどには「社会のためになること」の割合が高くない。相対的に「楽しいこと」の割合が高くなり、定期的に参加している人でも「気軽に参加できること」や「強制されないこと」の割合が比較的高い。本人の場合は、社会に役立つことが先立っているようだが、配偶者の場合はそれよりも自分が楽しむことをより重視しているように思われる。

今度はこれを年齢別に見る（表 15）。年齢による分布の傾向は、本人と配偶者で一致しているようである。年齢が高くなるほど「楽しいこと」や「多くの人と知り合えること」の割合が高い一方で「責任をもってやりとおすこと」の割合も高くなる。年齢が高い人の方が実際に活動に参加している人も多いため、活動に参加することによって得られることへの関心が高く、また参加することによって活動に対してある種の執着というか帰属意識のようなものから責任感も生まれてくるのかもしれない。若年層になるほど「社会のためになること」や「強制されないこと」などの割合が高くなるのは、おそらくその裏返しで、実際に参加した経験がないと社会活動のより形式的な側面が注目されることになると思われる。

表 15 年齢別 社会に役立つ活動の考え（括弧内は配偶者の年齢）

		35-44 (23-44)	45-54	55-64	65-69 (65-77)	標本数
本人	知識や能力の向上	17.2	18.9	15.8	18.2	150
	楽しいこと	27.3	33.3	42.7	42.5	309
	社会のためになること	57.7	53.5	53.1	51.5	473
	多くの人と知り合えること	20.6	19.3	25.3	32.1	203
	気軽にできること	40.1	53.9	52.7	38.1	408
	市民として当然	1.5	3.9	5.8	6.0	35
	強制されないこと	52.4	45.2	38.2	24.6	369
	責任をもってやりとおすこと	29.2	25.9	34.9	35.1	268
	その他	0.7	1.8	1.7	2.2	13
配偶者	知識や能力の向上	13.8	12.7	15.0	10.4	98
	楽しいこと	37.8	47.4	47.2	66.7	324
	社会のためになること	44.3	42.8	30.4	37.5	282
	多くの人と知り合えること	22.3	28.3	33.2	39.6	202
	気軽にできること	47.2	53.8	58.9	39.6	371
	市民として当然	2.5	2.9	2.8	2.1	19
	強制されないこと	54.6	45.1	32.7	35.4	319
	責任をもってやりとおすこと	32.6	28.9	39.7	43.8	248
	その他	1.1	1.2	0.5	0.0	6

(2)参加している社会活動の満足度

参加している社会活動に関する満足度については、「不満」という回答はなく、全体的に満足度が高いが、本人も配偶者も年齢が高い方が満足度も高い傾向が見られる（表 16）。

表 16 年齢別 参加している社会活動の満足度

		35-44 (23-44)	45-54	55-64	65-69 (65-77)	標本数
本人	満足	16.0	22.0	18.8	31.3	43
	どちらかといえば満足	50.0	53.7	52.9	56.3	110
	どちらともいえない	28.0	22.0	27.1	12.5	50
	どちらかといえば不満	6.0	2.4	1.2	0.0	5
配偶者	満足	13.4	15.0	17.6	33.3	27
	どちらかといえば満足	47.8	67.5	60.8	66.7	96
	どちらともいえない	32.8	15.0	21.6	0.0	39
	どちらかといえば不満	6.0	2.5	0.0	0.0	5

この満足度と社会に役立つ活動に対する考え方との関係を見るために、表 17 でそれぞれの考え方について満足度の平均値を取り、比べた（なお「その他」は度数が 5 未満であったため除外した）。値が大きい方が満足度が高い。

本人と配偶者で共通しているのは「多くの人と知り合えること」である。やはり活動を通じてしか知りえないような人たちとの関係が活動に対する満足度に影響しているようだ。違いとしては、本人が「知識や能力の向上」と「責任をもってやりとおすこと」で満足度が高いのに対して、配偶者は「楽しいこと」や「社会のためになること」で高くなっている。これは本人と配偶者の

社会活動に対する基本的な姿勢の違いのようで、本人はいわばまじめに社会活動をとらえようとしている（とらえている）のに対して、配偶者の方は社会活動を通じて楽しみを得ることにより重点を置いているようである。

表 17 社会に役立つ活動の考えと活動満足度の平均値

		平均値	標本数
本人	知識や能力の向上	4.06	48
	楽しいこと	3.92	78
	社会のためになること	3.93	125
	多くの人と知り合えること	4.12	65
	気軽にできること	3.80	70
	市民として当然	3.67	18
	強制されないこと	3.76	74
	責任をもってやりとおすこと	4.06	65
配偶者	知識や能力の向上	3.77	31
	楽しいこと	4.02	74
	社会のためになること	3.95	73
	多くの人と知り合えること	3.93	54
	気軽にできること	3.84	87
	市民として当然	3.40	5
	強制されないこと	3.76	72
	責任をもってやりとおすこと	3.83	63

では、具体的にどのような活動の参加満足度が高いのだろうか。それぞれの活動分野について、満足度の平均値を比べてみる（表 18）。

本人に関しては、「国際交流に関する活動」、「地域の文化財や伝統を守る活動」、「趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動」などの値が高い。配偶者では、「国際交流に関する活動」、「行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動」、などの値が比較的高くなっている。「国際交流に関する活動」の場合、標本数が少ないが、本人、配偶者とも値が高い。かなり参加の自発性が高いものと思われる。

表 18 社会活動参加分野と満足度（平均値）

	本人	標本数	配偶者	標本数
地域の生活環境を守る活動	3.83	72	3.75	32
地域のイベントや”村おこし”の活動	3.74	42	3.81	37
趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	4.18	64	4.03	35
児童や青少年活動の世話役としての活動	3.85	34	3.80	50
地域の文化財や伝統を守る活動	4.19	27	3.75	4
消費者活動や生活向上のための活動	3.45	11	3.88	8
障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	3.95	19	4.02	43
行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	4.05	17	4.14	14
自然保護や環境保全の活動	3.96	29	3.67	9
国際交流に関する活動	4.33	9	4.17	6
その他	4.00	23	3.93	14

(3)社会活動参加の感想

生活・就業スタイル調査では、実際に活動に参加してみてどのように感じたか、自分のためになったことや他者のためになったことなどについて感想をたずねている。

表 19 年齢別 社会活動参加の感想の平均値

		35-44 (23-44)	45-54	55-64	65-69 (65-77)
本人	知識・技術、能力、経験を活かさせた	3.46	3.76	3.62	3.79
	人間として成長できた	3.58	4.04	3.61	3.90
	多くの人と知り合えた	4.02	4.17	4.07	4.27
	困っている人の役に立てた	3.22	3.45	3.26	3.63
	社会のために役に立てた	3.67	3.74	3.63	3.72
	社会的な評価を得られた	2.96	3.15	3.28	3.43
	活動をして楽しい	3.72	3.81	3.85	4.32
配偶者	知識・技術、能力、経験を活かさせた	3.29	3.69	3.61	4.22
	人間として成長できた	3.75	3.93	3.82	3.90
	多くの人と知り合えた	4.11	4.24	4.02	4.11
	困っている人の役に立てた	3.29	3.54	3.46	3.75
	社会のために役に立てた	3.52	3.68	3.61	4.38
	社会的な評価を得られた	2.88	3.36	3.36	3.67
	活動をして楽しい	3.73	4.07	4.09	4.44

それぞれについて年齢別に平均値を比べてみると（表 19）、満足度と同様に、年齢が高い方が値が高くなる（より同意している）傾向が見られる。本人も配偶者も「多くの人と知り合えた」で値が高く、そう思っている人が多いことを示しており、満足度の傾向とも一致している。「活動をして楽しい」なども値が高いが、その一方で、「社会的評価を得られた」や「困っている人の役に立てた」では値が小さくなっている。これらの項目は活動の種類による影響も受けていると考えられる。つまり、直接的に人を助けるような活動に参加していない場合もあるということである。本人と配偶者で目だった傾向の違いは見られない。

これらの感想について、項目作成時に、活動に参加することによって自分自身が得られることに関する項目と、他者との関係に活動の重点をおいた項目を想定していた。そこで、これら7つの項目を主成分分析によって分類を試みたところ、「自分の知識・技術、能力、経験を活かせた」、「自分が人間として成長できた」、「多くの人と知り合いになれた」、「活動をしていて楽しい」という項目を含む成分と、「困っている人の役に立てた」、「社会のために役に立てた」、「社会的な評価を得られた」という項目を含む成分に分かれた（表 20）。前者は活動をつうじて自分自身になんらか得られるものがある要素を含むことから「自己充実型」、後者は他者との関係にかかわる要素を含むことから「社会関係型」とする。

それぞれ分類された項目を足しあげて合成変数を作り（自己充実型：最小値＝6、最大値＝20；社会関係型：最小値＝3、最大値＝15）、参加している社会活動の満足度との関係を見た（表 21）。自己充実型も社会関係型も統計的に有意な関係が確認されたが、本人と配偶者の双方について、自己充実型のほうが社会関係型よりも満足度との強い関係が見られた。参加している活動への満足にはどちらも重要であるが、自分自身にとって何らかの利益になるとが感じられたほうが、活動に対して満足感が高いようである。

表 20 社会活動参加の感想の主成分分析の結果

本人	成分 1	成分 2	配偶者	成分 1	成分 2
楽しい	0.774	0.070	知り合いになれた	0.820	-0.092
知り合いになれた	0.739	0.074	楽しい	0.782	0.049
知識・経験を活かした	0.735	0.246	人間として成長できた	0.775	0.274
人間として成長できた	0.688	0.369	知識・経験を活かした	0.590	0.399
社会の役に立つ	0.144	0.803	社会の役に立つ	0.056	0.876
困っている人の役に立つ	0.109	0.707	困っている人の役に立つ	0.060	0.785
社会的な評価	0.205	0.704	社会的な評価	0.509	0.527

因子抽出法: 主成分分析・回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

表 21 満足度と社会活動参加の感想の相関関係

	本人		配偶者	
	自己充実型	社会関係型	自己充実型	社会関係型
満足度との相関係数	0.589 **	0.379 **	0.473 **	0.399 **

**p < .01

参加している具体的な活動の種類とこれらの社会活動参加の感想との関係について、平均値の分散分析が統計的に有意（もしくは有意傾向）であったものだけを整理したのが表 22 である。本人に関しては自己充実型と社会関係型に分かれているが、配偶者では一致している。

本人の場合、自己充実型では「趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動」や「地域の文化財や伝統を守る活動」、「国際交流に関する活動」など、どちらかというと言教的な要素の多い活動が見られるのに対して、社会関係型では「地域の生活環境を守る活動」、「児童や青少年活動の世話役としての活動」、「障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動」、「行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護員などの活動」など地域に密着した要素の多い活動が並んでいる。

表 22 社会活動参加分野と社会活動参加の感想（平均値）

		自己充実型	社会関係型
本人	地域の生活環境を守る活動	—	10.20 *
	趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	16.5 **	—
	児童や青少年活動の世話役としての活動	—	9.6 +
	地域の文化財や伝統を守る活動	16.2 +	—
	障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	—	11.2 *
	行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	—	11.1 +
	国際交流に関する活動	17.8 **	—
配偶者	障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	11.3 **	16.0 **
	国際交流に関する活動	12.0 +	18.0 **

+p < .10、*p < .05、**p < .01

一方、配偶者のほうは、自己充実型も社会関係型も「障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動」と「国際交流に関する活動」となっている。「国際交流に関する活動」については満足度のところでも触れたように、標本数が少ない（10未満）が、配偶者の場合、それぞれの活動を通じて社会的に貢献しかつ自分自身に何か得られるものがあつたと考えているということになる。これだけで判断するのは難しいが、男性（本人）の場合は活動に関して、ある程度、限定的な関わり方を

するのに対して、女性（配偶者）の場合はトータルでの関わり方をしようとする傾向があるのかもしれない。

3. 参加していない人の理由について

社会活動に参加している人の規定要因や活動の実態について検討してきたが、現在、社会活動に参加していない人でも約6割の人々は「条件によっては参加してもよい」と考えている。では、その条件とは何だろうか。

まずは「生きがい調査」のデータから、第1回（1991年）と第3回（2001年）のデータを年齢別に上位3つまでの理由を比較してみると（表23）、双方とも「時間がたりない」や「きっかけがつかめない」が上位を占めるが、その間の経済社会状況を反映してか、2001年のデータでは「精神的ゆとりがない」が若年層に目立つ。

表23 年齢別 社会活動不参加理由

		35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	70-74
1991年	第1位	時間 56.5	時間 52.6	時間 51.7	時間 52.4	時間 55.6	きっかけ 39.0	きっかけ 36.2	自分に合う活動 43.5
	第2位	きっかけ 39.5	きっかけ 36.8	きっかけ 40.1	きっかけ 37.5	きっかけ 40.6	時間 38.6	自分に合う活動 31.2	健康や体力 29.8
	第3位	興味・関心 24.0	精神的ゆとり 25.1	興味・関心 21.0	自分に合う活動 31.1	自分に合う活動 24.1	自分に合う活動 30.5	時間 29.4	時間 27.4
2001年	第1位	時間 64.8	時間 65.1	時間 65.3	時間 64.1	時間 61.6	時間 42.1	きっかけ 34.3	健康や体力 31.0
	第2位	きっかけ 40.2	きっかけ 34.9	きっかけ 36.6	きっかけ 36.9	きっかけ 33.9	きっかけ 41.3	時間 32.5	自分に合う活動 29.3
	第3位	精神的ゆとり 23.0	精神的ゆとり 24.1	精神的ゆとり 27.5	精神的ゆとり 21.4	精神的ゆとり 20.6	自分に合う活動 23.8	自分に合う活動 26.5	きっかけ 26.7

ここからは「生活・就業スタイル調査」のデータを用いる。最初に、今後の参加意向と不参加の理由についてみていく。「積極的に参加したい」、「条件によっては参加してもよい」、「参加するつもりはない」、「わからない」のそれぞれに対して回答の多かったものから3つずつ取り出し、本人票と配偶者票の両方について並べたのが表24である。

表24 社会活動不参加者の今後別 社会活動不参加理由

		積極的に参加したい	条件によっては参加したい	参加するつもりはない	わからない
本人	第1位	時間 56.7	時間 62.2	時間 54.4	時間 62.2
	第2位	きっかけ 43.3	きっかけ 45.8	興味・関心 35.1	きっかけ 34.1
	第3位	精神的ゆとり 23.3	自分に合う活動 24.7	精神的ゆとり 31.6	精神的ゆとり 31.1
配偶者	第1位	時間 56.0	時間 54.3	時間 47.8	時間 51.6
	第2位	きっかけ 40.0	きっかけ 36.4	健康・体力 28.3	精神的ゆとり 33.5
	第3位	自分に合う活動／その他 24.0	精神的ゆとり 25.4	きっかけ 26.1	きっかけ／健康・体力 25.8

すべての項目について第1位は「時間がたりない」となっている。「積極的に参加したい」では、第2位は本人は「きっかけ」、配偶者は「自分に合う活動」と「その他」となっている。「条件によっては参加したい」でも第2位は「きっかけ」であり、第3位は本人は「自分に合う活動」で、配偶者は「精神的ゆとり」となっている。本人の場合は、うまく情報が入手できれば活動に参加できるということであろう。「参加するつもりはない」人については、本人の第2位は「興味がない、関心がない」で、第3位は「精神的ゆとり」、配偶者は第2位が「健康や体力に自信がない」

で、第3位は「きっかけ」となっている。配偶者のほうはまったく興味や関心がないわけではないので、どちらかといえば「条件によっては参加したい」に近いのかもしれない。「わからない」と回答した人は、社会活動そのものにどういうものがあるのかが分からないということが考えられるので、接する情報などによってはすぐにでも参加する可能性がある。

次に年齢別に不参加の理由を見ていく（表25）。配偶者の年齢の範囲が本人のものとは異なるので注意が必要だが、本人も配偶者も54-64歳までは第1位が「時間」となっている。65歳以上では、本人の第1位が「きっかけ」なのに対して、配偶者は「健康や体力に自信がない」である。配偶者の場合、45-54歳から健康や体力に対する不安をあげる人が増えている。女性の場合、家事や育児など家庭での仕事との両立が問題視されるということなのだろうか。他に特徴的なこととしては、本人と配偶者とも35-44歳の第4位に「経済的余裕がない」が入っていることである。住居費や子どもの教育費など、若年のほうが経済的負担が大きいことが参加への障害となっている。

表25 年齢別 社会活動不参加理由（括弧内は配偶者の年齢区分）

		35-44	(23-44)	45-54	54-64	65-69	(65-77)		
本人	第1位	時間	67.0	時間	67.6	時間	58.6	きっかけ	40.7
	第2位	きっかけ	35.8	きっかけ	44.0	きっかけ	42.1	時間	39.6
	第3位	精神的ゆとり	29.3	精神的ゆとり	30.8	自分に合う活動	21.1	自分に合う活動	34.1
	第4位	経済的余裕	23.3	自分に合う活動	24.2	精神的ゆとり	19.1	健康・体力	22.0
配偶者	第1位	時間	61.8	時間	52.7	時間	44.9	健康・体力	38.9
	第2位	精神的ゆとり	33.8	精神的ゆとり／ きっかけ	32.8	きっかけ	31.6	時間	33.3
	第3位	きっかけ	29.4	—	—	健康・体力	27.2	きっかけ	27.8
	第4位	経済的余裕	22.1	健康・体力	27.5	自分に合う活動	24.1	自分に合う活動	16.7

最後に、社会活動不参加者の今後の意向による、社会に役立つ活動についての考え方の違いについて見てみよう（表26）。

表26 社会活動不参加者の今後別 社会に役立つ活動の考え

		積極的に参加したい	条件によっては参加したい	参加するつもりはない	わからない				
本人	第1位	社会のためになる	73.3	社会のためになる	56.5	強制されない	43.1	気軽にできる	56.4
	第2位	気軽にできる	43.3	気軽にできる	52.6	気軽にできる	39.7	社会のためになる	47.9
	第3位	楽しい	40.0	強制されない	46.9	社会のためになる	36.2	強制されない	46.0
	第4位	多くの人と知り 合える	33.3	楽しい	35.2	やりとおす	34.5	楽しい	35.6
配偶者	第1位	気軽にできる	60.0	気軽にできる	55.6	気軽にできる	45.7	気軽にできる	47.8
	第2位	社会のためになる	52.0	楽しい	47.3	強制されない	43.5	楽しい	47.2
	第3位	強制されない	44.0	強制されない	44.8	楽しい	39.1	強制されない	44.9
	第4位	やりとおす	36.0	社会のためになる	41.2	多くの人と知り 合える	30.4	社会のためになる	32.6

本人票と配偶者票について、それぞれの項目で第4位まで抽出したところ、本人と配偶者で異なる傾向が見られた。本人の場合、「社会のためになること」が比較的に上位を占めることが多いのに対して、配偶者は「気軽にできること」がすべてで第1位となっている。また「強制されないこと」も上位を占めることが多く、自発性に対する意識（あるいは懸念）が感じられる。これ

は、配偶者がPTAなど子どもに関わる活動に参加することが多く、それが負担に感じられているのかもしれない。つまり、配偶者のほうが本人よりも、社会活動についてより具体的なイメージを持っているといえる。

社会活動不参加の理由について、「時間がない」「きっかけがつかめない」「精神的ゆとりがない」などが上位にあげられていたことと合わせて考えてみると、あまり時間的に拘束されず、自発的に参加できるような活動が望まれているといえるであろう。

自由時間の有無については本人票でのみたずねているが、社会活動に参加していない人でも自由時間のある人は、参加している人よりは少ないものの約50%であり(表27)、社会活動参加者の予備軍の多さを示している。

表 27 社会活動参加状況と自由時間の有無

	十分にある	まあまあ	不十分である	まったくない	標本数
定期的に参加している	17.9	45.3	32.1	4.7	106
ときどき参加している	16.8	52.3	28.0	2.8	107
以前に参加したことがある	11.4	40.9	44.3	3.4	88
参加していない	9.5	41.3	43.7	5.5	549

4. 定年退職への準備との関連から

「生きがい調査」では、「定年退職に向けて、どのようなことが必要だと思いますか」という設問(1991年度と2001年のみ)で、「個人として必要だと思うこと」、そして「実際に退職に向けて準備している(いた)こと」に分けてたずねている。それぞれの質問項目に対して、社会活動の参加状況を見てみると(表28)、「定期的に参加している」人の中では、両年の調査結果とも「友人や仲間との交流を深める」「近隣や地域の人との交流を深める」と回答した割合が高いが、実際に準備していることについては、「会社以外に居場所を作っておく」の割合も高い。

表 28 社会活動参加状況と定年退職前の準備

		健康の維持・増進	貯経済的基盤をつくる	生涯楽しめる趣味などを持つ	活かせる専門的技術を身につける	夫婦・家族の関係を大切に	友人や仲間との交流を深める	近隣や地域での交流を深める	会社以外に活動の場をつくる
<1991年>									
必要だと思うこと	定期的に参加している	13.3	10.6	9.9	13.1	14.5	17.4	19.9	14.1
	ときどき参加している	13.4	11.8	11.5	10.6	16.5	13.4	20.0	13.1
	以前に参加したことがある	9.4	10.1	11.4	10.1	10.2	8.9	12.2	15.1
	参加していない	64.0	67.5	67.2	66.3	58.9	60.3	48.9	57.7
実際に準備していること	定期的に参加している	13.4	11.5	12.6	12.8	15.2	15.3	25.7	16.8
	ときどき参加している	13.6	12.5	13.1	14.0	14.7	14.9	21.8	18.7
	以前に参加したことがある	10.5	10.0	11.5	13.1	11.4	9.9	10.7	14.6
	参加していない	62.5	65.9	62.8	60.1	58.7	59.9	41.9	49.9
<2001年>									
必要だと思うこと	定期的に参加している	13.5	12.3	15.1	13.1	12.7	14.6	26.7	17.3
	ときどき参加している	13.7	11.3	13.5	11.7	15.3	16.1	22.0	13.0
	以前に参加したことがある	10.3	11.7	10.0	12.5	10.6	10.3	12.7	8.8
	参加していない	62.5	64.8	61.4	62.7	61.4	59.0	36.7	60.9
実際に準備していること	定期的に参加している	15.7	14.2	16.4	15.9	15.1	16.8	33.1	28.4
	ときどき参加している	13.3	12.0	15.3	13.3	16.5	16.2	21.6	19.6
	以前に参加したことがある	10.7	10.7	11.6	14.5	11.8	11.0	9.3	12.4
	参加していない	60.2	63.1	56.7	56.3	56.6	56.0	36.1	39.6

つまり、社会活動に参加している人は、職場や家庭以外の活動の場を求めて意識的に地域活動に参加しているということが考えられ、それは1991年より2001年の割合が高くなっている。社会活動に参加する人の割合自体はさほど変わらないものの、参加する意識は変わってきている可能性がある。

また、「近隣や地域の人との交流を深める」と「会社以外に居場所を作っておく」について、社会活動に参加している人を年齢カテゴリー別に見ると(表29)、「近隣や地域の人との交流を深める」では、「必要だと思うこと」に関して定期的に参加している人での割合が1991年に比べて2001年の方が全ての年齢カテゴリーで増えており、「実際に準備していること」でも35-44歳以外は割合が増えている。特に45-54歳の割合の伸びが大きい。35-44歳でも、ときどき参加している人の割合は増えている。「会社以外に居場所を作っておく」では、「必要だと思うこと」の割合に目立った変化は見られないが、「実際に準備していること」の割合はすべての年齢層で増加している。つまり、社会活動に参加していない人の意識は変わっていないかもしれないが、社会活動に参加している人の地域や社会活動に対する意識は変わってきているようである。

表29 年齢別 社会活動参加状況と定年退職前の準備

		近隣や地域の人との交流を深める				会社以外の活動の場を作っておく			
		35-44	45-54	55-64	65-74	35-44	45-54	55-64	65-74
<1991年>									
必要だと思うこと	定期的に参加している	7.7	9.3	22.6	28.6	8.8	6.9	14.6	39
	ときどき参加している	19.2	22.2	13.2	26.2	12.5	12.6	14.6	12.2
実際に準備していること	定期的に参加している	27.9	12.4	22.6	38.8	8.8	9.2	19.6	34.4
	ときどき参加している	18	22.9	20.3	23.9	7.4	8.2	15.7	23
<2001年>									
必要だと思うこと	定期的に参加している	11.1	15.8	31.3	44.4	15	7.4	18.9	31.4
	ときどき参加している	22.2	15.8	16.7	31.1	17.5	18	18.2	24.3
実際に準備していること	定期的に参加している	25.9	27	30.6	39.9	17.8	20.6	25.6	43.7
	ときどき参加している	25.9	20.3	19	23.2	8.9	14.7	24	21.8

5. おわりに

一般に、サラリーマンにとって社会活動は、現状ではやはり高齢(定年前後)になって時間的あるいは経済的そして精神的余裕ができたところで実際に参加するということであり、女性の配偶者にとっては子どもを通じた(半強制的な)親同士の活動が中心ということになっているようだ。また、定期的な参加の継続には、配偶者間の活動に参加することに対する理解がベースとなっている。

都市計画からゴミ問題まで、環境、福祉、教育など様々な分野において、地域や社会の抱える問題や課題は多く、またそれらに対する関心も高まっているように思われる。それらを行政に頼るのみでは必ずしもよい結果が得られない。やはりその空間を共有している人々の考えや実感が反映される必要があるだろう。また一般市民が関わることによって彼ら自身の社会関係が広がり、社会生活をより豊かにする機会ともなりうる。そのためには、そのような情報を共有する場が必要であり、かつそれは自発性を促進するような気軽に利用、参加できるものであることが望ましい。

社会活動には、しがらみや義務感など、特に精神的に負担のかかるものであるというイメージ

があり、参加者が限られる中においては、実際にそのようなこともあるだろう。特に男性の場合、社会活動というものに対して真面目に考えすぎるところもあるようで、それが敷居の高さにつながっているようにも思われる。郡部の場合、若年から関わりを持つことによって、参加することに対する抵抗感が低減され、敷居が低くなっているのではないかと考えられる。

居住年数が長くなれば、地域における社会関係も自然と広がっていくことが多いが、個人の趣味的な活動をするにしても、地域や社会を単なる居住空間としてだけでなく、社会関係を含めた生活の場としてとらえ、個人の関心や時間的、経済的、精神的許容量などを勘案しながら、関わりを持つことによって自分の居場所を醸成していくという、個人のライフコースに応じた社会生活のバランスを考えていくことが、退職後の職場からの生活の場の移行もスムーズなものとするだろう。

第4章 引退形成との関係 定年と高齢期のキャリア形成

前田信彦(立命館大学助教授)

1 はじめに

現在我が国においては、長寿化や少子化の進行により、急速な高齢化が進んでおり、21世紀には超高齢社会の到来が予測されている。一方、右肩上がりの高度経済成長を支えてきた経済・社会の枠組みも大きな変化を余儀なくされており、とりわけ年功制や終身雇用などの日本型の雇用慣行の変化は顕著である。それとともに人々の働き方やライフスタイルにも変化が見え始めており、仕事と仕事以外の生活とのバランスのとれた暮らし方を重視する傾向も見られる。特に、女性や高齢者など、これまで労働市場の周辺領域に位置づけられてきた人々は、育児や介護、あるいはボランティア活動や生涯学習などのような、生活との調整をはかりながら働きたいという希望も多い。しかし、今後はこのような生活との調整をはかりながら就業を希望する傾向は、中高年の男性にも出現することが予想される。これは、従来の仕事のみのキャリアを追求するライフコースから、仕事も生活も大事にしながら積極的に社会へ参加するという「生活者としてのライフコースの構築」の出現ともいえる。またこれは、中年期から高齢期にかけての職業キャリア形成の多様化を促すともいえるだろう。そこで本章では、定年を契機とした高齢期における職業キャリアの形成の実態と意識についての分析を行い、高齢期の生活・職業キャリアの多様化の可能性について探ってみたい。

ところで、これまでの高齢期の職業キャリアにおいて、「定年」＝「引退」というイメージが強かったともいえる。これは、我が国の場合「定年(退職)」が労働市場からの引退を意味する場合が多かったことにもよる。つまり企業活動を中心とした社会においては、「定年＝引退」という構図や定年の規範が、人々の間で広く共有されてきたともいえる。本来、「定年」は特定の会社からの引退であり、労働市場、あるいは社会活動からの引退ではない。しかし、終身雇用を前提としていた時代においては、生涯勤め上げた会社からの定年退職は、同時に「労働」からの引退を意味していたともいえる。近年、日本的雇用慣行が変化する中で、定年退職まで雇用し続けるような、いわゆる終身雇用制度が見直しを迫られており、一人の労働者が定年退職までひとつの企業に勤め続けるような職業キャリアのパターンは大きく変化している。実際、中年期から高齢期にかけては、早期退職による別会社への転職、子会社への出向、独立開業する起業家、あるいはNPOなどのボランティア活動など、定年前後の生活・職業キャリアの多様化が進んでいる。経済的な理由のみならず、年金生活に入っても、実際にはその体力やライフスタイルに応じて働き続ける、あるいは働き続けたいと希望する高齢者も多い。このような中高年齢をとりまく労働市場の変容、あるいは高齢期の就業意欲の高まりなどによって、中高年にとっての「定年」を契機とした職業キャリアの形成が大きく変化しつつある。定年＝引退ではなく、定年が人生の後半における生活・職業キャリア形成の再構築の契機となっているともいえるだろう。また、これからの超高齢社会においては、高齢者を「定年＝引退」という人生のライフ・イベントによって労働市場から排除(exclusion)するのではなく、定年後も雇用の継続や起業、あるいはボランティア活動など、広い意味での「働く」ことを通しての社会参加によって、福祉社会の担い手となって社会に包摂(inclusion)される可能性を政策的にも積極的に探っていく必要があるだろう。

では、「定年」とその後の職業キャリアの形成は、ここ10年の間にどのように変化したであろうか。本章では、「定年」を人生後半の職業キャリアの形成の出発点としてとらえ、定年を契機とした職業キャリアの形成についてデータから明らかにしてみたい。つまり、「定年」＝「引退」という構図ではなく、定年を契機として、中年期から高齢期にかけてのライフステージを、人生後半のキャリアを積極的に形成していく第二のキャリア形成期として位置づけ、高齢期の多様な生活・職業キャリア形成の可能性について考察してみたい。

以下本章では、二つのデータ分析を行う。第一に、定年退職者（男性）を対象として、彼らの定年後のキャリア形成の実態と意識について「生きがい調査」から明らかにする。第二に、これから定年を迎える30歳代後半から50歳代にかけての中年期の男性を対象として、彼らの定年後のキャリア形成の意識と、その規定要因について「生活・就業スタイル調査」から明らかにする。

2-1 分析と知見① -「生きがい調査」から

1) データと方法

本節では「生きがい調査」データから、シニア期の定年に関する行動と意識の分析を行う。第1回（1991年）、第2回（1996年）、第3回（2001年）データのうち、男性のみのサンプルを用いる。分析の指標として、質問票（巻末参照）のうち以下のものを用いる。

定年後のキャリア形成（問21（4））

- A 労働市場からの引退型
 - A 1 完全引退型 (退職とともに引退)
 - A 2 ボランティア就業型 (シルバー人材センター)
- B 内部労働市場移動型
 - B 1 雇用延長型 (再雇用・勤務延長により就業継続)
 - B 2 出向型 (出向先に移籍)
- C 外部労働市場移動型
 - C 1 転職型 (別の企業に再就職)
 - C 2 独立・開業・自営型 (自分で事業や商売+家業手伝い)

以上の指標を軸としながら、以下ではとりわけ、この1991年から2001年にかけての10年間の定年後のキャリア形成の変化と、定年に対する意識について明らかにしてみたい。（表1-1～表4-1参照）

2) 定年後のキャリア形成

まず、「生きがい調査」の男性サンプル（1991年から2001年の10年間の合計）から、定年の実態をみてみよう。表1-1は定年年齢の分布である。1991-2001の計3回調査のすべての男性サンプル(7108)のうち、定年を経験している者は2233人(31.4%)である。これらの定年の年齢分布をみると、60-64歳が63.2%、55-59歳が27.5%で、60歳代前半に集中している。累積度数をみてもわかるように、

表1-1 定年年齢の分布(1991-2001の計3回調査の男性)

	度数	%	累積%
-54	33	1.5	1.5
55-59	614	27.5	29.0
60-64	1411	63.2	92.2
65-69	164	7.3	99.5
70-	11	0.2	100.0
計(定年経験者)	2233	100.0	
定年未経験	4875		
合計	7108		

注 定年経験者のみを対象

60-64歳までに定年を経験する割合は99.5%で、ほとんどの男性は60歳代前半までに定年を経験している。

では、定年年齢は時代とともにどのように変化しているであろうか。表1-2は調査年次別にみた定年年齢(定年のタイミング)である。60-64歳での定年は1991年が49.8%、1996年が66.5%、2001年が72.7%と増加する。これに対して55-59歳での定年は、1991年が41.7%、1996年が23.7%、2001年が17.6%と減少しており、定年のタイミングは時代とともに遅くなっていることがわかる。これは60歳定年制の浸透と連動している。企業が55歳から60歳に定年年齢を引き上げ、多くの労働者は60歳以降に定年を経験する割合が増えたものと推測できる。

表1-2 調査年次別の定年のタイミング

	-54	55-59	60-64	65-69	70-	平均 (SD)
1991	1.8	41.7	49.8	6.7	0.0	100.0(731) 58.8(3.07)
1996	0.5	23.7	66.5	8.4	0.8	100.0(729) 59.7(2.86)
2000	2.1	17.6	72.7	7.0	0.6	100.0(773) 59.8(2.92)

注 定年経験者のみを対象

次に、定年後の職業キャリア形成についてみてみよう。表2-1は、1991-2001の計3回調査のすべての男性サンプル(7108)のうち、定年を経験した者の定年後のキャリアパターンをみたものである。定年後のキャリアパターンのうち、最も多いのが「転職型」(33.6%)である。次いで「完全引退型」(23.4%)、「雇用延長型」(20.3%)となっている。ここでAタイプ(A1, A2)は、定年退職後に労働市場から離れるケース、Bタイプ(B1, B2)は定年後も内部労働市場にとどまるケースで、Cタイプ(C1, C2)は内部労働市場から退出し外部労働市場にとどまるケースと考えられるが、最も割合の高いケースはCタイプであり内部労働市場から退出し、外部労働市場で新たな仕事に就くケースである。定年退職後も内部労働市場にとどまるケースは34.9%で、完全に労働市場から退出するケースは25.8%で最も少ない割合である。

定年後の職業キャリア形成を年次比較でみると(表2-2)、1991年から2001年の10年間にかけて「転職型」(37.9%→30.5%)で7.4%、「雇用延長型」(23.9%→17.5%)で6.4%の減少となっており、定年後に仕事を続ける割合は全体的に減少している。これに対して「完全引退型」(17.6%→27.5%)は9.9%、「出向型」(13.5%→16.6%)で3.1%、「ボランティア就業型」(1.5%→3.1%)で1.6%の増加となっている。1991年から2001年の10年間に我が国はバブル経済の崩壊と失業率の上昇といった経済不況に陥り、いわば「失われた10年」ともいわれている。その間、雇用情勢が悪化し、高齢者の就業にも大きな影響があったことが予測されるが、この分析結果においてもそのような高齢者の雇用環境の厳しさが伺える。この10年間、定年退職後の企業の雇用延長の機会が減少し、また転職は厳しく、出向制度によっての高齢者雇用が維持されている他は、労働市場から完全に退出するケースが増加した事情を反映しているものと思われる。もっとも、定年のタイミングは50歳代から60歳代に移行しており、高齢者の雇用は60歳前半までは維持されており、退職後の年金生活に移行したケースが増加したことも、完全引退の増加した理由であろう。

表2-1 定年後のキャリアパターン(1991-2001の計3回調査分の男性)

	度数	%
A1 完全引退型	577	23.4
A2 ボランティア就業型	59	2.4
B1 雇用延長型	501	20.3
B2 出向型	360	14.6
C1 転職型	829	33.6
C2 独立・開業・自営型	140	5.7
計	2466	100.0

注 定年経験者のみを対象

表2-2 調査年次別の定年後のキャリア形成

	1991	1996	2001
A 1 完全引退型	17.6	24.7	27.5
A 2 ボランティア就業型	1.5	2.5	3.1
B 1 雇用延長型	23.9	19.9	17.5
B 2 出向型	13.5	13.5	16.6
C 1 転職型	37.9	32.7	30.5
C 2 独立・開業・自営型	5.6	6.6	4.9
計	100.0	100.0	100.0
(N)	(800)	(785)	(881)

注 定年経験者のみを対象

このような定年のタイミングと定年後の職業キャリアの分析から、以下の諸点が明らかになるといえるだろう。

- ①1991年以降10年間に、定年年齢が50歳代から60歳代へと遅れている。
- ②1991年以降10年間に、定年後は労働市場から完全引退する割合が高まっている。
- ③1991年以降10年間に、雇用延長は減少している。

このような傾向は、(1)60歳定年制の普及により、55歳から60歳定年へと定年年齢（タイミング）が遅れるようになった (2)雇用環境が悪化したため、雇用延長をできる企業が減少した、といった要因によるところが大きいと考えられるが、いずれにしても「失われた10年」という経済的な不況期において、中高年労働者の定年後はかなり厳しい雇用情勢であったことが伺える。

3) 定年への意味づけと職業キャリアの形成

では、男性労働者は「定年」に対してどのような意識を持っているのだろうか。「生きがい調査」の男性サンプル（1991年から2001年の10年間の合計）から、定年に対する意識をみてみよう。表3-1は年次別にみた「定年退職のイメージ」の分布とその年次推移である。1991年から10年間に顕著な変化を見せている項目は、「所属する組織や肩書きがなくなる」（21.1%→16.0%）で5.1%、「接触する人や情報が減る」（20.7%→15.6%）で5.1%の減少である。つまり、定年退職に対して否定的な意識は減少している。これに対して10年間に増加した項目は、「経済的に苦しくなる」（33.1%→37.6%）で4.5%、「自由な時間が増え、自分を取り戻す」（43.9%→51.8%）で7.9%、「新しい人生が開ける」（32.3%→36.5%）で3.2%で増加している。「経済的に苦しくなる」という否定的イメージはやや増加しているものの、自由な時間が増えて自分を取り戻し、また新しい人生が開けるといった肯定的イメージを持つ割合は増加している。つまり、定年退職は経済的な点においては不利であると意識するものの、その後のキャリア形成にはむしろプラスに作用する契機として捉える割合が増加しているのである。組織や肩書きがなくなったり、接触する人や情報が減るといった否定的な項目は減少していることから、従来のように定年が会社からの引退と孤独で退屈な人生をもたらすというイメージをもつ男性は少なくなり、むしろ定年をその後の新たな人生を切り開いていく一つの契機として捉える男性が増えていることを、10年間の年次推移は示している。

表3-1 調査年次別にみた「定年退職」のイメージ(%)

	1991 (N=2440)	1996 (N=2296)	2001 (N=2372)	
1 わずらわしい人間関係から解放される	27.4	26.2	25.1	
2 所属する組織や肩書きがなくなる	21.1	19.0	16.0	**
3 家庭サービスができる	17.0	15.2	15.4	
4 経済的に苦しくなる	33.1	35.3	37.6	**
5 自由な時間が増え、自分を取り戻す	43.9	48.8	51.8	**
6 生活の目標や気持ちの張りがなくなる	18.4	16.1	14.9	
7 接触する人や情報が減る	20.7	22.9	15.6	**
8 新しい人生が開ける	32.3	33.3	36.5	**
9 社会から取り残される	4.6	2.9	2.9	
10 決まりきった行動パターンから解放される	22.3	20.4	20.2	
11 自己実現の場や機会がなくなる	4.5	3.0	3.2	
12 精神的に楽になる	29.8	29.6	33.3	

** 1991-2001 の間に 4 ポイント以上差のある項目

注 全数を分析対象

では、このような定年に対する意識は、その後の職業キャリアとどのように関連しているだろうか。表3-2(1)から表3-2(3)は、定年退職後の職業キャリア別にみた定年退職へのイメージである。まず表3-2(1)によれば、定年を「経済的に苦しくなる」とイメージする割合は、どのような職業キャリアであれ1991年からの10年間はおおむね一貫しているが、「ボランティア就業型」においては大幅に減少している(58.3%→29.6%)。また表3-2(2)によれば、定年を「自由な時間が増え、自分を取り戻す」とイメージするケースは、「雇用延長型」(37.7%→55.2%)、「出向型」(46.3%→63.0%)で多いが、10年間で最も増加の著しいのは「独立・開業・自営型」(33.3%→65.1%)である。さらに表3-2(3)によれば、定年を「新しい人生が開ける」とする割合は、「独立・開業・自営型」で多く、1991年からの10年間で増加率(44.4%→62.8%)が18.4%である。

表3-2(1) 職業キャリア別にみた定年退職のイメージ(%)

		定年退職のイメージ 「経済的に苦しくなる」		
		1991	1996	2001
A 1	完全引退型 (N=141,194,242)	26.2	24.2	20.7
A 2	ボランティア就業型 (N=12, 20, 27)	58.3	20.0	29.6
B 1	雇用延長型 (N=191,156,154)	32.5	37.2	37.7
B 2	出向型 (N=108,106,146)	27.8	35.8	34.2
C 1	転職型 (N=303,257,269)	37.6	30.4	35.3
C 2	独立・開業・自営型 (N=45, 52, 43)	20.0	28.8	23.3
	計 (N=800,785,881)	32.4	30.6	30.8

注 定年退職者のみを分析

表3-2(2) 職業キャリア別にみた定年退職のイメージ(%)

		定年退職のイメージ 「自由な時間が増え、自分を取り戻す」		
		1991	1996	2001
A 1	完全引退型 (N=141,194,242)	53.9	59.3	58.3
A 2	ボランティア就業型 (N=12, 20, 27)	41.7	55.0	48.1
B 1	雇用延長型 (N=191,156,154)	37.7	39.1	55.2
B 2	出向型 (N=108,106,146)	46.3	48.1	63.0
C 1	転職型 (N=303,257,269)	42.2	51.4	46.1
C 2	独立・開業・自営型 (N=45, 52, 43)	33.3	61.5	65.1
	計 (N=800,785,881)	43.3	51.2	54.8

注 定年退職者のみを分析

表3-2(3) 職業キャリア別にみた定年退職のイメージ(%)

		定年退職のイメージ 「新しい人生が開ける」		
		1991	1996	2001
A 1	完全引退型 (N=141,194,242)	30.5	37.1	36.8
A 2	ボランティア就業型 (N=12, 20, 27)	16.7	35.0	48.1
B 1	雇用延長型 (N=191,156,154)	25.7	20.5	30.5
B 2	出向型 (N=108,106,146)	38.0	34.9	37.7
C 1	転職型 (N=303,257,269)	28.7	31.1	33.1
C 2	独立・開業・自営型 (N=45, 52, 43)	44.4	51.9	62.8
	計 (N=800,785,881)	30.3	32.5	36.3

注 定年退職者のみを分析

また「ボランティア就業型」(16.7%→48.1%)も31.4%と大幅に増加している。

このような定年への意味づけと定年後の職業キャリアの分析から、以下の諸点が明らかになるといえるだろう。

- ①1991-2001の10年の間に、定年の意味が変化している。特に「組織や肩書きがなくなる」あるいは「接触する人や情報が減る」といった否定的な意味づけが減少している。
- ②逆にこの10年間に、定年を「自由な時間が増え自分を取り戻す」「新しい人生が開ける」として捉えるような新しい価値志向が生まれている
- ③ボランティア就業型は、「経済的に苦しくなる」というイメージが減少し、逆に「新しい人生が開ける」という項目が増えている
- ④独立開業・自営型は、定年退職にもっとも肯定的であり、とりわけ「時間が増えて自分を取り戻す」「新しい人生が開ける」という意識が強まっている。

定年に対しては「経済的に苦しくなる」という意識は一定の水準で維持されているものの、そのような経済的な面での不安を持ちながらも、高齢者は定年を「新しい人生が開ける」といった、新たなキャリアの展開への契機として位置づけ始めている。また組織や肩書きが失われることへの不安や、それによる人・情報へのサクセスの減少に対する不安も少なくなっている傾向が見られる。このことから、高齢者は、従来の会社人間にみられたような「定年＝引退＝孤独で寂しい老後」といったイメージではなく、むしろ定年を長い人生の中でのキャリアを形成していく中での一つの通過点としてとらえ、会社から離れて自由な人生を送るための再出発のためのライフ・イベントとして捉え始めているのではないかと思われる。

4) 定年への意味づけと生活満足度

定年への意味づけが、生活の質とどのように関連するだろうか。ここでは定年への意味づけと「生活満足度」との関連をみてみよう(表4-1)。数字のうち左側に示すのは、各項目に該当する者の生活満足度であり、右側は各項目に該当しない者の生活満足度である。両者の数字を平均の差で

検定を行った結果をアスタリスク(*)で示している。この結果を見ると、定年退職に対して、「所属する組織や肩書きがなくなる」(生活満足度=41.21、以下同様)、「家庭サービスができる」(42.16)、「自由な時間が増え、自分を取り戻す」(41.42)、「新しい人生が開ける」(42.12)とイメージする者で生活満足度が有意に高い。これに対して、「わずらわしい人間関係から解放される」(生活満足度=40.10、以下同様)、「経済的に苦しくなる」(39.19)、「生活の目標や気持ちの張りがなくなる」(39.97)、「接触する人や情報が減る」(40.66)、「社会から取り残される」(38.60)とイメージする者ほど、生活満足度は低くなる。このことから、定年への否定的なイメージは生活満足度を下げた傾向が見られ、肯定的なイメージは生活満足度を上げる傾向が見られることがわかる。

表4-1 定年のイメージ別にみた生活満足度

	生活満足度(1991-2001 計)		
1 わずらわしい人間関係から解放される	40.10	<	40.98 **
2 所属する組織や肩書きがなくなる	41.21	>	40.63 **
3 家庭サービスができる	42.16	>	40.48 **
4 経済的に苦しくなる	39.19	<	41.64 **
5 自由な時間が増え、自分を取り戻す	41.42	>	40.11 **
6 生活の目標や気持ちの張りがなくなる	39.97	<	40.91 **
7 接触する人や情報が減る	40.66	<	40.77 N.S
8 新しい人生が開ける	42.12	>	40.03 **
9 社会から取り残される	38.60	<	40.83 **
10 決まりきった行動パターンから解放される	40.55	<	40.80 N.S
11 自己実現の場や機会がなくなる	40.65	<	40.75 N.S
12 精神的に楽になる	40.71	<	40.76 N.S

注1) 左は各項目について該当する場合に生活満足度、右の数字は該当しない場合の生活満足度を示す。

注2) 平均の差の検定による ** < .01 * < .05 + < .10

注3) 男性の全数を分析対象

このような定年への意味づけと生活満足度の分析から、以下の点が明らかになるといえるだろう。

①定年退職に対して「自由な時間が増え、自分を取り戻す」といった肯定的なイメージを持つ人ほど、現在の生活満足度が有意に高い傾向が見られる。

②逆に、定年退職に対して「生活の目標や張りがなくなる」といった否定的なイメージを持つ人ほど、現在の生活満足度は有意に低い傾向が見られる。

このような知見は、定年というイベントそのものと同時に、それをどのように意味づけるかということが、生活満足度を大きく左右するという点である。つまり定年への意味づけは、生活の質と密接に関連するといえるだろう。

2-2 分析と知見②-「生活・就業スタイル調査」から

1) データと方法

本節では「生活・就業スタイル調査」データから、定年後のキャリア形成に関する意識とその規定要因についての分析を行う。データのうち、本人調査（男性）のうち、35-59歳のサンプルを用いる。60歳以上のサンプルは、すでに定年に達している割合も多いことから、分析対象から除去した。分析の指標として、質問票（巻末参照）のうち以下のものを用いる。

定年後のキャリア形成の希望（問29）

A 労働市場からの引退型

A 1 完全引退型（退職とともに引退）

A 2 ボランティア参加活動型（NPO・ボランティア団体）

A 3 ボランティア就業型（シルバー人材センター）

B 内部労働市場移動型

B 1 雇用延長・出向型（再雇用・出向・勤務延長により就業継続）

C 外部労働市場移動型

C 1 転職型（別の企業に再就職）

C 2 独立・開業・自営型（自分で事業や商売）

（家業手伝いは、サンプルが少ないため除去した）

以上の指標を軸としながら、以下では定年退職後のキャリア形成の意識と、その規定要因について明らかにしてみたい。（表5-1～表5-4参照）

2) 定年後のキャリア形成の意識

30歳代後半から50歳代にかけての中年男性は、定年退職後の生活・職業キャリアをどのように考えているのだろうか。表5-1は、定年後のキャリア形成の希望についてまとめたものである。定年退職後のキャリア形成については「労働市場からの引退型」として、「完全引退型」（退職とともに職業生活から引退）、「ボランティア参加活動型」（退職後はNPO・NGOやボランティア団体で、地域や社会のために働く）、「ボランティア就業型」（退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をする）、という三つのタイプがある。また「内部労働市場移動型」は「雇用延長・出

表5-1 定年後のキャリア形成の希望

	度数	%
A 労働市場からの引退型		
A 1 完全引退型	104	20.1
A 2 ボランティア参加活動型	53	10.3
A 3 ボランティア就業型	67	13.0
B 内部労働市場移動型		
B 1 雇用延長・出向型	107	20.7
C 外部労働市場移動型		
C 1 転職型	85	16.4
C 2 独立・開業・自営型	101	19.5
計	517	100.0

向型」(退職後も再雇用や勤務延長、あるいは出向で移籍して働く)タイプである。さらに「外部労働市場移動型」は「転職型」(退職後は別の企業に再就職して働く)と「独立・開業・自営型」(退職後は自分で事業や商売を始めたい)という二つのタイプがある。

これらの分布をみると、「雇用延長・出向型」(20.7%)と「完全引退型」(20.1%)、および「独立・開業・自営型」(19.5%)が比較的多い。「ボランティア就業型」(13.0%)、「ボランティア参加活動型」(10.3)は低い割合である。すでに表2-1および表2-2の分析でみたように、「ボランティア就業型」は、1991~2001年では約2%~3%水準を示していることから、「生活・就業スタイル調査」のデータは、ボランティア就業の割合はかなり高い水準であることがわかる。また「独立・開業・自営」の割合もかなり高い。前者の分析はすでに定年を経験している男性のキャリア分析であり、ほとんどが60歳以上の高齢者が対象となっている。これに対して、ここでの分析は定年を経験していない中年期の男性が対象であり、キャリア形成に対する年齢効果が反映しているものと思われる。つまり、若い年齢ほど、ボランティア就業や独立・開業への志向が強いことが推測できる。また前者の「生きがい調査」のデータは郡部を含めた全国調査によるのに対して、後者は「生活・就業スタイル調査」の首都圏居住者を対象とするデータであることを反映しているものと思われる。

では、この「定年後のキャリア形成の意識」はどのような要因によって規定されているのだろうか。表5-2は「学歴」、「職種」、「年収」、「ローンの有無」と定年後のキャリア形成の意識との関連を分析したものである。まず「学歴」の相違がキャリア形成に及ぼす影響が大きいのが確認できる。「ボランティア活動型」および「転職型」の二つのキャリアは大学・大学院卒以上の高学歴層に多くみられる。これに対して「完全引退型」と「ボランティア就業型」は高校卒以下の低学歴層に多くなる傾向がある。「独立・開業型」は短大・専門学校卒に多い。つまり、学歴が高いほど、定年後は転職によって別会社に就職する志向がみられ、低学歴層では、定年後は労働市場から完全に引退したいという志向がみられる。またこの傾向は、ボランティア活動への効果にも当てはまる。つまり、高学歴層ほどNPOやNGOなどのボランティア活動・地域貢献に関わりたいとする志向が強いが、低学歴層はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をしたいという傾向が見られる。

表5-2 定年後の職業キャリアの規定要因(%)

	完全 引退型	ボランティア 活動型	ボランティア 就業型	雇用 延長型	転職 型	独立 開業型	計(N)
学歴							
高校卒以下	22.1	7.2	19.3	21.5	14.4	15.5	100.0(181)
短大・専門学校	19.1	7.4	14.7	14.7	14.7	29.4	100.0(68)
大学・大学院卒以上	19.2	13.2	8.3	21.8	18.4	19.2	100.0(266)
職種							
専門・技術	14.3	13.0	6.5	27.3	18.2	20.8	100.0(77)
管理職	21.7	13.3	10.8	19.9	16.9	17.5	100.0(166)
事務・販売	22.6	11.3	12.2	17.4	17.4	19.1	100.0(115)
技能・サービス	20.5	3.9	22.0	21.3	15.0	17.3	100.0(127)
本人年収(万円)	754.4	763.8	659.1	726.5	663.0	665.6	702.3(395)
ローンの有無							
あり	20.7	7.6	11.0	24.1	16.0	20.7	100.0(237)
なし	21.6	13.0	18.5	17.3	13.0	16.7	100.0(162)

「職種」別のキャリア形成をみると、「完全引退型」は専門・技術職の割合が少なくなる(14.3%)。逆に「雇用延長型」(27.3%)および「転職型」(18.2%)は専門・技術職に多くなる。またボランティア活動や就業に対する職種の影響も大きいことがわかる。「ボランティア活動型」は技能・サービス職(3.9%)で少なく、「管理職」(13.3%)、「専門・技術」(13.0%)で多くなる。逆に「ボランティア就業型」は「専門・技術」(6.5%)で少なく、「技能・サービス」(22.0%)が多い。つまりホワイトカラー層ほどNPOなどのボランティア活動への志向が強く、ブルーカラー層ではシルバー人材センターなどのボランティア就業への志向が強まるといえる。

次に、キャリア形成に及ぼす経済的要因についてみてみよう。まず、年収の差をみると、最も収入の多いのが「ボランティア活動型」(763.8万円)で、逆に最も収入の少ないのが「ボランティア就業型」(659.1万円)である。収入の高いほど「完全引退」(754.4万円)を選ぶ傾向がみられる。さらに「ローンの有無」をみると、ローンがある場合、「雇用延長型」(24.1%)、「転職型」(16.0%)、「独立・開業型」(20.7%)のキャリア形成を志向する。これに対してローンがない場合、「完全引退型」(21.6%)、「ボランティア活動型」(13.0%)、「ボランティア就業型」(18.5%)のキャリア形成を志向する傾向が見られる。つまり、ローンがある家計状況では、定年後は労働市場から離れることなく、なんらかの形で働き続ける志向をもっているといえよう。このように、定年後のキャリア形成は、現在の年収やローンの有無といった経済的要因に大きく左右されるといえる。

以上の定年後のキャリア志向とその規定要因の分析から、以下の点が明らかになるといえるだろう。

- ①都市圏居住の30歳代後半から50歳代にかけての中年男性についてみると、定年退職後の生活・職業キャリアの志向は「雇用延長・出向型」、「完全引退型」、「独立・開業・自営型」が比較的多い。「ボランティア就業型」や「ボランティア参加活動型」は10%程度であるが、全国サンプルの60歳代男性に比べると高い水準である。
- ②「学歴」別のキャリア形成をみると、学歴が高いほど、定年後は転職によって別会社に就職する志向がみられ、低学歴層では、定年後は労働市場から完全に引退したいという志向がみられる。また、高学歴層ほどNPOやNGOなどのボランティア活動・地域貢献に関わりたいとする志向も強いが、低学歴層はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をしたいという傾向が見られる。
- ③「職種」別のキャリア形成をみると、「雇用延長型」や「転職型」は専門・技術職に多い。また「ボランティア活動型」は技能・サービス職で少なく、管理職や専門・技術職などのホワイトカラー層で多くなる。逆に「ボランティア就業型」は専門・技術職で少なく、技能・サービス職に多い。つまりホワイトカラー層ほどNPOなどのボランティア活動への志向が強く、ブルーカラー層ではシルバー人材センターなどのボランティア就業への志向が強まるといえる。
- ④キャリア形成に及ぼす経済的要因についてみると、収入の高いほど「完全引退」や「ボランティア活動型」を選ぶ傾向がみられる。またローンがある家計状況では、定年後は労働市場から離れることなく、なんらかの形で働き続ける志向をもっている。つまり、定年後のキャリア形成は、現在の年収やローンの有無といった経済的要因に大きく左右される

3)職業キャリアの志向と定年後のキャリア形成

中年期に自分の職業キャリアをどのように志向しているかによって、定年後の生活・職業キャリアがどのように変化するかを、表5-3でみてみよう。ここでは中年期の職業キャリアの志向を5つに類型化している。管理職志向Aは、「1つの企業に長く勤め、管理職になる」志向。管理職志向Bは、「いくつかの企業を経験して、管理職になる」志向。専門職志向Aは、「1つの企業に長

表5-3 職業キャリアの志向と定年後の職業キャリアの希望

	完全 引退型	ボランティア 活動型	ボランティア 就業型	雇用 延長型	転職 型	独立 開業型	計(N)
管理職志向A	21.0	7.4	7.4	37.0	12.3	14.8	100.0(81)
管理職志向B	18.2	12.1	16.7	16.7	18.2	18.2	100.0(66)
専門職志向A	20.7	7.2	16.2	23.4	19.8	12.6	100.0(111)
専門職志向B	22.1	8.8	15.9	15.9	16.8	20.4	100.0(113)
独立・開業志向	10.9	18.8	9.4	9.4	6.3	45.3	100.0(64)

管理職志向Aは、「1つの企業に長く勤め、管理職になる」志向。

管理職志向Bは、「いくつかの企業を経験して、管理職になる」志向。

専門職志向Aは、「1つの企業に長く勤め、専門職になる」志向。

専門職志向Bは、「いくつかの企業を経験して、専門職になる」志向。

独立・開業志向は、アントレプレナー（独立・開業）志向。

く勤め、専門職になる」志向。専門職志向Bは、「いくつかの企業を経験して、専門職になる」志向。そして、独立・開業志向は、アントレプレナー（独立・開業）志向を示している。職業キャリアの志向の影響が強いのは、「ボランティア活動型」と「雇用延長型」および「独立・開業型」である。中年期の職業キャリアの志向において「独立・開業志向」の場合、定年後は「ボランティア活動型」（18.8%）を志向する傾向がみられる。中年期における「独立・開業志向」のキャリアが、定年後の「独立・開業志向」（45.3%）に影響することは当然の結果と思われるが、それがボランティア活動型のキャリアに結びつく点は興味深い。会社から離れての独立・開業は、アントレプレナーシップ（起業家精神）のあらわれともいえるが、そのような起業家精神はNPOやNGOのようなボランティア活動型のキャリア形成を促すことが推測できるだろう。

このような中年期の職業キャリアの志向と定年後のキャリア形成との関連の分析から、以下の点が明らかになるといえるだろう。

- ① 中年期に「独立・開業志向」を持つ者ほど、定年後は「ボランティア活動型」を志向する傾向がみられる。
- ② 会社から離れての独立・開業は、「起業家精神（アントレプレナーシップ）」のあらわれともいえるが、そのようなメンタリティーはNPOやNGOのようなボランティア活動型のキャリア形成を促すことが推測できる

4) アンペイドワークと定年後のキャリア形成

次に、アンペイドワークに対する意識が定年後のキャリア形成にどのような影響を及ぼすかを表5-4でみてみよう。アンペイドワークに対する意識とは、「親の介護」、「育児」、「家事」、「ボランティア活動（NPO、NGOを含む）」、「消費者・市民運動」、「地域貢献活動」といった6つの領域でのアンペイドワークに対して、「働くことにはあてはまりますか」という質問を対象者に試みたものである（問26を参照）。

表5-4 定年後の職業キャリアの希望別にみたアンペイドワークの意識得点

	完全 引退型	ボランティア 活動型	ボランティア 就業型	雇用 延長型	転職 型	独立 開業型	平均(N)
アンペイドワーク A	6.9	6.5	6.7	7.2	7.0	7.0	6.9(514)
アンペイドワーク B	6.6	6.8	6.5	6.7	6.8	7.0	6.7(515)
アンペイドワーク (計)	13.4	13.3	13.3	13.8	13.8	14.0	13.6(513)

得点の高いほどアンペイドワークを「働くこと」と評価していることを示す。

アンペイドワーク Aは介護、育児、家事の領域

アンペイドワーク Bはボランティア、市民運動、地域貢献活動の領域

表5-4では、「親の介護」、「育児」、「家事」の三つの領域を「アンペイドワークA」として、それぞれの点数を合算した。つまり、「アンペイドワークA」は家庭内でのアンペイドワークを意味する。また「アンペイドワークB」は「ボランティア活動（NPO、NGOを含む）」、「消費者・市民運動」、「地域貢献活動」の三つの領域について、点数を合算したものである。これは、地域・社会でのコミュニティでのアンペイドワークを意味している。表中の数字は、点数の高いほどアンペイドワークを「働くこと」として評価していることを示している。

これらの結果をみると、まず「アンペイドワークA」は、「雇用延長型」(7.2)、「転職型」(7.0)、「独立・開業型」(7.0)で点数が高い。つまり、これらのキャリア志向をする者は、家庭内でのアンペイドワークを「働くこと」とみなしている。逆に「ボランティア活動型」(6.5)は、家庭内でのアンペイドワークを「働くこと」とは評価しない傾向が見られる。次に、コミュニティ内でのアンペイドワーク（アンペイドワークB）をみると、「独立・開業型」(7.0)で最も高い得点となっている。つまり、コミュニティ内のアンペイドワークを「働くこと」と評価するものは、定年後に独立・開業するキャリア志向を持っていることを示している。また「ボランティア活動型」(6.8)、および「転職型」(6.8)もコミュニティ内でのアンペイドワークに対する評価は高い。最後に、アンペイドワークの合計（アンペイドワークA+Bの総合得点）をみると、最も得点の高いのは「独立・開業型」(14.0)であり、次いで「転職型」(13.8)、「雇用延長型」(13.8)となっている。逆に「ボランティア活動型」(13.3)、「ボランティア就業型」(13.3)は低い得点となっている。このような結果は、アンペイドワークを「働くこと」とみなすかどうかの違いが、その後のキャリア形成に影響を及ぼすことを示している。例えば、NPOやNGOなどのボランティア活動を志向する者は、アンペイドワークを「（賃金を得る）仕事ではない」と考えていることで、定年後は、（賃金を得る仕事ではない）アンペイドワークを積極的にやっていきたいと考えているのではないかと思われる。これに対して、独立・開業志向の者は、アンペイドワークを、「（賃金を得る）仕事」として捉えることによって、働くことをより広く定義し、またそれを自分の仕事として位置づけるような志向を持っているといえる。「独立・開業型」を志向する者は、「働くこと」を広く定義づけていることから、その背景にある「起業家精神（アントレプレナーシップ）」は、高齢期の働き方の意味の変化や、働き方の多様化、あるいは多様な生活・職業キャリアの展開を促す契機となることが推測できる。

以上のアンペイドワークと定年後のキャリア形成の分析から、以下の点が明らかになるといえるだろう。

- ①アンペイドワークへの評価をみると、最も得点の高いのは「独立・開業型」であり、次いで「転職型」、「雇用延長型」となっている。逆に「ボランティア活動型」や「ボランティア就業型」は低い得点となっている。
- ②独立・開業志向の者は、アンペイドワークを、「（賃金を得る）仕事」として捉えることによって、働くことをより広く定義し、またそれを自分の仕事として位置づけるような志向を持っている。
- ③独立・開業志向の者は、「働くこと」を広く定義づけていることから、その背景にある「起業家精神（アントレプレナーシップ）」は、高齢期の働き方の意味の変化や、働き方の多様化、あるいは多様な生活・職業キャリアの展開を促す契機となることが推測できる。

3 考察

本章の目的は、「定年」＝「引退」という構図ではなく、定年を契機として、中年期から高齢期にかけてのライフステージを、人生後半のキャリアを積極的に形成していく第二のキャリア形成期として位置づけ、定年後の多様な生活・職業キャリアを形成する諸要因を探ることであった。このような作業から得られた知見はすでに示した通りであるが、最後に、高齢期の生活と職業キャリア形成について、仮説を含めた考察と政策的なインプリケーションを述べて本章の結びとしたい。

まず、第一に、定年の意味の変化という点である。これまでの高齢期の職業キャリアにおいては、「定年」＝「引退」というイメージが強かったともいえるが、近年、日本的雇用慣行が変化する中で、定年退職まで雇用し続けるような、いわゆる終身雇用制度が見直しを迫られており、一人の労働者が定年退職までひとつの企業に勤め続けるような職業キャリアのパターンは大きく変化している。そのため、中年期から高齢期にかけては、早期退職による別会社への転職、子会社への出向、独立開業する起業家、あるいはNPOなどのボランティア活動など、定年前後の生活・職業キャリアの多様化が進んでいるといえるだろう。このような時代の流れの中で、「定年」は引退を意味するのではなく、高齢期における生活・職業キャリアの新たな展開の出発点として肯定的に受け止める傾向がみられるといえる。実際、経済的な理由のみならず、年金生活に入っても、実際にはその体力やライフスタイルに応じて働き続ける、あるいは働き続けたいと希望する高齢者も多く、かつての「隠居」とは異なるプラスのイメージへの転換がみられるのではないだろうか。これは日本におけるactive ageingあるいはシニア期のactiveなキャリア形成の出現ともいえるだろう。1990年代はバブル経済崩壊後の「失われた10年」ともいわれ、中高年齢者にとってはとりわけ厳しい雇用環境であった。しかし、その「なぜ失われた10年」というストレスフルな出来事の中でも、定年を契機として、積極的に高齢期に新たなキャリア形成を志向するような定年文化が生まれてきているといえるのではないだろうか。

第二に、定年のタイミングが遅くなっているにもかかわらず、定年を「自分を取り戻す」「新しい人生が開ける」と意味づけるような価値志向の増加がみられることである。つまり、「失われた10年」という経済的に困難な社会状況にもかかわらず、定年を前向きに定義し、柔軟に定年に向き合おうという姿勢がある。これはなぜなのだろうか。戦後、日本人のライフコースにおいて寿命の延び、という人口学的変化がみられたが、1980年代までは、人口学的変化に対応しきれない定年に対する古い価値規範が維持されていた。いわばかつての「定年＝引退＝隠居」というイメージが維持されていたといえる。しかし近年は「定年」に対する新たなイメージが作られつつある。寿命の延びが定年後の人生を長くしたと同時に、また、定年後もまた新たに人生を展開できるという意識が人々の間で共有され始めている。この趨勢は、ここ10年の経済不況の影響を受けつつも、確実に中高年齢層に浸透している、といえるのではないだろうか。

第三に、中高年齢者の職業キャリアは、「失われた10年」に翻弄されながらも、確実に新たな定年カルチャーを形成している。この点で、中高年世代の後期職業キャリア形成に主体的側面を伺い知ることができる。この人口学的変化に対応する人々の意識レベルでの対応は、「失われた10年」があったにもかかわらず、強固に形成されてきている。つまり社会の構造的変動を経験しながらも、それに対して中高年齢者は柔軟に対処(coping)しながら、多様なキャリア形成を展開しつつあるともいえよう。

最後に、今後の高齢者の生活・職業キャリアを考える上で、重要な政策的インプリケーションの一つは、雇用(会社で雇われて働くこと)だけが仕事ではなく、NPOや起業家などのもう一つの(オ

ルタナティブな)働き方を、制度的にも積極的に位置づけるということであろう。シニア期の働き方は、生活との調整をはかりながらのパートでの就業、NPOなどのボランティア活動、シルバー人材センターなどのボランティア就業、あるいは自ら独立・開業するような起業家など多種多様であることが、本章の分析からも明らかである。このような高齢者の多様な働き方の現状をふまえるならば、中年期から高齢期にかけての新たなライフスタイルに応じた、多様な働き方を可能にするような制度が必要であろう。例えば、EUを中心とするヨーロッパ諸国やアメリカにおいては、子育て期においては家庭生活との調和のとれた働き方、高齢期への移行期においては、早期引退の廃止と部分的・選択的引退という、新たな働き方が制度的にも構築されつつあり、多様なライフコースを選択可能にする政策展開がみられる。つまり、働き方の多様化や、働くことの意味の問い直しの中で、「働くこと」を一つのキー概念としながら福祉国家の再編が進んでいる。我が国においては、高齢者の「雇用延長」が政策的にも展開されつつあるが、働き方や働くことの意味をより包括的に捉え直し、企業で雇用される働き方のみならず、アクティブ・エイジングを前提とした多様なキャリア形成を支援する必要があるだろう。シニア期の職業キャリア形成において、NPOや起業家のような働き方を「多様な働き方の一つ=オルタナティブな働き方」として位置づけ、政策的にも積極的に支援する必要があるといえよう。

第5章 生きがいとの関係

正木裕司(シニアプラン開発機構 主任研究員)

生活、就業の変化と生きがいとの関係を論ずるにあたって、まず、生きがい調査の結果をもとに「生きがい」の概念を確認していくこととしたい。次いで、そのような「生きがい」と「生活の諸側面」との関係、また、「ライフコース形成」との関係を生活・就業スタイル調査をもとに見る。そして、時代変化の中で、あるいは世代推移の中で、生きがいの持ち方、生きがいと生活諸側面、ライフコース形成の関係がどのように変化しているかを見ることとしたい。

1. 生きがいとは

(1) 生きがい調査の知見

生きがい調査の正式名称は「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」であるが、生活と生きがいの関係を分析した結果、生きがいを持つ上で重要なこととして、以下の知見が得られている。

- ・ 生きがい構成要素とその取得の場のリンケージが重要であること
 - ・ 生きがい構成要素は多面的に求められるが、どのような面に重点を置くか、どのようにバランスをとるかは個々人により異なること
 - ・ 生きがい構成要素と取得の場がうまく機能しているかどうかの評価が生きがいの有無に影響すること
- (シニアプラン開発機構 2002 年 ‘第 3 回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査’)

この知見を手がかりに論を進めることとしたい。まず、「生きがい」と「生きがい構成要素」の概念について見ていく。

生きがいの意味するところは多義的である。生きがいの意味について、広辞苑（岩波書店）によれば「生きていくだけのねうち、生きていく幸福・利益」としているが、生きていく上でのほりあいを感じている人、人生の目的、目標を感じている人、自分の可能性の実現を感じている人、社会や他人への役立ちを感じている人、自分の内面の充実を感じている人など様々であり、個々人により、その意味として重視するところ、生きがい観の持ち方は多様で幅広い。

生きがい調査では「生きがい」とはメタ概念であるとする。生きがい調査で言及されたところを引用すると以下の通りである。

～メタ概念とは、ある言葉が指し示す個々の要素を総合的に把握するための、個人の有する上位概念である。例えば、「生きがい」という言葉は同じであっても、どのようなことを感じるかが「生きがい」なのか、何をすることが「生きがい」なのかは、その「生きがい」を感じるそれぞれの人によって異なる。つまり、その人が「これが生きがいだ」と感じる時の具体的な感情、価値、行動、等々が「生きがい」の構成要素であり、この構成要素を総合するのが「生きがい」に対する個人のメタ概念である。～

(シニアプラン開発機構 1993 年 3 月 ‘サラリーマンの生きがいに関する調査’)

(2) 生きがい構成要素

それでは生きがい構成要素について見ていきたい。参考とする生きがい調査は、過去10年間に
 において1991年(第1回)、1996年(第2回)、2001年(第3回)の3時点において行なわれた。

①取得の場

生きがい調査には、生活の場、つきあいの場で得られる感情、価値等である生きがい構成要素
 のそれぞれが、どの場から取得されているかについて該当する場を二つまで選んでもらう質問が
 ある。以下の表に示される生きがい構成要素の概念が用意され、そのそれぞれが取得されている
 場を「家庭」「仕事・会社」「地域・近隣」「個人的友人」「世間・社会」「その他」「どこにもない」
 から選択してもらった。

(表1) 生きがい構成要素と取得の場(生きがい調査) (%)

生きがい構成要素	調査回	取得の場						
		家庭	仕事・ 会社	地域・ 近隣	個人的 友人	世間・ 社会	その他	どこに もない
生活の活力やはりあい	第1回	68.4	57.4	4.5	15.6	7.0	2.9	0.9
	第2回	67.7	47.2	5.8	19.2	5.6	4.1	1.0
	第3回	70.6	46.3	5.9	22.8	6.0	4.9	0.8
心の安らぎや気晴らし	第1回	81.5	8.9	5.0	37.3	4.3	10.1	0.5
	第2回	78.4	5.7	5.5	35.6	4.5	10.8	0.6
	第3回	78.1	6.2	4.9	40.6	3.3	11.4	0.9
生きる喜びや満足感	第1回	59.6	49.7	5.1	12.8	8.2	6.9	1.8
	第2回	62.8	37.7	5.9	18.0	6.3	8.2	1.2
	第3回	65.6	38.0	5.9	21.9	6.5	8.8	1.4
人生観や価値観の形成	第1回	23.2	44.4	6.2	28.4	32.5	6.3	2.6
	第2回	31.4	37.6	6.2	27.8	26.3	6.2	3.0
	第3回	34.6	39.9	5.5	29.0	26.5	7.1	2.8
生きる目標や目的	第1回	68.7	40.0	4.9	2.8	17.6	5.1	1.3
	第2回	67.7	34.2	6.3	4.3	16.5	5.8	1.4
	第3回	70.4	35.2	5.5	5.3	15.5	7.5	1.9
自分自身の向上	第1回	14.2	62.5	8.6	13.2	36.6	5.0	1.7
	第2回	20.0	56.4	8.8	13.5	29.3	5.9	2.1
	第3回	21.7	58.5	8.7	15.4	29.0	7.2	1.8
自分の可能性の実現や何かを やりとげたと感じる事	第1回	18.7	69.1	9.2	4.2	20.5	7.5	4.2
	第2回	22.3	63.7	9.0	4.3	18.9	8.3	3.3
	第3回	22.9	63.8	9.9	5.7	19.3	10.0	3.5
役に立っていると感じたり、 評価を得ていること	第1回	31.5	68.1	11.3	8.3	15.4	4.3	3.5
	第2回	37.0	61.5	11.3	7.5	13.2	5.0	3.8
	第3回	39.1	60.3	11.6	9.8	13.2	5.4	4.3
平均	第1回	45.7	50.0	6.9	15.3	17.8	6.0	2.1
	第2回	48.4	43.0	7.4	16.3	15.1	6.8	2.1
	第3回	50.4	43.5	7.2	18.8	14.9	7.8	2.2

*第2回以降の調査でとっている「生活のリズムやメリハリ」は第1回でとっていないため集計から除外。
 以下同じ。

10年間における3回の調査を通じて言えることは、「家庭」と「仕事・会社」が生きがい構成要素を取得するための主要な場であることである。「個人的友人」「世間・社会」がその次に位置し、「地域・近隣」「その他」は少数である。また、「どこにもない」を選択する人は微小であり、通常、各構成要素はいずれかの場で取得されていることが窺える。

更に細かく見ると、「家庭」は心の安らぎ、生活の活力、喜びや満足、目標・目的を得る場、「仕事・会社」は自分自身の向上、可能性の実現、役立ちや評価を得る場と言えるようだ。ともに主要な場であるが獲得する要素に違いがあり相互に補完的だ。

そして、「個人的友人」は家庭とよく似た傾向を示し、心の安らぎ、生活の活力、喜びや満足を得る場である。ただし、生活の目標・目的の場ではなく、人生観や価値観の形成の傾向が強い。一方、「世間・社会」「地域・近隣」は仕事・会社とよく似た傾向を示す。自分自身の向上、可能性の実現、役立ち・評価の場である。ただし、「世間・社会」が自分自身の向上という内面に重心を置くのに対し、「地域・近隣」は他者への役立ち・評価を得ることに重心があり、内向きか外向きかの差がある。

②生きがいの意味として重視するもの

さて、生きがい構成要素と取得の場との関係は生活の実態的側面であるが、観念的側面として、どのようなことを生きがいの意味と考えられているかという点を見てみたい。

生きがい調査では、生きがい構成要素のうち、生きがいを表すのに最も適当だと思うものを二つまで選んでもらっている。3回の調査を通じて見ると、選択率の一番高い「生きる喜びや満足感」でも40%台に止まり、選択にばらつきが見られる。2位以下には「生活の活力やはりあい」「自分の可能性の実現」「役立ち・評価」「心の安らぎや気晴らし」などが続く。生きがいとして重視するもの、生きがい観の持ち方について多様性を認めることができる。

(表2) 生きがいの意味(生きがい調査) (%)

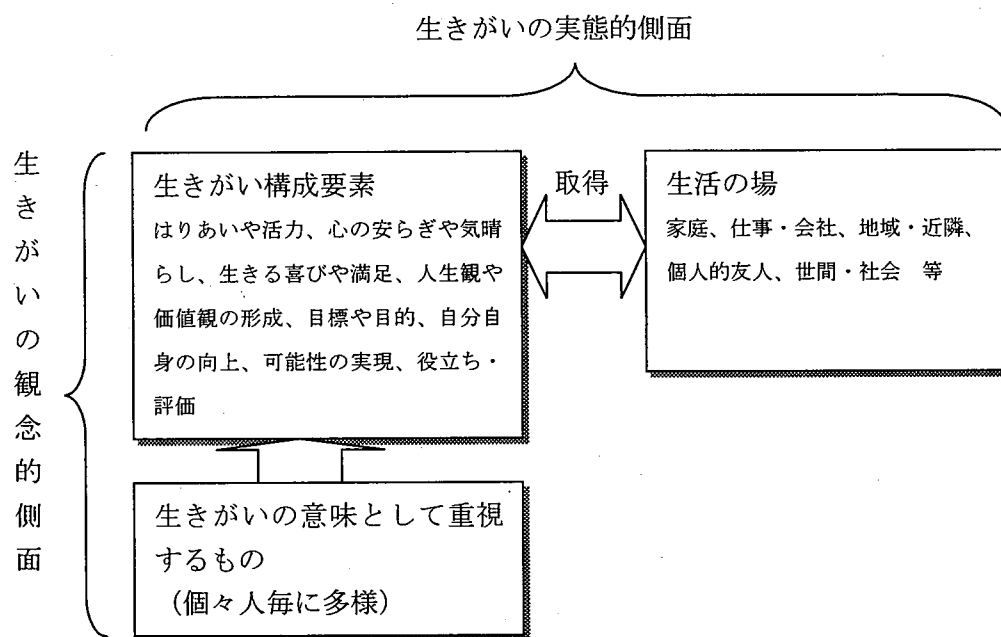
生きがい構成要素	第1回調査	第2回調査	第3回調査
生活の活力やはりあい	35.2	26.2	26.1
生活のリズムやメリハリ	7.1	9.7	10.2
心の安らぎや気晴らし	24.9	24.9	26.7
生きる喜びや満足感	47.0	43.7	40.5
人生観や価値観の形成	9.7	7.9	8.7
生きる目標や目的	19.6	20.4	17.5
自分自身の向上	22.3	15.8	18.3
自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	—	24.7	28.2
役に立っている、評価を得ていること	25.5	19.1	17.1

* 「自分の可能性の実現…」は第1回調査ではとっていない。第2、3回調査における、この選択率は大きく有意な3時点比較はできない。

③生きがい構成要素の概念

以上より、生きがい構成要素は、個々人の精神的、心理的欲求と関係するものであろうが、「生活のはりあいや活力」のような生活規律的なもの、「心の安らぎや気晴らし」のような安定的なもの、「可能性の実現」のような達成的なもの、「役立ち・評価」のような親和的なものなど幅広い内容を持つ。そして、観念的側面では、個々人により、生きがいの意味としてどれを重視するかという点には違いがあり、分散する。しかし、実態的側面においては、人はこれらの構成要素のそれぞれを多少なりとも、家庭、仕事・会社、世間社会などのいずれかの生活の場から取得していることが窺える。

(図 1) 生きがい構成要素の諸側面



(3) 生きがいの有無

① 傾向

さて、生きがいの有無であるが、まず、その傾向を見たい。生きがい調査では、個々人の持つ生きがいの意味を聞き、そのような生きがいについて、「持っている」「前は持っていたが今は持っていない」「持っていない」「わからない」のいずれかを選択してもらった。

「持っている」は第1回から2回で大きく上がり、第3回で同じ程度下がった。「わからない」は第3回で大きく上げた。「前は持っていたが今は持っていない」「持っていない」は第2回で上がり、第3回で再び上がったが第1回の水準までは戻していない。

(表 3) 生きがいの有無(生きがい調査) (%)

生きがいの有無	第1回調査	第2回調査	第3回調査
持っている	66.2	78.4	67.3
前は持っていたが今は持っていない	9.2	5.2	7.1
持っていない	13.1	6.7	8.4
わからない	9.7	8.5	15.6

次に3回の調査における傾向を年齢別、性別に見ると以下の表の通りである。「持っている」は年齢が上がるほど選択率は高くなり、男性に選択傾向が強い。「わからない」は年齢が上がるると選択率は下がり、女性に選択傾向が強い。

「前は持っていたが今は持っていない」は年齢が上がるると上がる、「持っていない」は年齢が上がるると下がる。男女で有意な差はない。

(表4) 生きがいの有無の選択傾向(生きがい調査)

生きがいの有無	選択傾向			
	選択割合	年齢(上がると)	性別	時代
持っている	大	上がる	男性>女性	第2回で上がり、第3回で下がった
前は持っていたが今は持っていない	小	上がる		第2回で下がり、第3回で上がった
持っていない	小	下がる		
わからない	小	下がる	女性>男性	第2回で少し下がり、第3回で大きく上がった

② 生きがい構成要素取得の場との関係

それでは、生きがいの有無と生きがい構成要素の取得との関係を見ていきたい。生きがいの有無については男女で選択傾向の違いが認められたため、男女の別に見ていく。

以下、生きがいを「持っている」「前は持っていたが今は持っていない」「持っていない」「わからない」の4群に分け、生きがい構成要素と取得の場との関係を見る。

(表5) 生きがい有無別の傾向(生きがい調査第3回)

生きがいを持っている(男性1,641人、女性480人)

	生きがい構成要素	取得の場						
		家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない
男	生活の活力やはりあい	76.6	48.6	7.4	17.6	7.6	3.7	0.2
	心の安らぎや気晴らし	84.7	7.3	7.1	36.7	4.0	10.0	0.4
	生きる喜びや満足感	72.1	42.0	7.7	17.4	8.1	7.2	0.4
	人生観や価値観の形成	35.9	42.2	6.8	27.1	30.2	6.9	1.6
	生きる目標や目的	75.4	38.7	6.7	4.7	16.4	5.4	0.8
	自分自身の向上	24.8	60.0	10.5	13.9	33.4	5.6	0.5
	自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	24.7	66.4	12.9	6.0	23.6	8.2	1.2
	役に立っている、評価を得ていること	40.2	62.9	15.7	8.8	17.7	4.8	2.0
	平均	54.3	46.0	9.4	16.5	17.6	6.5	0.9
	女	生活の活力やはりあい	60.2	41.0	7.1	40.6	5.0	6.3
心の安らぎや気晴らし		69.8	4.4	3.8	58.3	2.3	10.0	0.4
生きる喜びや満足感		57.9	28.3	7.1	38.1	6.9	9.8	0.8
人生観や価値観の形成		34.6	31.0	5.4	43.1	22.5	7.1	1.7
生きる目標や目的		61.9	28.8	6.3	9.2	19.0	12.5	1.3
自分自身の向上		21.7	51.9	10.4	22.1	25.0	12.1	0.4
自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事		24.2	55.2	10.6	7.5	18.3	16.0	3.1
役に立っている、評価を得ていること		42.3	52.9	10.8	15.0	10.4	8.3	2.1
平均		46.6	36.7	7.7	29.2	13.7	10.3	1.3

前は持っていたが今は持っていない(男性 167 人、女性 56 人)

	生きがい構成要素	取得の場						
		家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない
男性	生活の活力やはりあい	67.1	36.5	8.4	20.4	7.2	7.8	1.8
	心の安らぎや気晴らし	70.7	4.8	4.8	36.5	4.2	15.6	3.0
	生きる喜びや満足感	59.9	29.9	3.6	21.6	4.2	13.2	2.4
	人生観や価値観の形成	31.7	38.3	7.2	19.8	27.5	8.4	4.2
	生きる目標や目的	66.5	24.6	4.8	4.8	16.2	7.8	3.0
	自分自身の向上	17.4	47.9	7.8	13.2	30.5	7.8	4.2
	自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	22.8	51.5	7.8	3.0	17.4	10.2	6.6
	役に立っている、評価を得ていること	34.1	47.3	10.2	7.8	13.8	5.4	7.8
	平均	46.3	35.1	6.8	15.9	15.1	9.5	4.1
	女性	生活の活力やはりあい	48.2	33.9	3.6	37.5	5.4	10.7
心の安らぎや気晴らし		42.9	5.4	1.8	58.9	3.6	19.6	1.8
生きる喜びや満足感		46.4	26.8	3.6	39.3	3.6	16.1	5.4
人生観や価値観の形成		37.5	23.2	3.6	41.1	14.3	12.5	1.8
生きる目標や目的		53.6	28.6	0.0	5.4	8.9	17.9	5.4
自分自身の向上		17.9	41.4	1.8	28.6	21.4	21.4	5.4
自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事		17.9	53.6	5.4	7.1	10.7	17.9	3.6
役に立っている、評価を得ていること		37.5	42.9	5.4	19.6	1.8	10.7	10.7
平均		37.7	31.9	3.2	29.7	8.7	15.9	4.5

持っていない(男性 183 人、女性 79 人)

	生きがい構成要素	取得の場						
		家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない
男性	生活の活力やはりあい	72.1	43.7	1.6	18.6	3.3	8.7	3.8
	心の安らぎや気晴らし	73.8	4.9	0.5	31.7	2.2	16.9	4.9
	生きる喜びや満足感	59.6	37.2	3.8	14.2	3.3	10.9	5.5
	人生観や価値観の形成	28.4	46.4	2.7	23.0	24.6	9.3	8.7
	生きる目標や目的	67.2	35.0	4.4	2.7	15.3	10.4	4.9
	自分自身の向上	19.1	61.7	5.5	8.7	24.6	9.8	8.7
	自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	18.6	67.2	5.5	3.8	10.4	9.8	12.0
	役に立っている、評価を得ていること	32.8	65.6	6.0	6.0	5.5	4.9	13.1
	平均	46.5	45.2	3.8	13.6	11.2	10.1	7.7
	女性	生活の活力やはりあい	43.0	38.0	1.3	45.6	0.0	6.3
心の安らぎや気晴らし		51.9	2.5	1.3	57.0	3.8	16.5	1.3
生きる喜びや満足感		43.0	24.1	0.0	46.8	5.1	10.1	7.6
人生観や価値観の形成		26.6	35.4	0.0	35.4	20.3	7.6	3.8
生きる目標や目的		63.3	25.3	0.0	8.9	11.4	7.6	12.7
自分自身の向上		10.1	64.6	1.3	21.5	19.0	3.8	7.6
自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事		16.5	63.3	3.8	5.1	7.6	5.1	15.2
役に立っている、評価を得ていること		38.0	50.6	1.3	13.9	1.3	1.3	20.3
平均		36.6	38.0	1.1	29.3	8.6	7.3	9.4

わからない(男性 350 人、女性 143 人)

	生きがい構成要素	取得の場						
		家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない
男性	生活の活力やはりあい	77.1	54.0	1.4	15.1	4.0	2.9	0.9
	心の安らぎや気晴らし	82.9	7.4	1.4	32.3	2.6	13.1	0.0
	生きる喜びや満足感	68.9	46.0	2.3	12.0	4.0	8.6	2.3
	人生観や価値観の形成	33.1	49.1	2.6	19.4	23.7	7.1	5.7
	生きる目標や目的	74.0	41.1	4.0	2.3	10.3	6.3	2.3
	自分自身の向上	18.6	70.9	5.1	12.3	25.1	5.1	2.6
	自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	20.9	74.6	4.6	4.9	13.1	11.4	3.1
	役に立っている、評価を得ていること	39.4	70.6	5.1	6.6	8.3	4.9	4.9
	平均	51.9	51.7	3.3	13.1	11.4	7.4	2.7
女性	生活の活力やはりあい	51.7	49.0	0.7	31.5	2.8	7.7	0.7
	心の安らぎや気晴らし	68.5	1.4	0.0	49.7	0.0	11.2	3.5
	生きる喜びや満足感	51.7	34.3	0.7	33.6	0.7	14.0	1.4
	人生観や価値観の形成	39.2	29.4	0.7	38.5	16.8	5.6	3.5
	生きる目標や目的	59.4	28.7	0.0	7.7	10.5	11.9	3.5
	自分自身の向上	12.6	54.5	2.1	21.0	18.2	7.7	4.2
	自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	15.4	60.8	0.7	2.1	18.2	9.8	9.8
	役に立っている、評価を得ていること	36.4	58.7	1.4	11.9	4.9	4.9	9.1
	平均	41.9	39.6	0.8	24.5	9.0	9.1	4.5

まず、男女の差を見ると、同じ「生きがいを持っている」群でも構成要素と取得の場の傾向が異なるようである。女性は「家庭」の選択傾向が低く、「個人的友人」が高い。これは女性サンプルに未婚者が多かったためでもあろうが、「仕事・会社」についても女性は低い。男性と比べ、「仕事・会社」との関係性に差異があることが考えられる。男女では生きがいの有無について傾向差があると同時に、同じ生きがいを持っているケースにおいてもその構造に違いがあるようである。そこで、男女それぞれにおいて4群を比較すると以下の表の通りである。

(表 6) 生きがい有無と生きがい構成要素取得の場

表 5 より抜粋(生きがい調査)

(%)

生きがい有無	取得の場 (平均値)					
	家庭		仕事・会社		どこにもない	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
持っている	54.3	46.6	46.0	36.7	0.9	1.3
前は持っていたが今は持っていない	46.3	37.7	35.1	31.9	4.1	4.5
持っていない	46.5	36.6	45.2	38.0	7.7	9.4
わからない	51.9	41.9	51.7	39.6	2.7	4.5

「持っている」群は「家庭」の選択傾向が高く、「前は持っていたが今は持っていない」「持っていない」群は低い。「わからない」群は両者の中間である。「家庭」の選択傾向の高さは生きがい有無に関係あるようである。次に「前は持っていたが今は持っていない」群は他3群に比べ「仕事・会社」の選択傾向が低い。「仕事・会社」の選択傾向は「わからない」群が一番高く、「持っている」「持っていない」群は同じくらいの高さでその次である。「仕事・会社」の選択傾向の低さは生きがい喪失には関係するようだが、選択傾向の高さが生きがい有無に直接にはつながらないようだ。

上記の表では生きがい構成要素取得の場の選択率の平均値を記載したが、この傾向は個々の構

成要素レベルで見てもほぼ当てはまる。

また、「持っていない」群は、「どこにもない」の選択傾向が高い。特に可能性の実現、役立ち・評価の2要素においては男女とも10～20%の高率を示している。

「どこにもない」は、「前は持っていたが今は持っていない」「わからない」「持っている」の順に選択傾向は低くなる。「どこにもない」の選択傾向と生きがい有無との関係が窺える。

これらの点から、生きがい構成要素とその取得の場との関係が生きがいの有無に関係しているのではないかと予測される。生きがい構成要素と取得の場がうまく機能しているかどうかの評価が生きがい有無に影響しているのではないかということである。

③年齢推移との関係

ところで、いま1つの傾向である年齢とともに生きがいを持っている人が増えるとはどういうことであろうか。従来、定年退職し仕事の間を失うことが、生きがい喪失につながるのではないかと言われてきた。定年後、仕事に変えて他の生きがいを見出した人は生きがいを持つことができることも説明される。

それでは、生きがい有無と年齢推移との関係を見ていきたい。ここでは生きがいが高い男性サンプルを例に見ていく。以下の表で見る限り、生きがいを持っている割合は年齢推移とともに増えている。

(表7) 生きがい有無(男性、生きがい調査第3回) (%)

生きがい有無	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	全体
持っている	58.6	61.0	71.8	81.8	69.2
前は持っていたが今は持っていない	4.6	6.6	7.7	8.4	7.0
持っていない	12.8	11.7	5.2	2.9	7.7
わからない	23.0	19.7	14.1	5.1	14.8

次に、個々人が年齢推移とともに自身の生きがい度の変化をどう感じているかについてを見ていきたい。生きがい調査では、この10年間の生きがい度の変化をどう感じているかを聞く質問がある。その中で生活全般における生きがい度の変化を聞いているが、「上がってきた」と感じている人が全年齢層を通じコンスタントに多い。次に多いのが「変わらない」である。どう変わらないのかといえば中水準、高水準で変わらないと感じており、低水準は極めて稀である。「上がったたり下がったり不安定」は若年層では一定数いるが年齢推移とともに減る。「下がってきた」「どちらとも言えない」は少ない。

年齢推移との関係では、中もしくは高水準で変わらないと思う人が増え、高年齢層(65～74歳)においては、「上がっている」と感じている人とともに多数派を形成していることがわかる。個人の意識においても過去10年間を振り返り中・高水準の生きがい度を維持、あるいは、生きがい度が上がったと感じている人が高年齢層に多いわけである。

(表 8)生活全般における生きがい度の変化(男性、生きがい調査第3回) (%)

生きがい度	35～44 歳	45～54 歳	55～64 歳	65～74 歳	全体
上がってきた	35.2	28.0	30.0	27.5	29.9
下がってきた	8.9	15.5	12.0	13.1	12.6
不安定	28.2	20.9	17.9	12.6	19.3
変わらない	19.3	25.6	30.7	36.8	28.5
高水準	4.6	4.9	8.6	11.3	7.5
中	13.3	19.7	20.6	23.4	19.6
低	1.4	0.7	0.9	0.8	0.9
どちらとも言えない	7.2	8.3	6.8	5.9	7.0

では、生きがい構成要素の取得の場はどうか。家庭、仕事・会社等における各生きがい構成要素の取得の場としての選択率の平均値を年齢層別に見る。

(表 9)生きがい構成要素取得の場の選択率(平均)(男性、生きがい調査第3回) (%)

取得の場	35～44 歳	45～54 歳	55～64 歳	65～74 歳	全体
家庭	56.6	54.7	51.3	49.9	52.6
仕事・会社	58.1	57.5	49.1	23.4	45.9
地域・近隣	3.2	4.7	8.0	14.0	7.8
個人的友人	12.6	14.3	16.1	19.3	15.8
世間・社会	9.4	13.4	17.2	21.9	16.0
その他	6.9	6.8	6.6	8.0	7.1
どこにもない	2.0	1.8	2.0	2.0	1.9

年齢推移とともに仕事・会社が生きがい構成要素取得の場として選択される割合は減る。特に引退期である65～74歳層では当然ながら大きく減る(55～64歳層49.1%⇒65～74歳層23.4%)。それほど極端ではないが家庭も年齢推移とともに減る。代わって増えるのは世間・社会、地域・近隣である。しかし、その選択率は65～74歳層においても尚、仕事・会社の選択率を上回るものではない(仕事・会社23.4%に対し世間・社会21.9%、地域近隣14.0%)。にもかかわらず高年齢層で生きがいを持っているとする人が多いのはどういうことなのか。

このように見ていくと、生きがいについては、生活諸側面の場における生きがい構成要素と取得の場だけの関係では説明しきれない面もあるようだ。1つには、年齢が高くなるとともに日々の生活諸側面の関係だけではなく、自身の人生、ライフコースの意味の重要性が増し、そのことの価値に生きがいを感じるウェイトが高くなるとも考えられる。そのような意味付け、価値の一貫性が否定されることが起こればそれは生きがい喪失の危機となるであろうが、その価値体系が多面的な場を通じて、根太く、また複合的に形成されていれば多少の生活面の浮き沈みの中でも生きがいの維持につながるということが言えないか。振り返っての自分の人生の意味がどう感じられるか、それが有用な価値のあるものと感じられるかということ、時間の流れとともに蓄積される人生における自己実現、価値の充足が生きがいに関係しているということであろうか。ライフヒストリーの経過、意味の一貫性の長さとともにその価値は高くなり高齢者の生きがいが高いと考えることはできないか。

それでは、ここで生きがいの意味として重視するところを年齢層別に見ていきたい。「生きる喜びや満足感」「生きる目標や目的」は年齢推移とともに下がるが、内省的意味を重視する「自分自身の向上」「人生観や価値観の形成」の選択率は高年齢層(65～74歳)でも比較的高い水準を示す。また、有用的意味である「役立ち・評価」は年齢推移とともに顕著に上がる。年齢が高くな

るとともに、これら内省的意味、有意味のウエイトが高くなるようだ。ライフコース、人生の形成が満足のものか、それが有用な価値のあるものかへの関心が強くなっているとも言えよう。

(表 10) 生きがいの意味 年齢層別傾向(男性、生きがい調査第 3 回) (%)

生きがい構成要素	35～44 歳	45～54 歳	55～64 歳	65～74 歳	全体
生活の活力やはりあい	29.0	27.0	27.9	22.9	26.4
生活のリズムやメリハリ	5.6	7.3	12.4	13.4	10.1
心の安らぎや気晴らし	25.1	24.0	27.0	27.5	26.1
生きる喜びや満足感	43.9	41.0	38.5	38.4	40.2
人生観や価値観の形成	8.9	9.6	9.1	9.2	9.2
生きる目標や目的	23.8	20.2	15.5	12.1	17.5
自分自身の向上	17.0	17.0	16.2	18.8	17.4
自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる	26.5	31.1	28.8	27.5	28.6
役に立っている、評価を得ている	11.8	15.0	20.0	22.6	17.7

(4) 時代環境と生きがい

最後に生きがい傾向と時代との関係について見ていきたい。

生きがいを持っている割合が 3 回の調査で大きく変化したことは印象的である。1991 年の第 1 回調査では 66.2%、1996 年の第 2 回調査では 78.4%、そして、2001 年の第 3 回では 67.3%であった。

一方、生きがい構成要素と取得の場の関係については、時代により多少の変化はあるも全体の構造を変えるものではないとされた。

この点について生きがい調査では、生きがいの実態的側面である生きがい構成要素取得の場に時代影響が少なく、観念的側面と言える生きがいの有無に時代的影響が大きいと指摘している。どうやら、時代環境の変化はまず、意識面にあらわれ、生活実態である行動面に反映するには時間がかかるのかも知れない。

生きがい調査では、生きがい構成要素と取得の場がうまく機能しているかどうかの評価が生きがいの有無に影響すると指摘するが、その評価には、純然たる事実以外に生活面の将来の見通し、自身のライフコースの価値、継続性への見通しなどの予測、不安を通じた未来状況への評価なども織り込まれているのかも知れない。

(5) まとめ

生きがい調査では、「人は生活の場の変化にともない、心理的欲求、生きがいの意味、価値観等を変化させ生きがいの維持、再生を果たす」「生きがいとは心理的欲求と生活面の折り合いの中での調和、均衡の働きにより見出されるもの」(シニア開発機構 2002 年)と示唆されている。このような意味で、生活面の変化が生きがいに大きな影響を及ぼす点は本論においても確認した。

また、そのような中で形成されていく自身の人生、ライフコースの意味、価値の継続性に対する評価も生きがいに関係することが推測された。振り返っての人生の意味、価値への満足感が、特に高齢期の生きがいの高さに影響すると言うことである。

本論では「生きがい構成要素と取得の場がうまく機能しているかどうかの評価が生きがい有無に影響する」という知見を出発点としたが、詳しく見ると生きがい構成要素の取得には 2 つの面があるようである。1 つは生活諸側面という空間的な場での取得、もう 1 つはライフコース形成

という時間的積み上げの中での取得である。加齢とともに人生の重みが増すにつれ後者のウェイトが増すのではないかと思われる。そこで上記の知見に補足し、以下の仮説を提示したい。

生きがい構成要素と取得の場がうまく機能しているかどうかの評価が生きがいの有無に影響する

生きがい構成要素取得には2つの側面がある

- ①生活諸側面との関係での取得（空間的關係）
- ②ライフコース形成との関係での取得（時間的關係）

次節においてはこの仮説に基づき、生活諸側面と生きがいとの関係、ライフコース形成と生きがいとの関係を見ていくこととしたい。

2. 生活の諸側面、ライフコース形成と生きがい

以下では、「生活・就業スタイル調査」（2003年）の結果に基づき、生活の諸側面およびライフコース形成と生きがいとの関係を見ていきたい。当調査は35歳から69歳の男性就業者（退職者を含む）を対象としている。ここでは世代毎の差を追跡するため、5歳毎の年齢層別集計をベースに見ていく。また、時代環境による影響を確認するために必要に応じ3時点調査である「生きがい調査」の結果を参照する。

(1) 生活の諸側面の傾向

まず、個々人が生活面での諸要素（健康、時間、経済、家族、仕事、友人など）について、どの程度満足しているかを確認する。次に自由時間の有無とその過ごし方を見ることで生活諸側面における関心の持ち方を確認する。

① 生活諸側面の満足感

・満足感の傾向

問4（問番号は生活・就業スタイル調査票（本人用）のもの、以下同様）では個々人が生活の諸側面をどう評価しているかを聞いている。以下の表に示される生活諸側面の項目について、「十分に満たされている」「まあ満たされている」「どちらとも言えない」「どちらかといえばそう思わない」「まったくそう思わない」から1つを選んでもらった。

ここでは、満足感の尺度を作りその比較を行うこととした。肯定の回答である「十分に満たされている」は+2ポイント、「まあ満たされている」は+1ポイント、否定の回答である「どちらかといえばそう思わない」は-1ポイント、「まったくそう思わない」は-2ポイントを付与する。「どちらとも言えない」は0ポイントとする。それぞれの選択率に掛け合わせたものを合計し満足感の尺度とした。従って、プラスの数字は肯定の強さ、マイナスの数字は否定の強さを表す。

また項目毎に最も満足感の高い年齢層に○、最も満足感の低い年齢層に×を付記した。

(表 11)生活諸側面の満足感(生活・就業スタイル調査)

生活諸側面	35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	全体
健康	56.7	55.7	× 48.1	61.8	60.2	73.2	○ 75.7	61.9
時間的ゆとり	-31.7	×-38.9	-34.6	-29.0	1.8	51.4	○ 54.7	-2.6
経済的ゆとり	×-38.9	-24.9	-32.3	-17.7	11.1	11.8	○ 23.3	-9.8
精神的ゆとり	×-12.9	-10.9	-5.7	-9.2	21.4	○ 44.7	39.5	10.1
家族の理解・愛情	92.1	86.8	× 79.3	88.0	79.7	○ 94.9	81.1	86.1
友人・仲間	54.7	46.5	× 29.9	45.8	54.6	○ 66.3	59.8	51.7
熱中できる趣味	20.8	× 14.6	19.8	23.3	40.7	○ 57.5	46.9	32.2
仕事のほりあい	34.5	41.3	× 24.0	43.9	○ 46.3	38.9	40.1	38.1
社会的地位	3.0	16.3	15.7	20.6	○ 24.9	7.4	× 0.1	11.8
自然とのふれあい	×-33.1	-31.0	-32.1	-1.9	36.3	○ 54.5	45.9	5.5
近隣との交流	-45.4	-35.8	×-47.8	-30.7	-2.8	2.2	○ 11.0	-21.2
社会の役に立つこと	×-58.9	-48.9	-44.8	-42.9	-14.8	-27.7	○-14.5	-36.3

*項目ごとの最も満足感の高い年齢層を○、最も満足感の低い年齢層を×とした

満足感の基本的傾向は年齢が上がるにつれ高くなる。年齢層別に見ると、12項目のうち11までは45歳層までの時期に最低の評価を受け、12項目の全ては55歳層以降の時期に最高評価を受けている。

特に最低評価の項目が多かった年齢層は45歳層の5項目(健康、家族の理解・愛情、友人・仲間、仕事のほりあい、近隣との交流)、次いで35歳層の4項目(経済的ゆとり、精神的ゆとり、自然とのふれあい、社会の役に立つ)である。

逆に最高評価の項目が多かった年齢層は60歳層の5項目(精神的ゆとり、家族の理解・愛情、友人・仲間、熱中できる趣味、自然とのふれあい)、65歳層の5項目(健康、時間的ゆとり、経済的ゆとり、近隣との交流、社会の役に立つ)である。傾向が多少異なるのは「仕事のほりあい」「社会的地位」で、ともに55歳層で最高評価を示した。

総体的に60歳代の満足感が高い。「健康」などは客観的には衰えてくると思われるが、足るを知るということなのであろうか。その反面、ミドル層である45歳層の満足感が低いことが目立ち、仕事面、家庭面、プライベート面でのストレスが感じられる。

全年齢層を通じて満足感の高い項目の上位は固定している。1位「家族の理解・愛情」、2位「健康」、3位「友人・仲間」である。

下位もほぼ固定している。ほぼ全ての年齢層で最低は「社会の役に立つこと」、その次が「近隣との交流」である(例外は45歳層で両者が逆転していること、65歳層の2位が社会的地位になっていることのみ)。3番目は35歳層「経済的ゆとり」、40～55歳層「時間的ゆとり」、60歳層「社会的地位」、65歳層「近隣との交流」である。

項目毎の傾向を見ると「家族の理解・愛情」は45歳層、55歳層、65歳層で少し低くなるが相対的な水準は非常に高い。「健康」は年齢が上がるにつれ満足感が高くなる。「友人・仲間」は45歳層とその前後が低くなるが他の年齢層では比較的高いレベルで平準的に推移している。

「仕事のほりあい」は45歳層で一旦低くなるが50歳層でまた高くなる。「熱中できる趣味」は年齢推移とともに高くなる。「社会的地位」は50歳代までは年齢推移とともに高くなるが60歳代で急激に低くなる。仕事からの引退が影響しているようだ。

「精神的ゆとり」「自然とのふれあい」「時間的ゆとり」「経済的ゆとり」は若年齢層ほど低く年齢推移とともに高くなる。特に「時間的ゆとり」にその傾向が強い。

全体を通じ、最も満足度の低い「近隣との交流」「社会の役に立つこと」は年齢推移とともに高

くなるがその水準は依然低い。

・時代の影響

次に生きがい調査のデータより時代による変化を見ていきたい。生活・就業スタイル調査のサンプル（本人）が男性であるため、比較のため男性の傾向について見る。

「健康」「時間的ゆとり」「経済的ゆとり」「精神的ゆとり」「友人・仲間」「自然とのふれあい」は第1回から第2回で上がり、第3回で大きく下がった。第3回が最も低い。

「熱中できる趣味」も第1回から2回で上がるが第3回では同じくらい下がる。

「仕事のほりあい」「社会的地位」は回を追うごとに下がり第3回が最低となる。

「近隣との交流」「社会の役に立つこと」は常にマイナスであるが、回を追うごとに下がる。特に第2回から3回での下げが大きい。

唯一、一番満足感の高い「家族の理解・愛情」が同じくらいの水準で推移している。

生活の満足感には時代的影響が大きい。殆ど全ての項目で直近の第3回（2001年調査）が一番低い結果となっている。

（表 12）生活諸側面の満足感（男性、生きがい調査第1～3回）

生活諸側面	第1回（91年）	第2回（96年）	第3回（01年）
健康	75.3	79.1	67.6
時間的ゆとり	44.6	50.9	27.1
経済的ゆとり	33.0	34.4	27.3
精神的ゆとり	47.2	50.8	37.9
家族の理解・愛情	108.8	103.8	105.1
友人・仲間	69.1	72.9	64.2
熱中できる趣味	46.6	56.6	47.3
仕事のほりあい	53.8	49.8	39.6
社会的地位	30.9	29.2	26.0
自然とのふれあい	30.2	38.4	29.3
近隣との交流	-9.3	-14.4	-22.8
社会の役に立つこと	-14.8	-16.8	-34.5

*生きがい調査のデータをもとに満足感の尺度を計算

②自由時間の有無とその過ごし方

・自由時間の有無

問5では自由時間の有無を聞き、「十分にある」「まあまあ」「不十分である」「まったくない」から回答してもらった。

（表 13）自由時間の有無（生活・就業スタイル調査）

(%)

自由時間の有無	35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	全体
十分にある	2.9	4.7	3.3	5.6	13.9	27.6	23.4	11.9
まあまあ	33.8	31.0	37.2	42.1	46.3	49.3	58.4	42.6
不十分である	52.5	58.9	51.2	44.9	37.0	20.1	15.3	39.7
まったくない	7.9	5.4	7.4	5.6	2.8	2.2	1.5	4.7

年齢推移とともに「十分にある」「まあまあ」が増え、「不十分である」「まったくない」は減る。50歳層までは「不十分である」「まったくない」の割合が多いが、55歳層以降は「まあまあ」「十

分にある」が多くなる。年齢層による違いがはっきりしている。

・自由時間の過ごし方

次に、「十分にある」「まあまあ」「不十分である」と答えた人に対して自由時間の過ごし方を聞いた。以下の表に示される選択肢より3つまで答えてもらった。

当該年齢層で選択率の高い項目を明らかにするため年齢層毎（縦列）に選択率上位3位までの項目に順位（①～③）を記入した。また、当該項目の選択率が相対的に高い年齢層を明らかにするため項目毎（横列）に全体の傾向より選択率が高い年齢層を網掛けとした。

(表 14) 自由時間の過ごし方(生活・就業スタイル調査) (%)

自由時間の過ごし方	35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	全体
仕事仲間とのプライベートなつきあい	10.5	9.0	7.2	7.1	9.5	13.1	15.0	10.4
仕事に関する勉強や残務整理	12.9	27.0	18.9	14.1	17.1	9.2	6.8	14.9
テレビ・ゴロ寝やパチンコ、酒など	②39.5	②38.5	①43.2	①47.5	②37.1	26.2	20.3	①35.3
考えごとや瞑想	6.5	4.9	6.3	2.0	5.7	0.8	3.8	4.2
ひとりで趣味・スポーツ・学習など	25.0	③27.9	③33.3	②37.4	③33.3	②34.6	③29.3	③31.3
仲間と趣味・スポーツ・学習など	11.3	8.2	17.1	21.2	29.5	27.7	①34.6	21.5
パソコン通信やインターネットなど	③31.5	26.2	21.6	16.2	7.6	10.0	9.8	17.6
個人的な友人・仲間とのつきあい	20.2	12.3	9.9	11.1	18.1	26.9	26.3	18.3
行楽・ドライブなど	21.8	22.1	15.3	17.2	30.5	③33.8	27.1	24.3
庭いじりや家事など家庭内のこと	18.5	16.4	20.7	③33.3	①39.0	①40.8	②33.1	28.8
家族との団らんや家庭サービス	①53.2	①54.9	②40.5	31.3	24.8	13.1	19.5	②33.7
近隣の人とのつきあいや地域の用事	3.2	2.5	3.6	6.1	9.5	13.8	11.3	7.3
ボランティアなどの社会活動	0.0	0.0	0.9	6.1	4.8	10.0	4.5	3.8
宗教活動・政治活動	0.8	3.3	4.5	1.0	1.0	1.5	3.0	2.2
その他	2.4	0.0	0.0	2.0	2.9	1.5	5.3	2.1
特に何もしない	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	0.6

*各年齢層の選択率上位3位までの順位を記入（①～③）、項目毎に選択率が全体より高い年齢層を網掛けした。

まず、全体の傾向を見ると、3つまでの多重回答であるが、選択率が最大の「テレビ・ゴロ寝、パチンコ、酒」でも35.3%である。それ以外で選択率の比較的大きいものは「家族との団らんや家庭サービス」(33.7%)、「ひとりで趣味・スポーツ・学習」(31.3%)、「庭いじりや家事など家庭内のこと」(28.8%)、「行楽・ドライブなど」(24.3%)である。

次に年齢層別の傾向を見る。上記の表をもとに各年齢層の選択率1～3位、また、それ以外の項目を含め特徴的な事柄をまとめると次の表の通りとなる。

(表 15) 年齢層別選択傾向 表 14 をもとに作成

	1位	2位	3位	その他
35歳～	家族との団らん (53.2%)	テレビ・ゴロ寝 (39.5%)	パソコン通信 (31.5%)	「個人的な友人」が比較的高い
40歳～	家族との団らん (54.9%)	テレビ・ゴロ寝 (38.5%)	ひとりで趣味 (27.9%)	「パソコン通信」も依然高い 「仕事に関する勉強」が増える 「個人的な友人」が減る
45歳～	テレビ・ゴロ寝 (43.2%)	家族との団らん (40.5%)	ひとりで趣味 (33.3%)	「家族との団らん」が減る 「パソコン通信」「仕事に関する勉強」 が比較的高い 「個人的な友人」「行楽・ドライブ」が 減る
50歳～	テレビ・ゴロ寝 (47.5%)	ひとりで趣味 (37.4%)	庭いじりや家事 (33.3%)	「家族との団らん」「パソコン通信」 「仕事に関する勉強」が減る 「ボランティアなど」が増える
55歳～	庭いじりや家事 (39.0%)	テレビ・ゴロ寝 (37.1%)	ひとりで趣味 (33.3%)	「行楽・ドライブ」「仲間と趣味」「近隣 の人とのつきあい」が増える 「仕事に関する勉強」が比較的高い
60歳～	庭いじりや家事 (40.8%)	ひとりで趣味 (34.6%)	行楽・ドライブ (33.8%)	「テレビ・ゴロ寝」「仕事に関する勉強」 は減る 「仲間と趣味」「個人的友人」は増える 「近隣の人とのつきあい」「ボランティ アなど」「仕事仲間とのプライベートな つきあい」が増える
65歳～	仲間と趣味 (34.6%)	庭いじりや家事 (33.1%)	ひとりで趣味 (29.3%)	「個人的な友人」「行楽・ドライブ」が 高い 「ボランティアなど」が減る

年齢横断的に見ると 35 歳層から 55 歳層にかけてミドルを中心に「テレビ・ゴロ寝」の選択率が高い。また、40、45 歳層では「仕事に関する勉強」が比較的高い。同じ家庭のことであるが「家族との団らん」が低年齢層で高く、「庭いじりや家事」が高年齢層で高いことは興味深い。「ひとりで趣味」はどの年齢層を通じても選択率が高い。「パソコン通信」は 35～45 歳層で高く世代的なものを感じさせる。

「行楽・ドライブなど」は 45、50 歳層で低く、55 歳層以降でまた高くなる。「仲間との趣味」は年齢推移とともに高くなる。「個人的友人」は 40～55 歳層で低くなるが、60 歳層以降でまた高くなる。

「仕事仲間とのプライベートなつきあい」は 60、65 歳層が高いことが興味深い。「近隣の人とのつきあい」は年齢が上がるとともに高くなる。「考えごとや瞑想」は若年齢層が比較的高い。「ボランティア」は 35～45 歳層で殆どなく 50 歳層以降で増える。「宗教活動」「その他」は平準的に少ない。

ところで、自由時間の過ごし方の傾向は、自由時間の状況（十分にある、まあまあ、不十分である）によって異なると考えられる。そこで「十分にある」「まあまあ」「不十分である」の別に集計を行なった。

(表 16) 自由時間の過ごし方—自由時間の状況別集計—(生活・就業スタイル調査)

順位	十分にある (%)	まあまあ (%)	不十分である (%)
1	庭いじりや家事 37.5	テレビ・ゴロ寝やパチンコ 37.0	家族との団らん 40.9
2	個人的友人 31.7	ひとりで趣味 33.2	テレビ・ゴロ寝やパチンコ 35.4
3	ひとりで趣味 28.8	家族との団らん 31.1	ひとりで趣味 30.0
4	テレビ・ゴロ寝やパチンコ* 28.8	庭いじりや家事 29.5	庭いじりや家事 25.4
5	仲間と趣味 26.0	仲間と趣味 28.7	仕事に関する勉強 23.1
6	行楽・ドライブ* 26.0	行楽・ドライブ 26.3	パソコン通信 21.9
7	家族との団らん 19.2	個人的友人 19.3	行楽・ドライブ 21.6

*「テレビ・ゴロ寝やパチンコ」は同率3位、「行楽・ドライブ」は同率5位。

自由時間の状況は年齢により大きく異なり（高年齢層では「十分にある」が多く、低年齢層に「不十分である」が多い）、年齢層別の傾向の差の一つには自由時間の状況の差によるものと考えられる。自由時間が少ない場合、「家族との団らん」「テレビ・ゴロ寝やパチンコ」などコミュニケーション的なもの、気分転換的なものが高率となるが、自由時間が増えるとともに活動、対象範囲が広がるようだ。

・時代の影響

生きがい調査のデータより時代による変化を見る。自由時間は「十分にある」「まあまあ」とも第1回から2回で増えている。しかし第2回から3回で減っている。「不十分」「まったくない」はこの逆の傾向である。ただし、1回と3回を比較すると3回の方が時間的余裕はある。

(表 17) 自由時間の有無(男性、生きがい調査第1～3回) (%)

自由時間の有無	第1回(91年)	第2回(96年)	第3回(01年)
十分にある	18.7	23.3	19.2
まあまあ	41.0	48.1	44.7
不十分である	34.2	26.5	32.4
まったくない	4.8	1.3	2.2

自由時間の過ごし方を見ると「仕事仲間とのプライベートなつきあい」(第1回 20.4%⇒第2回 10.3%)、「仕事に関する勉強」(第1回 18.4%⇒第2回 12.6%)、「テレビ・ゴロ寝」(第1回 47.1%⇒第2回 34.5%)は第1回から2回で大きく減った。

「仲間との趣味」(第1回 16.1%⇒第2回 29.1%)「行楽・ドライブなど」(第1回 12.0%⇒第2回 29.7%)は第1回から2回で大きく増えた。

「庭いじりや家事など家庭内のこと」(30.0⇒36.6⇒33.6%)、「家族との団らんや家庭サービス」(37.0⇒35.3⇒34.0%)は3回を通じて比較的高い水準を維持している。「個人的友人」(17.5⇒20.7⇒18.2%)もあまり変わらない。

「パソコン通信やインターネット」(第2回 3.1%⇒第3回 14.0%)は2回目から追加したもののだが、第3回で大きく増えている。「近隣の人とのつきあい」(5.6⇒7.1⇒6.3%)、「ボランティア」(3.5⇒4.4⇒3.8%)は3回を通じて水準が低い。

その他、選択率の低い項目を見ると、「考えごとや瞑想」は第1回から2回で減る(6.4⇒3.1%)。「宗教活動」(1.6⇒1.7⇒1.8%)、「その他」(2.5⇒2.8⇒3.1%)、「特に何ものなし」(1.7⇒0.4⇒0.7%)は3回を通じてきわめて低い水準で推移する。

増減を問わず、概ね第1回から2回の変化が大きく、2回から3回では大きな変化はない。

(表 18)自由時間の過ごし方(男性、生きがい調査第 1~3 回) (%)

自由時間の過ごし方	第 1 回 (91 年)	第 2 回 (96 年)	第 3 回 (01 年)
仕事仲間とのプライベートなつきあい	20.4	10.3	10.0
仕事に関する勉強や残務整理	18.4	12.6	13.5
テレビ・ゴロ寝やパチンコ、酒など	47.1	34.5	34.7
考えごとや瞑想	6.4	3.1	3.0
ひとりで趣味・スポーツ・学習など	32.4	31.6	30.6
仲間と趣味・スポーツ・学習など	16.1	29.1	30.6
パソコン通信やインターネットなど *	—	3.1	14.0
個人的な友人・仲間とのつきあい	17.5	20.7	18.2
行楽・ドライブなど	12.0	29.7	29.5
庭いじりや家事など家庭内のこと	30.0	36.6	33.6
家族との団らんや家庭サービス	37.0	35.3	34.0
近隣の人とのつきあいや地域の行事	5.6	7.1	6.3
ボランティアなどの社会活動	3.5	4.4	3.8
宗教活動・政治活動	1.6	1.7	1.8
その他	2.5	2.8	3.1
特に何もなし	1.7	0.4	0.7

* 「パソコン通信やインターネットなど」は第 2 回調査より追加した。

(2) ライフコース形成の傾向

ここでは、ライフコース形成において、仕事面のみでなく生活面全体の大きな転機となる定年に対する意識、また、定年退職、あるいは定年前の退職を契機に仕事面の設計をどうしたいと思っているか、どうなると思っているかを中心に見る。

① 定年について

問 27 では定年退職前の人に今の会社に定年まで勤めたいと思っているかを聞いている。高年齢層で無回答が多いのは既に定年退職した人が増えるためである。年齢層別傾向を見ると 35 歳層、次いで 45 歳層で「定年前に退職したい」が多いことが目立つ。若年齢層、特にキャリアの転換期において定年前に退職する希望が強いようだ。

(表 19)今の会社に定年まで勤めたいと思うか(生活・就業スタイル調査) (%)

	35 歳～	40 歳～	45 歳～	50 歳～	55 歳～	60 歳～	65 歳～	全体
定年まで勤めたい	61.9	76.7	71.1	76.6	74.1	14.9	8.0	53.0
定年前に退職したい	34.5	18.6	22.3	16.8	6.5	0.7	2.2	14.6
無回答	3.6	4.7	6.6	6.5	19.4	84.3	89.8	32.3

② (定年)退職後の仕事

次に定年退職後または定年前の退職後の仕事をどう考えているかを見ていきたい。

問 29 では定年退職後または定年前の退職後の仕事をどのようにしたいか(既に退職した人についてはどのようにしたかったか)を聞いている。また、問 30 は、それでは実際に定年退職後または定年前の退職後の仕事はどのようになると思うかを聞いている。すなわち問 29 で希望を聞き、問 30 では実際にどうなるかの予測(定年退職した人については実際にどうなったか)を聞く。ともに 1 つだけの選択である。

それぞれについて年齢層別の傾向をまとめると以下の表の通りである。当該年齢層で選択率の高い項目を明らかにするため年齢層毎(縦列)に選択率上位 3 位までの項目に順位(①~③)を記入した。また、当該項目の選択率が相対的に高い年齢層を明らかにするため項目毎(横列)に

全体の傾向より選択率が高い年齢層を網掛けとした。

(表 20) (定年)退職後の仕事 希望と実際(生活・就業スタイル調査) (%)

		35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	全体
退職とともに職業生活から引退したい(する)	希望	②18.0	②17.8	②18.2	①17.8	13.9	③11.2	10.2	③15.2
	実際	②18.7	14.7	③14.9	③15.0	12.0	③16.4	③14.6	③15.3
	差	-0.7	3.1	3.3	2.8	1.9	-5.2	-4.4	-0.1
退職後も再雇用や勤務延長により今の会社に勤めたい	希望	12.2	①18.6	9.9	②16.8	①23.1	①30.6	①24.1	①19.4
	実際	7.9	①20.2	12.4	①16.8	①22.2	①24.6	②22.6	②18.1
	差	4.3	-1.6	-2.5	0.0	0.9	6.0	1.5	1.3
退職後は出向先に移籍したい(する)	希望	1.4	2.3	1.7	0.9	2.8	4.5	2.2	2.3
	実際	3.6	4.7	1.7	0.9	1.9	6.0	5.1	3.5
	差	-2.2	-2.4	0.0	0.0	0.9	-1.5	-2.9	-1.2
退職後は別の企業に再就職したい(する)	希望	13.7	11.6	②18.2	11.2	②15.7	②15.7	①24.1	②15.9
	実際	③18.0	③15.5	①19.0	②15.9	②19.4	②23.9	①29.2	①20.3
	差	-4.3	-3.9	-0.8	-4.7	-3.7	-8.2	-5.1	-4.4
退職後は自分で事業や商売を始めたい(始める)	希望	①21.6	③12.4	①20.7	13.1	③14.8	10.4	7.3	14.3
	実際	13.7	10.1	②18.2	10.3	③13.9	4.5	5.8	10.7
	差	7.9	2.3	2.5	2.8	0.9	5.9	1.5	3.6
退職後は家業を手伝いたい(手伝う)	希望	3.6	1.6	0.0	1.9	0.9	0.7	0.0	1.3
	実際	3.6	0.8	0.8	2.8	0.9	0.7	0.7	1.5
	差	0.0	0.8	-0.8	-0.9	0.0	0.0	-0.7	-0.2
退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事がしたい(する)	希望	8.6	10.9	12.4	13.1	11.1	10.4	③13.1	11.3
	実際	6.5	7.8	11.6	9.3	9.3	8.2	7.3	8.5
	差	2.1	3.1	0.8	3.8	1.8	2.2	5.8	2.8
退職後はNPO・NGOやボランティア団体で働きたい(働く)	希望	4.3	10.1	5.8	③14.0	11.1	9.0	4.4	8.1
	実際	2.2	4.7	5.0	8.4	7.4	6.0	2.2	4.9
	差	2.1	5.4	0.8	5.6	3.7	3.0	2.2	3.2
その他	希望	0.0	0.0	1.7	1.9	1.9	1.5	5.1	1.7
	実際	0.0	0.8	1.7	1.9	1.9	4.5	5.8	2.4
	差	0.0	-0.8	0.0	0.0	0.0	-3.0	-0.7	-0.7
わからない・考えたことがない	希望	③15.1	12.4	8.3	5.6	1.9	1.5	8.0	7.8
	実際	①24.5	②17.8	9.9	12.1	8.3	1.5	2.9	11.1
	差	-9.4	-5.4	-1.6	-6.5	-6.4	0.0	5.1	-3.3

* 希望=問 29 の回答、実際=問 30 の回答、差=希望-実際

* 各年齢層の選択率上位3位までの順位を記入(①～③)、項目毎に選択率が全体より高い年齢層を網掛けした。

全体の傾向を見ると、「退職後の仕事をどのようにしたいか(したかったか)」(以下、希望)、「実際に定年退職後(定年前の退職後)に仕事のしかたはどのようになると思うか(なったか)」(以下、実際)の上位3位迄は、ともに「再雇用や勤務延長により今の会社に勤めたい(勤める)」(希望 19.4%、実際 18.1%)、「別の企業に再就職したい(する)」(希望 15.9%、実際 20.3%)、「退職とともに職業生活から引退したい(する)」(希望 15.2%、実際 15.3%)である。以下、「自分で事業や商売を始めたい(始める)」(希望 14.3%、実際 10.7%)、「シルバー人材センターなどで簡単な仕事がしたい(する)」(希望 11.3%、実際 8.5%)が続く。若年齢層を中心に「わからない・考えたことがない」(希望 7.8%、実際 11.1%)も多い。

希望と実際の差を見ると、「自分で事業や商売を始める」(希望 14.3%⇔実際 10.7%)、「シルバー人材センターなどで簡単な仕事」(希望 11.3%⇔実際 8.5%)、「NPO・NGOやボランティア団体」(希望 8.1%⇔実際 4.9%)では希望より実際の選択率が低い。一方、「退職後は別の企業に再就職」(希望 15.9%⇔実際 20.3%)、「わからない・考えたことがない」(希望 7.8%⇔実際 11.1%)では逆に、希望より実際の選択率が高い。

次に年齢層別の傾向を見る。表 20 をもとに各年齢層の選択率 1～3 位、それ以外の項目を含め特徴的な事柄をまとめると以下の表の通りとなる。

(表 21) 年齢層別選択傾向 表 20 をもとに作成

		1 位	2 位	3 位	その他
35 歳～	希望	事業・商売	引退	わからない	希望で 1 位の「事業・商売」は実際では 4 位
	実際	わからない	引退	別企業に再就職	
40 歳～	希望	再雇用・勤務延長	引退	事業・商売	実際に 3 位の「別企業に再就職」は希望では 5 位 「引退」の実際は減る
	実際	再雇用・勤務延長	わからない	別企業に再就職	
45 歳～	希望	事業・商売	引退	別企業に再就職	「別企業に再就職」の実際と希望の乖離が小さくなる 「シルバー人材センターなど」が増える 「わからない」は減る
	実際	別企業に再就職	事業・商売	引退	
50 歳～	希望	引退	再雇用・勤務延長	NPO・NGO やボランティア団体	「NPO・NGO やボランティア団体」「シルバー人材センターなど」が希望、実際とも高い
	実際	再雇用・勤務延長	別企業に再就職	引退	
55 歳～	希望	再雇用・勤務延長	別企業に再就職	事業・商売	希望と実際の一致度が高い 「NPO・NGO やボランティア団体」「シルバー人材センターなど」が希望、実際とも引続き高い
	実際	再雇用・勤務延長	別企業に再就職	事業・商売	
60 歳～	希望	再雇用・勤務延長	別企業に再就職	引退	希望と実際の一致度が高い
	実際	再雇用・勤務延長	別企業に再就職	引退	
65 歳～	希望	別企業に再就職	再雇用・勤務延長	シルバー人材センターなど	
	実際	別企業に再就職	再雇用・勤務延長	引退	

年齢横断的に見ると「引退」は若年齢層での希望は高いが、高年齢層ではそうではなく希望より実際そうなった割合の方が高い。「今の会社での再雇用・勤務延長」は 50 歳層以降で希望も実際も高いが若年齢層の選択率は低い。「別の企業に再就職」も高年齢層に高いが、こちらも希望より実際が高い。希望はしないが実際はそうなるということである。

「自分で事業や商売を始めたい」と希望するのは 35 歳層が高い。次いで 45 歳層、55 歳層が高く断続的である。キャリアの転換期に高くなるということであろうか。35 歳層では希望と実際の乖離が大きい、その差は年齢とともに小さくなり、55 歳層においてほぼなくなる。年齢が高くなるにつれ実現に向けての準備が進んでいるということであろう。ちなみに、この項目は全体傾向でも希望に比べ実際が低い。実現のためには周知な準備を要するようだ。

「シルバー人材センターなどで簡単な仕事」「NPO・NGO やボランティア活動」は 45～55 歳層で希望、実際ともに高い。これらの項目も全体傾向では希望に比べ実際が小さい。希望するほどには実現できないようだ。

「わからない」は 35、40 歳層で多いが、実際については 45～55 歳層でも少なくない。この項目は全体傾向でも希望より実際が高く、その差が 1 番大きい項目である。

・時代の影響

次に生きがい調査のデータより時代による変化を見たい。当調査では、同種の質問を退職前の人と、定年退職または定年前の退職を経験した人に別の質問項目で行なっている。従ってここでは両者の別に確認したい。サンプルの構成は以下の通りである。退職前の人は若年齢層、退職経験した人は高年齢層が中心である。

(表 22) (定年)退職後の仕事 希望と実際—サンプル構成—

(男性、生きがい調査第 1～3 回)

(人)

	属性	総数				
			35～44 歳	45～54 歳	55～64 歳	65～74 歳
第 1 回	退職前	1426	518	558	314	25
	退職経験	879	0	8	365	479
第 2 回	退職前	1406	460	511	329	60
	退職経験	869	0	4	307	532
第 3 回	退職前	1421	479	561	343	29
	退職経験	950	4	14	316	598

生きがい調査では、退職前の人には「定年退職後または定年前の退職後に仕事をどのようにしたいと思いますか」(希望)、「それでは実際に定年退職後(または定年前の退職)の後、あなたの仕事のしかたはどのようになると思いますか」(実際)という質問、退職経験した人には「定年後・退職後に仕事につきましたか」(実際)、「あなたが 50 歳の頃に定年後の仕事をどのようにしたいと思っていましたか」(希望)という質問をしている。ちなみに第 1 回では退職前の人には希望についての質問、退職経験した人には実際についての質問しかしていない。厳密には生活・就業スタイル調査と質問形式が異なるがおおよその時代変化を把握する分には支障ないと考え、以下、3 時点の傾向変化を見たい。また、選択肢において「退職後は NPO・NGO やボランティア団体で働きたい」がないが、選択率の高い項目の傾向は概ね生活・就業スタイル調査の結果と同じである。

退職経験した人では第 1 回(91 年)から 2 回(96 年)の実際面の変化が目立つ。「引退」(第 1 回 16.0%⇒第 2 回 22.3%)が増え、「再雇用・勤務延長」(同 21.7%⇒18.0%)、「別企業に再就職」(同 34.5%⇒29.6%)が減った。次に第 2 回から 3 回(01 年)の変化を見ると実際面における「引退」(第 2 回 22.3%⇒第 3 回 25.5%)は引き続き増え、「再雇用・勤務延長」(同 18.0%⇒16.2%)、「別企業に再就職」(同 29.9%⇒28.3%)は引き続き減っている。希望についても第 2 回から 3 回で「引退」は増え、「再雇用・勤務延長」「別企業に再就職」は減った。

一方、退職前の人では第 1 回から 2 回で「再雇用・勤務延長」の希望(第 1 回 15.7%⇒第 2 回 18.7%)が増えた。また、第 2 回から 3 回では「引退」「事業や商売」の希望が少し増えている。

希望と実際の乖離は、退職経験を問わず「再雇用・勤務延長」が第 2 回(退職前の人:希望 18.7%⇔実際 13.3%、退職経験した人:同 22.2%⇔18.0%)を中心に大きく、希望が実際を上回る。「事業や商売」も 2、3 回とも希望が実際を上回り、特に退職前の人(第 2 回希望 11.7%⇔実際 7.4%、第 3 回同 13.8%⇔8.9%)にその傾向が強い。また、「わからない」の実際が希望を大きく上回り、第 2 回(希望 12.7%⇔実際 20.4%)より第 3 回(同 10.6%⇔20.1%)でこの傾向は強くなる。

一方、退職経験した人では「別企業に再就職」「出向先に移籍」が第 2、3 回と実際が希望を上回る(「別企業に再就職」第 2 回希望 23.4%⇔実際 29.6%、第 3 回同 21.4%⇔28.3%、「出向先に移籍」第 2 回希望 8.2%⇔実際 12.2%、第 3 回同 10.8%⇔15.4%)。

(表 23) 仕事のやり方 希望と実際(男性、生きがい調査第1~3回) (%)

		退職前の人			(定年)退職経験した人		
		第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回
退職とともに職業生活から引退したい(する)	希望	20.5	20.9	23.2	—	20.0	24.2
	実際	—	21.8	21.2	16.0	22.3	25.5
	差	—	-0.9	2.0	—	-2.3	-1.3
退職後も再雇用や勤務延長により今の会社に勤めたい	希望	15.7	18.7	17.1	—	22.2	18.9
	実際	—	13.3	14.5	21.7	18.0	16.2
	差	—	5.4	2.6	—	4.2	2.7
退職後は出向先に移籍したい(する)	希望	3.8	3.3	3.4	—	8.2	10.8
	実際	—	4.3	5.5	12.3	12.2	15.4
	差	—	-1.0	-2.1	—	-4.0	-4.6
退職後は別の企業に再就職したい(する)	希望	18.7	18.1	16.3	—	23.4	21.4
	実際	—	19.6	17.0	34.5	29.6	28.3
	差	—	-1.5	-0.7	—	-6.2	-6.9
退職後は自分で事業や商売を始めたい(始める)	希望	16.3	11.7	13.8	—	7.0	6.2
	実際	—	7.4	8.9	3.6	4.3	3.7
	差	—	4.3	4.9	—	2.7	2.5
退職後は家業を手伝いたい(手伝う)	希望	1.1	0.9	1.1	—	0.8	0.7
	実際	—	1.1	1.5	1.5	1.7	0.8
	差	—	-0.2	-0.4	—	-0.9	-0.1
退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事がしたい(する)	希望	8.3	9.0	11.3	—	3.5	3.5
	実際	—	7.0	8.3	1.4	2.3	2.8
	差	—	2.0	3.0	—	1.2	0.7
その他	希望	1.9	2.5	1.9	—	1.8	2.1
	実際	—	1.6	1.3	3.4	5.4	6.1
	差	—	0.9	0.6	—	-3.6	-4.0
わからない・考えたことがな	希望	12.3	12.7	10.6	—	10.4	11.2
	実際	—	20.4	20.1	—	—	—
	差	—	-7.7	-9.5	—	—	—

*—は当該回の調査においてとっていない項目である。

(3) 生活諸側面・ライフコース形成と生きがいとの関係

以上で述べた生活諸側面とライフコース形成の傾向と生きがいとの関係を見ていきたい。始めに「生活・就業スタイル調査」における生きがい関係の項目についてその傾向を確認する。それを踏まえ、生活諸側面の事柄、ライフコース形成との関係を見る。

① 生きがいの傾向の確認

以下、生きがい構成要素と取得の場、生きがいの意味、生きがいの有無の順に見ていく。

- 生きがい構成要素と取得の場

問6では各生きがい構成要素について、取得の場を2つまで選んでもらった。質問形式は生きがい調査と同じであるが、取得の場の選択肢とし「一人にいるとき」が追加された。

(表 24) 生きがい構成要素と取得の場(生活・就業スタイル調査) (%)

生きがい構成要素	取得の場							
	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	一人である	その他	どこにもない
生活の活力やはりあい	73.5	47.9	4.2	16.3	3.7	7.7	4.2	0.8
生活のリズムやメリハリ	44.9	62.9	5.4	10.5	8.3	12.0	3.7	0.7
心の安らぎや気晴らし	74.2	5.1	5.6	23.2	1.6	35.0	7.0	0.5
生きる喜びや満足感	68.6	38.4	4.7	17.8	4.2	10.9	5.4	0.6
人生観や価値観の形成	34.7	45.1	6.4	27.2	27.9	2.3	5.3	2.9
生きる目標や目的	73.8	38.3	4.7	5.0	14.6	4.8	5.5	1.1
自分自身の向上	22.9	65.5	7.2	11.8	28.5	7.1	5.5	2.2
自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	18.6	73.1	7.8	5.1	17.5	8.2	6.6	2.3
役に立っている、評価を得ていること	35.7	74.5	11.2	6.2	13.3	0.9	3.3	3.1
平均	49.7	50.1	6.4	13.7	13.3	9.9	5.2	1.6

全体の傾向は概ね生きがい調査の結果と同じであるが、選択肢に追加された「一人であるとき」は、心の安らぎ(35.0%)、生活のリズムやメリハリ(12.0%)、生きる喜びや満足(10.9%)、自分の可能性の実現(8.2%)において比較的高い選択率を示している。

次に年齢層別に、取得の場ごとの選択率の平均を見る。年齢層毎(縦列)に選択率上位3位までの項目に順位(①~③)を記入、項目毎(横列)に全体の傾向より選択率が高い年齢層を網掛けとした。

(表 25) 生きがい構成要素取得の場 年齢層別平均((生活・就業スタイル調査) (%)

生きがい構成要素 取得の場	35歳~	40歳~	45歳~	50歳~	55歳~	60歳~	65歳~	全体
家庭	②51.0	②53.9	②50.7	②50.5	②50.9	①47.3	①44.0	②49.7
仕事・会社	①54.4	①59.1	①56.0	①51.9	①57.3	②41.0	②33.8	①50.1
地域・近隣	3.0	3.1	4.0	7.8	7.6	9.0	10.2	6.4
個人的友人	③14.8	③14.1	12.2	11.4	13.3	14.5	14.8	③13.7
世間・社会	9.0	11.6	③12.4	③13.3	③16.4	③15.3	③15.6	13.3
一人であるとき	10.1	11.5	9.6	11.9	8.6	9.6	8.1	9.9
その他	4.2	4.2	6.1	7.5	4.8	4.6	5.2	5.2
どこにもない	2.0	1.4	1.3	0.9	0.7	2.2	2.0	1.6

*各年齢層の選択率上位3位までの順位を記入(①~③)、項目毎に選択率が全体より高い年齢層を網掛けした。

年齢横断的に見ると、主要な場である「家庭」「仕事・会社」はともに60歳代が低い。「地域・近隣」「世間・社会」は年齢が上がるにつれ高くなる。しかし「家庭」「仕事・会社」の低下を補うほどの伸びではない。「個人的友人」は45歳層、50歳層で少し低いが、だいたい平準的に推移する。「一人であるとき」は低年齢層で比較的高い。各年齢層の選択率1~3位、それ以外の項目を含め特徴的な事柄をまとめると次の表の通りである。

(表 26) 年齢層別選択傾向 表 25 をもとに作成

	1位	2位	3位	その他
35歳～	仕事・会社	家庭	個人的友人	「一人でいるとき」が高い 「どこにもない」も相対的に高い
40歳～	仕事・会社	家庭	個人的友人	「一人でいるとき」が依然高い
45歳～	仕事・会社	家庭	世間・社会	「その他」が増える 「個人的友人」が少し減る
50歳～	仕事・会社	家庭	世間・社会	「一人でいるとき」「地域・近隣」「その他」が増える 「仕事・会社」が少し減る
55歳～	仕事・会社	家庭	世間・社会	「仕事・会社」が少し増える 「世間・社会」「個人的友人」が増える
60歳～	家庭	仕事・会社	世間・社会	「仕事・会社」が大きく減る「家庭」が少し減る 「地域・近隣」「個人的友人」が増える 「どこにもない」が相対的に高い
65歳～	家庭	仕事・会社	世間・社会	「仕事・会社」「家庭」が更に減る

・生きがいの意味

問 7 では生きがい構成要素のうち、生きがいを表すのに最も適当だと思うものを二つまで選んでもらった。表 25 と同じく年齢層毎（縦列）に選択率上位 3 位までの項目に順位（①～③）を記入、項目毎（横列）に全体の傾向より選択率が高い年齢層を網掛けとした。

(表 27) 生きがいの意味として重視する要素(生活・就業スタイル調査) (%)

生きがい構成要素	35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	全体
生活の活力やはりあい	16.5	18.6	23.1	21.5	12.0	③25.4	②28.5	21.0
生活のリズムやメリハリ	5.0	4.7	2.5	9.3	8.3	9.7	13.1	7.5
心の安らぎや気晴らし	18.0	21.7	14.0	18.7	21.3	17.9	20.4	18.9
生きる喜びや満足感	①48.2	①44.2	①43.0	①38.3	②32.4	①36.6	①39.4	①40.6
人生観や価値観の形成	10.8	8.5	9.9	10.3	19.4	8.2	5.8	10.2
生きる目標や目的	②33.8	③29.5	③30.6	③29.0	③21.3	13.4	17.5	③24.9
自分自身の向上	19.4	17.1	15.7	16.8	7.4	24.6	15.3	16.9
自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	③30.2	②31.0	②38.8	②30.8	①44.4	②30.6	②28.5	②33.1
役に立っている、評価を得ていること	5.8	11.6	11.6	14.0	18.5	20.9	17.5	14.2

* 各年齢層の選択率上位 3 位までの順位を記入（①～③）、項目毎に選択率が全体より高い年齢層を網掛けした。

年齢横断的に見ると、「生活の活力やはりあい」「リズムやメリハリ」は年齢が上がるほど高い。「生きる喜びや満足感」「生きる目標や目的」は低年齢層で高く年齢が上がると低くなる。「心の安らぎや気晴らし」は 40 歳層、55 歳層、65 歳層が比較的高い。この時期にストレスフルな状況があるということであろうか。「人生観や価値観の形成」「可能性の実現」は 55 歳層が高い。「自分自身の向上」「役立ち・評価」は 60 歳層で高い。生きがい調査では「生活の活力やはりあい」は年齢とともに下がる傾向、「心の安らぎや気晴らし」は年齢とともに上がる傾向が見られたが、この点が異なる。

各年齢層の選択率 1～3 位、それ以外の項目を含め特徴的な事柄をまとめると表 28 の通りとなる。

(表 28) 年齢層別選択傾向 表 27 に基づき作成

	1位	2位	3位	その他
35歳～	喜びや満足感	目標や目的	可能性の実現	「自分自身の向上」「人生観や価値観の形成」が高い
40歳～	喜びや満足感	可能性の実現	目標や目的	「心の安らぎ」「自分自身の向上」が相対的に高い
45歳～	喜びや満足感	可能性の実現	目標や目的	「生活の活力」が高い
50歳～	喜びや満足感	可能性の実現	目標や目的	「生活の活力」が高い 「人生観や価値観の形成」「リズムやメリハリ」が相対的に高い 「喜びや満足感」が下がり始める
55歳～	可能性の実現	喜びや満足感	目標や目的	「役に立っている」が高い 「心の安らぎ」が高い 目標や目的が下がり始める
60歳～	喜びや満足感	可能性の実現	生活の活力	「生活の活力」「自分自身の向上」「役に立っている」が高い
65歳～	喜びや満足感	可能性の実現	生活の活力	「心の安らぎ」「役に立っている」「リズムやメリハリ」が高い

・生きがいの有無

次にそのような生きがいについて「持っている」「前は持っていたが今は持っていない」「持っていない」「わからない」のいずれかを選択してもらった。質問形式は生きがい調査と同じ。「持っている」は年齢が上がるるとともに高くなる。「わからない」は逆に低くなる。「前は持っていたが今は持っていない」は高齢層（55歳層以降）が比較的高い。「持っていない」は比較的若年齢層で多い。傾向は生きがい調査の結果と概ね同じである。

(表 29) 生きがいの有無(生活・就業スタイル調査) (%)

生きがいの有無	35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	全体
持っている	56.1	61.2	59.5	67.3	73.1	69.4	75.2	65.8
前は持っていたが今は持っていない	3.6	8.5	8.3	7.5	12.0	14.2	11.7	9.4
持っていない	9.4	6.2	11.6	11.2	3.7	8.2	2.2	7.4
わからない	29.5	24.0	19.8	12.1	8.3	6.7	9.5	16.0

以上、生きがい構成要素と取得の場、生きがいの意味、生きがいの傾向を概観したが、概ね生きがい調査の傾向と符合しており、生きがい調査の結果から得た仮説は生活・就業スタイル調査においても適用できると考える。

② 生きがいの有無別、生活諸側面・ライフコース形成の傾向

生活諸側面の傾向、ライフコース形成の傾向が生きがい有無の違いに関係するかを見るため、生きがいを「持っている」「前は持っていたが今は持っていない」「持っていない」「わからない」と答えた4群の比較を行なった。サンプル構成は以下の通りである。

(表 30) 生きがいの有無—サンプル構成—(生活・就業スタイル調査) (人)

合計	持っている	前は持っていたが今は持っていない	持っていない	わからない
875	576	82	65	140

・生活諸側面の満足感

満足感尺度を表 11 と同様に算出し比較を行なった。プラスの数字は満足を感じている肯定の強さ、マイナスの数字は否定の強さを表す。

(表 31)生活諸側面の満足感—生きがい有無別集計—(生活・就業スタイル調査) (%)

生活諸側面	持っている	前は持っていたが今は持っていない	持っていない	わからない	全体
健康	76.7	14.6	27.5	45.7	61.9
時間的ゆとり	2.8	-3.6	-21.6	-17.8	-2.6
経済的ゆとり	3.6	-33.1	-41.6	-36.5	-9.8
精神的ゆとり	28.4	-32.8	-38.5	-18.6	10.1
家族の理解・愛情	95.8	54.9	58.4	80.7	86.1
友人・仲間	66.8	19.5	9.1	33.7	51.7
熱中できる趣味	51.1	-2.4	-22.9	0.0	32.2
仕事のはりあい	60.1	-23.1	-27.7	12.1	38.1
社会的地位	25.6	-26.9	-18.6	-7.1	11.8
自然とのふれあい	18.8	6.0	-58.4	-20.0	5.5
近隣との交流	-11.2	-24.4	-73.7	-34.3	-21.2
社会の役に立つこと	-18.8	-74.4	-95.5	-59.4	-36.3

*表 11 と同じく満足感尺度を比較

全ての項目で満足感が一番高いのが「持っている」群、次が「わからない」群である。「前は持っていたが今は持っていない」と「持っていない」群は 12 項目中 9 項目でマイナスであり生活満足度が低い。特に生活の場の中心となる家族、仕事関係の満足感が「持っている」群に比べかなり低い。

・自由時間の有無と過ごし方

自由時間の有無については、「持っている」群は比較的、時間に余裕があり、「持っていない」「わからない」群に余裕が少ないことが窺われる。

(表 32)自由時間の有無—生きがい有無別集計—(生活・就業スタイル調査) (%)

自由時間の有無	持っている	前は持っていたが今は持っていない	持っていない	わからない	全体
十分にある	12.7	14.6	10.8	6.4	11.9
まあまあ	44.3	39.0	41.5	38.6	42.6
不十分である	36.8	43.9	43.1	47.9	39.7
まったくない	5.0	1.2	4.6	5.7	4.7

次に自由時間の過ごし方について見ると以下の表の通りである。「持っている」群と「持っていない」「わからない」群では傾向に大きな差が認められる。「前は持っていたが今は持っていない」群の傾向は両者の中間的な位置にあるようだ。

(表 33) 自由時間の過ごし方—生きがい有無別集計—(生活・就業スタイル調査) (%)

自由時間の過ごし方	持っている	前は持っていたが今は持っていない	持っていない	わからない	全体
仕事仲間とのプライベートなつきあい	11.3	10.0	8.1	9.2	10.4
仕事に関する勉強や残務整理	15.9	11.3	12.9	13.8	14.9
テレビ・ゴロ寝やパチンコ、酒など	28.7	①43.8	①58.1	①46.2	①35.3
考えごとや瞑想	3.0	8.8	8.1	5.4	4.2
ひとりで趣味・スポーツ・学習など	②33.3	②32.5	③29.0	22.3	③31.3
仲間と趣味・スポーツ・学習など	26.5	11.3	8.1	13.1	21.5
パソコン通信やインターネットなど	15.6	18.8	②33.9	18.5	17.6
個人的な友人・仲間とのつきあい	20.2	17.5	17.7	12.3	18.3
行楽・ドライブなど	25.4	②32.5	22.6	15.4	24.3
庭いじりや家事など家庭内のこと	③30.4	②32.5	16.1	③24.6	28.8
家族との団らんや家庭サービス	①37.6	16.3	19.4	②36.9	②33.7
近隣の人とのつきあいや地域の行事	8.7	6.3	1.6	5.4	7.3
ボランティアなどの社会活動	5.0	2.5	0.0	1.5	3.8
宗教活動・政治活動	2.6	1.3	0.0	2.3	2.2
その他	2.2	2.5	1.6	1.5	2.1
特に何もなし	0.4	0.0	1.6	1.5	0.6

* 各群の選択率上位3位までの順位を記入(①～③)、項目毎に選択率が全体より高い群を網掛けした。

「持っている」群の選択率上位1～3位は「家族との団らん」「一人で趣味」「庭いじりや家事」であるが、「持っていない」「わからない」群では「テレビ・ゴロ寝」が1位で選択率がかなり高い(58.1%、46.2%)。2位以下に「家族との団らん」「一人で趣味」がくる。また、「持っている」群は「仕事仲間とのプライベートなつきあい」「仲間との趣味」「個人的な友人」「近隣の人とのつきあい」「ボランティアなど」の選択率が他群と比べ相対的に高い。対して「持っていない」「わからない」群は「パソコン通信」「考えごとや瞑想」が相対的に高かった。また、「持っていない」群では「家族との団らん」「庭いじりや家事」といった家庭項目が低い傾向が目立つ。

・(定年)退職後のライフコース形成

生きがいの有無別に「退職後の仕事をどのようにしたいか(退職経験した人は「したかったか)」「(希望)」「実際に定年退職後(定年前の退職後)に仕事のしかたはどのようになると思うか(経験した人は「なったか)」「(実際)」の回答を集計すると次の表の通りである。

(表 34) (定年)退職後の仕事 希望と実際—生きがい有無別集計—(生活・就業スタイル調査)(%)

		持っている	前は持っていたが 今は持っていない	持っていない	わからない	全体
退職とともに職 業生活から引退 したい(する)	希望	③14.8	②15.9	13.8	②17.9	③15.2
	実際	③14.9	③18.3	③13.8	②16.4	③15.3
	差	-0.1	-2.4	0.0	1.5	-0.1
退職後も再雇用や 勤務延長により今 の会社に勤めたい	希望	①19.3	①26.8	③15.4	③15.7	①19.4
	実際	②18.8	①22.0	②15.4	12.1	②18.1
	差	0.5	4.8	0.0	3.6	1.3
退職後は出向先 に移籍したい(す る)	希望	2.6	2.4	0.0	2.1	2.3
	実際	4.0	2.4	1.5	3.6	3.5
	差	-1.4	0.0	-1.5	-1.5	-1.2
退職後は別の企 業に再就職した い(する)	希望	②16.1	③13.4	①23.1	11.4	②15.9
	実際	①21.4	②20.7	①20.0	③15.7	①20.3
	差	-5.3	-7.3	3.1	-4.3	-4.4
退職後は自分で 事業や商売を始 めたい(始める)	希望	15.1	③13.4	②18.5	10.0	14.3
	実際	11.8	8.5	③13.8	7.1	10.7
	差	3.3	4.9	4.7	2.9	3.6
退職後は家業を 手伝いたい(手伝 う)	希望	1.2	0.0	0.0	2.1	1.3
	実際	1.6	1.2	0.0	1.4	1.5
	差	-0.4	-1.2	0.0	0.7	-0.2
退職後はシブハ [®] -人材 センターなどで簡単な 仕事がしたい(する)	希望	10.1	③13.4	12.3	③15.7	11.3
	実際	7.6	9.8	10.8	10.0	8.5
	差	2.5	3.6	1.5	5.7	2.8
退職後は NPO・ NGO やボランティア団 体で働きたい(働く)	希望	9.2	8.5	9.2	3.6	8.1
	実際	6.1	3.7	1.5	2.9	4.9
	差	3.1	4.8	7.7	0.7	3.2
その他	希望	2.4	0.0	0.0	0.7	1.7
	実際	2.4	4.9	3.1	0.7	2.4
	差	0.0	-4.9	-3.1	0.0	-0.7
わからない・考えた ことがな	希望	6.6	1.2	4.6	①18.6	7.8
	実際	8.3	4.9	③13.8	①25.7	11.1
	差	-1.7	-3.7	-9.2	-7.1	-3.3

* 希望=問 29 の回答、実際=問 30 の回答、差=希望-実際

* 各群の選択率上位 3 位までの順位を記入 (①~③)、項目毎に選択率が全体より高い群を網掛けした。

どの群においても、希望、実際ともに「再雇用・勤務延長」「別企業に再就職」「引退」が上位にくるが、「前は持っていたが…」群では「再雇用・勤務延長」(希望 26.8%、実際 22.0%)、「持っていない」群では「別企業に再就職」(希望 23.1%、実際 20.0%)が高く志向の違いが認められる。また「持っていない」群では「事業・商売」(希望 18.5%、実際 13.8%)の選択率も高い。わからない群で「わからない」(希望 18.6%、実際 25.7%)が非常に高いことが目を引く。また、他群と比べ「引退」(希望 17.9%、実際 16.4%)の選択率が高い。それぞれの選択率の 1~3 位をまとめると表 35 の通りである。

(表 35) (定年)退職後の仕事 希望と実際 表 34 をもとに作成

生きがい有無		1位	2位	3位
持っている	希望	再雇用・勤務延長	別企業に再就職	引退
	実際	別企業に再就職	再雇用・勤務延長	引退
前は持っていたが今は持っていない	希望	再雇用・勤務延長	引退	別企業に再就職
	実際	再雇用・勤務延長	別企業に再就職	引退
持っていない	希望	別企業に再就職	事業・商売	再雇用・勤務延長
	実際	別企業に再就職	再雇用・勤務延長	引退／わからない
わからない	希望	わからない	引退	再雇用・勤務延長
	実際	わからない	引退	別企業に再就職

次に希望と実際の差を見ると「前は持っていたが…」群で差が顕著である。「別企業に再就職」(希望 13.4%⇔実際 20.7%)、その他(同 0.0%⇔4.9%)は実際が希望を上回っている。逆に「再雇用・勤務延長」(同 26.8%⇔22.0%)、「事業・商売」(同 13.4%⇔8.5%)、「NPO・NGO やボランティア」(同 8.5%⇔3.7%)では希望が実際を上回っている。

「持っていない」「わからない」群では「わからない・考えたことがない」で実際が希望を大きく上回る(「持っていない」群：希望 4.6%⇔実際 13.8%、「わからない」群：同 18.6%⇔25.7%)。ちなみに「持っている」群は他群に比べ乖離が小さい。

(4)まとめ

以上の知見を整理する。まず、生活の諸側面に関する傾向、ライフコース形成に関する傾向を確認し、生きがいとの関係についてまとめることとしたい。

①生活の諸側面

個人が生活面における諸要素にどの程度満足しているかを確認した。

- ・満足感は若年齢層で低く高年齢層で高い。60歳層、65歳層が非常に高いのに対し45歳層が非常に低い。
- ・どの年齢層においても「家族の理解・愛情」「健康」「友人・仲間」が高く、「近隣との交流」「社会の役立つこと」が低い。
- ・3時点(91、96、01年)を比較すると、91年から96年で「健康」「友人」「時間、経済、精神的ゆとり」の満足感は高くなり、「仕事」「近隣」「社会の役に立つこと」は低くなる。96年から01年においては「家族の理解・愛情」以外の全項目が低くなる。全体として見ると01年の満足感が最も低い。

次に、生活における関心を見るため自由時間の余裕度とその過ごし方を確認した。

- ・自由時間は50歳層までは不十分が多いが、55歳層以降、余裕がでてくる。
- ・自由時間の過ごし方は年齢層による傾向の違いが大きい。ライフステージにおける仕事面、家族面の変化との関係が窺える。
 - －35歳層～45歳層では「家族との団らん」「テレビ・ゴロ寝」の選択率が高い。また、「パソコン通信」「仕事に関する勉強」も比較的高い。
 - －50歳層以降になると子供の成長の影響か「家族との団らん」が後退し「庭いじりや家事など家庭内のこと」が増える。また、時間に余裕ができるためか「行楽・ドライブ」「仲間と趣味」「ボランティアなどの社会活動」「近隣の人とのつきあい」が増える。
 - －60歳層以降では「テレビ・ゴロ寝」「仕事に関する勉強」は大きく後退する。代わって「個

「人的友人・仲間とのつきあい」「仕事仲間とのプライベートなつきあい」が増え、仕事からの引退の影響が感じられる。

年齢層における違いは自由時間の余裕度との関係でもあろう。自由時間に余裕がないと「テレビ・ゴロ寝」など気分転換的なもの、「家族との団らん」「仕事に関する勉強」など必要なものに限られ、他のことを行なう余裕がなくなるようだ。

- ・3時点を比較すると91年から96年で自由時間の余裕度は増している。しかし96年から01年で減っている。91年と01年を比べると01年の余裕度が少し大きい。

自由時間の過ごし方の傾向は91年から96年で大きく変わった。「仕事仲間とのプライベートなつきあい」「仕事に関する勉強」「テレビ・ゴロ寝」が減り、「仲間との趣味」「行楽・ドライブ」が増えた。仕事、会社中心の生活からの転換が感じられる。また、「パソコン通信」が96年から01年で飛躍的に伸びた。

②ライフコース形成

就業面のみでなく生活全般において定年退職が大きな転機であることから、これに対する意識、退職後の仕事の希望と実際の予測（退職経験者については実際におこったこと）を確認した。

- ・定年退職に対する意識を見ると、若年齢層において定年前の退職の希望が強い。35歳層、45歳層で特に強く、キャリアの転換期であることの影響が感じられる。
- ・定年あるいは定年前の退職後の仕事については、希望、実際とも「再雇用や勤務延長により今の会社に勤める」「別の企業に再就職する」「退職とともに職業生活から引退する」の3つが高い。
- ・若年齢層では「自分で事業や商売を始める」「わからない」「引退」の選択率が高い。「自分で事業や商売」は35歳層、45歳層、55歳層で高くキャリアの転換期との関係が推測される。また、45～55歳層では「シルバー人材センターなどで簡単な仕事」「NPO、NGOなどボランティア活動」が相対的に高い。
- ・希望に比べ実際が低いものが「事業や商売」「シルバー人材センターなど」「NPO、NGOなどボランティア活動」で、希望しているほどには実現できないということである。逆に実際が希望より高いものが「別の企業に再就職」「わからない」であり、希望はしないが実際にはそうなるということである。「わからない」は若年齢層で多いが、特に35歳層で希望に比べ実際がかなり高い。
- ・3時点を比較すると91年から96年で実際面の変化が目立つ。退職経験者で「引退」が増え、「再雇用・勤務延長」「別企業に再就職」が減った。96年から01年においてもこの傾向は変わらず、希望面においても「引退」が増え「再雇用・勤務延長」「別企業に再就職」が減った。退職前の人では91年から96年で「再雇用・勤務延長」の希望が増え、96年から01年では「引退」「事業や商売」の希望が少し増えた。

希望と実際の乖離は「再雇用・勤務延長」で96年を中心に希望が実際を上回る。退職前の人を中心に「事業や商売」が96年、01年で希望が実際を上回る。退職前の人では「わからない」の実際が希望を大きく上回り、96年から01年でこの傾向は強くなる。退職経験者では「別企業に再就職」「出向先に移籍」が96年、01年で実際が希望を上回る。

③生きがいとの関係

生活諸側面、ライフコース形成の傾向と生きがいとの関係について以下の点を確認した。

- ・生活満足感については、生きがいを「持っている」群で非常に高く、「前は持っていたが今は持

っていない」群、「持っていない」群で非常に低い。

- ・自由時間は、生きがいを「持っている」群で余裕があり、「持っていない」「わからない」群の余裕が少ない。
- ・自由時間の過ごし方では、生きがいを「持っている」群は「仕事仲間とのプライベートなつきあい」「仲間との趣味」など対人親和的な傾向が強い。「持っていない」「わからない」群では「テレビ・ゴロ寝」が非常に高く、家庭に関する項目が低い。
- ・退職後の仕事については、「前は持っていたが…」群で「再雇用・勤務延長」の選択率が高く、「持っていない」群で「別企業に再就職」「自分で事業・商売」が高い。「わからない」群では「わからない」が高い。希望と実際の乖離は「前は持っていたが…」群で顕著である。「持っていない」「わからない」群では「わからない」の実際が希望を大きく上回る。ちなみに「持っている」群は他群に比べ希望と実際の乖離が小さい。

生活諸側面の満足感、自由時間の過ごし方、退職後のライフコース形成の違いと生きがいとの関係性が推測される。

生きがいの傾向は、生きがいを「持っている」割合が大きく（65.8%：生活・就業スタイル調査、以下同じ）、「わからない」（16.0%）、「前は持っていたが…」（9.4%）、「持っていない」（7.4%）の順で続く。「持っている」「前は持っていたが…」は概ね年齢が上がるるとともに高くなる。逆に「わからない」「持っていない」は低くなる。

このような生きがいの傾向は、一面において年齢推移にともなう生活面の変化、ライフコース形成面における変化と連動していると言えよう。生活諸側面の満足感は生きがいと双方向に働き、生きがいを持っている状態を促進する影響をもたらし、また、自由時間の余裕は生きがいを見出す助けとなり、自由時間の過ごし方がそのような生きがいを育むということが言えるかも知れない。生きがい構成要素の取得の場において高年齢層では「仕事・会社」「家庭」から他の場への転換が認められており、自由時間の中で生きがいの場をどう構築するかが問われるとも言えよう。

また、ライフコースにおける退職後の仕事の形成について見ると、やはり年齢推移の中でライフコース形成をどう行なっているかが生きがいと関わっているようである。若年齢層では、どうしたいか、あるいは実際どうなるか「わからない」が多く、同時に生きがい有無についても「わからない」が比較的多い。

その後、年齢推移とともに仕事の形成における希望、実際とも変化する。全体的に見ると「引退」「再雇用・勤務延長」「他企業に再就職」の3つの選択率が高いが、40歳代では「自分で事業・商売」の希望が高くなり、50歳代では「NPO、NGO やボランティア団体」の希望が高くなる。また、希望と実際の乖離は年齢層により変化する。定年期である55歳層、60歳層では希望と実際の一致度が高くなる。年齢が上がるるとともに増えるのが、生きがいを「持っている」「前は持っていたが今は持っていない」であるが、「持っている」群では退職後の仕事の希望と実際の乖離が他群と比べ一番小さい。これに対し「前は持っていたが今は持っていない」群では希望と実際の乖離が大きい。ライフコース形成において希望を現実化できることが生きがいと関わっているようである。すなわち、若年齢層ではどうしたいか、実際どうなるか「わからない」が比較的多いが、年齢の推移とともにライフコース形成の準備を重ね、希望と実際の予測のすり合わせを行い、希望を現実化できる場合、あるいは、希望と現実の折り合いをつけられる場合に生きがいを持っている場合が多く、希望と実際の乖離が大きい場合、生きがい喪失になりやすいと言えるかもしれない。

年齢層により生きがいとして重視する要素が異なることは確認されたが、ライフコース形成と

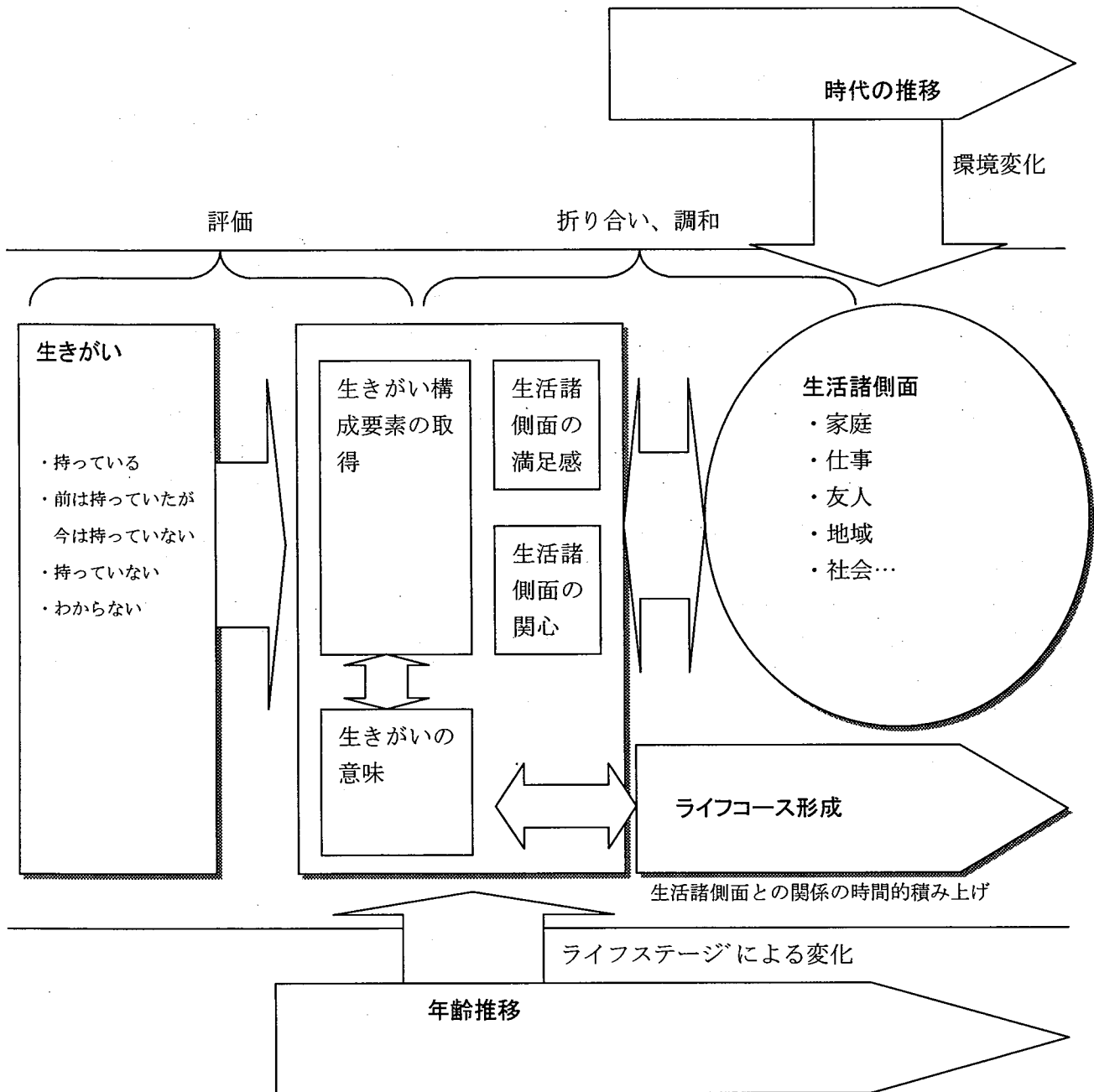
そのようなライフステージに応じた生きがい観のあり方は双方向で働きあうものであろう。生きがいにおけるライフコース形成の重要性が示唆されるところである。

時代変化についても注目する必要がある。生活の満足感においては96年以降、「仕事」「近隣」「社会の役に立つこと」が下がり、直近の01年では他の項目も下がり、この10年間で満足感が一番低くなった。自由時間については91年から96年で余裕度は上がったが01年でまた下がった。その過ごし方を見ると仕事、会社中心の生活からの転換が見られる。退職後の仕事については、96年以降、退職経験した人では「引退」が増えている。退職前の人では「事業や商売」が増えている。会社と距離を置く傾向にあるようだ。また若年齢層を中心に「わからない」が増えている。時代の転換期がもたらす不確実性の反映でもあろう。このように時代推移に伴う環境変化が及ぼす影響も無視できないようだ。年齢層による傾向の差異はライフステージによる差であるとともに、その時代を反映した世代の差でもあると言えるのではないかと。

人は家庭、仕事など生活諸側面の場と折り合い、調和していくことにより生きがい構成要素を取得する。その際、重視する生きがいの意味は年齢推移とともに変容する。年齢が上がると積み上げてきた人生に対する意味付けや評価をより重視する傾向となるようだ。その意味で、より若い時期からのライフコース形成のあり方が高齢期の生きがいに影響するとも言えよう。このように生活面との関係、その時間的積み上げであるライフコース形成への評価が生きがい有無に関係する。そして、生活諸側面の環境は時代とともに変化する。この意味で時代推移に伴う環境変化も生きがいの変容に影響を及ぼす。社会・経済環境が大きく変わろうとする今、サラリーマンの就業・生活においても新たなパラダイム構築が求められる時期であろう。

以上の知見をまとめると次の図のようになると思われる。

(図2)生活諸側面、ライフコース形成と生きがいとの関係



3. 小活

(1) 生きがいとは

10年間の3時点（1991年、96年、2001年）で行なわれた生きがい調査の結果をもとに生きがいの概念を確認した。生きがい構成要素は個人の精神的、心理的欲求と関係し、「生活のはりあいや活力」のような生活規律的なもの、「心の安らぎや気晴らし」のような安定的なもの、「自分の可能性の実現」のような達成的なもの、「役立ちや評価を得ていること」のような対人親和的、有用感を得るものなど幅広い内容を持つ。このような要素の集合が生きがいを形成すると言える。

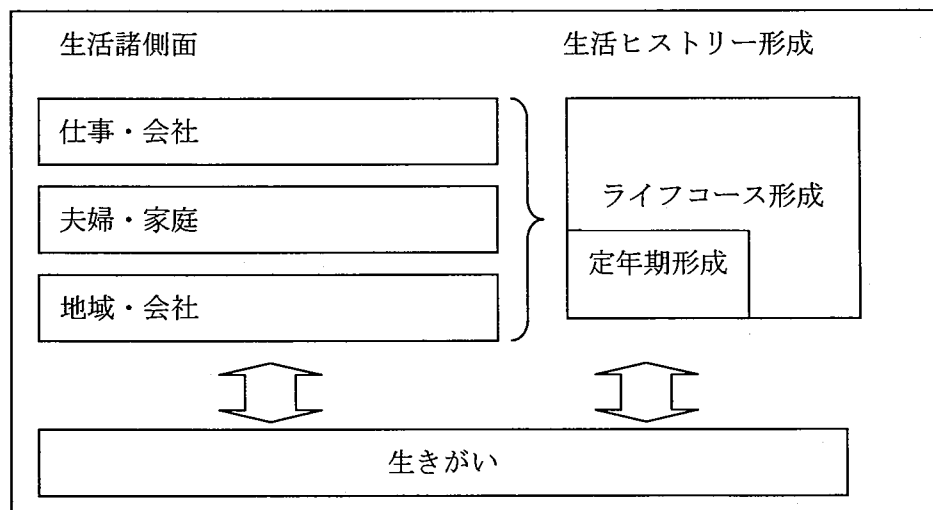
そして、生きがいの意味として、どの要素を重視するかは個人により異なる。しかし、生活の実態面において人はこれらの要素のそれぞれを多少なりとも「家庭」「仕事・会社」「世間・社会」等の生活の諸側面から取得している。

生きがいの有無には、生活の諸側面から生きがい構成要素を取得できているかということが関係する。生きがいを持っていない人は取得の場として、生活の主要な場である「家庭」を選択する割合が低く、「どこにもない」を選択する割合が高い。

また、生きがいを持っている人の割合は年齢が上がるとともに高くなる。生活諸側面との関係では、年齢が高くなると生きがい構成要素を取得する場として「家庭」「仕事・会社」の選択率は下がる。「世間・社会」などは上がるが「家庭」「仕事・会社」の下げを補う水準ではない。年齢が高くなると日々の生活面との関係だけでなく、自身が形成してきた人生、ライフコースの意味の重要性が増し、これへの評価が生きがいに影響するようである。

本論では「生きがい構成要素と取得の場がうまく機能しているかどうかの評価が生きがいの有無に影響する」という生きがい調査の知見（シニアプラン開発機構2002年）を出発点としたが、これに補足し、「そのような生きがい構成要素の取得には2つの側面があり、それは①生活諸側面との関係における取得（空間的關係）、②ライフコース形成との関係での取得（時間的關係）である」と考えた。

(図3) 生活諸側面、ライフコース形成と生きがい



*生活諸側面（活動、ネットワーク）⇒評価⇒生きがい（生活空間との関係）

ライフコース（ライフスタイル継続性、意味、達成）⇒評価⇒生きがい（生活時間との関係）

(2)生活の諸側面、ライフコース形成と生きがい

生活・就業スタイル調査(2003年)の結果をもとに直近の傾向を確認した。また、生きがい調査により3時点の変化を確認した。

生活諸側面における満足感の高年齢層で高く、若年齢層で低い。どの年齢層でも「家族の理解・愛情」「健康」「仲間・友人」の満足感が高く、「近隣」「社会の役に立つ」の満足感が低い。3時点では全体的に直近の2001年が一番低い。「仕事」「近隣」「社会の役に立つ」が96年以来下がり続けている。

自由時間は高年齢層に余裕がある。また、ライフステージの局面の影響もあり年齢層によりその過ごし方の傾向は異なる。40歳代を中心に時間の余裕度が少なく、過ごし方も「テレビ・ゴロ寝」「仕事に関する勉強や残務整理」の割合が高く、友人、仲間関係が低い。3時点では自由時間の余裕度は96年が一番高いが01年では下がった。過ごし方の傾向は96年で大きく変わり、仕事、会社中心の生活からの転換が感じられる。

ライフコース形成については若年齢層に定年前の退職の希望が強く、特にキャリアの節目で意識されるようだ。今の会社を退職した後の仕事については、全体として「再雇用や勤務延長で今の会社に勤める」「別の企業に再就職」「職業生活から引退」の3つが高い。若年齢層では「自分で事業や商売」「わからない」も多い。3時点を見ると「引退」が増えている。「事業や商売」は希望する割合は増えるが、実際そうなるという予測の割合が追いついていない。逆に「わからない」では実際が希望を大きく上回る。

以上の諸点を勘案すると、依然、40～50代のミドルと呼ばれる層では仕事、会社を中心とした生活形成が窺えるが、時代変化の中で仕事、会社の求心力が薄れていることも事実のようである。若年齢層を中心にキャリア形成における節目の時期では定年前の退職の志向が高まり、自ら起業する「事業や商売」の志向が高まる。50歳代では「NPO、NGOやボランティア団体」の志向も高まっている。しかし、これらは希望と比べ実際そうなるという予測する割合は低い。実現するためには周到な準備が必要なのであろう。若年齢層を中心に「わからない」が多いことが目を引くが、特に希望に比べ実際の割合が大きい。この傾向は時代とともに大きくなっている。社会・経済環境が変わろうとしている中で不確実な時代への対応が求められている。

次に、生きがいとの関係を見るにあたり、生活・就業スタイル調査の生きがいの傾向を生きがい調査の結果と比較、前頁の仮説の妥当性を確認した。

そして、生きがい有無別に生活面の傾向、ライフコース形成の傾向を見た。生きがいを持っている人の傾向は生活満足感が高く、ライフコース形成においても希望と実際の乖離が小さい。希望を実現できること、あるいは希望と実際の折り合いをつけることができることが影響するようだ。

今、社会は大きな転換期に来ている。終身雇用制度の終焉が言われ、雇用慣行も変わろうとしている。その一方で少子高齢社会の進展が言われ、エイジフリーな様々な形での社会参加が言及される。また、性差役割を解消し、より自己実現の高いライフコース形成が説かれている。そのような中で男性就業者も従来の仕事、会社を中心としたライフコース形成から、一方で転職、起業を視野に置き、また、家族役割、社会活動などを実現させるライフコースの選択可能性もでてきたと言える。しかし、その選択可能性は自己の取組みの努力を要するものであり、希望を現実のものとし、自己実現を図っていくためには、それ相応の取組みが求められるということでもあるようだ。

生活諸側面との関係、ライフコース形成のあり方が生きがいと関わっていることは既に見た通りであるが、新しい社会環境の中での新しい就業、生活におけるパラダイムの構築が必要である

う。今、時代環境は大きく変化している。従来の仕事、会社を中心としたある意味で画一的な生活形成、ライフコース形成から、新しい時代において自己実現を図れる、より多様化したものへ、選択可能性と自己責任の間においてサラリーマンにおいても新しい取り組みが求められている。

第4部 調査結果の分析

1. 調査実施概要

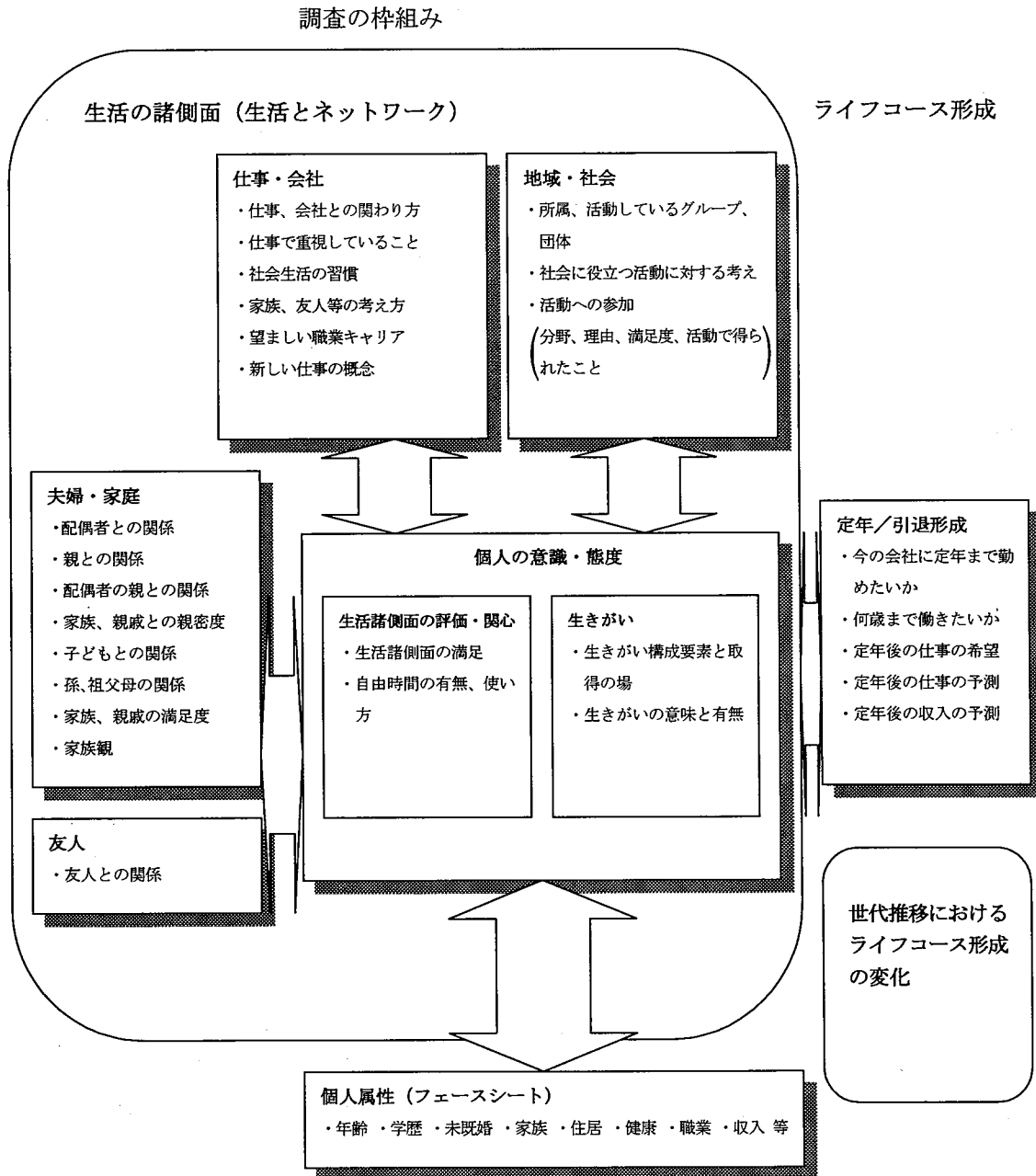
2. 調査結果の詳細

第4部 調査結果の分析

1. 調査実施概要

(1) 調査の枠組み

本調査の枠組みは以下のとおりである。



調査の枠組みについては、「仕事・会社」「夫婦・家庭」「地域・社会」から生活諸側面（活動・ネットワーク）の変化およびその相互の関係を時代別、世代別に見るとともに、「定年/引退形成」を中心としたライフコース形成の変化、生きがいに見られる「個人の意識・態度」との関係を見るなかで多様化と個人の選択可能性、個人化傾向等の関係を分析する構造としている。

① 仕事・会社

仕事・会社に対する意識・態度、仕事や職場で重視すること、会社生活の習慣、望ましい職業キャリア観、家族の期待等をもとに仕事・会社の生活全体における位置付けを分析する。

② 夫婦・家庭

夫婦とのコミュニケーション、行動における関係、世代関係（親子関係、祖父母と孫との関係）、および家族との紐帯、家族への満足度、家族観を通じ、習慣、価値観の変化を分析する。

③ 地域・社会

地域・社会活動の団体への帰属、活動、活動に対する考え等をもとに生活全体における位置付けを分析する。

④ 定年／引退形成

定年期、定年移行期における仕事への意識変化を分析し、ライフコース形成のなかで定年移行期の位置付けをはかり、仕事、家庭、地域・社会活動等のウエイトの置き方を見ていく。

⑤ 個人の意識・態度

生活諸側面への評価、生きがいに対する意識等と生活の諸側面、ライフコース形成、引退形成の変化との関係を見ていき、可能となる生活スタイル、就業スタイルが生きがいを感じるものであるかを分析する。

⑥ 個人属性、友人

年齢、職業、未既婚、家族状況、健康状況などの「基本属性」が生活の諸側面、個人の意識・態度にどのように影響するかを見る。また、友人との関係がネットワークに及ぼす影響を見る。

以上の分析を通じ、サラリーマンの生活面、就業面の多様化の方向を分析し、そのような傾向が自己実現性、生きがい度の高いものとなるかを検証する。

(2) 調査設計

【調査対象者と標本数】

1都3県（東京、埼玉、千葉、神奈川）在住の35～69歳の就業者を中心とする男性（OBを含む）2,000人およびその配偶者を対象に実施。年齢を5歳ごと7層に分け、各層100人前後を対象とした。

(3) 回収結果

【本人調査】 有効回収数 875件、有効回収率43.8%。

【配偶者調査】 有効回収数 747件、配布数2,000件に対する有効回収率37.4%。

※【本人調査】 回答票中の有配偶者数875件に対して、85.4%が夫婦ともに回収された。

(4)本報告書を読むにあたって

① 本報告書における数値の取り扱い及び図表については以下のように扱っている。

- ・調査結果の数値は、原則としてパーセンテージ(%)で表記した。%値の母数は、原則としてその質問項目の該当標本数(回答すべき人の数)であり、図では「n」、表では「標本数」として表示してある。

- ・%値は小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記してある。したがって、単数回答の合計が必ずしも100%でない場合(99.9%または100.1%など)がある。同様に、複数の選択肢をあわせた場合や小計等では、内訳の%値を単純加算した数値と0.1%異なる場合がある。

- ・分析対象項目が初めて出現する図表では、回答選択肢の全て及び「無回答」を表示してある。その後を示す同じ項目の図表では、煩雑さを避けるために、選択肢の言葉や文章を省略型にしたり、「その他」「無回答」等の表示を省略する場合がある。

② 標本誤差について

調査結果の数値(比率)を読む際に、比率の差が統計的に有意であるかどうかを考慮する目安として、以下の早見表を参照されたい。

a. 1つの回答比率(%)の誤差範囲

1つの回答比率における誤差の範囲は、以下の早見表に示すとおりである。

1つの回答比率における誤差範囲

比率 \ n	50	100	200	300	400	500	700	1000
10% or 90%	± 8.5%	± 6.0%	± 4.2%	± 3.5%	± 3.0%	± 2.7%	± 2.3%	± 1.9%
20% or 80%	±11.3%	± 8.0%	± 5.7%	± 4.6%	± 4.0%	± 3.6%	± 3.0%	± 2.5%
30% or 70%	±13.0%	± 9.2%	± 6.5%	± 5.3%	± 4.6%	± 4.1%	± 3.5%	± 2.9%
40% or 60%	±13.9%	± 9.8%	± 6.9%	± 5.7%	± 4.9%	± 4.4%	± 3.7%	± 3.1%
50%	±14.1%	±10.0%	± 7.1%	± 5.8%	± 5.0%	± 4.5%	± 3.8%	± 3.2%

比率 \ n	1250	1500	1750	2000	2500	3000	3200
10% or 90%	± 1.7%	± 1.5%	± 1.4%	± 1.3%	± 1.2%	± 1.1%	± 1.1%
20% or 80%	± 2.3%	± 2.1%	± 1.9%	± 1.8%	± 1.6%	± 1.5%	± 1.4%
30% or 70%	± 2.6%	± 2.4%	± 2.2%	± 2.0%	± 1.8%	± 1.7%	± 1.6%
40% or 60%	± 2.8%	± 2.5%	± 2.3%	± 2.2%	± 2.0%	± 1.8%	± 1.7%
50%	± 2.8%	± 2.6%	± 2.4%	± 2.2%	± 2.0%	± 1.8%	± 1.8%

b. 2つの回答比率 (%) の差

(i) 1つの標本の場合

1つの標本において、2つの回答比率の間に差があるかどうかをみる場合、例えば、ある質問の全体の結果で、ある質問に対する回答「A」の比率 p 、回答「B」の比率 q とで差があるといえるかどうかをみる場合に用いる。

<使い方> (注意) %で表示されているものを、 $100\% = 1$ として比率になおして用いる。

- 1) 比率 p 、 q から、 $p + q$ 、及び $|p - q|$ を計算する。
- 2) 標本数 n と $p + q$ により、表から誤差範囲を読み取る。
- 3) $|p - q|$ がその誤差範囲内であれば有意差 (統計的に意味のある差) があるとはいえず、誤差範囲を超えていれば、有意差があるといえる。

2つの比率の差の検定表(1つの標本の場合、片側検定、 $\alpha = 0.05$)

n $p+q$	50	100	200	300	400	500	700	1000	1250	1500	1750	2000	2500	3000	3200
0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.
0.10	074	052	037	030	026	023	020	016	015	013	012	012	010	009	009
0.20	104	074	052	042	037	033	028	023	021	019	018	016	015	013	013
0.30	127	090	064	052	045	040	034	028	025	023	022	020	018	016	016
0.40	147	104	074	060	052	047	039	033	029	027	025	023	021	019	018
0.50	164	116	082	067	058	052	044	037	033	030	028	026	023	021	021
0.60	180	127	090	074	064	057	048	040	036	033	030	028	025	023	023
0.70	195	138	097	079	069	062	052	044	039	036	033	031	028	025	024
0.80	208	147	104	085	074	066	056	047	042	038	035	033	029	027	026
0.90	221	156	110	090	078	070	059	049	044	040	037	035	031	028	028
1.00	233	164	116	095	082	074	062	052	047	042	039	037	033	030	029
0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.

(ii) 2つの標本の場合

異なる2つの標本における回答比率に差があるかどうかをみる場合、例えば、ある質問に対する回答「A」のサラリーマン現役の比率 p とサラリーマンOBの比率 q との間に差があるといえるかどうかをみる場合に用いる。

<使い方>

- 1) 2つの標本 n_1 と n_2 から、調和平均表により調和平均 (H) を求める。
- 2) 比率 p と q の加重平均 P を算出する。ただし、サラリーマン現役とOBとの比較や男女別の比較などの場合には、全体の比率を近似的に P として用いてもかまわない。
- 3) 検定表により、 H と P から誤差範囲を読み取る。
- 4) $|p - q|$ がその誤差範囲内であれば有意差があるとはいえず、誤差範囲を超えていれば、有意差があるといえる。

調和平均表

$n_1 \backslash n_2$	50	100	200	300	400	500	700	1000	1250	1500	1750	2000	2500	3000	3200
50	50														
100	67	100													
200	80	133	200												
300	86	150	240	300											
400	89	160	267	343	400										
500	91	167	286	375	444	500									
700	93	175	311	420	509	583	700								
1000	95	182	333	462	571	667	824	1000							
1250	96	185	345	484	606	714	897	1111	1250						
1500	97	188	353	500	632	750	955	1200	1364	1500					
1750	97	189	359	512	651	778	1000	1273	1458	1615	1750				
2000	98	190	364	522	667	800	1037	1333	1538	1714	1867	2000			
2500	98	192	370	536	690	833	1094	1429	1667	1875	2059	2222	2500		
3000	98	194	375	545	706	857	1135	1500	1765	2000	2211	2400	2727	3000	
3200	98	194	376	549	711	865	1149	1524	1798	2043	2263	2462	2807	3097	3200

2つの比率の差の検定表(2つの標本の場合、片側検定、 $\alpha=0.01$)

$H \backslash P$	50	100	200	300	400	500	700	1000	1250	1500	1750	2000	2500	3000	3200
0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.
0.10or 0.90	099	070	049	040	035	031	026	022	020	018	017	016	014	013	012
0.20or 0.80	132	093	066	054	047	042	035	029	026	024	022	021	019	017	016
0.30or 0.70	151	107	075	062	053	048	040	034	030	028	025	024	021	019	019
0.40or 0.60	161	114	081	066	057	051	043	036	032	029	027	025	023	021	020
0.50	164	116	082	067	058	052	044	037	033	030	028	026	023	021	021
0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.

(5)分析標本の基本属性

分析標本（有効回答者）の基本属性は以下のとおりである。【本人調査】及び【配偶者調査】をともに記すが、とくに記載のない場合は【本人調査】の基本属性である。

○ 年齢・学歴

① 年齢 (人)

	標本数	35～ 39歳	40～ 44歳	45～ 49歳	50～ 54歳	55～ 59歳	60～ 64歳	65～ 69歳
全 体	875	139	129	121	107	108	134	137

【配偶者調査】 (人)

	標本数	35～ 39歳	40～ 44歳	45～ 49歳	50～ 54歳	55～ 59歳	60～ 64歳	65～ 69歳
全 体	747	109	108	105	89	94	119	123

② 学歴 (%)

	標本数	小学校・高 等小学校・ 新制中学 校	旧制中学・ 旧制高女・ 旧制実業・ 新制高校	旧制高校・ 高等師範・ 新制短大	大学・大学 院	専門学校・ 専修学校・ その他	無回答
全 体	875	10.4	31.0	3.4	45.0	7.9	2.3

○ 職業・勤務先

③ 現在の就業形態 (%)

	標本数	正 規 の 社 員 ・ 従 業 員	派遣・嘱 託・パート タイマー など	自営業・ 自由業・ 家族 従 業 員	内職	シルバー 人材セン ター	その他	無回答
全 体	751	76.2	14.2	5.6	0.0	1.6	0.3	2.1

【配偶者調査】 (%)

	標本数	正 規 の 社 員 ・ 従 業 員	派遣・嘱 託・パート タイマー など	自営業・ 自由業・ 家族 従 業 員	内職	シルバー 人材セン ター	その他	無回答
全 体	383	22.2	67.6	6.5	2.6	0.3	0.8	0.0

④ 職種

(%)

	標本数	専門技術職	管理職	事務職	販売職	技能職・技術補助・作業者	サービス職	その他	無回答
全体	751	14.6	29.4	18.9	2.9	27.7	4.4	1.2	0.8

【配偶者調査】

(%)

	標本数	専門技術職	管理職	事務職	販売職	技能職・技術補助・作業者	サービス職	その他	無回答
全体	383	8.9	2.3	31.1	20.9	23.5	9.9	3.1	0.3

⑤ 勤務先の企業規模

(%)

	標本数	～29人	30～ 99人	100～ 299人	300～ 999人	1000人以上	無回答
全体	751	21.2	14.5	13.4	15.6	33.3	2.0

⑥ 通勤時間

(%)

	標本数	～29分	30～ 44分	45～ 59分	60～ 89分	90～ 119分	120分以上	無回答
全体	751	24.1	19.2	9.7	30.8	12.5	2.0	1.7

⑦ 会社の定年退職年齢

(%)

	標本数	50歳未満	50～ 54歳	55～ 59歳	60～ 64歳	65～ 69歳	70歳以上	無回答
全体	751	0.0	0.5	4.9	71.6	9.1	2.9	10.9

⑧ 転職回数

(%)

	標本数	0回	1回	2回	3回	4回	5回	6～ 9回	10～ 14回	15～ 19回	20回以上	無回答
全体	875	24.8	23.7	16.9	12.7	7.5	5.6	3.4	0.6	0.1	0.0	4.7

○ 居住地

⑨ 居住地域

(%)

	標本数	東京	埼玉	千葉	神奈川
全体	875	28.2	21.9	22.6	27.2

⑩ 居住地の都市規模

(%)

	標本数	都区部・政令 指定都市	その他の市	郡部
全体	875	31.9	61.0	7.1

⑪ 居住年数

(%)

	標本数	5年未満	5～10年 未満	10～20年 未満	20～30年 未満	30年以上	無回答
全体	875	6.5	13.1	22.4	19.8	36.0	2.2

○ 家族・世帯・住宅

⑫ 未既婚

(%)

	標本数	未婚	既婚 (初婚)	既婚 (再婚)	離別 (現在独身)	死別 (現在独身)	その他	無回答
全体	875	7.2	80.6	3.9	1.0	1.6	5.5	0.2

⑬ 子供の数

(%)

	標本数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	無回答
全体	875	13.5	14.8	51.9	15.2	1.7	0.1	0.0	2.8

⑭ 兄弟姉妹の数

(%)

	標本数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	無回答
全体	875	5.9	29.3	22.5	16.5	9.4	7.0	6.3	3.2

⑮ 世帯構成

(%)

同居家族	標本数	配偶者	子供	自分の父	自分の母	配偶者の父	配偶者の母	自分の祖父	自分の祖母	父 配偶者の祖 母	配偶者の祖 母	兄弟姉妹	その他	なし(一人 住まい)	無回答
全体	875	85.9	65.1	7.4	15.0	1.6	3.4	0.0	0.0	0.1	0.5	1.9	1.7	4.1	2.5
35~39歳	139	76.3	66.2	12.9	20.1	1.4	2.9	0.0	0.0	0.7	0.7	3.6	0.0	9.4	1.4
40~44歳	129	86.8	79.8	10.1	16.3	3.9	5.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	6.2	0.8
45~49歳	121	89.3	82.6	10.7	17.4	1.7	3.3	0.0	0.0	0.0	0.8	3.3	0.0	4.1	0.8
50~54歳	107	83.2	72.0	4.7	26.2	1.9	1.9	0.0	0.0	0.0	0.9	2.8	0.0	4.7	4.7
55~59歳	108	89.8	61.1	8.3	14.8	0.9	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	4.6	0.0	0.9
60~64歳	134	90.3	59.0	5.2	6.7	0.7	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	3.7	2.2	3.7
65~69歳	137	86.9	38.7	0.0	5.8	0.7	5.1	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	3.6	1.5	5.1

⑯ 住居形態

(%)

	標本数	持ち家・ 一戸建て (自分の 代で取 得・建替 え)	持ち家・ 一戸建て (親の持 ち家)	持ち家マン ション(自 分の代で 取得)	持ち家マン ション(親 の持ち 家)	貸家・賃 貸マンシ ョン・賃貸 アパート)	社宅・官 舎・寮等)	その他	無回答
全体	875	56.7	11.3	11.9	0.7	14.4	2.6	0.0	2.4

⑰ 住宅ローンの有無

(%)

	標本数	払っている		払っていない	無回答
			残り支払年数平均		
全体	705	44.5	17.1年	52.8	2.7

○ 健康状態・年収・その他

⑱ 現在の健康状態

(%)

	標本数	非常に 健康	まあ健康	注意点は あるが、生 活に支障 はない	注意点が あり、生活 に制限が ある	病気がち・ 療養中	無回答
全体	875	12.5	51.3	29.8	2.6	1.5	2.3

⑱ 本人の年収 (％)

	標本数	～ 200万 円未 満	200～ 300万 円未 満	300～ 400万 円未 満	400～ 500万 円未 満	500～ 600万 円未 満	600～ 800万 円未 満	800～ 1000 万円未 満	1000～ 1500 万円未 満	1500 万円 以上	無回 答
全 体	875	5.5	7.9	11.4	9.7	12.5	21.9	17.5	9.0	2.5	2.1

⑳ 世帯の年収 (％)

	標本数	～ 200万 円未 満	200～ 300万 円未 満	300～ 400万 円未 満	400～ 500万 円未 満	500～ 600万 円未 満	600～ 800万 円未 満	800～ 1000 万円未 満	1000～ 1500 万円未 満	1500 万円 以上	無回 答
全 体	875	2.6	5.1	9.9	8.9	11.1	21.8	18.1	16.3	4.3	1.7

㉑ 主な収入源 (％)

	標本数	給与	年金収入 (公的・企 業・個人 年金)	不動産収入	利息・配 当 金収入	その他	無回答
全 体	875	79.0	17.5	0.9	0.1	1.9	0.6

㉒ 収入の充足程度 (％)

	標本数	十分で余裕が ある	ほぼ十分で ある	やや不足する	非常に不足 する	無回答
全 体	875	4.7	45.6	39.4	9.7	0.6

㉓ 現在の経済的な暮らし向き (％)

	標本数	とても楽だ	少し楽だ	苦しい	とても 苦しい	無回答
全 体	875	4.5	47.0	41.9	5.5	1.1

(6) 調査の内容

当調査では、‘サラリーマンの生活と就業スタイルの多様化’の観点から生活の諸側面の実態をより詳しく把握するため、前記「調査の枠組み」に従い「仕事・会社」「夫婦・家庭」「地域・社会」「定年・引退」「個人の意識・態度」「友人」の各分野、および「基本属性」についてアンケート調査を行った。以下、本人、配偶者について、各項目ごとに対応した問番号を次に示した。

調査項目

分野	項目	生活・就業スタイル調査	
		本人	配偶者
仕事・会社	仕事・会社との関わり方	問 21	—
	仕事で重視していること	問 22	—
	会社生活の習慣	問 23	—
	家族、友人等の考え方	問 24	—
	望ましい職業キャリア	問 25	—
	新しい仕事の概念	問 26	—
夫婦・家庭	配偶者との関係	問 9、問 10	問 7、問 8
	自分の親との関係	問 11、問 12	問 9、問 10
	配偶者と親との関係	問 13	問 11
	家族、親戚との新密度	問 14、問 15	問 12、問 13
	子どもとの関係	問 16	問 14
	孫と祖父母との関係	問 17、問 18	問 15、問 16
	家族、親戚関係の満足度	問 19	問 17
	家族観	問 20	問 18
地域・社会	所属、活動しているグループ、団体	問 1	問 1
	社会に役立つ活動に対する考え	問 2	問 2
	活動（参加、理由、満足度、得られたこと）	問 3	問 3
定年・引退	今の会社に定年まで勤めたいか	問 27	—
	何歳まで働きたいか	問 28	—
	定年後の仕事の希望	問 29	—
	定年後の仕事の予測	問 30	—
	定年後の収入の予想	問 31	—
個人の意識・態度	生活諸側面の満足	問 4	—
	自由時間の有無、使い方	問 5	—
	生きがい構成要素と取得の場	問 6	問 4
	生きがいの意味と有無	問 7	問 5
友人	友人との関係	問 8	問 6
* 基本属性	家族、学歴、未既婚、住居、〔年齢、職業、職種〕収入等	F1～F16	問 19～問 21

* 基本属性：配偶者の項目は〔 〕内の項目のみ。

2. 調査結果の詳細

(1) 仕事・会社

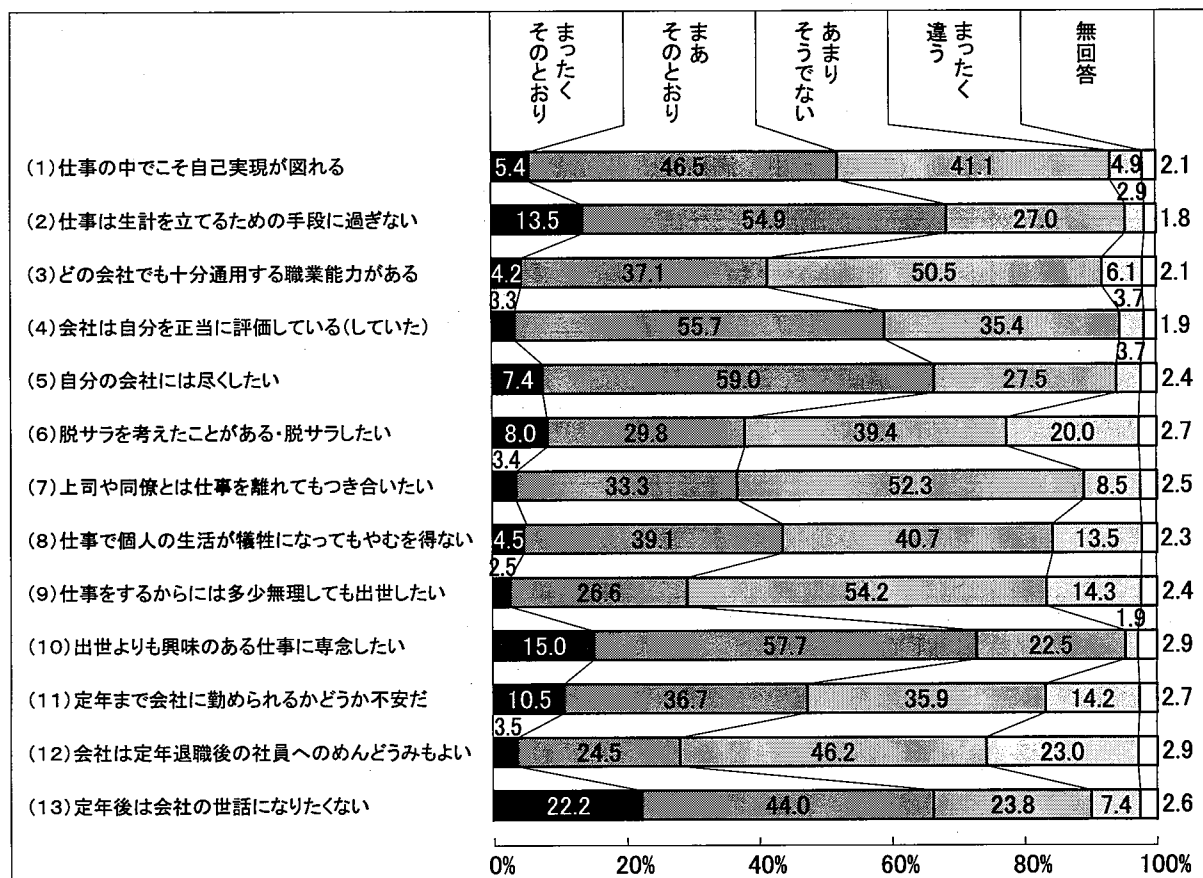
① 仕事や会社とのかかわり意識(本人調査:問 21)

仕事や会社とのかかわりについて、どう感じているかたずねた。「まったくそのとおり」の回答をみると、『定年後は会社の世話になりたくない』が 22.2%と多く、以下『出世よりも興味ある仕事に専念したい』(15.0%)、『仕事は生計を立てる手段に過ぎない』(13.5%)と続いている。また、「まったくそのとおり」と「まあそのとおり」を合わせた<そのとおり>でみると、『出世よりも興味のある仕事に専念したい』が 72.7%と最も多くなり、次いで『仕事は生計を立てるための手段に過ぎない』(68.4%)、第3位に『自分の会社には尽くしたい』(66.4%)が続き、会社へのかかわりは、帰属する方向よりはむしろ離れる方向性がみられる。

また、「まったく違う」でも、『会社は定年退職後の社員へのめんどろみもよい』が 23.0%で最も多く、「あまりそうではない」「まったく違う」を合わせた<そうではない>でも『会社は定年退職後の社員へのめんどろみもよい』(69.2%)、『仕事をするからには多少無理しても出世したい』(68.5%)、『上司と同僚とは仕事を離れてもつき合いたい』(60.8%)と続き、ここでも会社へのかかわりは薄れている結果となっている。

図表(1)-1 会社とのかかわり意識(全体)

n=875 (%)



つぎに、＜そのとおり＞の肯定回答を年齢層別にみると、『出世よりも興味ある仕事に専念したい』については、「35～39歳」層が84.1%で最も多くが肯定的であり、以下「50～54歳」(79.5%)、「45～49歳」(77.7%)、「40～44歳」(75.2%)と続く。また、54歳以下の年齢層では70%台後半と高い比率を維持しているが、55歳以降になると60%台に減少する。『自分の会社には尽くしたい』では、どの年齢層も50%は超えているが「35～39歳」層が56.8%と他の年齢層と比べて会社への帰属意識は低く、年齢が進むにつれ帰属意識は高まっていく。

また、＜そうではない＞の否定回答を年齢層別にみると、『会社は定年退職後の社員へのめんどろみもよい』については「45～49歳」層で83.4%と最も高く否定的であり、この年齢層を除いた「35～39歳」(79.1%)、「40～44歳」(73.7%)以降は、年齢の上昇と共に減少していく。

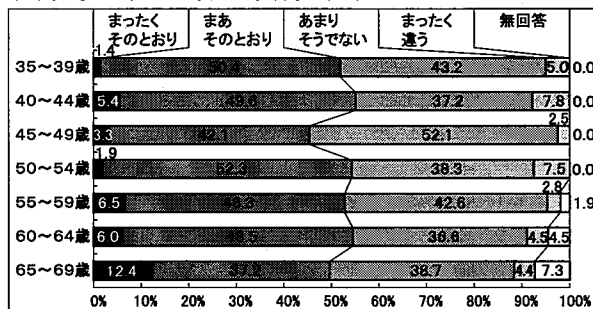
『仕事をするからには多少無理しても出世したい』では、＜そうではない＞の否定回答は、会社内でのキャリア見直しの時期とみられる「50～54歳」(79.4%)、「45～49歳」(78.5%)が最も高く、次に退職直前の「60～64歳」(76.1%)が続く、これらの年齢層以外は、60%台以下となっている。

さらに、年齢層別に差がみられるものは、『上司と同僚とは仕事を離れてもつき合いたい』で、＜そのとおり＞の肯定的回答では、「35～39歳」(38.1%)から「50～54歳」(26.2%)まで減少傾向を示すが、以降は年齢と共に上昇に転じていく。また、『定年まで会社に勤められるかどうか不安だ』では、＜そのとおり＞の肯定的回答が「35～39歳」(71.2%)が最も高く、年齢の上昇と共に急速に減少する。これは若年齢世代では、定年までの年数が長く、将来の見通しが厳しくなっていることの表れといえる。

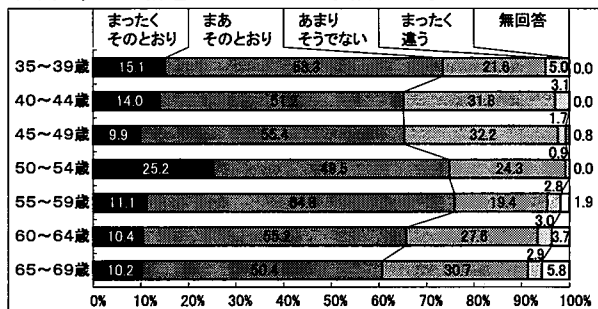
図表(1)－2 会社とのかかわり意識(年齢層別)

n=875 (%)

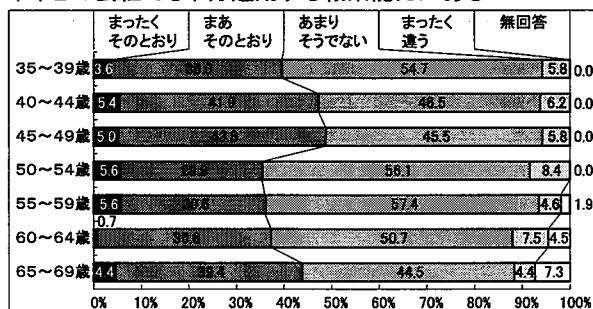
(1) 仕事の中でこそ自己実現が図れる



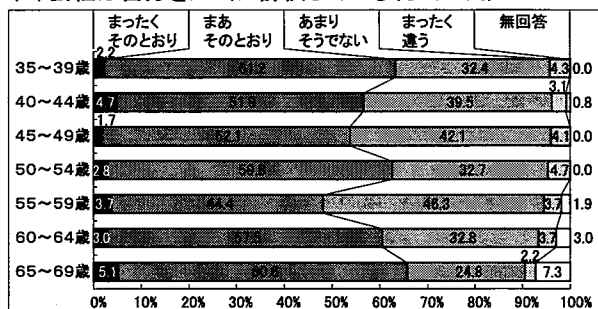
(2) 仕事は生計を立てるための手段に過ぎない



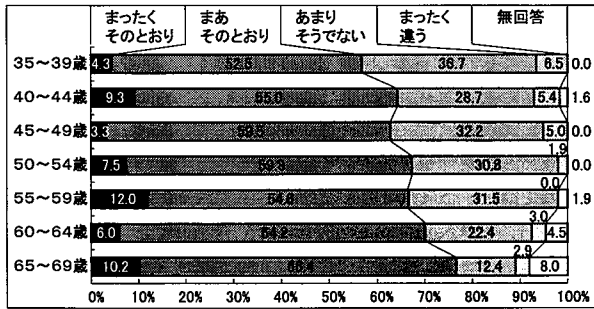
(3) どの会社でも十分通用する職業能力がある



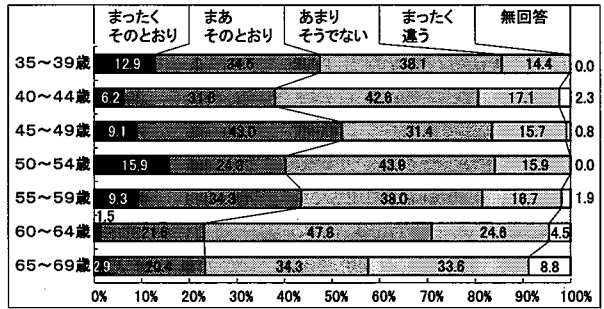
(4) 会社は自分を正当に評価している(していた)



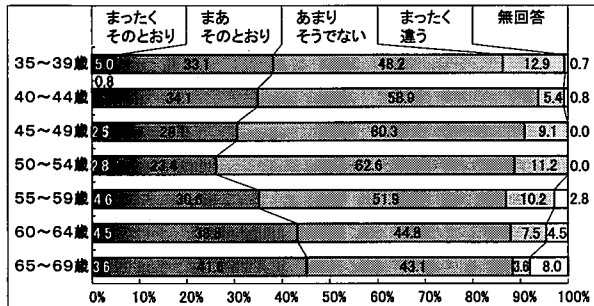
(5) 自分の会社には尽くしたい



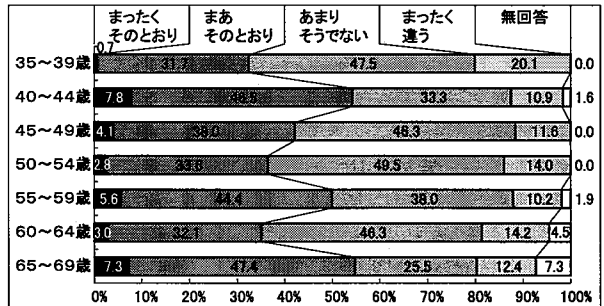
(6) 脱サラを考えたことがある・脱サラしたい



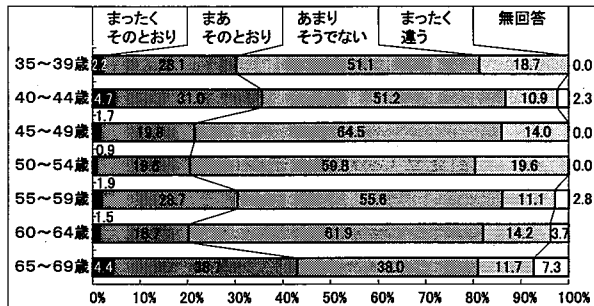
(7) 上司や同僚とは仕事を離れてもつき合いたい



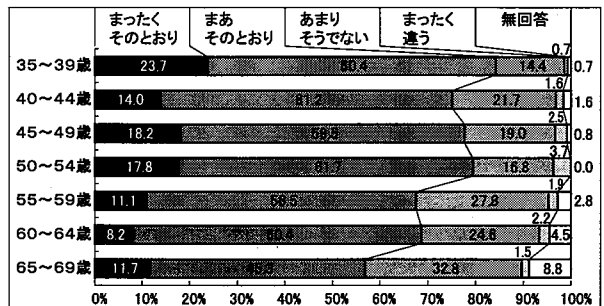
(8) 仕事で個人の生活が犠牲になってもやむを得ない



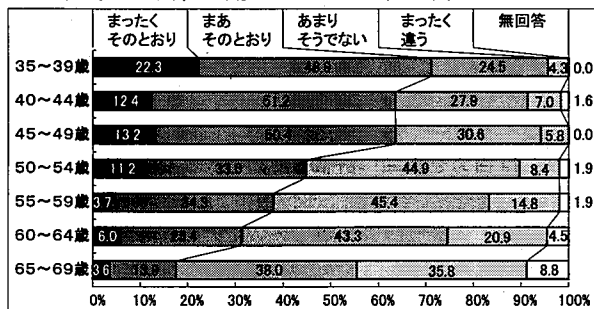
(9) 仕事をするからには多少無理しても出世したい



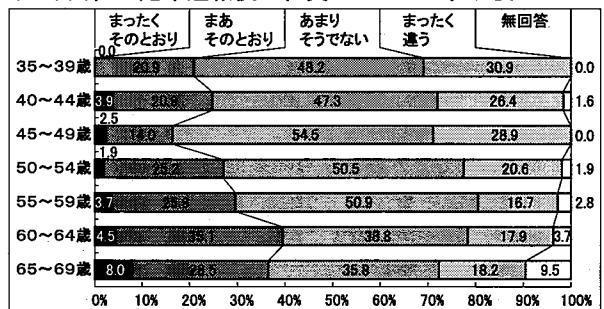
(10) 出世よりも興味のある仕事に専念したい



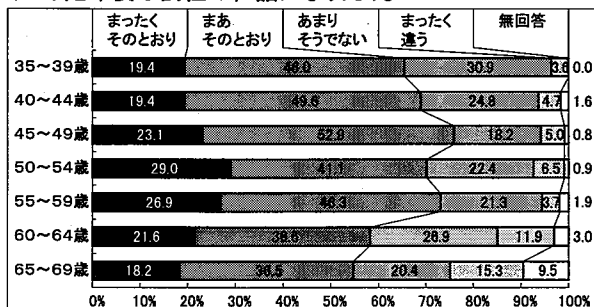
(11) 定年まで会社に勤められるかどうか不安だ



(12) 会社は定年退職後の社員へのめんどうみもよい



(13) 定年後は会社の世話になりたくない



② 仕事や会社とのかかわり方(実態)(本人調査:問 23)

仕事や会社とのかかわり方についてたずねた。『仕事の後や休日につき合う相手は、会社の上司や同僚よりも会社以外の人であることが多い』では「あてはまる」が 32.0%で「どちらかといえばあてはまる」の 28.7%を加えた<そのとおり>では、60.7%が肯定的であり、上司や同僚よりも、むしろ会社や仕事以外の人に多くのかかわりを持っていた。年齢層別では「55～59歳」層が 69.5%と最も高く、以下「35～39歳」(69.1%)、「50～54歳」(65.4%)と続いた。

また、『今の会社にずっと勤め続けるつもりで、経済的な生活設計をしている』では、<そのとおり>の肯定回答は 77.0%で、多くは今の会社に勤め続ける考えであり、否定回答(21.2%)を大きく上回った。年齢層別では、退職年齢前の「60～64歳」層で 82.1%と最も高く、また全年齢層で 70%を上回った。

『勤めている会社の一員であることや社内での地位以外に、自分の誇りとなるものがある』は、<そのとおり>の肯定回答は 62.4%であり、年齢層別でみると、「40～44歳」(52.8%)で最も低く、他の年齢層は全て 60%台であった。

『会社での研修や職場訓練以外に、自分自身で職業能力を高める努力をしている』では、<そのとおり>の肯定回答(52.7%)が否定回答(45.2%)を僅かに上回った。年齢層別<そのとおり>では、「35～39歳」(43.2%)が最も低く、定年が迫った「55～59歳」層が 60.2%と最も高くなっている。

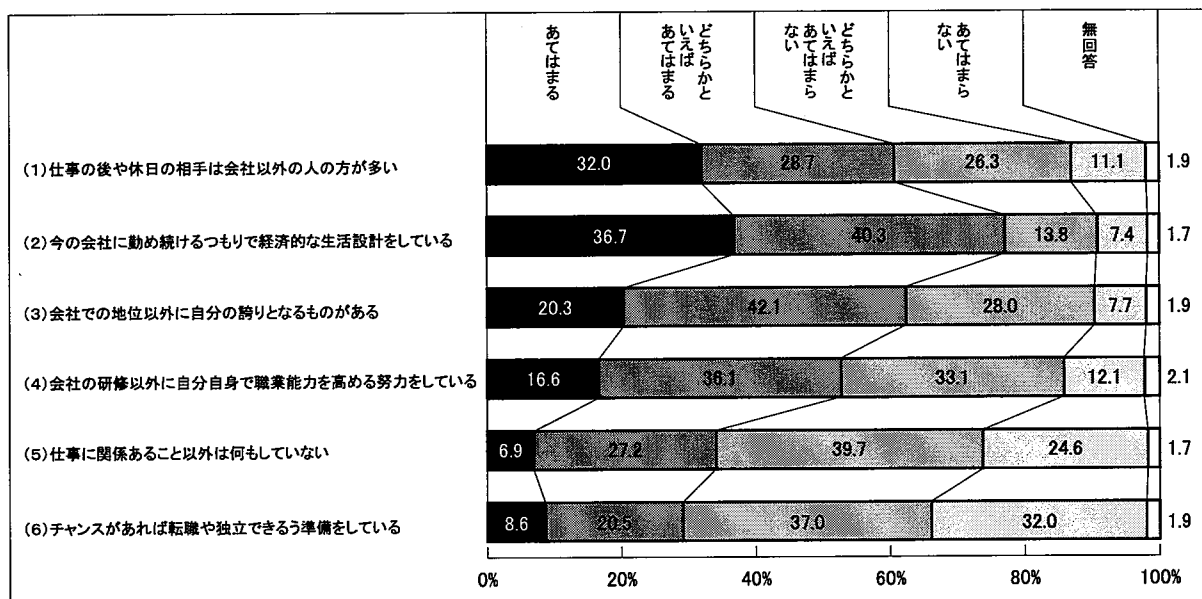
『生活全体の中で、仕事の関係のあること以外は、ほとんど何もしていない』では、<そうではない>の否定回答(64.3%)が、肯定回答(34.1%)を上回った。年齢層別でみると、「65～69歳」(56.2%)が最も低く、他の全ての年齢層で 60%を超え否定的であった。

『チャンスがあれば転職や独立できるよう準備をしている』では、否定回答の<そうではない>(69.0%)が肯定回答(29.1%)を大きく上回った。年齢層別でも、全て年齢層で 60%以上が転職や独立の準備をしていないとの回答であった。

会社への帰属意識は全ての年齢層で薄れてきているものの、積極的な転職や独立準備をしている人は少なく、今の会社にずっと勤め続けようとする実態が窺える。

図表(1)－3 会社とのかかわり方(全体)

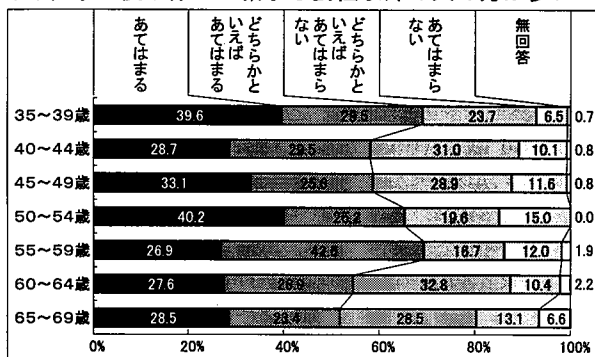
n=875 (%)



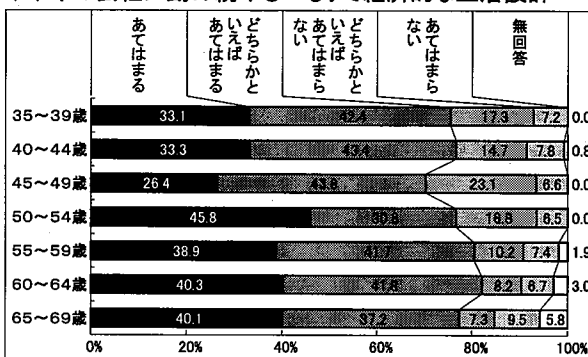
図表(1)-4 会社とのかかわり方(年齢層別)

n=875 (%)

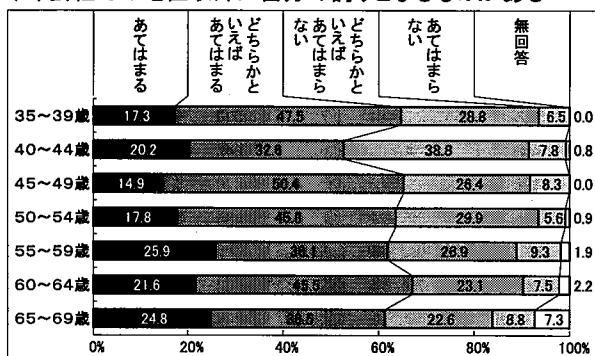
(1) 仕事の後や休日の相手は会社以外の方が多い



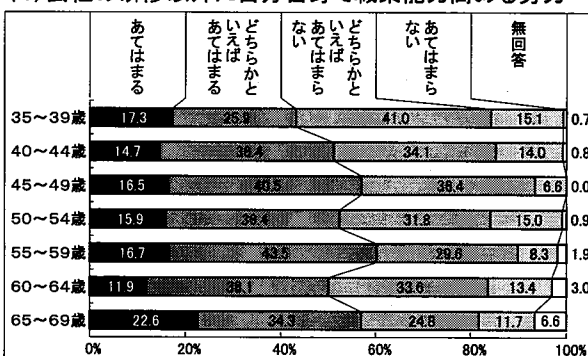
(2) 今の会社に勤め続けるつもりで経済的な生活設計



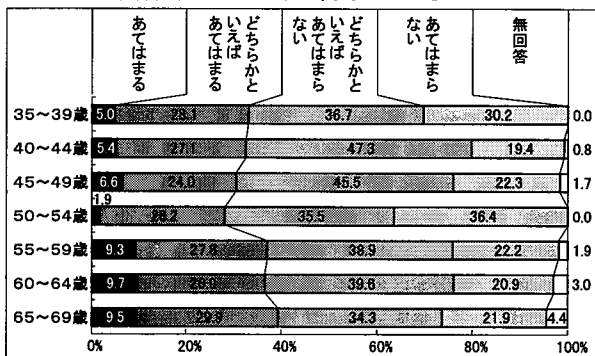
(3) 会社での地位以外に自分の誇りとなるものがある



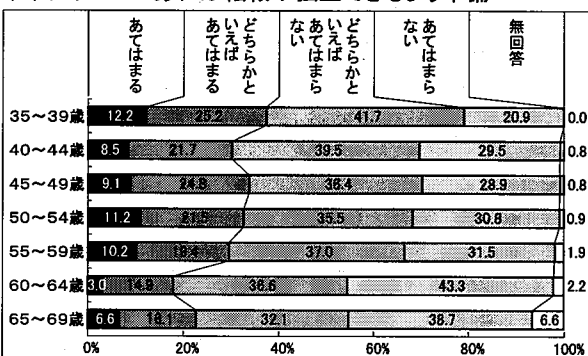
(4) 会社の研修以外に自分自身で職業能力高める努力



(5) 仕事に関係あること以外は何もしていない



(6) チャンスがあれば転職や独立できるよう準備



(2)夫婦・家庭

① 夫婦関係

a. 配偶者への意識(本人調査:問9、配偶者調査:問7)

本人とその配偶者について、互いに日頃の関係をどのように感じているか15項目をあげ4段階で回答してもらった。

「まったくそのとおり」「まあそのとおり」を加えた<あてはまる>をみると、本人の回答では、『頼りにしてくれている』『理解してくれている』『私を愛している』『妻と対話がある』が高く8割以上の回答であった。続いて、『よく一緒に出かける』『趣味や行動を尊重してくれる』『能力や努力を高く評価してくれる』『心配事や悩み事を聞いてくれる』『妻は私がいないと駄目だ』が7割以上の高い回答を得た。反対に<あてはまらない>の否定回答は、『妻と共通の趣味がある』『妻との公平な家事を分担している』で6割前後の回答であった。

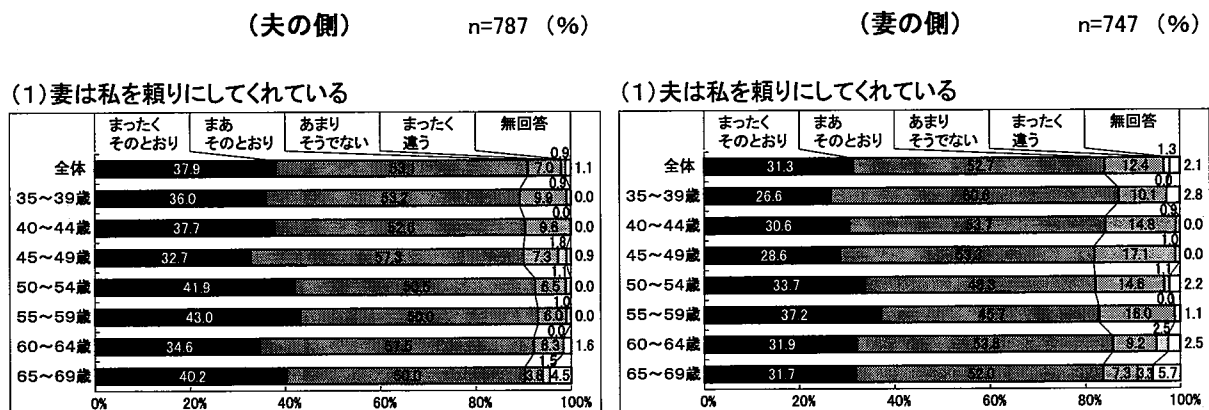
一方、妻の側では、『私を頼りにしてくれている』『私を愛している』『趣味や行動を尊重してくれる』が8割以上、『理解してくれている』『夫と対話がある』『心配事や悩み事を聞いてくれる』で7割以上の高い回答を示したが、『趣味や行動を尊重してくれる』以外は全て夫の方が高い数値を示した。

また、<あてはまらない>の否定回答では、夫の回答と同様『夫と私は、家事を公平に分担しておこなっている』『夫と共通の趣味がある』が高く5~6割強の回答であった。

年齢層別にみると、本人では、『私を愛している』『価値観・考え方が似ている』『能力や努力を高く評価してくれる』『共に子育てを行っている』『妻は私がいないと駄目だ』は低年齢層で高く、高齢者年齢層では低くなる傾向がみられた。配偶者については、『私を愛している』『価値観・考え方が似ている』『共に子育てを行っている』『私は夫がいないと駄目だ』で同様の傾向がみられた。

また、『妻(夫)は私がいないと駄目だ』に対する、お互いの意識の差については、夫が思っている(49.7%)以上に妻自身は『夫がいないと駄目だ』(63.8%)と思っており、また一方、妻が思っている(59.9%)以上に夫自身は『妻がいないと駄目だ』(72.1%)と感じており、互いの意識に10ポイント以上の開きがみられた。

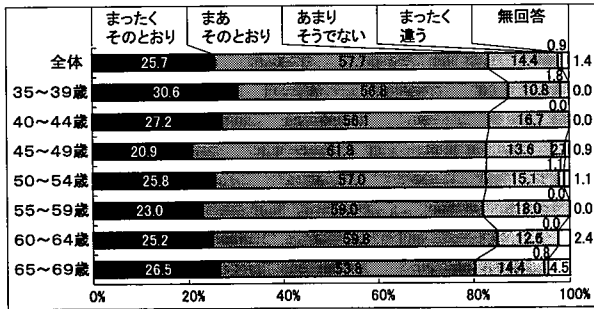
図表(2)-1 配偶者への意識



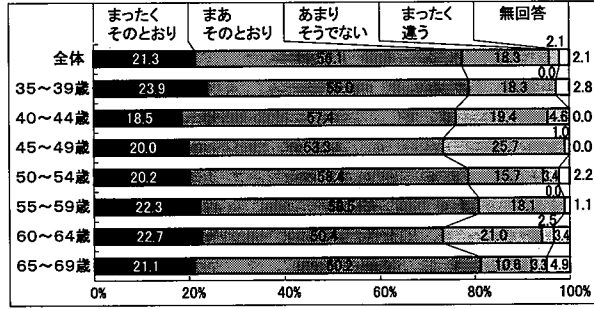
(夫の側) n=787 (%)

(妻の側) n=747 (%)

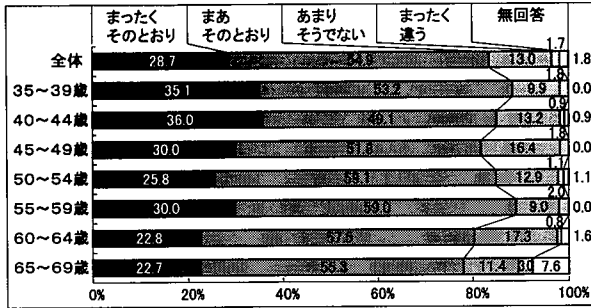
(2)妻は私を理解してくれている



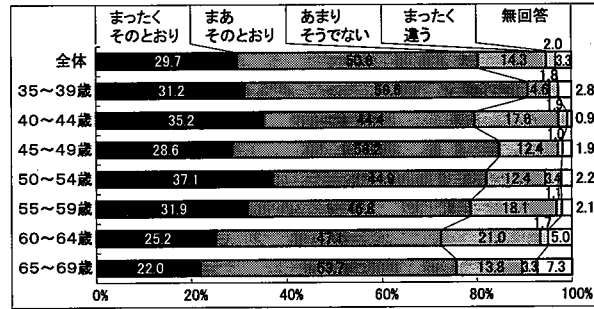
(2)夫は私を理解してくれている



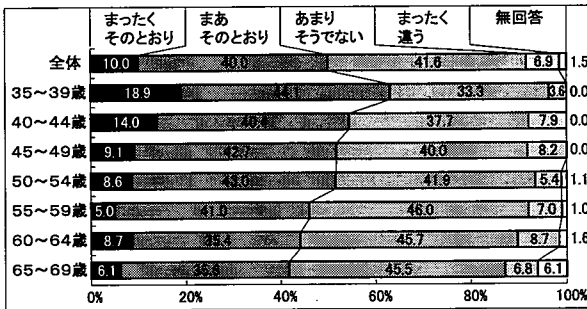
(3)妻は私を愛している



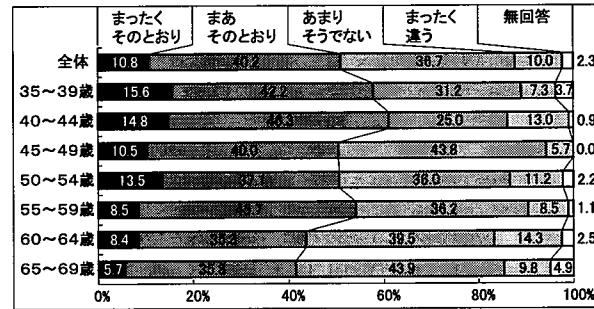
(3)夫は私を愛している



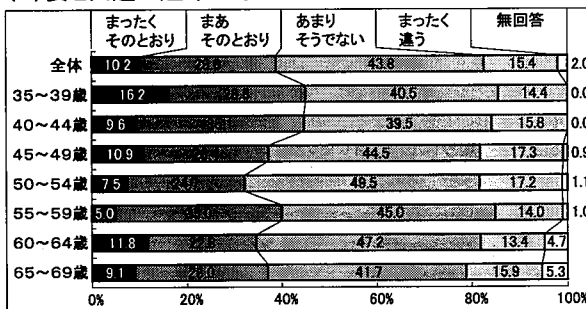
(4)妻と価値観・考え方が似ている



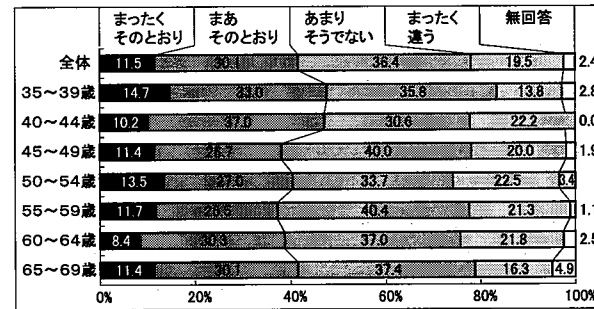
(4)夫と価値観・考え方が似ている



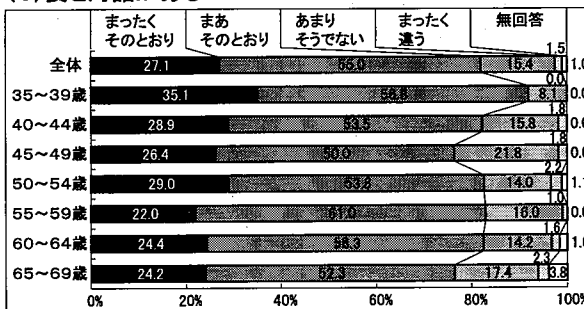
(5)妻と共通の趣味がある



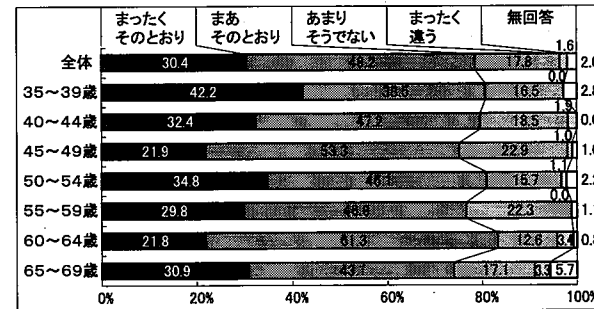
(5)夫と共通の趣味がある



(6)妻と対話がある



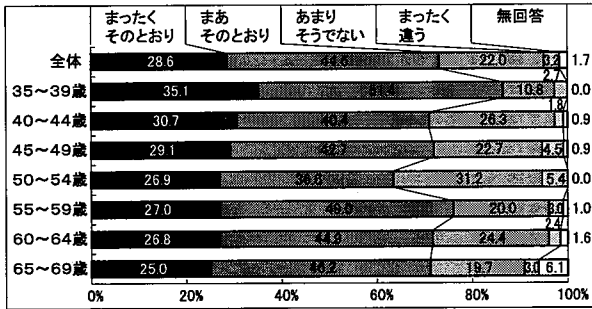
(6)夫と対話がある



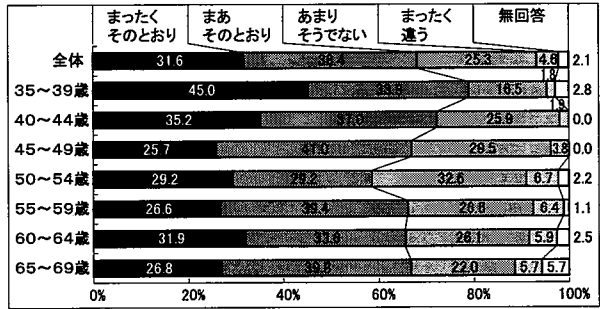
(夫の側) n=787 (%)

(妻の側) n=747 (%)

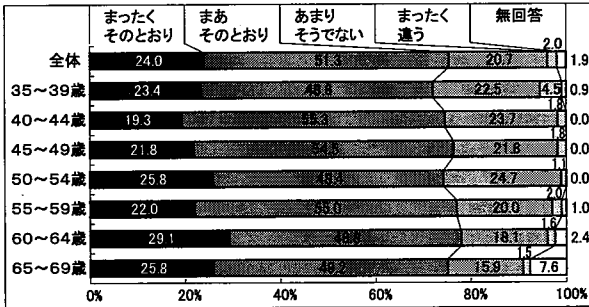
(7)妻とよく一緒に出かける



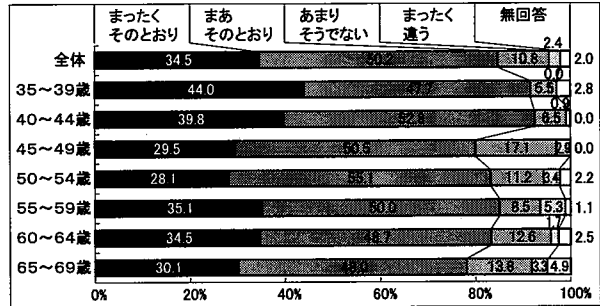
(7)夫とよく一緒に出かける



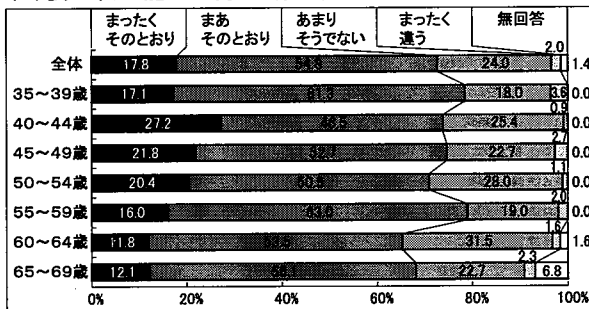
(8)妻は私の趣味や行動を尊重してくれる



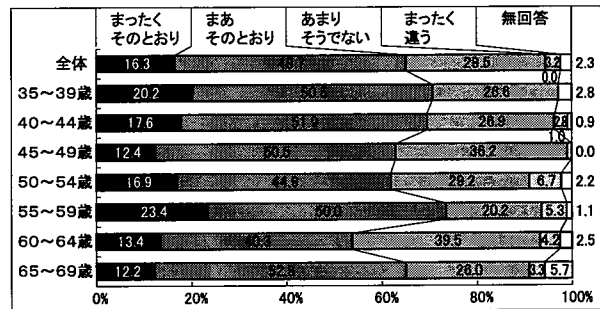
(8)夫は私の趣味や行動を尊重してくれる



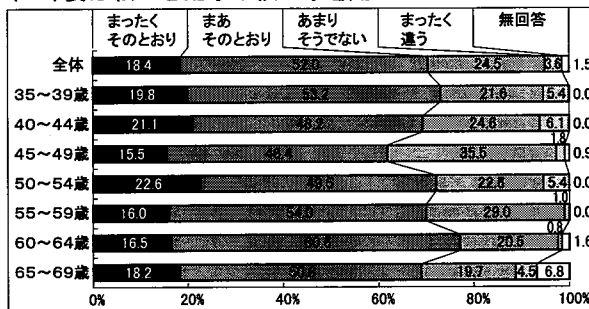
(9)妻は私の能力や努力を高く評価してくれる



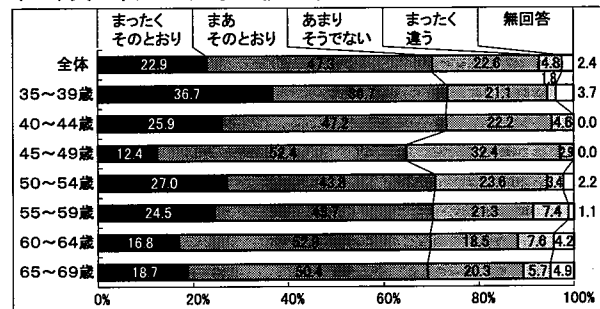
(9)夫は私の能力や努力を高く評価してくれる



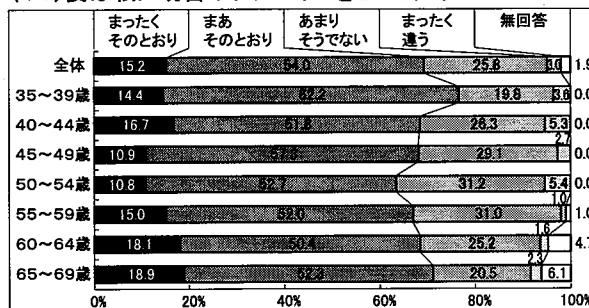
(10)妻は私の心配事や悩み事を聞いてくれる



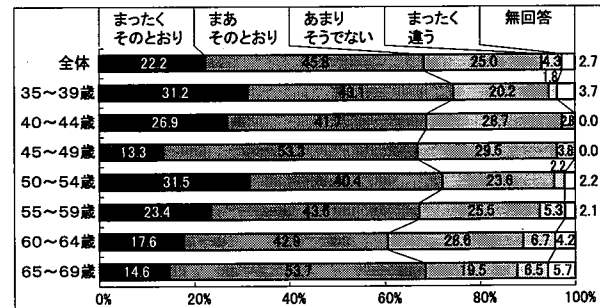
(10)夫は私の心配事や悩み事を聞いてくれる



(11)妻は私に助言やアドバイスをしてくれる



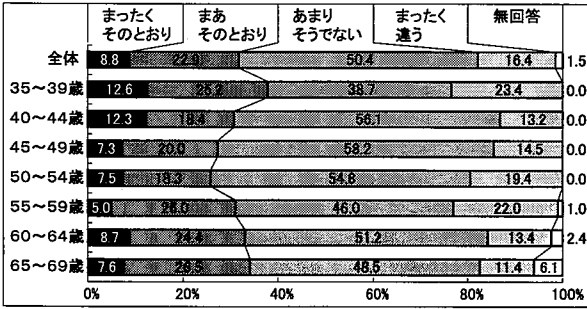
(11)夫は私に助言やアドバイスをしてくれる



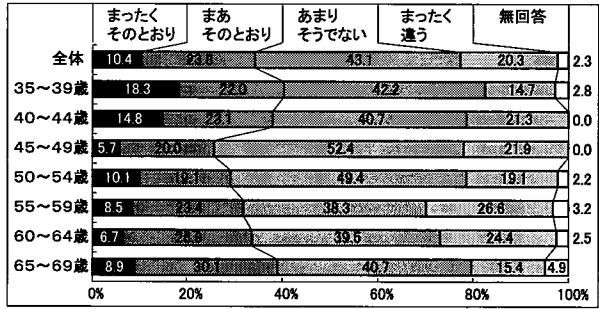
(夫の側) n=787 (%)

(妻の側) n=747 (%)

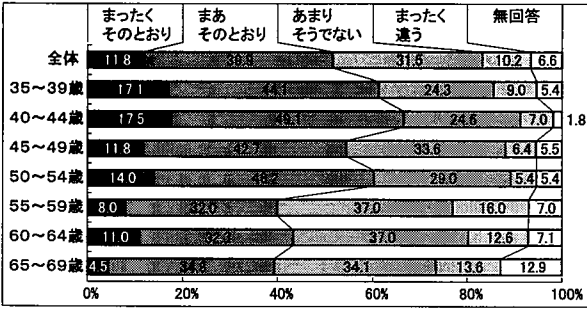
(12)妻と私は家事を公平に分担しておこなっている



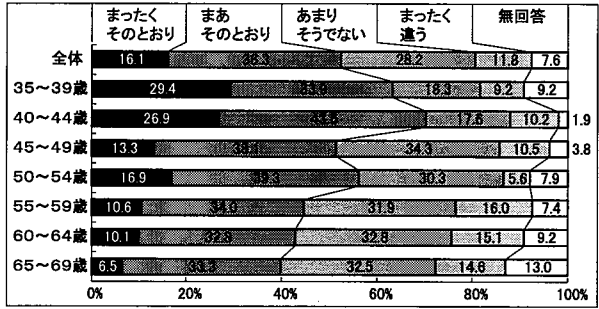
(12)夫と私は家事を公平に分担しておこなっている



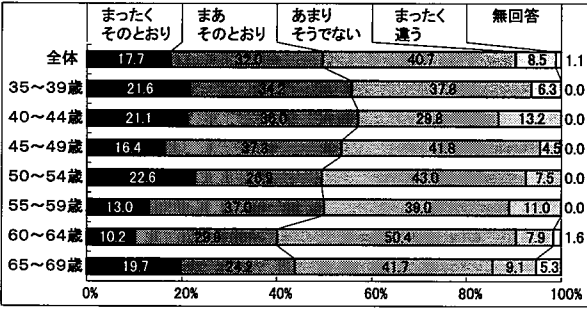
(13)妻と私は、ともに子育てをおこなっている



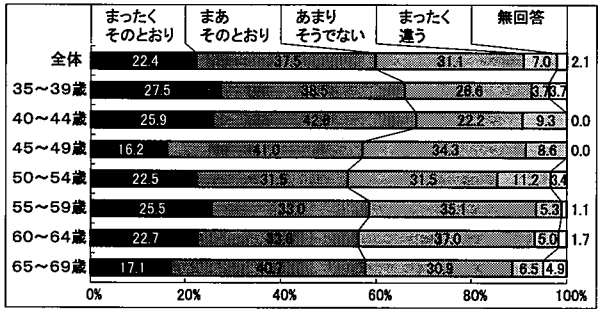
(13)夫と私は、ともに子育てをおこなっている



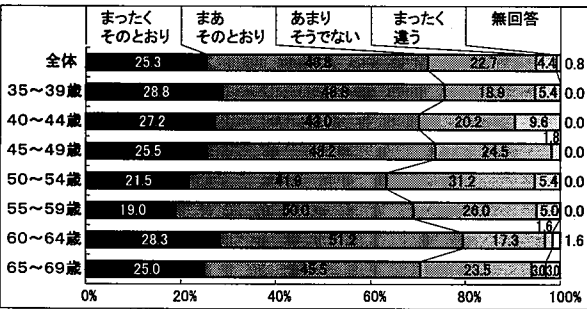
(14)妻は、私がいないと駄目だ



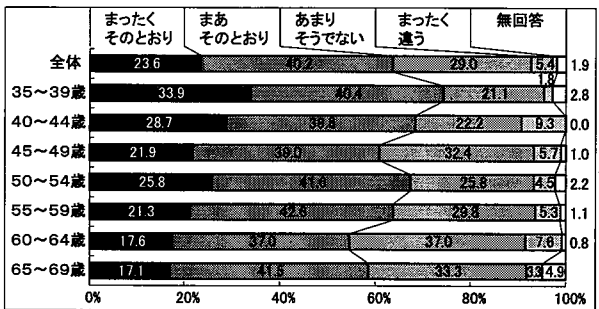
(14)夫は、私がいないと駄目だ



(15)私は、妻がいないと駄目だ



(15)私は、夫がいないと駄目だ



(注) (妻の側) の年齢区分は、主人 (夫) の年齢層別区分で分類

b. 配偶者との生活の実態(本人調査:問 10)

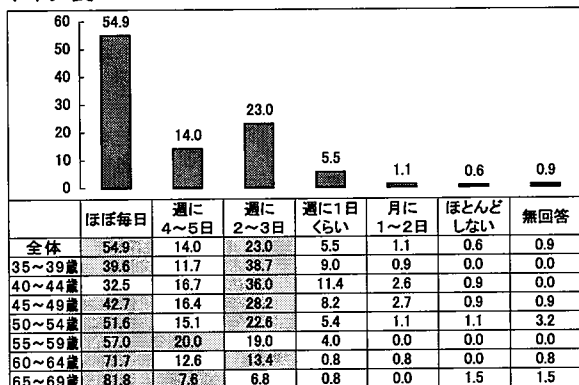
夫の配偶者との日頃の生活について、『夕食』『買物』『食事の用意』『洗濯』『風呂掃除』等の家事参加および『意見の食い違い』についての実態をたずねた。

『夕食』は、半数以上が「ほぼ毎日」共に食事をとっており、高齢層になるにつれ比率は上昇する。『買物』は半数近くが「週に1日くらい」で買物をしているが、高齢層になるとその回数は分散していく。『洗濯』については、6割の夫が「ほとんどしない」の回答であるが、『食事の用意』『風呂掃除』については、6割前後の夫が、参加程度にバラツキはあるものの、手伝いに参加していた。

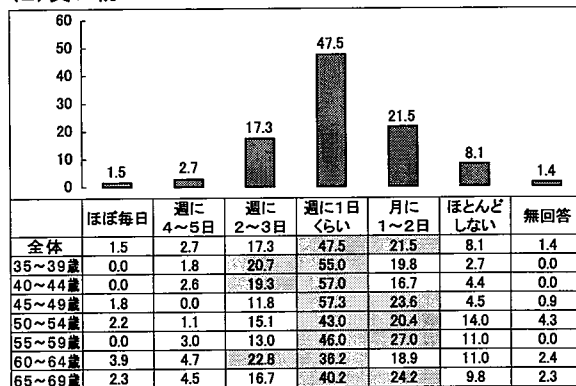
図表(2)－2 配偶者との生活実態

n=787 (%)

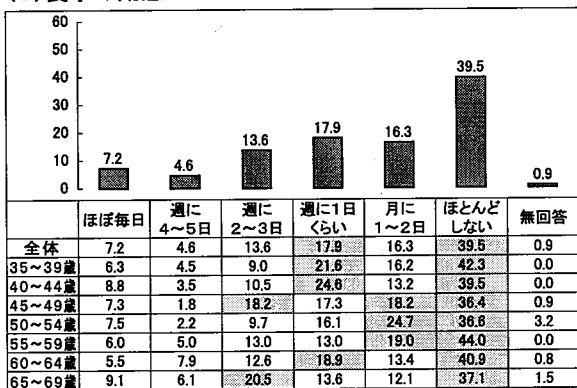
(1) 夕食



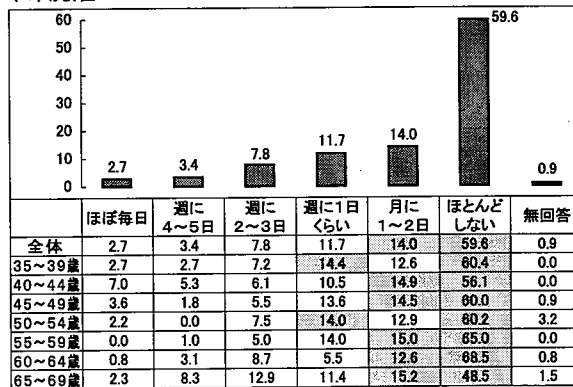
(2) 買物



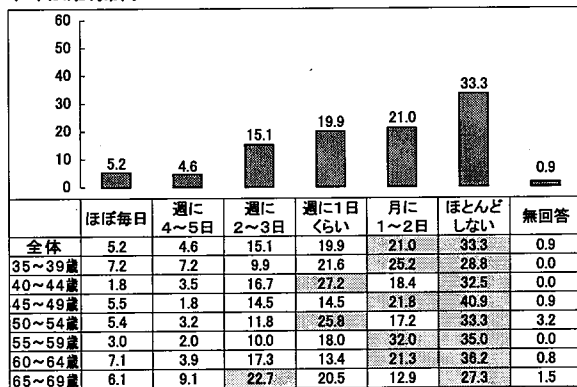
(3) 食事の用意



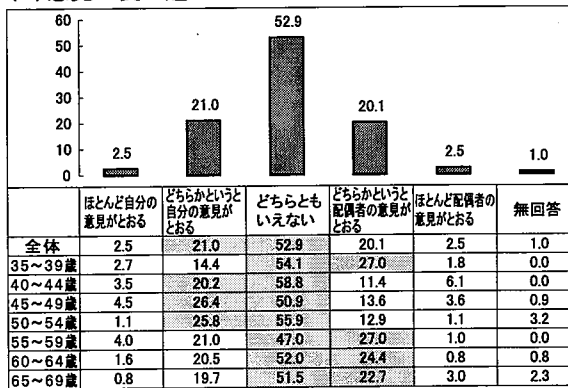
(4) 洗濯



(5) 風呂掃除



(6) 意見の食い違い



(年齢層別に上位2位まで網掛け)

② 親との関係

次に親との関係について、「自分の親」と「配偶者の親」との日頃のかかわりをたずねた。

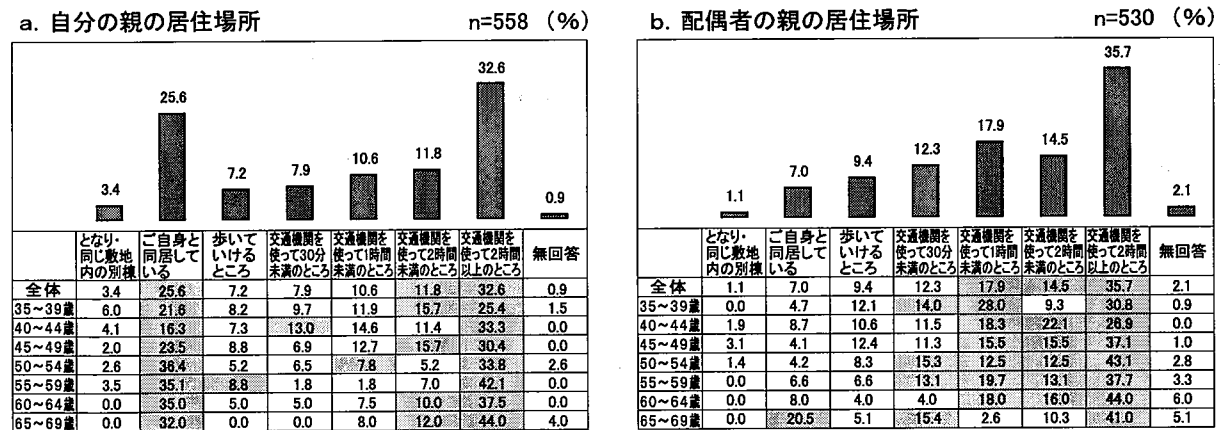
a. 自分の親の居住場所(本人調査:問 12(1))

親との居住距離については、「交通機関を使って2時間以上のところ」が最も多く、32.6%であり、次に「自分の親との同居」が25.6%と続いた。同居では、50歳以降の年齢層で、他の年齢層に比べて10ポイント以上同居率が上昇している。

b. 配偶者の親の居住場所(配偶者調査:問 10(1))

配偶者の親との居住距離では、自分の親と同様「交通機関を使って2時間以上のところ」が35.7%と多いが、「交通機関を使って1時間未満のところ」以内の近距離に4割強が配偶者の親が居住していた。

図表(2)-3 親の居住場所(自分の親と配偶者の親)



(年齢層別に上位3位まで網掛け)

c. 日頃の親との付き合い(本人調査:問 12(2)、問 13、配偶者調査:問 10(2)、問 11)

「自分の親」と「配偶者の親」との日頃の付き合いについて、『ちょっとした話』『ちょっとした用事』『外出』の日頃の頻度を、男性(本人)と女性(配偶者)それぞれにたずねた。(ここでは、本人について男性、配偶者を女性とした)

『ちょっとした話をする』では男性の「自分の親」とは、「月に1~2回」(31.4%)が最も多く、次に「年に数回」(25.6%)であり、又、「配偶者の親」に対しては、「年に数回」が46.6%、「月に1~2回」(26.0%)と続いた。

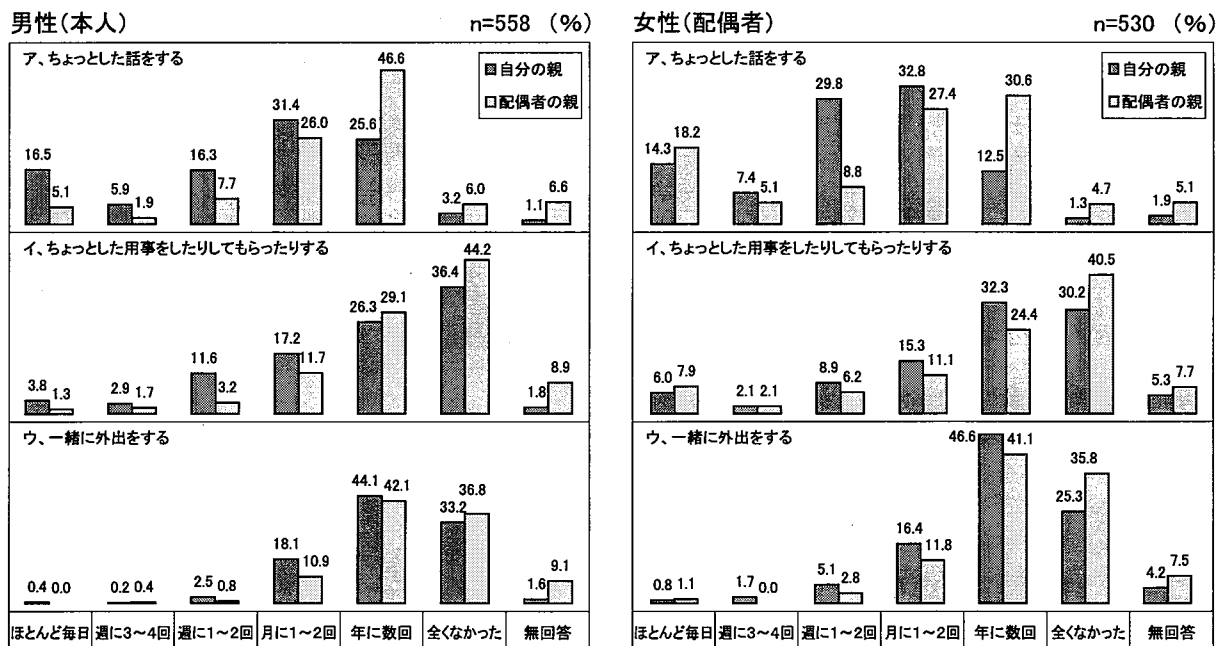
また女性については、「自分の親」とは「月に1~2回」(32.8%)が男性と同様最も多いが、次に「週に1~2回」(29.8%)が続く、男性よりは13ポイント高い。また、「一週間で1~2回」以上でみると、男性の38.7%に対し、女性は51.5%と半数以上が「自分の親」と『ちょっとした話』をしている。また、女性の「配偶者の親」については、「一週間で1~2回」以上でみると、男性の14.7%に対し女性では32.1%と17.4ポイント高く、特に「ほとんど毎日」では、男性の「自分の親」と話す(16.5%)よりも1.7ポイント高く「配偶者の親」と話していた。

『ちょっとした用事をしたり、してもらったりする』では、男性では、「全くなかった」(36.4%)と「年に数回」(26.3%)が6割を占め、配偶者の親に対しては、7割を越えた。また、女性についても、同様に「自分の親」、「配偶者の親」とともに、「年に数回」「全くなかった」で6割を超え、男女共、あまり積極的なかわりはしていなかった。

『一緒に外出する』については、男性、女性ともに、「自分の親」とは「年に数回」が、4割半ばで最も多く、「配偶者の親」についても同様に4割強であった。また「全くなかった」では、男性は「自分の親」「配偶者の親」とともに3割台であるが、女性では「配偶者の親」は3割、「自分の親」とでは、2割半ばであった。

男性に比べると女性の方が、日頃、「自分の親」や「配偶者の親」に対し、かかわりを保っているが、親との行動については、男女ともに、ある程度の距離を持ってかかわっていることが示唆される。

図表(2)-4 親との付き合い



(3) 地域・社会

① 社会に役立つ活動(本人調査:問2、配偶者調査:問2)

ボランティアなどの社会に役立つ活動に対する考えについて、本人とその配偶者に3つまでの複数回答でたずねた。

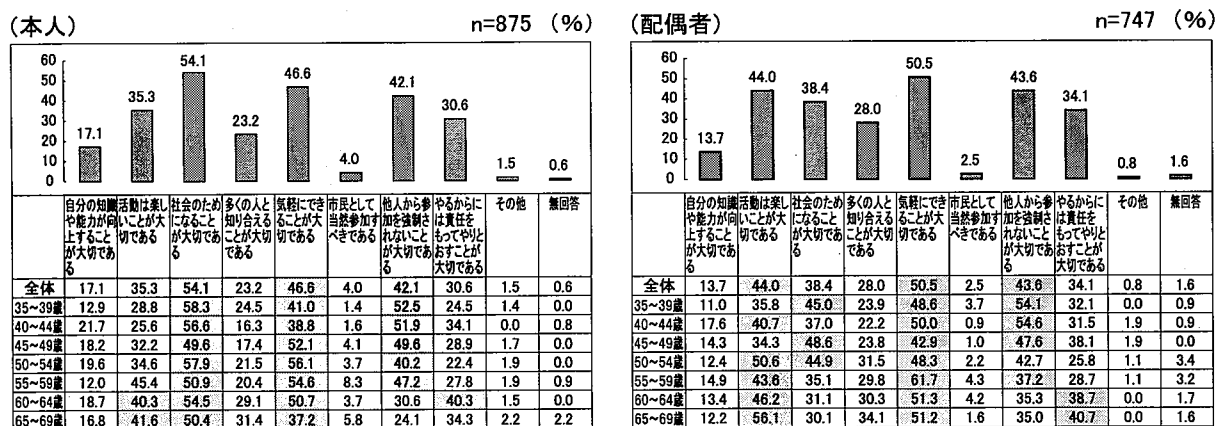
本人については、『社会のためになることが大切である』(54.1%)が1位に考えられており、以下『気軽にできることが大切である』(46.6%)、『他人から参加を強制されないことが大切である』(42.1%)と続いた。また、配偶者でみると、1位が『気軽にできることが大切である』(50.5%)で、次に『活動は楽しいことが大切である』(44.0%)、『他人から参加を強制されないことが大切である』(43.6%)と続き、本人の『社会のためになることが大切である』に替わり『活動は楽しいことが大切である』が上位3位内に入った。

「社会に役立つ活動」は、本人、配偶者とも楽しく、気軽に参加し、強制されないことが重要な要素と考えているが、特に男性(本人)では、半数以上が『社会のため』であるとの意識が強く表れた。

年齢層別にみると、本人では、35歳から59歳までの各年齢層で『社会のため』『気軽にでき』『強制されないこと』を上位3位にあげたが、60歳から69歳の年齢層では『強制されないこと』に替わり、『活動は楽しいことが大切である』『やるからには責任をもってやりとおすことが大切である』を上位にあげた。

配偶者については、『気軽にできることが大切である』が全ての年齢層で上位3位内に入ったが、その他に『強制されないこと』『楽しいことが大切』『社会のため』が上位を占めた。特に60歳から69歳の年齢層では『やるからには責任をもってやりとおすことが大切である』が新たに上位3位に入った。

図表(3)-1 社会に役立つ活動



(年齢層別に上位3位まで網掛け)

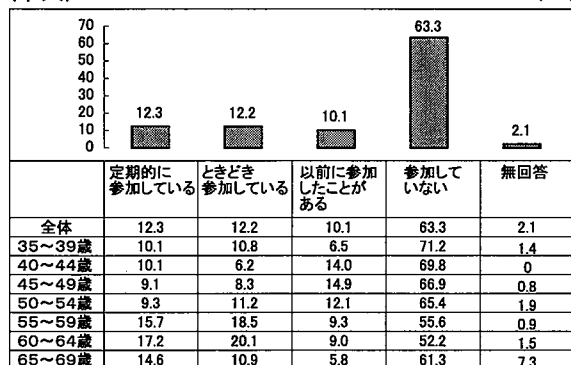
② 社会参加状況(本人調査:問3、配偶者調査:問3)

社会活動の参加についてたずねた。本人については、『定期的に参加している』(12.3%)と『ときどき参加している』(12.2%)を合わせた現状での参加率は22.5%であった。また『参加していない』(63.3%)と『以前に参加したことがある』(10.1%)を合わせた不参加率は73.4%であった。

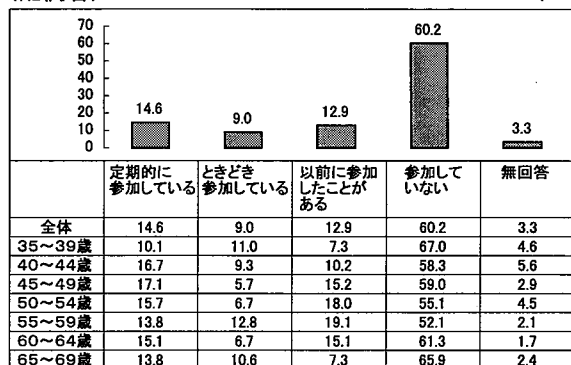
また、配偶者についても、『定期的に参加している』(14.6%)、『ときどき参加している』(9.0%)の参加率は23.6%であり、また不参加率は『参加していない』(60.2%)、『以前に参加したことがある』(12.9%)と不参加者が7割を超え、本人とほぼ同様な傾向を示している。

図表(3)－2 社会活動参加状況

(本人) n=875 (%)



(配偶者) n=747 (%)



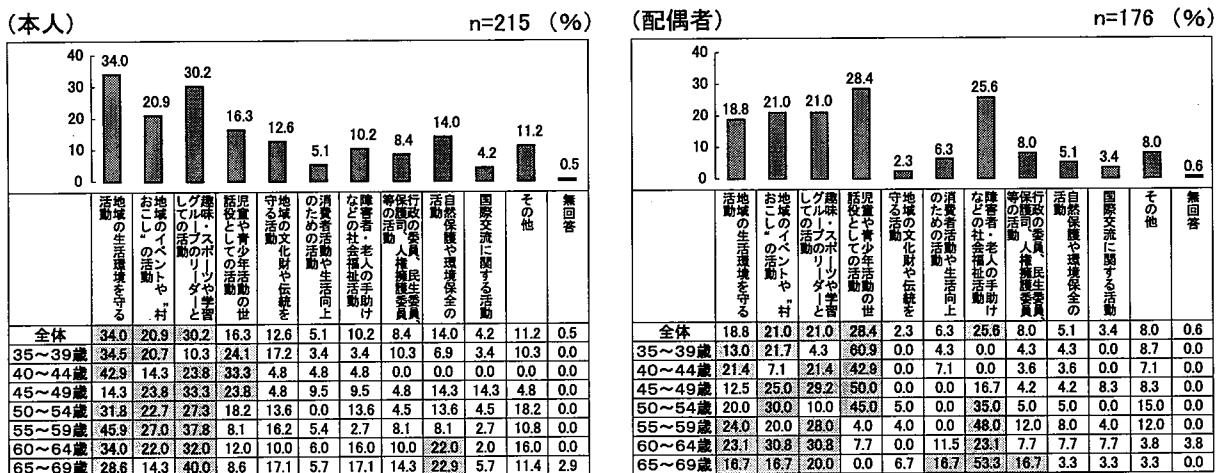
③ 社会活動参加分野(本人調査:問3付問1、配偶者調査:問3付問1)

次に、社会参加をしている人について、その活動分野を複数回答でたずねた。

本人については、その活動の分野は、『地域の生活環境を守る活動』(34.0%)が最も多く、次に『趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動』(30.2%)、『地域のイベントや‘村おこし’の活動』(20.9%)と続いた。また、配偶者については、『児童や青少年活動の世話役としての活動』(28.4%)、『障害者、老人の手助けなどの社会福祉活動』(25.6%)が本人の『地域の生活環境を守る活動』に替わり上位となり、これは本人の2倍前後のポイントであった。次に本人と同じく『趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動』と『地域のイベントや‘村おこし’の活動』が21.0%で続いた。

年齢層別では、本人について、『地域の生活環境を守る活動』が「45～49歳」(14.3%)以外、全ての年齢層で配偶者のほぼ2倍のポイントとなった。また、配偶者については『児童や青少年活動の世話役としての活動』が「55～59歳」層から激減するのに対し、『障害者、老人の手助けなどの社会福祉活動』が「45～49歳」層以降に急速に増加傾向を示すのは、家族や身の回りにかけるライフスタイルの変化に影響しているものと示唆される。

図表(3)－3 社会活動参加分野



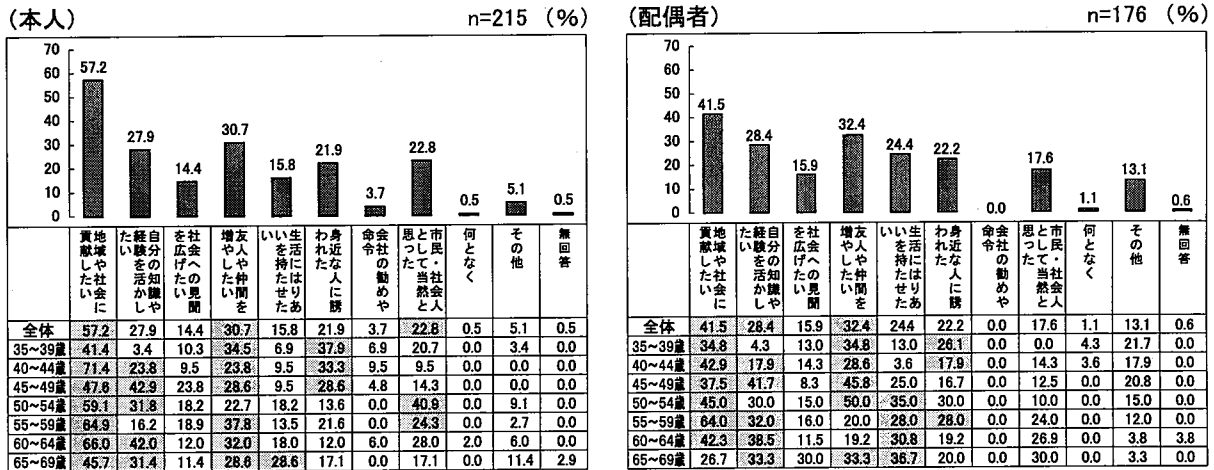
(年齢層別に上位3位まで網掛け)

④ 社会活動参加理由(本人調査:問3付問2、配偶者調査:問3付問2)

社会活動の参加理由について3つまでの複数回答でたずねた。本人では、『地域や社会に貢献したい』(57.2%)が最も多く、以下『友人や仲間を増やしたい』(30.7%)、『自分の知識や経験を活かしたい』(27.9%)と続いた。また、配偶者でも、上位3位迄は本人と同様に『地域や社会に貢献したい』(41.5%)、『友人や仲間を増やしたい』(32.4%)、『自分の知識や経験を活かしたい』(28.4%)となったが、4位に『生活にはりあいを持たせたい』が本人よりも8.6ポイント高く24.4%で続いた。

年齢層別では、上位3位はほぼ全ての年齢層で高い数値を示しているが、『地域や社会に貢献したい』では、本人が全ての年齢層で配偶者を大きく上回っている。また、配偶者においては、『生活にはりあいを持たせたい』について、子育てが終わったと思われる「45～49歳」以降の年齢層での選択率が高くなっている

図表(3)-4 社会活動参加理由



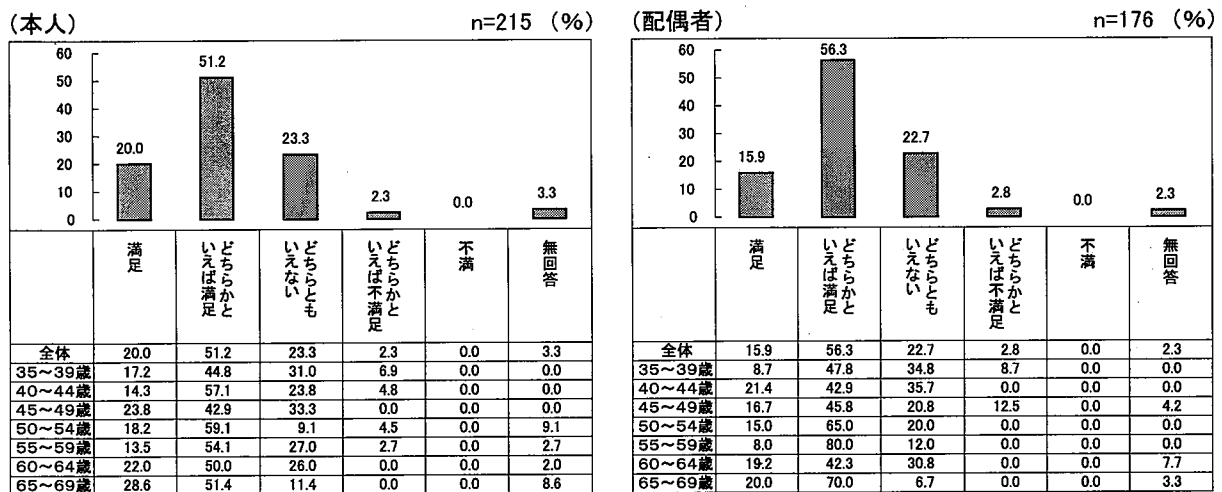
(年齢層別に上位3位まで網掛け)

⑤ 社会活動の満足度(本人調査:問3付問3、配偶者調査:問3付問3)

次に、社会活動の満足度についてたずねた。本人については、『満足』(20.0%)、『どちらかといえば満足』(51.2%)の71.2%が肯定し、また、配偶者でも『満足』(15.9%)、『どちらかといえば満足』(56.3%)の72.2%が肯定しており、まったくの『不満』は無く、本人とほぼ同様な満足度を示した。

年齢別にみると、『満足』と『どちらかといえば満足』を合わせた<満足している>をみると、本人では、年齢層の低い「35～39歳」(62.0%)が最も低く、逆に年齢層の高い「65～69歳」(80.0%)が最も高い満足度を示した。また、配偶者についても、「35～39歳」(56.5%)が最も低く、「65～69歳」(90.0%)が最も高い結果となり、本人と同様の傾向を示した。

図表(3)－5 社会活動の満足度



⑥ 社会活動の感想(本人調査:問3付問4、配偶者調査:問3付問4)

社会活動をしていて、具体的にどのように感じるか7項目についてたずねた。

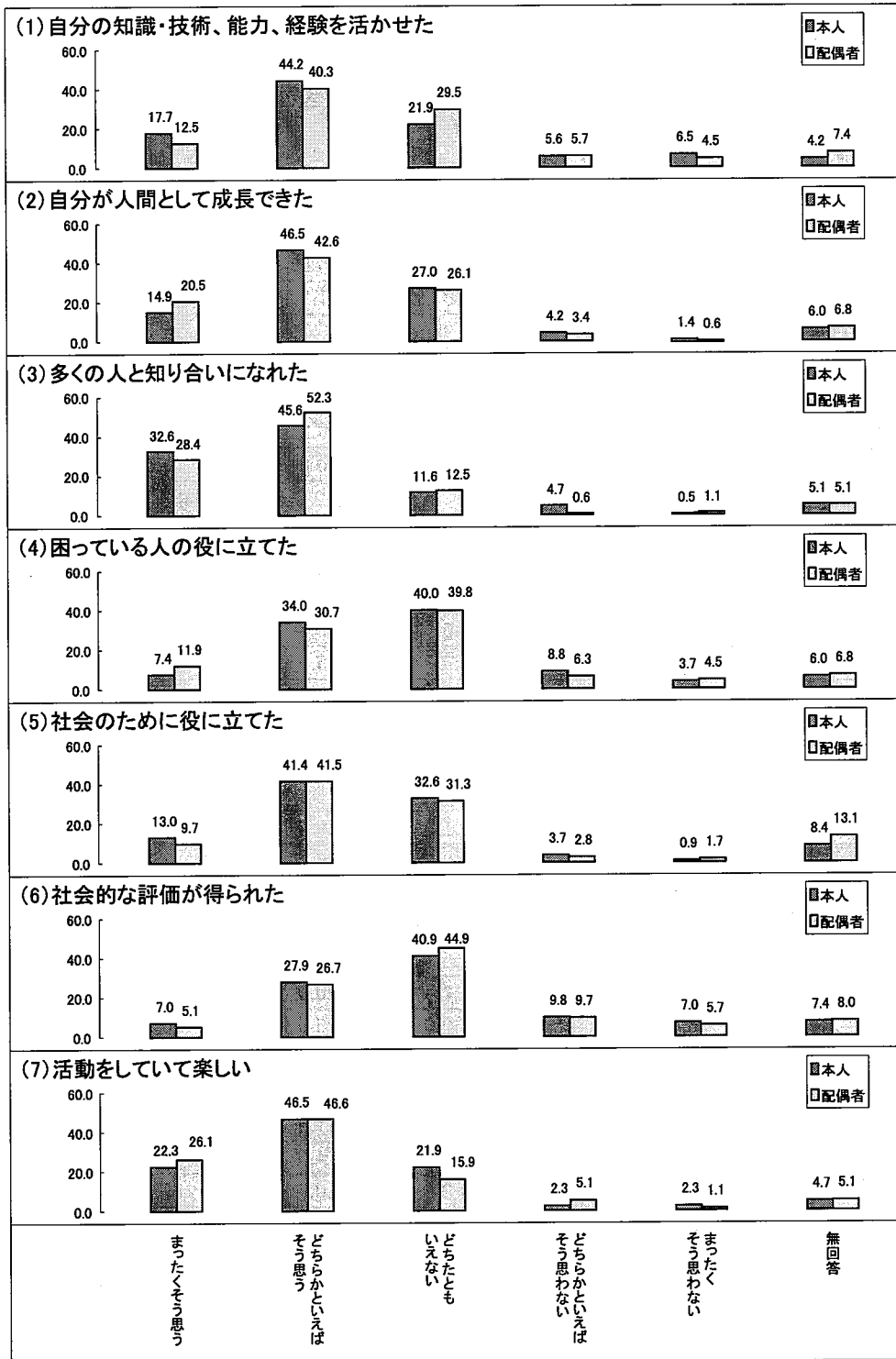
『多くの人と知り合いになれた』については、「まったくそう思う」では、本人(32.6%)、配偶者(28.4%)と他の項目に比べて最も高く、また、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた<そう思う>についても、本人(78.2%)、配偶者(80.7%)とも8割前後が肯定的であった。年齢層別でも、全年齢層を通じ同様に高い評価を得た。

次に高いのは、『活動をしていて楽しい』であり、<そう思う>で本人(68.8%)、配偶者(72.7%)と7割前後の肯定回答であった。

最も低いのは、『社会的な評価を得られた』であり「まったくそう思う」では、本人(7.0%)、配偶者(5.1%)と共に低く、また<そう思う>でも、本人(34.9%)、配偶者(31.8%)ともに他の項目と比べ低い数値を示した。年齢層別にみると、全般的に若い年齢層で低く、特に配偶者では、「35～39歳」層で<そう思う>が13.0%、「40～44歳」層で14.3%と全体を通じ、最も低い結果となった。

図表(3)-6-1 社会活動の感想

本人 n=215、配偶者 n=176 (%)



図表(3)-6-2 社会活動感想

(本人)

(配偶者)

(%)

	標本数	まったくそ	どちらかと	どちらとも	どちらかと	まったくそ	無回答	標本数	まったくそ	どちらかと	どちらとも	どちらかと	まったくそ	無回答
		う思う	思いう	言えばそう	言えない	思いう			言えばそう	言えない	思いう	言えばそう	言えない	
		(1) 自分の知識・技術、経験を活かした							(1) 自分の知識・技術、経験を活かした					
全体	215	17.7	44.2	21.9	5.6	6.5	4.2	176	12.5	40.3	29.5	5.7	4.5	7.4
35歳～	29	6.9	41.4	24.1	6.9	20.7	0.0	23	0.0	30.4	43.5	8.7	13.0	4.3
40歳～	21	38.1	33.3	19.0	9.5	0.0	0.0	28	7.1	32.1	46.4	10.7	3.6	0.0
45歳～	21	19.0	52.4	19.0	4.8	4.8	0.0	24	16.7	45.8	16.7	12.5	0.0	8.3
50歳～	22	13.6	45.5	36.4	0.0	0.0	4.5	20	20.0	35.0	35.0	5.0	0.0	5.0
55歳～	37	8.1	37.8	32.4	10.8	5.4	5.4	25	16.0	44.0	40.0	0.0	0.0	0.0
60歳～	50	22.0	46.0	16.0	2.0	6.0	8.0	26	19.2	38.5	19.2	3.8	7.7	11.5
65歳～	35	20.0	51.4	11.4	5.7	5.7	5.7	30	10.0	53.3	10.0	0.0	6.7	20.0
		(2) 自分が人間として成長できた							(2) 自分が人間として成長できた					
全体	215	14.9	46.5	27.0	4.2	1.4	6.0	176	20.5	42.6	26.1	3.4	0.6	6.8
35歳～	29	17.2	41.4	27.6	6.9	6.9	0.0	23	17.4	39.1	39.1	4.3	0.0	0.0
40歳～	21	19.0	33.3	38.1	9.5	0.0	0.0	28	14.3	42.9	32.1	3.6	3.6	3.6
45歳～	21	28.6	52.4	19.0	0.0	0.0	0.0	24	33.3	37.5	16.7	4.2	0.0	8.3
50歳～	22	13.6	68.2	13.6	0.0	0.0	4.5	20	15.0	65.0	20.0	0.0	0.0	0.0
55歳～	37	5.4	54.1	25.1	0.0	0.0	5.4	25	16.0	48.0	28.0	0.0	0.0	8.0
60歳～	50	12.0	38.0	30.0	8.0	2.0	10.0	26	19.2	42.3	23.1	7.7	0.0	7.7
65歳～	35	17.1	45.7	20.0	2.9	0.0	14.3	30	26.7	30.0	23.3	3.3	0.0	16.7
		(3) 多くの人と知り合いになった							(3) 多くの人と知り合いになった					
全体	215	32.6	45.6	11.6	4.7	0.5	5.1	176	28.4	52.3	12.5	0.6	1.1	5.1
35歳～	29	27.6	55.2	6.9	6.9	3.4	0.0	23	26.1	60.9	8.7	0.0	4.3	0.0
40歳～	21	28.6	52.4	19.0	0.0	0.0	0.0	28	28.6	53.6	10.7	0.0	3.6	3.6
45歳～	21	42.9	38.1	9.5	4.8	0.0	4.8	24	33.3	54.2	8.3	4.2	0.0	0.0
50歳～	22	22.7	59.1	13.6	0.0	0.0	4.5	20	55.0	35.0	10.0	0.0	0.0	0.0
55歳～	37	32.4	43.2	18.9	2.7	0.0	2.7	25	20.0	64.0	12.0	0.0	0.0	4.0
60歳～	50	32.0	46.0	6.0	10.0	0.0	6.0	26	26.9	42.3	26.9	0.0	0.0	3.8
65歳～	35	40.0	31.4	11.4	2.9	0.0	14.3	30	16.7	53.3	10.0	0.0	0.0	20.0
		(4) 困っている人の役に立てた							(4) 困っている人の役に立てた					
全体	215	7.4	34.0	40.0	8.8	3.7	6.0	176	11.9	30.7	39.8	6.3	4.5	6.8
35歳～	29	6.9	34.5	41.4	6.9	10.3	0.0	23	4.3	34.8	56.5	0.0	4.3	0.0
40歳～	21	4.8	28.6	52.4	14.3	0.0	0.0	28	10.7	14.3	57.1	14.3	0.0	3.6
45歳～	21	9.5	42.9	38.1	9.5	0.0	0.0	24	12.5	33.3	41.7	8.3	0.0	4.2
50歳～	22	9.1	31.8	45.5	4.5	4.5	4.5	20	5.0	35.0	50.0	5.0	5.0	0.0
55歳～	37	5.4	18.9	54.1	13.5	5.4	2.7	25	20.0	40.0	24.0	8.0	4.0	4.0
60歳～	50	6.0	40.0	32.0	6.0	4.0	12.0	26	11.5	34.6	26.9	3.8	11.5	11.5
65歳～	35	11.4	40.0	25.7	8.6	0.0	14.3	30	16.7	26.7	26.7	3.3	6.7	20.0
		(5) 社会のために役に立てた((4)を除く)							(5) 社会のために役に立てた((4)を除く)					
全体	215	13.0	41.4	32.6	3.7	0.9	8.4	176	9.7	41.5	31.3	2.8	1.7	13.1
35歳～	29	10.3	41.4	34.5	6.9	3.4	3.4	23	8.7	34.8	43.5	8.7	0.0	4.3
40歳～	21	19.0	52.4	28.6	0.0	0.0	0.0	28	7.1	39.3	42.9	3.6	0.0	7.1
45歳～	21	14.3	42.9	33.3	0.0	0.0	9.5	24	12.5	50.0	25.0	4.2	0.0	8.3
50歳～	22	9.1	54.5	18.2	9.1	0.0	9.1	20	5.0	45.0	30.0	0.0	5.0	15.0
55歳～	37	10.8	32.4	45.9	2.7	2.7	5.4	25	12.0	60.0	16.0	4.0	0.0	8.0
60歳～	50	20.0	32.0	32.0	6.0	0.0	10.0	26	11.5	26.9	42.3	0.0	0.0	19.2
65歳～	35	5.7	48.6	28.6	0.0	0.0	17.1	30	10.0	36.7	20.0	0.0	6.7	26.7

図表(3)-6-2 社会活動感想

(本人)

(配偶者)

(%)

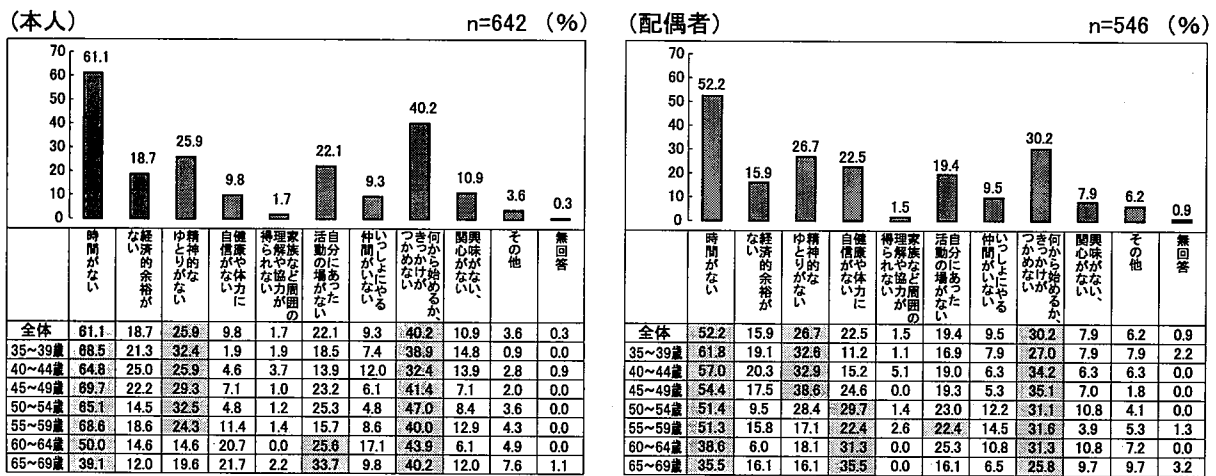
	標本数	まったくそ う思う	どちらかと 言えばそう 思う	どちらとも 言えない	どちらかと いえばそう 思わない	まったくそ う思わない	無回答	標本数	まったくそ う思う	どちらかと 言えばそう 思う	どちらとも 言えない	どちらかと いえばそう 思わない	まったくそ う思わない	無回答
		(6) 社会的な評価を得られた							(6) 社会的な評価を得られた					
全体	215	7.0	27.9	40.9	9.8	7.0	7.4	176	5.1	26.7	44.9	9.7	5.7	8.0
35歳～	29	0.0	31.0	37.9	10.3	17.2	3.4	23	0.0	13.0	60.9	17.4	8.7	0.0
40歳～	21	9.5	23.8	47.6	4.8	14.3	0.0	28	3.6	10.7	60.7	10.7	14.3	0.0
45歳～	21	4.8	23.8	47.6	19.0	4.8	0.0	24	4.2	37.5	25.0	25.0	0.0	8.3
50歳～	22	9.1	31.8	31.8	9.1	9.1	9.1	20	10.0	35.0	45.0	5.0	5.0	0.0
55歳～	37	10.8	24.3	43.2	10.8	5.4	5.4	25	4.0	40.0	44.0	8.0	0.0	4.0
60歳～	50	6.0	28.0	42.0	10.0	2.0	12.0	26	11.5	34.6	34.6	0.0	7.7	11.5
65歳～	35	8.6	31.4	37.1	5.7	2.9	14.3	30	3.3	20.0	43.3	3.3	3.3	26.7
		(7) 活動をしていて楽しい							(7) 活動をしていて楽しい					
全体	215	22.3	46.5	21.9	2.3	2.3	4.7	176	26.1	46.6	15.9	5.1	1.1	5.1
35歳～	29	17.2	41.4	31.0	3.4	6.9	0.0	23	17.4	39.1	30.4	8.7	4.3	0.0
40歳～	21	23.8	52.4	19.0	0.0	4.8	0.0	28	25.0	46.4	17.9	7.1	3.6	0.0
45歳～	21	19.0	42.9	28.6	9.5	0.0	0.0	24	33.3	37.5	20.8	8.3	0.0	0.0
50歳～	22	9.1	68.2	18.2	0.0	0.0	4.5	20	30.0	55.0	10.0	5.0	0.0	0.0
55歳～	37	16.2	40.5	35.1	2.7	2.7	2.7	25	24.0	60.0	12.0	0.0	0.0	4.0
60歳～	50	24.0	50.0	14.0	2.0	2.0	8.0	26	30.8	42.3	19.2	3.8	0.0	3.8
65歳～	35	40.0	37.1	11.4	0.0	0.0	11.4	30	23.3	46.7	3.3	3.3	0.0	23.3

⑥ 不参加理由(本人調査:問3付問5、配偶者調査:問3付問5)

不参加者に参加していない理由をたずねた。本人では、『時間がない』(61.1%)、『何から始めるかきっかけがつかめない』(40.2%)、『精神的なゆとりがない』(25.9%)と続いた。年齢層別でみると、上位3位迄は60代の年齢層を除く全ての層で同様の傾向がみられた。

また、配偶者でも、不参加理由の上位3位迄は本人と同様であったが、年齢層別では50歳以降で『健康や体力に自身がない』が3位にはいり、本人とは10ポイント以上の開きがみられた。

図表(3)-7 不参加理由

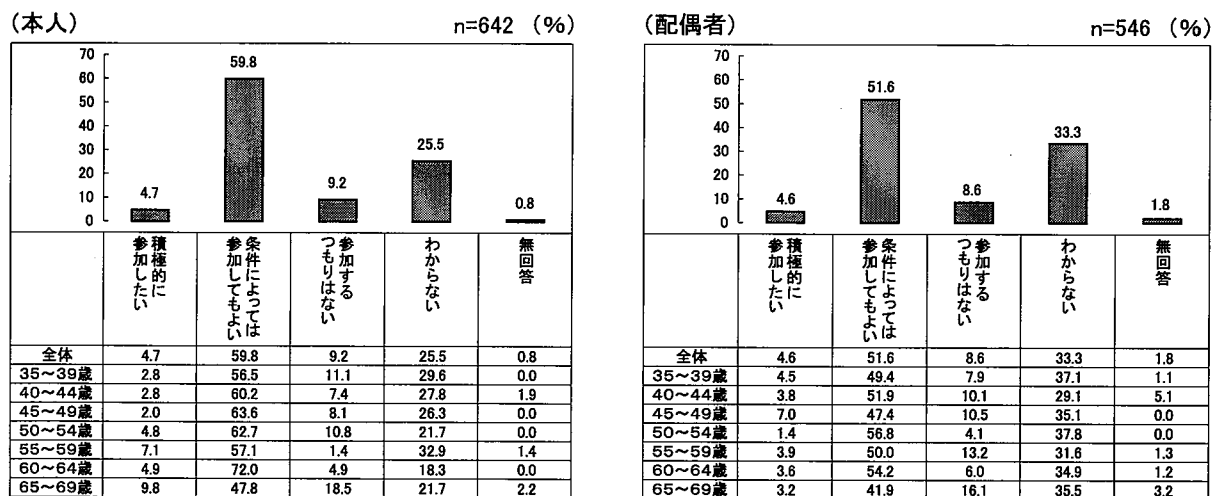


(年齢層別に上位3位まで網掛け)

⑦ 社会活動不参加者の今後の活動意向(本人調査:問3付問6、配偶者調査:問3付問6)

今後の社会活動の参加意向については、本人では、『条件によっては参加してもよい』(59.8%)が最も多く、『積極的に参加したい』(4.7%)と合わせ64.5%が肯定的な意向を示している。配偶者でも、肯定回答は56.2%と高く、本人と同様な傾向を示した。

図表(3)-8 社会活動不参加者の今後の活動意向



(4)引退形成

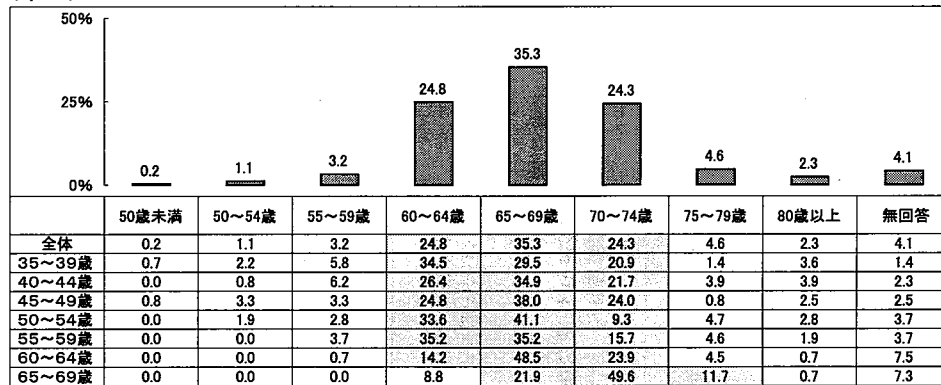
① 引退希望年齢(本人調査:問 28)

今後何歳まで仕事をしたいかについてたずねた。＜65～69歳＞での引退希望が35.3%と最も高く、次に＜60～64歳＞(24.8%)、＜70～74歳＞(24.3%)とこの15年間での引退希望が全体の84.4%を占めた。年齢別では、最も多い希望年齢は「35～39歳」の年齢層が＜60～64歳＞と引退希望年齢が低く、反対に「65～69歳」の年齢層は＜70～74歳＞と最も引退希望年齢が高かった。

図表(4)－1 引退希望年齢

n=875 (%)

(本人)



(年齢層別に上位3位まで網掛け)

② 定年後の仕事の希望および実際予測(本人調査:問 29、問 30)

定年後の仕事について希望と実際の予測についてたずねた。定年後の「仕事希望」の1位は『再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤めたい』が19.4%で、次に『退職後は別の企業に再就職したい』(15.9%)、『退職とともに職業生活から引退したい』(15.2%)と続いた。それに対して「実際の予測」では、『退職後は別の企業に再就職する』が20.3%と最も高く、『再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める』(18.1%)、『退職とともに職業生活から引退する』(15.3%)となり、今の会社に引き続き勤めたいが、実際には別の会社に再就職するだろうとの予測が多くみられた。

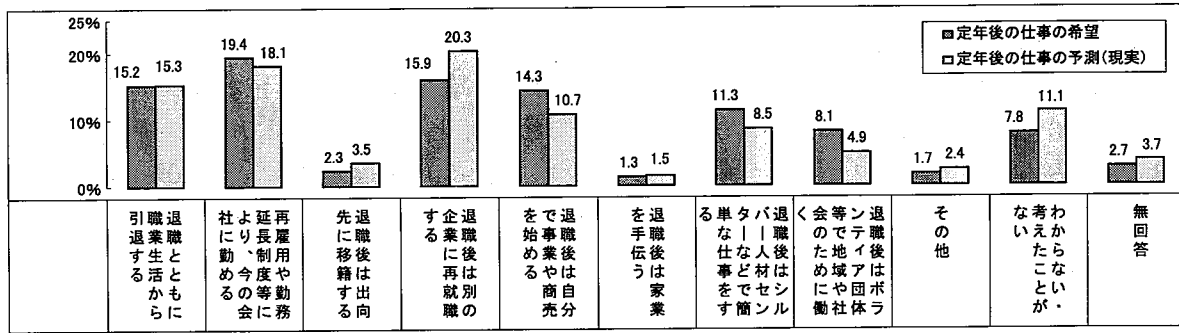
また、定年後の「仕事の希望」と「実際の予測」とのギャップの最も大きいのは、『退職後は別の企業に再就職する』の4.4ポイントであり、反対に差がないのは、『退職とともに職業生活から引退する』の0.1ポイントであった。

年齢層別にみると、「35～39歳」の年齢層では、「仕事の希望」は『退職後は自分で事業や商売を始めたい』(21.6%)が最も高く、また「実際の予測」でも『わからない、考えたことがない』(24.5%)に続き『退職とともに職業生活から引退する』(18.7%)が高く、将来会社とのかかわりは薄れていくと考えている。

また、引退が現実のものとなっていく「50～54歳」以降の年齢層になると『再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める』が「仕事の希望」と「実際の予測」で共に1位、もしくは「実際の予測」が『退職後は別の企業に再就職する』で最も多く、将来も会社とのかかわりは続いていくとの見方になっていく。

図表(4)－2－1 定年後の仕事希望および実際の予測(全体)

n=875 (%)



図表(4)－2－2 定年後の仕事希望および実際の予測(年齢層別)

(仕事希望：左欄、実際予測：右欄)

n=875 (%)

年齢層	引退する	退職とともに職業生活から引退する	社に勤め、今の会社に長く働ける	再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める	先に退職後は出向先に移籍する	退職後は別の企業に再就職する	退職後は別の企業に再就職する	退職後は自分で事業や商売を始める	退職後は家業を手伝う	単なる仕事をする	シルバー人材センターなどで働く	退職後はボランティアや地域の社会のために働く	その他	わからない・考えたことがない	無回答			
全体	15.2	15.3	19.4	18.1	2.3	3.5	15.9	20.3	14.3	10.7	1.3	1.5	11.3	8.5	8.1	4.9	12.2	17.2
35～39歳	18.0	18.7	12.2	7.9	1.4	3.6	13.7	18.0	21.6	13.7	3.6	3.6	8.6	6.5	4.3	2.2	16.5	25.9
40～44歳	17.8	14.7	18.6	20.2	2.3	4.7	11.6	15.5	12.4	10.1	1.6	0.8	10.9	7.8	10.1	4.7	14.7	21.7
45～49歳	18.2	14.9	9.9	12.4	1.7	1.7	18.2	19.0	20.7	18.2	0.0	0.8	12.4	11.6	5.8	5.0	13.3	16.6
50～54歳	17.8	15.0	16.8	16.8	0.9	0.9	11.2	15.9	13.1	10.3	1.9	2.8	13.1	9.3	14.0	8.4	11.2	20.5
55～59歳	13.9	12.0	23.1	22.2	2.8	1.9	15.7	19.4	14.8	13.9	0.9	0.9	11.1	9.3	11.1	7.4	6.6	13.0
60～64歳	11.2	16.4	30.6	24.6	4.5	6.0	15.7	23.9	10.4	4.5	0.7	0.7	10.4	8.2	9.0	6.0	7.5	9.7
65～69歳	10.2	14.6	24.1	22.6	2.2	5.1	24.1	29.2	7.3	5.8	0.0	0.7	13.1	7.3	4.4	2.2	14.6	12.3

*「その他」は、(その他、わからない・考えたことがない、無回答)の合計

[年齢層別、上位1位に網掛け。「35～39歳」の実際予測は、その他(25.9%)の内「わからない・考えたことがない」(24.5%)が1位]

(5) 個人の意識・態度

① 生きがいの意味(本人調査:問 7(1)、配偶者調査:問 5(1))

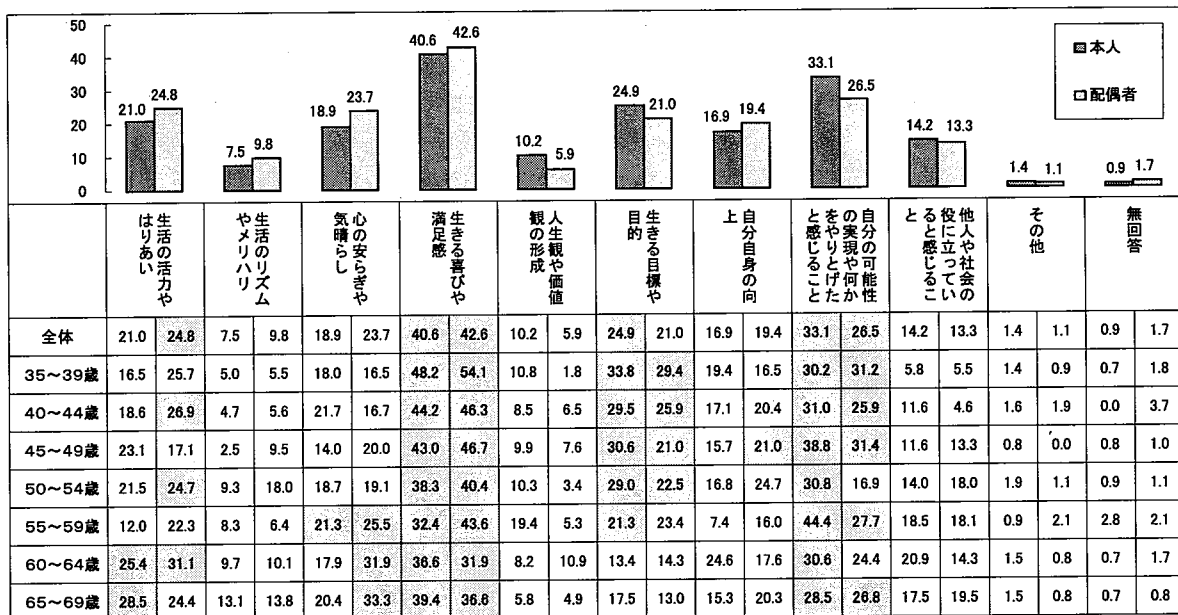
生きがいの意味を表す語句を 9 項目示し、生きがいを表すのに最も適当だと思うものから 2 つ 選んでもらった。

最も多かったのは、本人、配偶者とも『生きる喜びや満足感』でそれぞれ 40.6%、42.6%であった。この他、両者ともに『自分の可能性や何かをやりとげたと感じる』が 33.1%、26.5%で続き、次に本人では『生きる目標や目的』(24.9%)、『生活の活力やはりあい』(21.0%)、また、配偶者では、『生活の活力やはりあい』(24.8%)、『心も安らぎや気晴らし』(23.7%)と続いたが、全体の選択については、両者とも同様な傾向を示した。また、両者の差が大きいのは、『自分の可能性や何かをやりとげたと感じる』で本人が 6.6 ポイント高く、配偶者では『心も安らぎや気晴らし』が 4.8 ポイント本人よりも高かった。

年齢層別でみると、本人については、前年齢層とも全体での傾向とほぼ同様な傾向であるが、60 歳以降では、『生きる目標や目的』が減少し、替わって『生活の活力やはりあい』や『他人の役に立っていること』等が増加傾向を示す。また、配偶者では、全年齢層で『生きる喜びや満足感』に 1 位になっており、55 歳以降では、『心も安らぎや気晴らし』の選択が、増加傾向を示した。

図表(5)－1 生きがいの意味

本人 n=875、配偶者 n=747 (%)



(年齢層別に上位 3 位まで網掛け)

② 生きがいの構成要素取得の場(本人調査:問 6、配偶者調査:問 4)

先に「生きがいの意味」としてあげた生きがいを構成する各要素を、それぞれどこで取得しているか、「家庭」「仕事・会社」「地域・近隣」「個人的友人」「世間・社会」「1人有的时候」の6つの場からそれぞれ2つまで回答してもらった。

本人が1位にあげたのをみると、『生活の活力やはりあい』『心の安らぎや気晴らし』『生きる喜びや満足感』『生活の目標や目的』では、「家庭」であり、それぞれ7割前後の回答がみられる。その他の『生活のリズムやメリハリ』『人生や価値観の形成』『自分自身の向上』『自己実現や達成感』『他人や社会の役に立つと感じる』(有用感や評価)では「仕事・会社」であり、「生きがいの取得の場」は、この2つの場に集中した。

配偶者については、1位に挙げたのが『自分自身の向上』『自己実現や達成感』が「仕事・会社」である以外は全て「家庭」を1位にあげた。

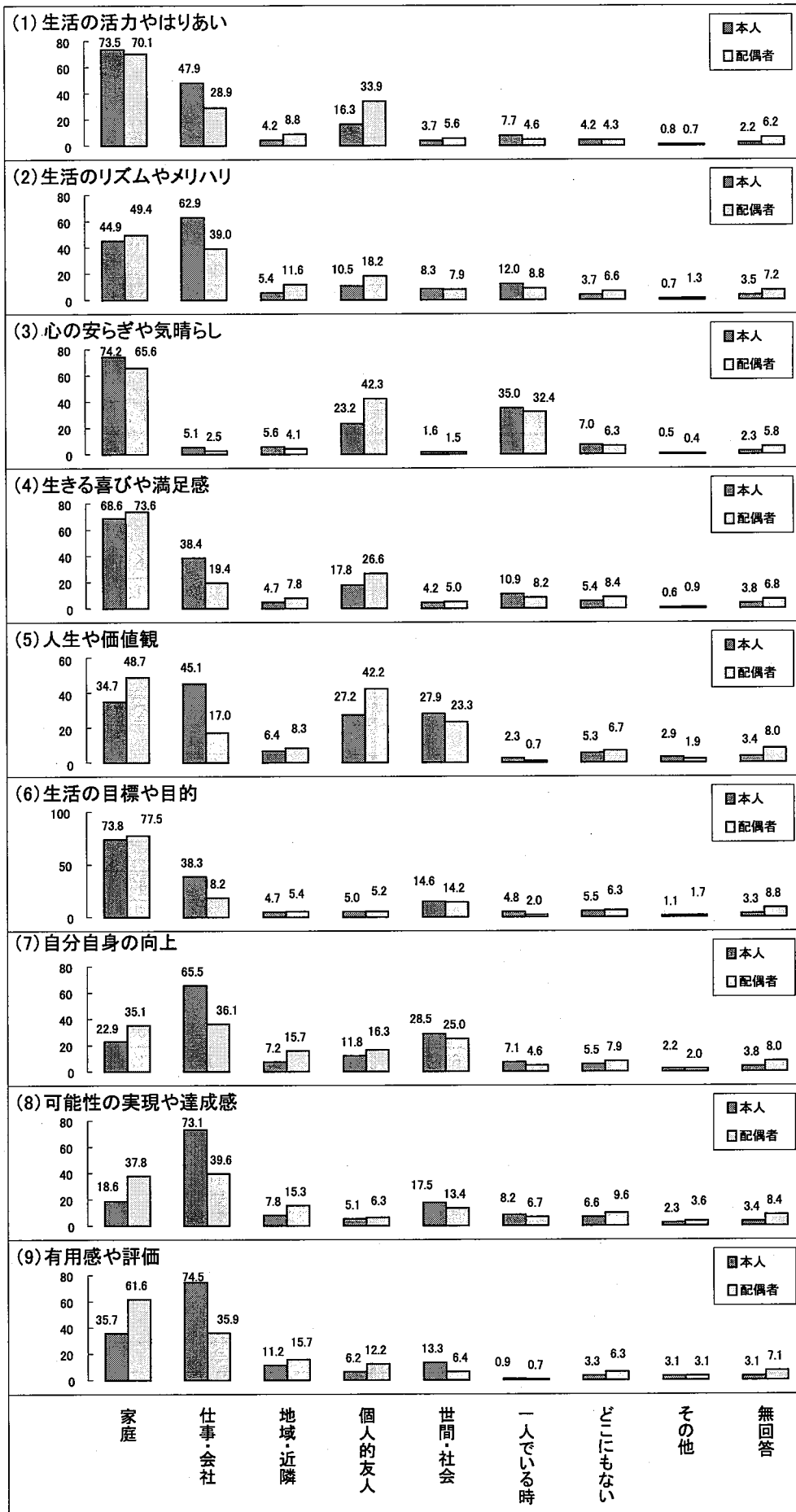
それ以外の「生きがいの取得の場」としては、本人では2番目の選択として『心の安らぎや気晴らし』の場が「1人有的时候」(35.0%)、『自分自身の向上』の場が「世間・社会」で28.5%であった。また、配偶者では、2位に『生活の活力やはりあい』『心の安らぎや気晴らし』『生きる喜びや満足感』『人生や価値観の形成』の場を「個人的友人」にあげているのは特徴的であった。また、特に本人と比べると、「家庭」の選択では、『人生や価値観の形成』『自分自身の向上』『自己実現や達成感』で10ポイント以上高く、『他人や社会の役に立つと感じる』(有用感や評価)では25.9ポイント高かった。

年齢層別では、本人については、定年を迎える60歳以降の年齢層で、『心の安らぎや気晴らし』以外の全てにおいて「仕事・会社」の場が減少し、替わって「地域・近隣」「個人的友人」「世間・社会」「1人有的时候」等に分散していく。

配偶者でも同様な傾向はみられるものの、各年齢層で特に大きな差は認められなかった。

図表(5)-2-1 生きがい構成要素取得の場

本人 n=875、配偶者 n=747 (%)



図表(5)-2-2 生きがい構成要素取得の場

(本人)

(配偶者)

(%)

	標本数	家庭	社 事・会	隣 地 域・近	友 個 人 的	会 世 間・社	る 一 人 でい	標本数	家庭	社 事・会	隣 地 域・近	友 個 人 的	会 世 間・社	る 一 人 でい		
															(1) 生活のはりあいや活力	
全体	875	73.5	47.9	4.2	16.3	3.7	7.7	747	70.1	28.9	8.8	33.9	5.6	4.6		
35歳～	139	74.1	46.8	1.4	18.0	2.9	8.6	109	73.4	24.8	4.6	34.9	7.3	6.4		
40歳～	129	79.1	58.1	0.8	18.6	0.8	5.4	108	75.0	29.6	7.4	36.1	5.6	2.8		
45歳～	121	74.4	48.8	0.8	14.9	2.5	5.8	105	72.4	38.1	8.6	29.5	3.8	4.8		
50歳～	107	77.6	54.2	3.7	12.1	3.7	14.0	89	69.7	39.3	4.5	22.5	6.7	3.4		
55歳～	108	73.1	54.6	3.7	13.0	4.6	9.3	94	77.7	29.8	10.6	35.1	4.3	3.2		
60歳～	134	74.6	43.3	6.0	16.4	5.2	3.7	119	65.5	26.1	6.7	37.8	5.0	5.0		
65歳～	137	62.8	32.8	12.4	19.7	5.8	8.0	123	60.2	18.7	17.9	38.2	6.5	5.7		
		(2) 生活のリズムやメリハリ								(2) 生活のリズムやメリハリ						
全体	875	44.9	62.9	5.4	10.5	8.3	12.0	747	49.4	39.0	11.6	18.2	7.9	8.8		
35歳～	139	39.6	74.1	1.4	7.2	5.8	10.1	109	49.5	45.0	12.8	20.2	5.5	9.2		
40歳～	129	46.5	74.4	0.8	10.1	7.8	12.4	108	45.4	46.3	10.2	13.9	8.3	8.3		
45歳～	121	44.6	71.1	2.5	7.4	9.9	12.4	105	45.7	48.6	8.6	11.4	7.6	9.5		
50歳～	107	43.0	59.8	5.6	13.1	6.5	17.8	89	51.7	48.3	11.2	20.2	6.7	2.2		
55歳～	108	44.4	75.0	7.4	7.4	13.9	6.5	94	56.4	33.0	17.0	23.4	6.4	10.6		
60歳～	134	48.5	50.0	9.0	9.0	9.0	14.2	119	43.7	30.3	9.2	23.5	8.4	10.9		
65歳～	137	47.4	38.7	10.9	19.0	6.6	10.9	123	54.5	25.2	13.0	15.4	11.4	9.8		
		(3) 心の安らぎや気晴らし								(3) 心の安らぎや気晴らし						
全体	875	74.2	5.1	5.6	23.2	1.6	35.0	747	65.6	2.5	4.1	42.3	1.5	32.4		
35歳～	139	74.1	2.9	2.9	25.2	0.0	41.0	109	62.4	2.8	4.6	46.8	0.0	39.4		
40歳～	129	77.5	8.5	2.3	28.7	0.0	41.1	108	62.0	2.8	1.9	43.5	0.9	31.5		
45歳～	121	81.0	4.1	5.8	18.2	1.7	36.4	105	72.4	1.9	2.9	45.7	2.9	31.4		
50歳～	107	76.6	4.7	9.3	19.6	1.9	31.8	89	67.4	1.1	3.4	39.3	2.2	36.0		
55歳～	108	75.0	4.6	7.4	24.1	0.0	38.9	94	73.4	1.1	4.3	47.9	2.1	29.8		
60歳～	134	68.7	5.2	4.5	23.9	3.0	33.6	119	56.3	3.4	5.0	38.7	0.0	31.9		
65歳～	137	67.9	5.8	8.0	21.9	4.4	22.6	123	67.5	4.1	6.5	35.8	2.4	27.6		
		(4) 生きる喜びや満足感								(4) 生きる喜びや満足感						
全体	875	68.6	38.4	4.7	17.8	4.2	10.9	747	73.6	19.4	7.8	26.6	5.0	8.2		
35歳～	139	72.7	37.4	2.9	17.3	3.6	11.5	109	78.0	24.8	9.2	26.6	0.9	9.2		
40歳～	129	71.3	45.7	2.3	19.4	1.6	16.3	108	75.9	21.3	1.9	24.1	3.7	9.3		
45歳～	121	70.2	38.0	2.5	17.4	7.4	10.7	105	78.1	25.7	7.6	26.7	1.9	8.6		
50歳～	107	68.2	44.9	5.6	13.1	3.7	13.1	89	80.9	21.3	9.0	25.8	4.5	6.7		
55歳～	108	68.5	49.1	5.6	19.4	2.8	7.4	94	76.6	13.8	7.4	28.7	5.3	6.4		
60歳～	134	72.4	30.6	4.5	20.9	3.7	7.5	119	63.9	14.3	7.6	25.2	9.2	10.9		
65歳～	137	56.9	27.0	9.5	16.8	6.6	9.5	123	65.9	15.4	11.4	29.3	8.1	5.7		
		(5) 人生や価値観								(5) 人生や価値観						
全体	875	34.7	45.1	6.4	27.2	27.9	2.3	747	48.7	17.0	8.3	42.2	23.3	0.7		
35歳～	139	37.4	50.4	2.2	30.2	18.7	2.9	109	56.0	18.3	9.2	46.8	15.6	0.0		
40歳～	129	43.4	50.4	2.3	31.0	29.5	3.1	108	55.6	17.6	5.6	46.3	25.9	0.0		
45歳～	121	35.5	56.2	5.0	24.0	29.8	1.7	105	58.1	20.0	4.8	36.2	27.6	1.0		
50歳～	107	39.3	43.9	8.4	24.3	29.0	3.7	89	48.3	15.7	6.7	44.9	21.3	3.4		
55歳～	108	41.7	55.6	6.5	25.9	25.9	1.9	94	58.5	17.0	8.5	46.8	21.3	0.0		
60歳～	134	21.6	32.8	9.7	32.1	35.8	0.7	119	28.6	17.6	7.6	38.7	27.7	0.0		
65歳～	137	27.0	29.9	10.9	21.9	27.0	2.2	123	40.7	13.0	14.6	37.4	22.8	0.8		

(年齢層別に上位3位まで網掛け)

図表(5)-2-2 生きがい構成要素取得の場

(本人)

(配偶者)

(%)

	標 本 数	家 庭	社 事 ・ 会	隣 地 域 ・ 近	友 人 個 人 的	会 世 間 ・ 社	る 時 一 人 で い	標 本 数	家 庭	社 事 ・ 会	隣 地 域 ・ 近	友 人 個 人 的	会 世 間 ・ 社	る 時 一 人 で い
		(6) 生活の目標や目的							(6) 生活の目標や目的					
全体	875	73.8	38.3	4.7	5.0	14.6	4.8	747	77.5	18.2	5.4	5.2	14.2	2.0
35歳～	139	76.3	42.4	1.4	4.3	11.5	5.0	109	81.7	18.3	2.8	4.6	13.8	2.8
40歳～	129	73.6	52.7	3.9	2.3	12.4	7.0	108	77.8	24.1	2.8	3.7	13.9	1.9
45歳～	121	71.1	42.1	2.5	7.4	12.4	2.5	105	83.8	24.8	4.8	2.9	10.5	1.0
50歳～	107	80.4	32.7	10.3	3.7	12.1	4.7	89	79.8	20.2	4.5	6.7	13.5	3.4
55歳～	108	79.6	43.5	3.7	6.5	18.5	1.9	94	78.7	14.9	5.3	6.4	20.2	2.1
60歳～	134	72.4	30.6	6.7	4.5	17.2	6.0	119	72.3	11.8	5.0	6.7	12.6	1.7
65歳～	137	65.7	24.8	5.1	6.6	18.2	5.8	123	70.7	14.6	11.4	5.7	15.4	1.6
		(7) 自分自身の向上							(7) 自分自身の向上					
全体	875	22.9	65.5	7.2	11.8	28.5	7.1	747	35.1	36.1	15.7	16.3	25.0	4.6
35歳～	139	25.9	72.7	5.0	14.4	18.7	5.0	109	41.3	38.5	18.3	16.5	18.3	6.4
40歳～	129	29.5	79.1	4.7	8.5	22.5	7.0	108	38.9	43.5	12.0	13.0	19.4	5.6
45歳～	121	22.3	72.7	7.4	12.4	25.6	6.6	105	41.0	48.6	15.2	12.4	21.0	4.8
50歳～	107	21.5	66.4	6.5	11.2	32.7	11.2	89	31.5	43.8	12.4	14.6	21.3	5.6
55歳～	108	21.3	70.4	10.2	11.1	38.0	5.6	94	37.2	30.9	19.1	16.0	29.8	4.3
60歳～	134	18.7	51.5	10.4	11.2	33.6	9.7	119	26.1	30.3	14.3	18.5	30.3	4.2
65歳～	137	20.4	48.2	6.6	13.1	30.7	5.1	123	30.9	21.1	17.9	22.0	33.3	1.6
		(8) 可能性の実現や達成感							(8) 可能性の実現や達成感					
全体	875	18.6	73.1	7.8	5.1	17.5	8.2	747	37.8	39.6	15.3	6.3	13.4	6.7
35歳～	139	20.1	77.7	3.6	6.5	11.5	5.8	109	36.7	46.8	18.3	7.3	8.3	10.1
40歳～	129	19.4	81.4	4.7	3.9	18.6	10.9	108	40.7	39.8	12.0	3.7	13.9	6.5
45歳～	121	17.4	87.6	2.5	5.0	14.9	8.3	105	39.0	52.4	14.3	6.7	13.3	3.8
50歳～	107	12.1	79.4	7.5	1.9	16.8	8.4	89	29.2	49.4	14.6	2.2	18.0	5.6
55歳～	108	20.4	81.5	12.0	6.5	22.2	5.6	94	40.4	31.9	17.0	10.6	12.8	9.6
60歳～	134	19.4	62.7	12.7	6.7	16.4	9.7	119	33.6	34.5	14.3	5.0	14.3	5.9
65歳～	137	20.4	46.7	11.7	5.1	22.6	8.8	123	43.1	26.0	16.3	8.1	13.8	5.7
		(9) 有用感や評価							(9) 有用感や評価					
全体	875	35.7	74.5	11.2	6.2	13.3	0.9	747	61.6	35.9	15.7	12.2	6.4	0.7
35歳～	139	38.8	84.9	6.5	10.1	8.6	0.7	109	59.6	41.3	15.6	13.8	5.5	0.0
40歳～	129	45.0	81.4	6.2	4.7	10.9	0.0	108	60.2	35.2	11.1	15.7	4.6	0.9
45歳～	121	39.7	83.5	6.6	3.3	7.4	1.7	105	66.7	48.6	16.2	4.8	7.6	1.0
50歳～	107	35.5	81.3	13.1	3.7	13.1	2.8	89	66.3	43.8	15.7	9.0	3.4	0.0
55歳～	108	34.3	81.5	12.0	5.6	21.3	0.0	94	67.0	30.9	19.1	18.1	6.4	1.1
60歳～	134	29.1	62.7	17.2	6.0	14.2	1.5	119	58.0	31.9	14.3	7.6	5.0	0.8
65歳～	137	27.7	50.4	16.8	8.8	18.2	0.0	123	56.1	22.8	17.9	16.3	11.4	0.8

(年齢層別に上位3位まで網掛け)

③ 生きがいの有無(本人調査:問 7(2)、配偶者調査:問 5(2))

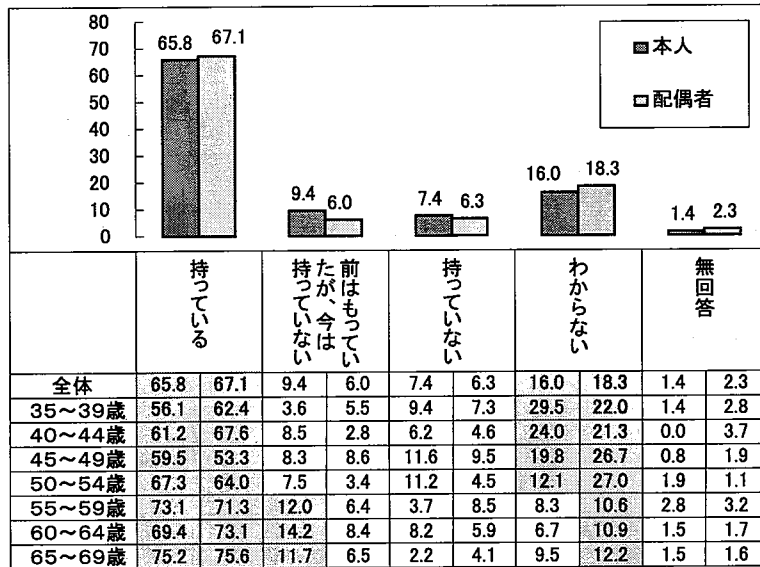
生きがいの意味とその取得の場についてみたが、ここでは、そのような生きがいを持っているかについてたずねた。

本人について、現在、生きがいを「持っている」は 65.8%であり、総じて年齢が上昇するにつれ、生きがいの取得率も上昇する。次に「わからない」が 16.0%で続き、年齢層別では「35～39歳」の年齢層で 29.5%と最も高く、年齢の上昇と共に減少していく。

また、「前はもっていたが、今は持っていない」は 9.4%であるが、55歳以降の年齢層で 10ポイント以上に増加した。

配偶者では、生きがいを「持っている」は 67.1%であり、55歳以降の年齢層で 70%を超え、上昇傾向を示した。「わからない」は 18.3%であるが、55歳以降の年齢層では、10%強に減少傾向を示した。

図表(5)－3 生きがいの有無 本人 n=875、配偶者 n=747 (%)



(年齢層別に上位 2 位まで網掛け)

調査データ

1. 調査票(本人用および配偶者用)
2. 平成14年「第3回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」調査票(本人用および配偶者用)及び単純集計結果(第1回～第3回)

サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査【本人用】

平成 15 年 1 月

- 財団法人 シニアプラン開発機構では、おおむね 50 歳以上の企業在職者や退職者を「シニア」と位置づけ、シニアの豊かで実りある生活の実現のため生活と生きがいに関してさまざまな活動・調査研究を行うとともに、企業の賃金・退職金などの雇用諸制度に関する調査研究活動を進めています。本調査も、その一環として実施しており、働き方やふだんの生活、意識などをうかがい、少子高齢化の進展する中で多様化するサラリーマン像を捉えることを目的としています。
- 調査の対象者は、以前中央調査社の実施した調査にご協力くださり、今後も調査に協力いただけるとお答えになった方の中から、お勤め人と思われる男性の方をお願いしています。
- 調査は無記名で実施し、ご回答は細心の注意を持って取り扱い、結果はすべて統計的に処理いたしますので、1人1人のお名前やお答えが公表されるようなことは絶対にございませぬ。また、ご回答を、本調査以外の目的に使用することもございませぬ。ご多忙中とは存じますが、ぜひご協力くださいますよう、よろしくお願ひ申しあげます。
- この【本人用】調査票は、調査票をお送りした封筒の宛名の方ご自身がお答えください。
- 同封の【配偶者用】調査票につきましては、封筒の宛名の方の配偶者の方をご記入ください（配偶者がいらっしゃらない場合は【配偶者用】調査票の記入・返送は不要です）。
- 調査票への記入が終了したら、【本人用】調査票は緑色の封筒に、【配偶者用】調査票は黄色の封筒に、それぞれ封入のうえ、緑色の封筒と黄色の封筒の両方（ただし配偶者がいらっしゃらない場合は緑色の封筒のみ）を返信用封筒に封入し、1月20日（月）ごろまでにご投函願ひます。

記入上の注意

1. ご回答は、あらかじめ用意した回答項目の中から、あてはまるもの、お考えに近いものを選び、項目についている番号「1, 2, 3……」を○で囲んでください。また、具体的に文字や数字を記入していただくものもあります。
2. ご質問は、「○は1つ」や「○はいくつでも」の場合があります。質問をよくお読みになってご回答ください。
3. 質問によっては、一部の方だけにおたずねするものがあります。この場合は、おそれいりますが指示に沿ってお答えください。
4. 回答が「その他」にあてはまる場合は、() 内に具体的な内容を記入してください。
5. 調査内容について、ご不明な点がおありでしたら、下記の 社団法人 中央調査社にお問い合わせください。

調査企画

財団法人 シニアプラン開発機構

調査実施

社団法人 中央調査社

〒141-0031 東京都品川区西五反田7-1-1

電話 03(5487)2314

<ご注意>

この調査は、現在お勤めの方・以前にお勤め人として働いた経験のある方にお願いしています。（ここでいう「お勤め」とは、派遣・嘱託・パートなど雇用形態は問いませんが、学生時代のアルバイトはあてはまりませぬ。）

もし、封筒の宛名の方ご本人が、お勤め人として働いた経験がない場合、今回は調査の対象にあてはまりませぬので、お手数ですが、お送りしたアンケート票は廃棄してください。別の機会にご協力をよろしくお願ひします。どうもありがとうございました。

ふだんの生活についておうかがいします。

問1. あなたが現在所属して、実際に活動しているグループ・団体はどれですか。(〇はいくつでも)

1. 趣味やスポーツのクラブ・サークル	31.1	7. 町内会・自治会や防災・防犯協会	17.5
2. 学習・研究の会や教養教室	6.1	8. 老人クラブや地域の同好会	3.1
3. 職場・職域関係の団体・グループ	19.2	9. 消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	3.4
4. 定年退職者の会など、旧職場の集まり	7.4	10. 宗教団体・政治団体	4.2
5. PTA・父母会や子供会・青少年団体	4.7	11. その他 ()	3.7
6. 難病や障害児・者を持つ家族の会	0.8	12. いずれもない	38.4
			NA 1.1

問2. ボランティアなど社会に役立つ活動についてどのように思いますか。あなたの考え方に近いものをお答えください。(〇は3つまで)

1. 自分の知識や能力が向上することが大切である	17.1
2. 活動は楽しいことが大切である	35.3
3. 社会のためになることが大切である	54.1
4. 多くの人と知り合えることが大切である	23.2
5. 気軽にできることが大切である	46.6
6. 市民として当然参加すべきである	4.0
7. 他人から参加を強制されないことが大切である	42.1
8. やるからには責任をもってやりとおすことが大切である	30.6
9. その他 ()	1.5
NA 0.6	

問3. では、あなたはいま、何か社会に役立つ活動に参加していますか。団体活動でも個人の活動でもかまいません。

1. 定期的に参加している	12.3	3. 以前に参加したことがある	10.1
2. ときどき参加している	12.2	4. 参加していない	63.3
			NA 2.1

付問1. どのような分野の活動ですか。(〇はいくつでも)

1. 地域の生活環境を守る活動	34.0
2. 地域のイベントや“村おこし”の活動	20.9
3. 趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	30.2
4. 児童や青少年活動の世話役としての活動	16.3
5. 地域の文化財や伝統を守る活動	12.6
6. 消費者活動や生活向上のための活動	5.1
7. 障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	10.2
8. 行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	8.4
9. 自然保護や環境保全の活動	14.0
10. 国際交流に関する活動	4.2
11. その他 ()	11.2
NA 0.5	

付問5. 現在参加していない理由は何ですか。(〇は3つまで)

1. 時間がない	61.1
2. 経済的余裕がない	18.7
3. 精神的なゆとりがない	25.9
4. 健康や体力に自信がない	9.8
5. 家族など周囲の理解や協力が得られない	1.7
6. 自分にあった活動の場がない	22.1
7. いっしょにやる仲間がない	9.3
8. 何から始めるか、きっかけがつかめない	40.2
9. 興味がない、関心がない	10.9
10. その他 ()	3.6
NA 0.3	

付問2. 活動に参加した理由は何ですか。(〇は3つまで)

1. 地域や社会に貢献したい	57.2
2. 自分の知識や経験を活かしたい	27.9
3. 社会への見聞を広げたい	14.4
4. 友人や仲間を増やしたい	30.7
5. 生活にはりあいを持たせたい	15.8
6. 身近な人に誘われた	21.9
7. 会社の勧めや命令	3.7
8. 市民・社会人として当然と思った	22.8
9. 何となく	0.5
10. その他 ()	5.1
NA 0.5	

付問6. 今後参加したいと思いますか。(〇は1つ)

1. 積極的に参加したい	4.7
2. 条件によっては参加してもよい	59.8
3. 参加するつもりはない	9.2
4. わからない	25.5
NA 0.8	

【現在は参加していない方は、付問5、6をお答えの後、問4にお進みください。】

〔引き続き、問3で「定期的に参加している」「ときどき参加している」と答えた方に〕

付問3. 参加している活動についてどの程度満足していますか、それとも不満を感じていますか。(〇は1つ)

1. 満足 20.0	2. どちらかといえば満足 51.2	3. どちらともいえない 23.3	4. どちらかといえば不満 2.3	5. 不満 0.0	NA 3.3
---------------	-----------------------	----------------------	----------------------	--------------	--------

付問4. それでは、活動をしていて、具体的にはどのように感じていますか。(1)～(7)のそれぞれについてお答えください。(〇はそれぞれ1つ)

	まったく そう思う	どちらか といえば そう思う	どちらとも いえない	どちらか といえば そう 思わない	まったく そう 思わ ない	NA
(1) 自分の知識・技術、 能力、経験を活かした……	17.7	44.2	21.9	5.6	6.5	4.2
(2) 自分が人間として成長できた……	14.9	46.5	27.0	4.2	1.4	6.0
(3) 多くの人と知り合いになれた……	32.6	45.6	11.6	4.7	0.5	5.1
(4) 困っている人の役に立てた……	7.4	34.0	40.0	8.8	3.7	6.0
(5) 社会のために役に立てた (4)を除く)……	13.0	41.4	32.6	3.7	0.9	8.4
(6) 社会的な評価を得られた……	7.0	27.9	40.9	9.8	7.0	7.4
(7) 活動をしていて楽しい……	22.3	46.5	21.9	2.3	2.3	4.7

〔全員の方に〕

問4. 現在のあなたの生活で、以下のことがどの程度満たされていると思いますか。(1)～(12)のそれぞれについてお答えください。

	十分に満た されている	まあ満たさ れている	どちらとも いえない	やや欠けて いる	まったく 欠けている	NA
(1) 健康 ……	13.5	53.6	13.3	14.5	2.1	3.1
(2) 時間的ゆとり ……	5.9	31.1	22.2	28.5	8.5	3.9
(3) 経済的ゆとり ……	2.5	29.9	28.2	26.1	9.3	4.0
(4) 精神的ゆとり ……	3.7	34.1	30.3	23.8	3.8	4.5
(5) 家族の理解・愛情 ……	18.7	55.1	16.7	5.0	0.7	3.8
(6) 友人・仲間 ……	8.0	49.3	26.3	11.4	1.1	3.9
(7) 熱中できる趣味 ……	11.0	37.8	24.9	16.8	5.4	4.1
(8) 仕事のはりあい ……	8.0	42.3	28.0	12.6	3.8	5.4
(9) 社会的地位 ……	3.2	30.2	42.7	13.6	5.6	4.7
(10) 自然とのふれあい ……	5.5	32.0	26.4	26.7	5.4	4.0
(11) 近隣との交流 ……	2.4	23.5	31.4	28.5	10.5	3.7
(12) 社会の役に立つこと ……	1.6	15.0	36.9	31.9	11.3	3.3

■自由時間についておうかがいします。

問5. 仕事や通勤や仕事上のつきあいの時間、睡眠時間、食事や入浴などの生活必需時間を除いて、あなたが日頃、自由に使える時間は十分にあると思いますか。

1. 十分にある 11.9	2. まあまあ 42.6	3. 不十分である 39.7	4. まったくない 4.7	NA 1.1
---------------	--------------	----------------	---------------	--------

(付問へ) 問6へお進みください

〔問5で自由な時間が「十分にある」「まあまあ」「不十分である」と答えた方に〕

付問. 日頃の自由時間を、主にどんなことに使っていますか。(〇は3つまで)

1. 仕事仲間とのプライベートなつきあい	10.4	9. 行楽・ドライブなど	24.3
2. 仕事に関する勉強や残務整理	14.9	10. 庭いじりや家事など家庭内のこと	28.8
3. テレビ・ゴロ寝やパチンコ、酒など	35.3	11. 家庭との団らんや家庭サービス	33.7
4. 考えごとやめい想	4.2	12. 近隣の人とのつきあいや地域の用事	7.3
5. ひとりで趣味・スポーツ・学習など	31.3	13. ボランティアなどの社会活動	3.8
6. 仲間と趣味・スポーツ・学習など	21.5	14. 宗教活動・政治活動	2.2
7. パソコン通信やインターネットなど	17.6	15. その他 ()	2.1
8. 個人的な友人・仲間とのつきあい	18.3	16. 特に何もしない	NA 1.6 0.6

〔全員の方に〕

問6. 生活やつきあいの場を「家庭」、「仕事」などのようにいくつかに分けた場合、(1)～(9)にあてはまるものを、それぞれ2つまで選んでください。

	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	一人でいる時	その他	どこにもない	NA
(1) 生活にはりあいや活力をもたらしてくれるのはどこですか	73.5	47.9	4.2	16.3	3.7	7.7	4.2	0.8	2.2
(2) 生活のどの場で、リズムやメリハリがつかますか	44.9	62.9	5.4	10.5	8.3	12.0	3.7	0.7	3.5
(3) 心の安らぎや気晴らしを感じるのは、どこが多いですか	74.2	5.1	5.6	23.2	1.6	35.0	7.0	0.5	2.3
(4) 生活のどの場で、喜びや満足感を感じる人が多いですか	68.6	38.4	4.7	17.8	4.2	10.9	5.4	0.6	3.8
(5) あなたの人生観や価値観に影響を与えているのは、どこの人ですか	34.7	45.1	6.4	27.2	27.9	2.3	5.3	2.9	3.4
(6) 生活の目標や目的は、どこにあると感じますか	73.8	38.3	4.7	5.0	14.6	4.8	5.5	1.1	3.3
(7) どの場での生活が自分自身を向上させていると考えますか	22.9	65.5	7.2	11.8	28.5	7.1	5.5	2.2	3.8
(8) 自分の可能性を実現したり、何かをやりとげたと感じるのは、どの場でのことが多いですか	18.6	73.1	7.8	5.1	17.5	8.2	6.6	2.3	3.4
(9) 自分が役に立っていると感じたり、評価を得ているのは、どの場でのことが多いですか	35.7	74.5	11.2	6.2	13.3	0.9	3.3	3.1	3.1

■生きがいについておうかがいします。

問7 (1). よく「生きがい」と言われますが、次の中で「生きがい」を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。あなたのお考えに最も近いものから2つまで選んでください。

1. 生活の活力やはりあい	21.0	6. 生きる目標や目的	24.9
2. 生活のリズムやメリハリ	7.5	7. 自分自身の向上	16.9
3. 心の安らぎや気晴らし	18.9	8. 自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じること	33.1
4. 生きる喜びや満足感	40.6	9. 他人や社会の役に立っていると感じること	14.2
5. 人生観や価値観の形成	10.2	10. その他 ()	1.4

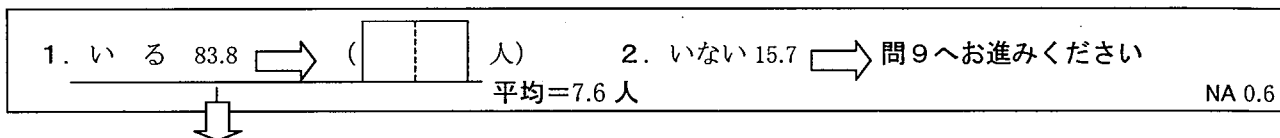
NA 0.9

(2). そのような生きがいを、あなたは現在持っていますか。

1. 持っている	65.8	3. 持っていない	7.4
2. 前は持っていたが、今は持っていない	9.4	4. わからない	16.0
			NA 1.4

■友人との関係についておうかがいします。

問8. あなたには、生涯を通じてつきあえる友人や仲間がいますか。



付問1. どのような関係で知り合った方々ですか。(○はいくつでも)

1. 幼なじみ・学生時代の友人・仲間	72.4
2. 職場や仕事を通じて知り合った友人・仲間	74.6
3. 近隣の人、地域で知り合った友人・仲間	22.4
4. 趣味・パソコン教室・スポーツや学習を通じて知り合った友人・仲間	21.0
5. 電子メール、パソコンネット、携帯電話などを通じて知り合った友人・仲間	0.4
6. 社会活動を通じて知り合った友人・仲間	8.0
7. 宗教活動を通じて知り合った友人・仲間	3.3
8. 家族や親戚・縁戚関係を通じて知り合った友人・仲間	16.2
9. その他(<input type="text"/>)	1.2 NA 0.0

付問2. そのうち一番だいじな人はどれですか。上で○をつけた中から1つだけ番号を選んでください。

■配偶者や家族との関係についておうかがいします。

〔配偶者がいらっしゃる方におうかがいします。配偶者がいらっしゃらない方は問11にお進みください。〕

問9. 話は変わりますが、日頃の配偶者との関係について、どう感じていらっしゃいますか。(1)～(15)のそれぞれについてお答えください。

まったく そのとおり	まあ そのとおり	あまり そうでない	まったく 違う	NA
---------------	-------------	--------------	------------	----

(1) 妻は私を頼りにしてくれている	37.9	-----	53.1	-----	7.0	-----	0.9	1.1
(2) 妻はわたしを理解してくれている	25.7	-----	57.7	-----	14.4	-----	0.9	1.4
(3) 妻はわたしを愛している	28.7	-----	54.9	-----	13.0	-----	1.7	1.8
(4) 妻と価値観・考え方が似ている	10.0	-----	40.0	-----	41.6	-----	6.9	1.5
(5) 妻と共通の趣味がある	10.2	-----	28.6	-----	43.8	-----	15.4	2.0
(6) 妻と対話がある	27.1	-----	55.0	-----	15.4	-----	1.5	1.0
(7) 妻とよく一緒に出かける	28.6	-----	44.6	-----	22.0	-----	3.2	1.7
(8) 妻は私の趣味や行動を尊重してくれる	24.0	-----	51.3	-----	20.7	-----	2.0	1.9
(9) 妻は私の能力や努力を高く評価してくれる	17.8	-----	54.8	-----	24.0	-----	2.0	1.4
(10) 妻は私の心配事や悩み事を聞いてくれる	18.4	-----	52.0	-----	24.5	-----	3.6	1.5
(11) 妻は私に助言やアドバイスをしてくれる	15.2	-----	54.0	-----	25.8	-----	3.0	1.9
(12) 妻と私は、家事を公平に分担しておこなっている	8.8	-----	22.9	-----	50.4	-----	16.4	1.5
(13) 妻と私は、ともに子育てをおこなっている	11.8	-----	39.9	-----	31.5	-----	10.2	6.6
(14) 妻は、私がいないと駄目だ	17.7	-----	32.0	-----	40.7	-----	8.5	1.1
(15) 私は、妻がいないと駄目だ	25.3	-----	46.8	-----	22.7	-----	4.4	0.8

〔引き続き、配偶者がいらっしゃる方におうかがいします。〕

問 10. 日頃の配偶者の方との生活についてお伺いします。

(1) あなたは、配偶者の方と、どの程度一緒に夕食を取られますか。

1. ほぼ毎日 54.9	2. 週に 4~5日 14.0	3. 週に 2~3日 23.0	4. 週に1日 くらい 5.5	5. 月に 1~2日 1.1	6. ほとんど しない 0.6	NA 0.9
-----------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--------------------	--------

(2) あなたは、配偶者の方と、どの程度一緒に買い物にでかけられますか。

1. ほぼ毎日 1.5	2. 週に 4~5日 2.7	3. 週に 2~3日 17.3	4. 週に1日 くらい 47.5	5. 月に 1~2日 21.5	6. ほとんど しない 8.1	NA 1.4
----------------	-------------------	--------------------	---------------------	--------------------	--------------------	--------

(3) あなたは、食事の用意をどの程度なされますか(手伝いを含む)。

1. ほぼ毎日 7.2	2. 週に 4~5日 4.6	3. 週に 2~3日 13.6	4. 週に1日 くらい 17.9	5. 月に 1~2日 16.3	6. ほとんど しない 39.5	NA 0.9
----------------	-------------------	--------------------	---------------------	--------------------	---------------------	--------

(4) あなたは、洗濯をどの程度なされますか(手伝いを含む)。

1. ほぼ毎日 2.7	2. 週に 4~5日 3.4	3. 週に 2~3日 7.8	4. 週に1日 くらい 11.7	5. 月に 1~2日 14.0	6. ほとんど しない 59.6	NA 0.9
----------------	-------------------	-------------------	---------------------	--------------------	---------------------	--------

(5) あなたは、お風呂の掃除をどの程度なされますか(手伝いを含む)。

1. ほぼ毎日 5.2	2. 週に 4~5日 4.6	3. 週に 2~3日 15.1	4. 週に1日 くらい 19.9	5. 月に 1~2日 21.0	6. ほとんど しない 33.3	NA 0.9
----------------	-------------------	--------------------	---------------------	--------------------	---------------------	--------

(6) あなたと配偶者の方との意見が食い違った場合、どのようになることが多いですか。

1. ほとんど 自分の意見 がとおる 2.5	2. どちらかと いうと 自分の意見 がとおる 21.0	3. どちらとも いえない 52.9	4. どちらかと いうと 配偶者の意見 がとおる 20.1	5. ほとんど 配偶者の意見 がとおる 2.5	NA 1.0
---------------------------------	---------------------------------------	--------------------------	--	----------------------------------	--------

〔全員の方におうかがいします〕

問 11. ご自身の親御さんについてお伺いします。

(1) あなたご自身のお父さんは、ご健在ですか。

1. 死亡 61.8 ⇒ あなたが何歳のときにお亡くなりになりましたか。	<input type="text"/>	歳		
2. 健在 37.1 ⇒ 現在	<input type="text"/>	歳 平均=74.7 歳 平均=34.0 歳		
NA 1.0				
付問(a)現在働いていらっしゃいますか。				
1. 仕事についている 24.3	2. 無職(定年退職を含む) 75.1	NA 0.6		
(b)現在の健康状態はいかがですか。 NA 0.6				
1. たいへん 良好 10.8	2. まあ良好 54.5	3. どちらとも いえない 16.9	4. やや悪い 15.4	5. たいへん 悪い 1.8

(2) あなたご自身のお母さんは、ご健在ですか。

1. 死亡 40.2 ⇒ あなたが何歳のときにお亡くなりになりましたか。	<input type="text"/>	歳		
2. 健在 59.0 ⇒ 現在	<input type="text"/>	歳 平均=74.7 歳 平均=39.4 歳		
NA 0.8				
付問(a)現在働いていらっしゃいますか。				
1. 仕事についている 12.2	2. 無職(定年退職を含む) 86.4	NA 1.4		
(b)現在の健康状態はいかがですか。 NA 0.8				
1. たいへん 良好 7.6	2. まあ良好 47.7	3. どちらとも いえない 21.1	4. やや悪い 17.4	5. たいへん 悪い 5.4

[引き続き、ご自身の親御さんについてお伺いします。ご自身の親御さんがお二人とも亡くなられた方は、問13にお進みください。]

問12. (1) ご自身の親御さんは、どこに住んでいらっしゃいますか。

1. ご自身と同居している	25.6	5. 交通機関を使って1時間未満のところ	10.6
2. となり・同じ敷地内の別棟	3.4	6. 交通機関を使って2時間未満のところ	11.8
3. 歩いていけるところ	7.2	7. 交通機関を使って2時間以上のところ	32.6
4. 交通機関を使って30分未満のところ	7.9		NA 0.9

(2) あなたは、ここ1年の間で、ご自身の親御さんと、次のような事柄をどの程度なさいましたか。ア～ウのそれぞれの項目について、当てはまる番号に1つずつ○をお付けください。

ほとんど毎日	週に3～4回	週に1～2回	月に1～2回	年に数回	全くなかった	NA
--------	--------	--------	--------	------	--------	----

ア. ちょっとした話をする(電話を含む) ……	16.5	5.9	16.3	31.4	25.6	3.2	1.1
イ. ちょっとした用事(買い物・使い走りなど)をしたり、してもらったりする ……	3.8	2.9	11.6	17.2	26.3	36.4	1.8
ウ. 一緒に外出する(食事・買い物など) ……	0.4	0.2	2.5	18.1	44.1	33.2	1.6

[配偶者がいらっしゃる方に。現在結婚されていない方・配偶者の親御さんが亡くなられている方は問14へ]
問13. 配偶者の親御さんのおつき合いについてお伺いします。ここ1年の間で、配偶者の親御さんと次のような事柄をどの程度なさいましたか。それぞれの項目について、当てはまる番号に○をお付けください。

ほとんど毎日	週に3～4回	週に1～2回	月に1～2回	年に数回	全くなかった	NA
--------	--------	--------	--------	------	--------	----

ア. ちょっとした話をする(電話を含む) ……	5.1	1.9	7.7	26.0	46.6	6.0	6.6
イ. ちょっとした用事(買い物・使い走りなど)をしたり、してもらったりする ……	1.3	1.7	3.2	11.7	29.1	44.2	8.9
ウ. 一緒に外出する(食事・買い物など) ……	0.0	0.4	0.8	10.9	42.1	36.8	9.1

[全員の方に]

問14. あなたはこの1年間に、次の方との間に経済的な援助(小遣い、仕送り、貸し金など)のやりとりがありましたか。それぞれの方について教えてください(ご自身や配偶者の方の親御さんが亡くなられている方、18歳以上のお子さんがいらっしゃらない方、兄弟姉妹がいらっしゃらない方は「該当者はいない」という欄に○をお付けください)。

援助も、たこともあつた 援助をしたことを受け	自分が援助をした	援助を受けたことがあつた	援助のやり取りはなかつた	該当者はいない
---------------------------	----------	--------------	--------------	---------

ア. ご自身のお父さん・お母さん ……	9.4	9.8	10.6	31.0	35.5	3.7
イ. ご自身の兄弟姉妹 ……	4.3	6.3	3.4	66.6	6.6	12.7
ウ. 18歳以上のお子さんも ……	2.3	24.5	0.7	17.1	45.8	9.6
エ. 配偶者の親御さん ……	4.8	7.1	9.6	37.9	34.3	6.3

問 15. あなたはこの1年間に、次の方との間で、重要な事柄を相談したり、相談を受けたりしたことがありますか。それぞれの方について教えてください（ご自身や配偶者の方の親御さんが亡くなられている方、18歳以上のお子さんがいらっしゃらない方、兄弟姉妹がいらっしゃらない方は「該当者はいない」という欄に○をお付けください）。

	相談をしたこと も、相談を受け たこともあった	自分が相談をし たことがあった	ことがあった 相談を受けた	なかつた されたことは 相談をしたり、	該当者はいない	NA
ア. ご自身のお父さん・お母さん	11.1	4.8	14.4	31.5	36.0	2.2
イ. ご自身の兄弟姉妹	8.2	3.8	16.8	53.4	7.0	10.9
ウ. 18歳以上の子ども	5.1	1.4	21.8	16.8	45.9	8.9
エ. 配偶者の親御さん	3.3	1.5	7.1	47.8	34.6	5.7

〔高校生以下のお子さんがいらっしゃる方におうかがいします。高校生以下のお子さんがいらっしゃらない方は問 17にお進みください〕

問 16. 高校生以下のお子さんがいる方に、そのお子さんとの関係についてお聞きします。

(1) あなたは、ふだん、お子さんと一緒に、次のようなことをどれくらいされていますか。

	ほとんど 毎日	週に 3～4回	週に 1～2回	月に 1～2回	年に数回	全く なかつた	NA
ア. 一緒に夕食をとる	10.7	8.2	14.2	0.9	0.7	0.2	65.0
イ. 一緒にスポーツやゲーム、趣味を楽しむ	1.7	2.7	11.5	8.3	7.1	3.5	65.0
ウ. 一緒に外出する (買い物や食事、映画など)	0.8	0.7	16.0	10.3	5.9	1.1	65.1
エ. 知識や技能(勉強や料理など)を教える	1.3	1.4	9.1	11.0	7.7	4.6	65.0

(2) あなたとお子さんとの関係は、どのようなものですか。

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう思わ ない	NA
ア. 子どもの好きなことをよくわかっている	7.9	24.0	4.7	0.0	63.4
イ. 子どもの仲のいい友達の名前はほとんど知っている	2.9	13.1	15.9	4.8	63.3
ウ. 子どもに信頼されている	7.9	23.1	5.4	0.3	63.3
エ. 子どもの将来の夢についてよく知っている	3.1	15.4	15.4	2.6	63.4

〔全員の方に。お孫さんがいらっしゃらない方もお答えください。〕

問 17 (1). 祖父母と孫のかかわり方に関する次の意見のなかで、ご自身のお考えにもっとも近いものはどれですか。1つだけ選び、その番号に○をお付けください。

1. 孫の育児は親の責任でなすべきもので、祖父母は、一切口をはさむべきではない	9.6
2. 孫の育児は親の責任であるが、孫の親から求められた場合は、祖父母も孫の育児にかかわったほうがよい	57.8
3. 孫の育児は親の責任であるが、気が付いたことがある場合には、祖父母は親の求めがなくても積極的に孫の育児にかかわったほうがよい	26.5
4. 孫の育児には、祖父母も孫の親と同じぐらいの責任を持ってかかわるべき	3.1

NA 3.0

〔引き続き、全員の方におうかがいします。〕

(2) 祖父母と孫のかかわりあい方に関して、さらにおうかがいします。以下の意見について、ご自身のお考えにもっとも近い番号に、それぞれ○をお付けください。

	賛成	やや賛成	やや反対	反対	NA
ア. 子どもの優しい気持ちが育つので、祖父母が孫の育児にかかわることが望ましい……………	26.6	54.3	13.1	3.4	2.5
イ. 祖父母は孫を甘やかすので、祖父母は育児にかかわらない方がよい……………	6.1	25.4	47.9	18.3	2.4
ウ. 祖父母が孫の育児にかかわると、孫は時代からずれた古い価値観を持つようになるので、祖父母は育児にかかわらない方がよい……………	3.1	11.3	45.5	37.6	2.5
エ. 祖父母が孫の育児にかかわると、孫は文化や家風を受け継ぐことが出来るので、祖父母が孫の育児にかかわることは望ましい……………	17.5	59.9	15.5	4.1	3.0
オ. 祖父母は子育ての経験があるので、祖父母が孫の育児にかかわることは望ましい……………	19.1	58.3	16.0	3.9	2.7
カ. 時代の変化で子育ての仕方も変わったため、子育ての経験があるといっても、祖父母は孫の育児にかかわらない方がよい……………	5.4	15.8	53.3	22.6	3.0
キ. 祖父母が育児にかかわると、親に精神的なゆとりができて望ましい……………	12.9	61.4	17.6	4.3	3.8
ク. 祖父母が育児にかかわると、親に時間的なゆとりができて望ましい……………	11.5	65.5	15.8	4.1	3.1
ケ. 祖父母が育児にかかわると、親に経済的なゆとりができて望ましい……………	6.2	47.3	35.4	8.1	3.0

〔お孫さんのいらっしゃる方におうかがいします。お孫さんがいらっしゃらない方は問 19 にお進みください〕

問 18. お孫さんについてお聞きします。

- (1) 現在、お孫さんは何人いらっしゃいますか。 () 人 平均=2.4 人
- (2) 現在、一緒に住んでいるお孫さんは何人いらっしゃいますか。(一人もいらっしゃらない場合には、「0人」とお答えください。)
- () 人 平均=0.2 人
- (3) 最初のお孫さんが生まれたのは、あなたが何歳の時でしたか。 () 歳の時 平均=56.0 歳
- (4) お孫さんが生まれてからのお気持ちはどのようでしたか。次の感想について、ご自身のお気持ちにもっとも近いものに、それぞれ○をお付けください。

	まったくその通り	まあその通り	あまりそうでない	まったく違う	NA
ア. 人前で「おじいちゃん」等と呼ばれて、恥ずかしいような気がしたことがある……………	8.6	23.7	39.9	24.7	3.0
イ. 孫が生まれて、自分の子育てで反省していることをやり直せる気がした……………	4.0	26.3	49.5	17.2	3.0
ウ. 孫に「おじいちゃん」等と呼ばれて、うれしく感じた……………	30.3	46.0	17.2	3.0	3.5
エ. 孫が生まれて、人間としての位がひとつ上がったような気がした……………	7.6	21.7	48.0	20.7	2.0
オ. 孫が生まれて、歳をとった感じがした……………	5.6	33.3	46.0	13.1	2.0
カ. 孫のことは、私の現在の最大の関心事だ……………	16.2	33.8	38.9	8.6	2.5
キ. 孫が生まれて、周囲から、老人ではないのに年寄扱いをされたような気がしたことがある……………	1.0	14.6	58.1	23.2	3.0

[全員の方に]

問 19. 現在、次のような関係・お付き合いに関して、どの程度満足していらっしゃいますか（ご自身の親御さんが亡くなられている方やお子さんがいらっしゃらない方、結婚されていない方、ご親戚がいらっしゃらない方は「該当者はいない」という欄に○をお付けください）。

	満足	どちらかという満足	どちらかという不満足	不満足	該当者はいない	NA
ア. 親子関係（自分の親との）	15.5	33.3	10.6	3.4	35.7	1.5
イ. 親子関係（自分の子どもとの）	26.5	45.4	9.3	1.1	13.5	4.2
ウ. 夫婦関係	31.4	45.9	6.6	2.2	10.1	3.8
エ. 親戚とのおつきあい	11.5	59.5	19.1	4.6	3.2	2.1
オ. ご近所とのおつきあい	7.2	59.7	22.7	6.3	*	4.1
カ. 生活全般	11.1	69.0	12.6	2.7	*	4.6

問 20. 次のような意見について、あなたはどのように思われますか。ア～ケのそれぞれについて、ご自身のお気持ちにもっとも近い番号に○をお付けください。

	賛成	やや賛成	やや反対	反対	NA
ア. 子どものうち誰か一人は、結婚しても両親と同居すべきだ	9.4	36.2	36.5	16.0	1.9
イ. 息子と娘がいるときは、息子が親の面倒を見るべきだ	5.8	32.3	40.3	19.4	2.1
ウ. 親の面倒をみるのは、長男の義務だ	4.3	24.8	41.3	27.8	1.8
エ. 財産を相続する場合、長男が他の兄弟よりも多く相続するのは当然だ	6.7	24.7	40.5	26.1	2.1
オ. 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ	6.7	34.9	38.4	17.6	2.4
カ. 家族と対立しても、自分らしく生きるべきだ	5.8	34.9	46.4	10.3	2.6
キ. 自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきだ	2.3	35.1	52.7	7.7	2.3
ク. 家族が不満に思っても、自分自身に充実感がある暮らし方をするべきだ	3.4	29.9	54.5	9.9	2.2
ケ. 自分のことはさしおいても、家族が満足できるように心がけるべきだ	7.3	46.9	38.6	4.7	2.5

■仕事や会社との関係についておうかがいします。

問 21. 仕事や会社とのかわりについて、どう感じていますか。(1)～(13)のそれぞれについてお答えください。

	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	NA
(1) 仕事の中でこそ自己実現が図れる	5.4	46.5	41.1	4.9	2.1
(2) 仕事は生計を立てるための手段に過ぎない	13.5	54.9	27.0	2.9	1.8
(3) どの会社でも十分通用する職業能力がある	4.2	37.1	50.5	6.1	2.1
(4) 会社は自分を正当に評価している（していた）	3.3	55.7	35.4	3.7	1.9
(5) 自分の会社には尽くしたい	7.4	59.0	27.5	3.7	2.4
(6) 脱サラを考えたことがある・脱サラしたい	8.0	29.8	39.4	20.0	2.7
(7) 上司や同僚とは仕事を離れてもつき合いたい	3.4	33.3	52.3	8.5	2.5
(8) 仕事のためには個人の生活を犠牲にすることがあってもやむを得ない	4.5	39.1	40.7	13.5	2.3
(9) 仕事をするからには多少無理しても出世したい	2.5	26.6	54.2	14.3	2.4
(10) 出世よりも興味のある仕事に専念したい	15.0	57.7	22.5	1.9	2.9
(11) 定年まで会社に勤められるかどうか不安だ（だった）	10.5	36.7	35.9	14.2	2.7
(12) 会社は定年退職後の社員へのめんどうみもよい	3.5	24.5	46.2	23.0	2.9
(13) 定年後は会社の世話になりたくない	22.2	44.0	23.8	7.4	2.6

問 22. 仕事や職場について、あなたはどのような点を重視していますか。次の中からあなたのお考えに近いものを2つまでお答えください。

1. 年齢や勤続年数に関係なく成果しだいで昇給や昇進ができること	22.2
2. 職場の人間関係や雰囲気が良いこと	52.2
3. 失業の心配がないこと	19.9
4. 勤め先が変わっても通用する職業能力が身につくこと	17.6
5. 福利厚生が充実していること	5.7
6. 出勤日や勤務時間が自分の生活スタイルに合っていること	14.5
7. 賃金や社会的評価が高いこと	14.6
8. 仕事内容が自分の興味や能力に合っていること	41.1
9. その他 ()	1.0 NA 1.4

問 23. あなたの会社や仕事とのかかわり方について、次の(1)から(6)のようなことはあてはまりますか。また、すでに退職されている方は、かつて勤めていたとき、あてはまりましたか。

あてはまる	あてはまる どちらかといえば	あてはまらない どちらかといえば	あてはまらない	NA
-------	-------------------	---------------------	---------	----

(1) 仕事の後や休日につき合う相手は、会社の上司や同僚よりも会社以外の人であることが多い(多かった)	32.0	28.7	26.3	11.1	1.9
(2) 今いる会社にずっと勤めつづけるつもりで、経済的な生活設計をしている(していた)	36.7	40.3	13.8	7.4	1.7
(3) 勤めている会社の一員であることや社内での地位以外に、自分の誇りとなるものがある(あった)	20.3	42.1	28.0	7.7	1.9
(4) 会社での研修や職場訓練以外に、自分自身で職業能力を高める努力をしている(していた)	16.6	36.1	33.1	12.1	2.1
(5) 生活全体のなかで、仕事に関係あること以外は、ほとんど何もしていない(していなかった)	6.9	27.2	39.7	24.6	1.7
(6) チャンスがあれば転職や独立できるよう準備をしている(していた)	8.6	20.5	37.0	32.0	1.9

問 24. あなたの周りの方々について、次の(1)から(3)のようなことはあてはまりますか。すでに定年退職された方は、かつて勤めていたときに、周りの方々はどうでしたか。

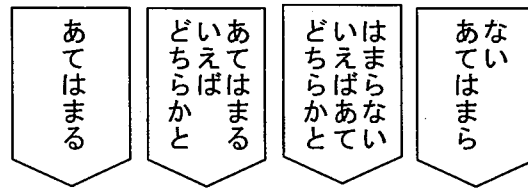
あてはまる	あてはまる どちらかといえば	あてはまらない どちらかといえば	あてはまらない	NA
-------	-------------------	---------------------	---------	----

(1) 家族は、自分が今の会社に勤めつづけることを望んでいる	50.4	36.6	9.0	2.9	1.1
(2) 勤め先には、自分から会社を辞める人が多い	8.1	23.8	38.2	28.3	1.6
(3) 勤め先以外の友人には、仕事や勤め先を変える人が多い	3.2	19.3	53.5	21.8	2.2

問 25. 世の中には、いろいろな仕事のコース(職業キャリア)がありますが、この中からあなたがもっとも望ましいと思うものを1つあげてください。

1. 1つの企業に長く勤め、だんだん管理的な地位になっていくコース	17.0
2. いくつかの企業を経験して、だんだん管理的な地位になっていくコース	12.3
3. 1つの企業に長く勤め、ある仕事の専門家になるコース	21.7
4. いくつかの企業を経験して、ある仕事の専門家になるコース	20.6
5. 最初は雇われて働き、後に独立して仕事をするコース	9.8
6. 最初から独立して仕事をするコース	1.3
7. どちらともいえない	11.3
8. わからない	5.3 NA0.7

問 26. あなたにとって、ここにある (1) から (6) のような活動は「働くこと」にあてはまりますか。



(1) 親の介護	16.5	22.9	28.1	28.9	3.7	NA
(2) 育児	16.3	23.0	28.7	28.1	3.9	
(3) 家事	18.6	28.5	30.2	19.4	3.3	
(4) ボランティア活動 (NPO、NGO を含む)	12.9	31.9	29.4	22.1	3.8	
(5) 消費者・市民運動	8.3	23.9	36.1	27.8	3.9	
(6) 地域貢献活動	10.4	31.8	33.1	21.5	3.2	

■定年との関係についておうかがいします。

〔定年前の方におうかがいします。すでに定年退職されている方は問 28 へお進みください〕

問 27. 今の会社に定年まで勤めたいと思いますか。

1. 定年まで勤めたい 53.0

2. 定年前に退職したい 14.6 → (あと 年くらいで) 平均=6.7年

NA 32.3

付問. 定年前に退職する場合、Uターン・Iターンをすることを考えたことがありますか。

1. どちらも考えたことがない 71.9

2. Uターンを考えたことがある 13.3 → 出身地はどちらですか。
() 県

3. Iターンを考えたことがある 9.4 → どちらにですか。
NA 7.0 () 県

〔全員の方に〕

問 28. あなたは今後何歳まで、仕事をしたいと思いますか。現在働いていない人は、今後、働きに出たとした場合を仮定してお答えください。今後も働く計画のない人は、最後に仕事を辞めた年齢を記入してください。

歳 平均=65.6 歳

問 29. 定年退職後または定年前の退職後に、仕事をどのようにしたいと思いますか。すでに定年退職された方は、定年後の仕事をどのようにしたいと思っていましたか。(○は1つだけ)

1. 退職とともに職業生活から引退したい (引退したかった)	15.2
2. 退職後も再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤めたい (勤めたかった)	19.4
3. 退職後は出向先に移籍したい (移籍した)	2.3
4. 退職後は別の企業に再就職したい (再就職したかった)	15.9
5. 退職後は自分で事業や商売を始めたい (始めたかった) (自由業を含む)	14.3
6. 退職後は家業を手伝いたい (手伝いたかった)	1.3
7. 退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をしたい (したかった)	11.3
8. 退職後は NPO・NGO やボランティア団体で、地域や社会のために働きたい (働きたかった)	8.1
9. その他 ()	1.7
10. わからない・考えたことがない	7.8 NA2.7

問 30. それでは、実際には定年退職後（または定年前の退職）の後、あなたの仕事のしかたはどのようになると思われますか。定年退職された方は、退職後に仕事につきましたか（○は1つだけ）

1. 退職とともに職業生活から引退する（引退した）	15.3
2. 退職後も再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める（勤めた）	18.1
3. 退職後は出向先に移籍する（移籍した）	3.5
4. 退職後は別の企業に再就職する（再就職した）	20.3
5. 退職後は自分で事業や商売を始める（始めた）（自由業を含む）	10.7
6. 退職後は家業を手伝う（手伝うようになった）	1.5
7. 退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をする（するようになった）	8.5
8. 退職後はNPO・NGOやボランティア団体に、地域や社会のために働く（働くようになった）	4.9
9. その他（ ）	2.4
10. わからない	NA3.7 11.1

問 31. 定年後の生活費を主に何によってまかなおうと考えていますか。すでに定年退職された方は、主に何によってまかなっていますか。次の中から3つまでお答えください。

1. 公的年金	70.1	6. 就労による収入	42.9
2. 企業年金	31.8	7. 子ども等からの経済的支援	0.6
3. 退職金	33.4	8. その他（ ）	3.3
4. 生命保険の保険金や個人年金	17.6	9. わからない・考えたことがない	3.7
5. 預貯金の切りくずし	22.4		NA 3.3

【フェイスシート】

最後に、今までお聞きしたことを分析する上で必要な事項についておうかがいします。

F 1. 年齢（2003年1月1日現在） 歳 平均=52.0歳

F 2. 居住地 都道府県 市区町村

F 3. 現在お住まいの地域（市区町村）に住んで何年になりますか。単身赴任等で一時離れた場合も、家族が継続して住んでいた期間は年数に含めてください。

1. 5年未満	6.5	3. 10年以上～20年未満	22.4	5. 30年以上	36.0
2. 5年以上～10年未満	13.1	4. 20年以上～30年未満	19.8	NA	2.2

F 4. あなたが最後に卒業された学校は、次のどれですか。

1. 小学校・高等小学校・新制中学校	10.4	4. 大学・大学院	45.0
2. 旧制中学校・旧制高等女学校・ 旧制実業学校・新制高等学校	31.0	5. 専門学校・専修学校	7.8
3. 旧制高等学校・高等師範学校・新制短大	3.4	6. その他（ ）	0.1
		NA	2.3

F 5. あなたは、現在結婚されていますか。（○は1つだけ）

1. 結婚していない	7.2	平均=24.4年目
2. 結婚している（初婚）	80.6	→結婚 <input type="text"/> 年目 *2003年1月1日現在でご記入ください。
3. 結婚している（再婚）	3.9	→現在の配偶者と結婚 <input type="text"/> 年目 *2003年1月1日現在でご記入ください。
4. 離別して現在は独身	1.0	平均=14.7年目
5. 死別して現在は独身	1.6	NA 0.2

F 6. あなたにはお子さんがいらっしゃいますか。(○は1つだけ)

1. 子供はいない 13.5 → F 7へお進みください

2. 子供がいる 84.8 → 人 平均=2.1人

NA 1.7

付問1. 一番上と一番下のお子さんの性別と年齢をご記入ください。(お子さんが1人の場合「一番下のお子さん」についてのご記入は不要です。) (a)平均=22.6歳 (b)平均=19.4歳

(a)一番上のお子さん→ (1. 男性 50.3 2. 女性 47.2) NA 2.6 満 歳

(b)一番下のお子さん→ (1. 男性 39.1 2. 女性 39.6) NA 21.3 満 歳

*すべて2003年1月1日現在でご記入ください。

付問2. お子さんの中で、結婚された方はいらっしゃいますか。

1 結婚を経験した子供はいない 51.2 → F 7へお進みください

2 結婚を経験した子供がいる 34.1

NA 14.7 平均=25.8歳

付問(a)最初に結婚されたおさんは、そのお子さんが何歳のときに結婚されましたか。 (歳)

(b)また、そのときあなたは何歳でしたか。 (歳) 平均=54.4歳

【全員の方に】

F 7. 現在、あなたにはご健在の兄弟姉妹は何人いらっしゃいますか。 人 平均=2.5人

F 8. 現在、あなたとごいっしょの世帯にお住まいの方をすべて選んで○をつけてください。

1. 配偶者	85.9	5. 配偶者の父	1.6	9. 配偶者の祖父	0.1
2. 子供	65.1	6. 配偶者の母	3.4	10. 配偶者の祖母	0.5
3. 自分の父	7.4	7. 自分の祖父	0.0	11. 兄弟姉妹	1.9
4. 自分の母	15.0	8. 自分の祖母	0.0	12. その他(具体的に)	1.7
				13. なし(ひとり住まい)	4.1
				NA	2.5

F 9. 現在お住まいの住居は、次のどれですか。

1. 持ち家一戸建て(自分の代で取得・建て替え)	56.7	5. 貸家・賃貸マンション・賃貸アパート	14.4
2. 持ち家一戸建て(親の持ち家)	11.3	6. 社宅・官舎・寮等	2.6
3. 持ち家マンション(自分の代で取得)	11.9	7. その他(具体的に)	0.0
4. 持ち家マンション(親の持ち家)	0.7	NA	2.4

付問. 住宅ローンを支払っていますか。 平均=17.1年

1. 払っている 44.5 (残りはあと 年) 2. 払っていない 52.8

NA 2.7

【全員の方に】

F 10. 現在のあなたの健康状態は。

1. 非常に健康	12.5	4. 注意する点があり、日常生活に制限がある	2.6
2. まあ健康	51.3	5. 病気がち・療養中	1.5
3. 注意する点はあるが、日常生活に支	29.8	NA	2.3

F11. あなたは現在、収入を伴う仕事に就いていますか。パート・アルバイト等も含みます。(○は1つ)

1. 就いている	85.8	2. 就いていない	11.9 (最後に職を離れてから <input type="text"/> 年) 平均=2.4年
NA 2.3		F13へお進みください	

F12. [現在職業についている方におうかがいします。]

(1) あなたの現在の就業形態(正規の社員、嘱託、自営業など)は、次のどれですか。

1. 正規の社員・従業員	76.2	4. 内職	0.0
2. 派遣・嘱託・パートタイマーなど	14.2	5. シルバー人材センター(高齢者事業団)	1.6
3. 自営業・自由業・家族従業員	5.6	6. その他(<input type="text"/>)	0.3 NA 2.1

(2) あなたの職種は次のどれですか。

1. 専門技術職(研究職・技師等)	14.6	5. 技能職・技術補助・生産工程従事・作業者	27.7
2. 管理職(役員・課長以上の管理職)	29.4	6. サービス職(添乗員・ホテルマン等)	4.4
3. 事務職(一般事務・営業・経理事務等)	18.9	7. その他(<input type="text"/>)	1.2
4. 販売職(店員・セールス等)	2.9	NA	0.8

(3) 勤務先の従業員数は会社全体でどのくらいですか。(支店や営業所がある場合は合計)

1. 1~29人	21.2	2. 30~99人	14.5	3. 100~299人	13.4	4. 300~999人	15.6	5. 1000人以上	33.3
NA 2.0									

(4) あなたの職場までの通勤時間をお答えください。

片道 時間 分 平均=50.3分

(5) あなたご自身の通常労働時間はどのくらいですか。

(a) 1日の労働時間は。 平均 時間 平均=9.0時間

(b) 週に何日勤務していますか。 平均 日 平均=5.0日

* 小数以下は四捨五入してください。
労働時間は、残業時間を含めてお答えください。ただし休憩時間は除きます。

(6) 現在の勤務先での勤続年数をお答えください。

現在の勤務先では、勤続 年目 *2003年1月1日現在でご記入ください。
平均=16.3年

(7) あなたの会社の定年退職年齢は何歳ですか。

歳
平均=60.7歳

[全員の方におうかがいします。]

F13. あなたはこれまでに何回勤め先を変りましたか。最初の勤め先を辞め、その後1度も勤めていない場合は「1回」とお答えください。出向については転職に加えないでください。自営業からの転身や商売変えは転職に加えてください。定年退職された方は、定年前までの数をお答えください。

回 平均=2.0回

F14. 昨年1年間のあなたの年収（年金や副業等も含めて、税込でお答えください）

1. 200万円未満	5.5	6. 600万円以上～800万円未満	21.9
2. 200万円以上～300万円未満	7.9	7. 800万円以上～1000万円未満	17.5
3. 300万円以上～400万円未満	11.4	8. 1000万円以上～1500万円未満	9.0
4. 400万円以上～500万円未満	9.7	9. 1500万円以上	2.5
5. 500万円以上～600万円未満	12.5		NA 2.1

F15 (1). 昨年1年間のあなたの世帯の年収（年金や副業等も含めて、税込でお答えください）

1. 200万円未満	2.6	6. 600万円以上～800万円未満	21.8
2. 200万円以上～300万円未満	5.1	7. 800万円以上～1000万円未満	18.1
3. 300万円以上～400万円未満	9.9	8. 1000万円以上～1500万円未満	16.3
4. 400万円以上～500万円未満	8.9	9. 1500万円以上	4.3
5. 500万円以上～600万円未満	11.1		NA 1.7

(2). 主たる収入源は何ですか。（○は1つだけ）

1. 給与	79.0	4. 利息・配当金収入	0.1
2. 年金収入（公的・企業・個人年金）	17.5	5. その他	1.9
3. 不動産収入	0.9		NA 0.6

(3). それは生活する上で十分な収入ですか。

1. 十分で余裕がある	4.7	2. ほぼ十分である	45.6	3. やや不足する	39.4	4. 非常に不足する	9.7
							NA 0.6

F16. 現在の経済的な暮らしについて、どのように感じていますか。

1. とても楽だ	4.5	2. 少し楽だ	47.0	3. 苦しい	41.9	4. とても苦しい	5.5	NA	1.1
----------	-----	---------	------	--------	------	-----------	-----	----	-----

この調査全体についてのご感想やご意見がありましたら、お書きください。

以上で終了です。ご協力ありがとうございました。記入もれがないかお確かめの上、緑色の回収用封筒に封入のうえ、配偶者の方の調査票を封入した黄色の封筒とともに（ただし配偶者のおられない方は黄色の封筒は不要で、緑色の封筒のみ）、返信用封筒にてご返送ください。

※なお、のちに、この調査に関連して、別途ご意見をうかがう機会を設けたいと考えております。これに応じてよいと思われる方は、下の欄にお名前、お電話番号をお書きください。（ご記入いただいた内容は、この目的以外のために使用することはありません。）

〔別の意見聴取に応じてよい方〕

お名前		電話番号	()
-----	--	------	-----

サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査【配偶者用】

平成 15 年 1 月

記入上の注意

- 1) この調査のご回答は、封筒の宛名の方の配偶者の方がご記入ください。
- 2) 回答は、すべてこの調査用紙に直接記入してください。
- 3) 問1から順にお答えください。回答は、あてはまる番号に○をつけるところと、具体的に文字や数次を記入していただくところがあります。
- 4) とくに断りがないときは、1問につき○は1つだけです。
- 5) 「その他」を選んだときは、番号に○をつけたうえで、() に具体的に記入してください。

1月20日(月) ごろまでにご投函ください。

■ふだんの生活についておうかがいします。

問1. あなたが現在所属して、実際に活動しているグループ・団体はどれですか。(○はいくつでも)

1. 趣味やスポーツのクラブ・サークル	35.9	7. 町内会・自治会や防災・防犯協会	16.3
2. 学習・研究会や教養教室	7.9	8. 老人クラブや地域の同好会	2.1
3. 職場・職域関係の団体・グループ	9.2	9. 消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	5.5
4. 定年退職者の会など、旧職場の集まり	1.2	10. 宗教団体・政治団体	5.1
5. PTA・父母会や子供会・青少年団体	23.6	11. その他 ()	2.3
6. 難病や障害児・者を持つ家族の会	1.1	12. いずれもない	28.6

NA2.3

問2. ボランティアなど社会に役立つ活動についてどのように思いますか。あなたの考え方に近いものをお答えください。(○は3つまで)

1. 自分の知識や能力が向上することが大切である	13.7
2. 活動は楽しいことが大切である	44.0
3. 社会のためになることが大切である	38.4
4. 多くの人と知り合えることが大切である	28.0
5. 気軽にできることが大切である	50.5
6. 市民として当然参加すべきである	2.5
7. 他人から参加を強制されないことが大切である	43.6
8. やるからには責任をもってやりとおすことが大切である	34.1
9. その他 ()	0.8

NA 1.6

問3. では、あなたはいま、何か社会に役立つ活動に参加していますか。団体活動でも個人の活動でもかまいません。

1. 定期的に参加している	14.6	3. 以前に参加したことがある	12.9
2. ときどき参加している	9.0	4. 参加していない	60.2
		NA	3.3

付問1. どのような分野の活動ですか。

(〇はいくつでも)

1. 地域の生活環境を守る活動	18.8
2. 地域のイベントや“村おこし”の活動	21.0
3. 趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	21.0
4. 児童や青少年活動の世話役としての活動	28.4
5. 地域の文化財や伝統を守る活動	2.3
6. 消費者活動や生活向上のための活動	6.3
7. 障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	25.6
8. 行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	8.0
9. 自然保護や環境保全の活動	5.1
10. 国際交流に関する活動	3.4
11. その他 ()	NA 0.6 8.0

付問5. 現在参加していない理由は何ですか。

(〇は3つまで)

1. 時間がない	52.2
2. 経済的余裕がない	15.9
3. 精神的なゆとりがない	26.7
4. 健康や体力に自信がない	22.5
5. 家族など周囲の理解や協力が得られない	1.5
6. 自分にあった活動の場がない	19.4
7. いっしょにやる仲間がいない	9.5
8. 何から始めるか、きっかけがつかめない	30.2
9. 興味が無い、関心がない	7.9
10. その他 ()	NA 0.9 6.2

付問2. 活動に参加した理由は何ですか。

(〇は3つまで)

1. 地域や社会に貢献したい	41.5
2. 自分の知識や経験を活かしたい	28.4
3. 社会への見聞を広げたい	15.9
4. 友人や仲間を増やしたい	32.4
5. 生活にはりあいを持たせたい	24.4
6. 身近な人に誘われた	22.2
7. 会社の勧めや命令	0.0
8. 市民・社会人として当然と思った	17.6
9. 何となく	1.1
10. その他 ()	NA 0.6 13.1

付問6. 今後参加したいと思いますか。

(〇は1つ)

1. 積極的に参加したい	4.6
2. 条件によっては参加してもよい	51.6
3. 参加するつもりはない	8.6
4. わからない	33.3
NA 1.8	

[現在は参加していない方は、付問5、6をお答えの後、問4にお進みください。]

[引き続き、問3で「定期的に参加している」「ときどき参加している」と答えた方に]

付問3. 参加している活動についてどの程度満足していますか、それとも不満を感じていますか。(〇は1つ)

1. 満足	2. どちらかといえば満足	3. どちらともいえない	4. どちらかといえば不満	5. 不満	NA
15.9	56.3	22.7	2.8	0.0	2.3

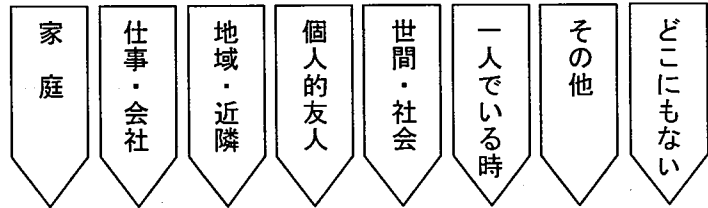
付問4. それでは、活動をしていて、具体的にはどのように感じていますか。(1)～(7)のそれぞれについてお答えください。(〇はそれぞれ1つ)



(1) 自分の知識・技術、能力、経験を活かした	12.5	40.3	29.5	5.7	4.5	7.4	NA
(2) 自分が人間として成長できた	20.5	42.6	26.1	3.4	0.6	6.8	
(3) 多くの人と知り合いになれた	28.4	52.3	12.5	0.6	1.1	5.1	
(4) 困っている人の役に立てた	11.9	30.7	39.8	6.3	4.5	6.8	
(5) 社会のために役に立てた ((4)を除く)	9.7	41.5	31.3	2.8	1.7	13.1	
(6) 社会的な評価を得られた	5.1	26.7	44.9	9.7	5.7	8.0	
(7) 活動をしていて楽しい	26.1	46.6	15.9	5.1	1.1	5.1	

〔全員の方に〕

問4. 生活やつきあいの場を「家庭」、「仕事」などのようにいくつかに分けた場合、(1)～(9)にあてはまるものを、それぞれ2つまで選んでください。



(1) 生活にはりあいや活力をもたらしてくれるのはどこですか	70.1	28.9	8.8	33.9	5.6	4.6	4.3	0.7	6.2NA
(2) 生活のどの場で、リズムやメリハリがつかますか	49.4	39.0	11.6	18.2	7.9	8.8	6.6	1.3	7.2
(3) 心の安らぎや気晴らしを感じるのは、どこが多いですか	65.6	2.5	4.1	42.3	1.5	32.4	6.3	0.4	5.8
(4) 生活のどの場で、喜びや満足感を感じる人が多いですか	73.6	19.4	7.8	26.6	5.0	8.2	8.4	0.9	6.8
(5) あなたの人生観や価値観に影響を与えているのは、どこの人ですか	48.7	17.0	8.3	42.2	23.3	0.7	6.7	1.9	8.0
(6) 生活の目標や目的は、どこにあると感じますか	77.5	18.2	5.4	5.2	14.2	2.0	6.3	1.7	8.8
(7) どの場での生活が自分自身を向上させていると考えますか	35.1	36.1	15.7	16.3	25.0	4.6	7.9	2.0	8.0
(8) 自分の可能性を実現したり、何かをやりとげたと感じるのは、どの場でのことが多いですか	37.8	39.6	15.3	6.3	13.4	6.7	9.6	3.6	8.4
(9) 自分が役に立っていると感じたり、評価を得ているのは、どの場でのことが多いですか	61.6	35.9	15.7	12.2	6.4	0.7	6.3	3.1	7.1

■生きがいについておうかがいします。

問5 (1). よく「生きがい」と言われますが、次の中で「生きがい」を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。あなたのお考えに最も近いものから2つまで選んでください。

1. 生活の活力やはりあい	24.8	6. 生きる目標や目的	21.0
2. 生活のリズムやメリハリ	9.8	7. 自分自身の向上	19.4
3. 心の安らぎや気晴らし	23.7	8. 自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	26.5
4. 生きる喜びや満足感	42.6	9. 他人や社会の役に立っていると感じる事	13.3
5. 人生観や価値観の形成	5.9	10. その他 ()	1.1
			NA 1.7

(2). そのような生きがいを、あなたは現在持っていますか。

1. 持っている	67.1	3. 持っていない	6.3
2. 前は持っていたが、今は持っていない	6.0	4. わからない	18.3
			NA 2.3

■友人との関係についておうかがいします。

問6. あなたには、生涯を通じてつきあえる友人や仲間がいますか。

1. いる 90.9 () 人) 平均=6.7人 2. いない 7.5 問7へお進みください
NA 1.6

付問1. どのような関係で知り合った方々ですか。(〇はいくつでも)

1. 幼なじみ・学生時代の友人・仲間	73.2
2. 職場や仕事を通じて知り合った友人・仲間	53.2
3. 近隣の人、地域で知り合った友人・仲間	53.3
4. 趣味・パソコン教室・スポーツや学習を通じて知り合った友人・仲間	24.4
5. 電子メール、パソコンネット、携帯電話などを通じて知り合った友人・仲間	0.6
6. 社会活動を通じて知り合った友人・仲間	7.2
7. 宗教活動を通じて知り合った友人・仲間	5.0
8. 家族や親戚・縁戚関係を通じて知り合った友人・仲間	14.9
9. その他 (<input type="text"/>)	4.4
	NA 0.1

付問2. そのうち一番だじな人はどれですか。上で〇をつけた中から1つだけ番号を選んでください。

■配偶者や家族との関係についておうかがいします。

問7. 話は変わりますが、日頃の配偶者との関係について、どう感じていますか。(1)～(15)のそれぞれについてお答えください。

	まったく そのとおり	まあ そのとおり	あまり そうでない	まったく 違う	NA
(1) 夫は私を頼りにしてくれている	31.3	52.7	12.4	1.3	2.1
(2) 夫はわたしを理解してくれている	21.3	56.1	18.3	2.1	2.1
(3) 夫はわたしを愛している	29.7	50.6	14.3	2.0	3.3
(4) 夫と価値観・考え方が似ている	10.8	40.2	36.7	10.0	2.3
(5) 夫と共通の趣味がある	11.5	30.1	36.4	19.5	2.4
(6) 夫と対話がある	30.4	48.2	17.8	1.6	2.0
(7) 夫とよく一緒に出かける	31.6	36.4	25.3	4.6	2.1
(8) 夫は私の趣味や行動を尊重してくれる	34.5	50.2	10.8	2.4	2.0
(9) 夫は私の能力や努力を高く評価してくれる	16.3	48.7	29.5	3.2	2.3
(10) 夫は私の心配事や悩み事を聞いてくれる	22.9	47.3	22.6	4.8	2.4
(11) 夫は私に助言やアドバイスをしてくれる	22.2	45.8	25.0	4.3	2.7
(12) 夫と私は、家事を公平に分担しておこなっている	10.4	23.8	43.1	20.3	2.3
(13) 夫と私は、ともに子育てをおこなっている	16.1	36.3	28.2	11.8	7.6
(14) 夫は、私がいないと駄目だ	22.4	37.5	31.1	7.0	2.1
(15) 私は、夫がいないと駄目だ	23.6	40.2	29.0	5.4	1.9

問8. 日頃の配偶者の方との生活についてお伺いします。

(1) あなたは、配偶者の方と、どの程度一緒に夕食を取られますか。

1. ほぼ毎日 53.4	2. 週に 4~5日 14.1	3. 週に 2~3日 22.1	4. 週に1日 くらい 6.8	5. 月に 1~2日 1.3	6. ほとんど しない 0.7	NA 1.6
-----------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--------------------	--------

(2) あなたは、配偶者の方と、どの程度一緒に買い物にでかけられますか。

1. ほぼ毎日 1.2	2. 週に 4~5日 2.3	3. 週に 2~3日 17.0	4. 週に1日 くらい 44.4	5. 月に 1~2日 20.2	6. ほとんど しない 12.9	2.0
----------------	-------------------	--------------------	---------------------	--------------------	---------------------	-----

(3) あなたは、食事の用意をどの程度なされますか(手伝いを含む)。

1. ほぼ毎日 84.7	2. 週に 4~5日 6.2	3. 週に 2~3日 3.9	4. 週に1日 くらい 1.3	5. 月に 1~2日 0.5	6. ほとんど しない 1.2	2.1
-----------------	-------------------	-------------------	--------------------	-------------------	--------------------	-----

(4) あなたは、洗濯をどの程度なされますか(手伝いを含む)。

1. ほぼ毎日 71.1	2. 週に 4~5日 12.3	3. 週に 2~3日 10.7	4. 週に1日 くらい 1.6	5. 月に 1~2日 0.8	6. ほとんど しない 1.6	1.9
-----------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--------------------	-----

(5) あなたは、お風呂の掃除をどの程度なされますか(手伝いを含む)。

1. ほぼ毎日 38.7	2. 週に 4~5日 16.6	3. 週に 2~3日 21.7	4. 週に1日 くらい 9.2	5. 月に 1~2日 5.1	6. ほとんど しない 6.8	1.9
-----------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--------------------	-----

(6) あなたと配偶者の方との意見が食い違った場合、どのようになることが多いですか。

1. ほとんど 自分の意見 がおとる 2.4	2. どちらかと いうと 自分の意見 がおとる 19.1	3. どちらとも いえない 56.4	4. どちらかと いうと 配偶者の意見 がおとる 16.3	5. ほとんど 配偶者の意見 がおとる 3.9	1.9
---------------------------------	---------------------------------------	--------------------------	--	----------------------------------	-----

[全員の方におうかがいします]

問9. ご自身の親御さんについてお伺いします。

(1) あなたご自身のお父さんは、ご健在ですか。

1. 死亡 54.9	⇒	あなたが何歳のときにお亡くなりになりましたか。	<input type="text"/>	歳
2. 健在 43.9	⇒	現在	<input type="text"/>	歳 平均=72.3 歳
NA 1.2				平均=34.8 歳
付問(a)現在働いていらっしゃいますか。				
1. 仕事についている 32.3		2. 無職(定年退職を含む) 64.3	NA 3.4	
(b)現在の健康状態はいかがですか。				
1. たいへん 良好 8.5	2. まあ良好 57.3	3. どちらとも いえない 15.9	4. やや悪い 12.2	5. たいへん 悪い 3.4
NA				

(2) あなたご自身のお母さんは、ご健在ですか。

1. 死亡 34.1	⇒	あなたが何歳のときにお亡くなりになりましたか。	<input type="text"/>	歳
2. 健在 65.3	⇒	現在	<input type="text"/>	歳 平均=72.5 歳
NA 0.5				平均=39.8 歳
付問(a)現在働いていらっしゃいますか。				
1. 仕事についている 20.7		2. 無職(定年退職を含む) 76.8	NA 2.5	
(b)現在の健康状態はいかがですか。				
1. たいへん 良好 6.6	2. まあ良好 55.1	3. どちらとも いえない 17.0	4. やや悪い 16.0	5. たいへん 悪い 4.3
NA 1.0				

[引き続き、ご自身の親御さんについてお伺いします。ご自身の親御さんがお二人とも亡くなられた方は、問 11にお進みください。]

問 10. (1) ご自身の親御さんは、どこに住んでいらっしゃいますか。

1. ご自身と同居している	7.0	5. 交通機関を使って1時間未満のところ	17.9
2. となり・同じ敷地内の別棟	1.1	6. 交通機関を使って2時間未満のところ	14.5
3. 歩いていけるところ	9.4	7. 交通機関を使って2時間以上のところ	35.7
4. 交通機関を使って30分未満のところ	12.3		NA 2.1

(2) あなたは、ここ1年の間で、ご自身の親御さんと、次のような事柄をどの程度なさいましたか。ア～ウのそれぞれの項目について、当てはまる番号に1つずつ○をお付けください。

	ほとんど毎日	週に3～4回	週に1～2回	月に1～2回	年に数回	全くなかった	NA
ア. ちょっとした話をする(電話を含む) ……	14.3	7.4	29.8	32.8	12.5	1.3	1.9
イ. ちょっとした用事(買い物・使い走りなど)をしたり、してもらったりする ……	6.0	2.1	8.9	15.3	32.3	30.2	5.3
ウ. 一緒に外出する(食事・買い物など) ……	0.8	1.7	5.1	16.4	46.6	25.3	4.2

問 11. 配偶者の親御さんとおつき合いについてお伺いします(配偶者の親御さんが亡くなられている方12にお進みください)。ここ1年の間で、配偶者の親御さんと次のような事柄をどの程度なさいましたか。それぞれの項目について、当てはまる番号に○をお付けください。

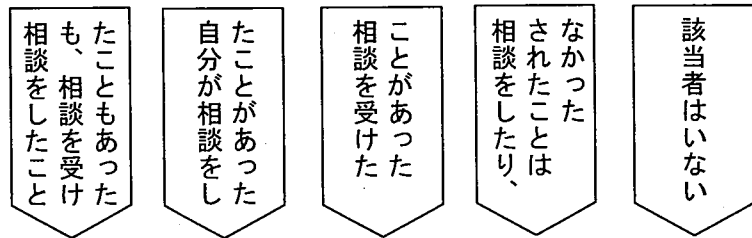
	ほとんど毎日	週に3～4回	週に1～2回	月に1～2回	年に数回	全くなかった	NA
ア. ちょっとした話をする(電話を含む) ……	18.2	5.1	8.8	27.4	30.6	4.7	5.1
イ. ちょっとした用事(買い物・使い走りなど)をしたり、してもらったりする ……	7.9	2.1	6.2	11.1	24.4	40.5	7.7
ウ. 一緒に外出する(食事・買い物など) ……	1.1	0.0	2.8	11.8	41.1	35.8	7.5

[全員の方に]

問 12. あなたはこの1年間に、次の方との間に経済的な援助(小遣い、仕送り、貸し金など)のやりとりがありましたか。それぞれの方について教えてください(ご自身や配偶者の方の親御さんが亡くなられている方、18歳以上のお子さんがいらっしゃらない方、兄弟姉妹がいらっしゃらない方は「該当者はいない」という欄に○をお付けください)。

	援助も、たこともあつた	援助をしたこと	自分が援助をした	援助を受けた	援助のやり取り	該当者はいない	NA
ア. ご自身のお父さん・お母さん ……	9.8	7.4	14.2	35.7	29.0	3.9	NA
イ. ご自身の兄弟姉妹 ……	2.7	5.5	2.9	71.6	12.9	4.4	
ウ. 18歳以上のお子ども ……	2.9	22.6	2.1	20.6	42.6	9.1	
エ. 配偶者の親御さん ……	4.0	5.6	12.2	35.7	37.2	5.2	

問 13. あなたはこの1年間に、次の方との間で、**重要な事柄を相談したり、相談を受けたりしたことがありますか。**それぞれの方について教えてください（ご自身や配偶者の方の親御さんが亡くなられている方、18歳以上のお子さんがいらっしゃらない方、兄弟姉妹がいらっしゃらない方は「該当者はいない」という欄に○をお付けください）。



ア. ご自身のお父さん・お母さん	15.7	6.2	13.5	31.6	29.0	4.0	NA
イ. ご自身の兄弟姉妹	14.1	4.3	16.3	49.9	11.1	4.3	
ウ. 18歳以上の子ども	7.8	1.2	20.2	20.2	42.7	7.9	
エ. 配偶者の親御さん	4.6	2.8	8.3	42.0	37.2	5.1	

〔高校生以下のお子さんがいらっしゃる方におうかがいします。高校生以下のお子さんがいらっしゃらない方は問 15にお進みください〕

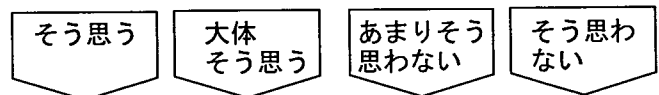
問 14. 高校生以下のお子さんがいる方に、そのお子さんとの関係についてお聞きします。

(1) あなたは、ふだん、お子さんと一緒に、次のようなことをどれくらいされていますか。



ア. 一緒に夕食をとる	36.4	2.3	0.9	0.3	0.0	0.4	59.7	NA
イ. 一緒にスポーツやゲーム、趣味を楽しむ	7.0	3.6	10.8	7.9	7.4	3.3	60.0	
ウ. 一緒に外出する (買い物や食事、映画など)	5.8	3.7	16.5	8.7	4.6	0.8	60.0	
エ. 知識や技能(勉強や料理など)を教える	9.0	6.2	10.6	5.8	6.3	2.3	60.0	

(2) あなたとお子さんとの関係は、どのようなものですか。



ア. 子どもの好きなことをよくわかっている	19.0	22.2	0.4	0.1	58.2	NA
イ. 子どもの仲のいい友達の名前はほとんど知っている	19.0	18.7	3.7	0.3	58.2	
ウ. 子どもに信頼されている	14.3	24.9	2.7	0.1	58.0	
エ. 子どもの将来の夢についてよく知っている	8.8	21.3	10.2	1.1	58.6	

〔全員の方に。お孫さんがいらっしゃらない方もお答えください。〕

問 15 (1). 祖父母と孫のかかわり方に関する次の意見のなかで、ご自身のお考えにもっとも近いものはどれですか。1つだけ選び、その番号に○をお付けください。

1. 孫の育児は親の責任でなすべきもので、祖父母は、一切口をはさむべきではない	9.8
2. 孫の育児は親の責任であるが、孫の親から求められた場合は、祖父母も孫の育児にかかわったほうがよい	65.1
3. 孫の育児は親の責任であるが、気が付いたことがある場合には、祖父母は親の求めがなくても積極的に孫の育児にかかわったほうがよい	21.7
4. 孫の育児には、祖父母も孫の親と同じぐらいの責任を持ってかかわるべきだ	1.7

NA 1.7

〔引き続き、全員の方におうかがいします。〕

(2) 祖父母と孫のかかわりあい方に関して、さらにおうかがいします。以下の意見について、ご自身のお考えにもっとも近い番号に、それぞれ○をお付けください。

	賛成	やや賛成	やや反対	反対	
ア. 子どもの優しい気持ちが育つので、祖父母が孫の育児にかかわることが望ましい……………	21.7	61.0	13.1	2.0	2.1 NA
イ. 祖父母は孫を甘やかすので、祖父母は育児にかかわらない方がよい……………	4.8	24.0	51.7	17.4	2.1
ウ. 祖父母が孫の育児にかかわると、孫は時代からずれた古い価値観を持つようになるので、祖父母は育児にかかわらない方がよい……………	2.3	13.3	49.8	32.5	2.1
エ. 祖父母が孫の育児にかかわると、孫は文化や家風を受け継ぐことが出来るので、祖父母が孫の育児にかかわることは望ましい……………	15.0	62.8	16.9	2.8	2.5
オ. 祖父母は子育ての経験があるので、祖父母が孫の育児にかかわることは望ましい……………	15.9	60.0	18.6	3.2	2.3
カ. 時代の変化で子育ての仕方も変わったため、子育ての経験があるといっても、祖父母は孫の育児にかかわらない方がよい……………	3.9	23.2	52.2	18.5	2.3
キ. 祖父母が育児にかかわると、親に精神的なゆとりができて望ましい……………	15.3	61.7	17.5	2.7	2.8
ク. 祖父母が育児にかかわると、親に時間的なゆとりができて望ましい……………	15.5	65.7	14.1	2.3	2.4
ケ. 祖父母が育児にかかわると、親に経済的なゆとりができて望ましい……………	7.9	49.4	32.7	7.2	2.8

〔お孫さんのいらっしゃる方におうかがいします。お孫さんがいらっしゃらない方は問 17 にお進みください〕

問 16. お孫さんについてお聞きします。

平均=53.2 歳

(1) 最初のお孫さんが生まれたのは、あなたが何歳の時でしたか。 () 歳の時

(2) お孫さんが生まれてからのお気持ちはどのようでしたか。次の感想について、ご自身のお気持ちにもっとも近いものに、それぞれ○をお付けください。

	まったくその通り	まあその通り	あまりそうでない	まったく違う	
ア. 人前で「おばあちゃん」等と呼ばれて、恥ずかしいような気がしたことがある……………	1.9	5.1	10.0	6.2	76.8 NA
イ. 孫が生まれて、自分の子育てで反省していることをやり直せる気がした……………	1.1	6.3	11.9	3.7	77.0
ウ. 孫に「おばあちゃん」等と呼ばれて、うれしく感じた……………	8.8	10.4	3.1	0.4	77.2
エ. 孫が生まれて、人間としての位がひとつ上がったような気がした……………	1.2	4.1	13.3	4.4	77.0
オ. 孫が生まれて、歳をとった感じがした……………	0.5	6.0	13.1	3.1	77.2
カ. 孫のことは、私の現在の最大の関心事だ……………	3.5	9.8	8.3	1.5	77.0
キ. 孫が生まれて、周囲から、老人ではないのに年寄扱いをされたような気がしたことがある……………	0.0	2.7	11.4	9.1	76.8

〔全員の方に〕

問 17. 現在、次のような関係・お付き合いに関して、どの程度満足していらっしゃいますか（ご自身の親御さんが亡くなられている方やお子さんがいらっしゃらない方、結婚されていない方、ご親戚がいらっしゃらない方は「該当者はいない」という欄に○をお付けください）。

満 足	どちらかとい うと 満 足	どちらかとい うと 不 満 足	不 満 足	該当者はい ない
-----	---------------------	-----------------------	-------	-------------

ア. 親子関係（自分の親との）	21.8	36.9	7.0	3.3	29.0	1.9	NA
イ. 親子関係（自分の子どもとの）	34.3	47.4	6.6	0.8	6.4	4.6	
ウ. 夫婦関係	34.9	47.3	10.3	3.3	0.0	4.1	
エ. 親戚とのおつきあい	12.9	65.5	15.7	2.0	1.3	2.7	
オ. ご近所とのおつきあい	12.7	68.1	13.0	2.4	*	3.7	
カ. 生活全般	19.3	66.0	9.4	1.6	*	3.7	

問 18. 次のような意見について、あなたはどのように思われますか。ア～ケのそれぞれについて、ご自身気持ちにもっとも近い番号に○をお付けください。

賛 成	やや賛成	やや反対	反 対
-----	------	------	-----

ア. 子どものうち誰か一人は、結婚しても両親と同居すべきだ	5.2	24.5	45.4	22.9	2.0	NA
イ. 息子と娘がいるときは、息子が親の面倒を見るべきだ	2.3	18.1	46.2	31.6	1.9	
ウ. 親の面倒をみるのは、長男の義務だ	2.0	12.0	40.4	43.8	1.7	
エ. 財産を相続する場合、長男が他の兄弟よりも多く相続するのは当然だ	4.1	15.9	37.1	41.0	1.9	
オ. 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ	3.2	22.9	42.4	29.9	1.6	
カ. 家族と対立しても、自分らしく生きるべきだ	6.2	32.8	48.6	10.8	1.6	
キ. 自分の生き方が家族と対立する場合、自分のその生き方を変えるべきだ	1.6	32.8	55.7	7.9	2.0	
ク. 家族が不満に思っても、自分自身に充実感がある暮らし方をするべきだ	2.9	31.1	53.4	10.7	1.9	
ケ. 自分のことはさしおいても、家族が満足できるよう心がけるべきだ	5.1	41.0	44.7	7.1	2.1	

問 19. あなたの年齢（2003年1月1日現在） 歳 平均=49.2 歳

問 20. あなたは現在、収入を伴う仕事に就いていますか。パート・アルバイト等も含まれます。（○は1つ）

1. 就いている 51.3	2. 就いていない 47.5（最後に職を離れてから <input type="text"/> 年）	平均=11.7 年
NA 1.2	以上で終了です。ご協力ありがとうございました。	

問 21. [現在職業についている方におうかがいします。]

(1) あなたの現在の就業形態（正規の社員、嘱託、自営業など）は、次のどれですか。

1. 正規の社員・従業員	22.2	4. 内職	2.6
2. 派遣・嘱託・パートタイマーなど	67.6	5. シルバー人材センター（高齢者事業団）	0.3
3. 自営業・自由業・家族従業員	6.5	6. その他（ <input type="text"/> ）	0.8 NA 0.0

(2) あなたの職種は次のどれですか。

1. 専門技術職（研究職・技師等）	8.9	5. 技能職・技術補助・生産工程従事・作業者	23.5
2. 管理職（役員・課長以上の管理職）	2.3	6. サービス職（添乗員・ホテルマン等）	9.9
3. 事務職（一般事務・営業・経理事務等）	31.1	7. その他（ <input type="text"/> ）	3.1
4. 販売職（店員・セールス等）	20.9		NA 0.3

●以上で終了です。ご協力ありがとうございました。記入もれがないかお確かめの上、黄色の封筒に封入して配偶者の方にお渡しください。

特にことわりのない場合 n=3,189。 NA は無回答。

「サラリーマンの生きがい」に関する調査【本人用】

平成 13 年 10 月

財団法人 シニアプラン開発機構

調査のお願い

- 当財団では、豊かな人生経験を持ち、心身ともに活力あふれる企業退職者等を“シニア”と位置づけ、こうした方々が定年後も充実した生活を送るために必要なさまざまな社会システム“シニアプラン”を社会に提示しています。
その事業の一つとして、現在「サラリーマンの生きがい」に関する調査研究を進めています。
このアンケート調査は、その一環として、厚生年金基金の加入員・受給者の方々を対象に、ふだんの生活の実態や生きがい等のお考えをうかがい、それが定年退職後の生活にどう関連するのかを調べることを目的としています。
- 調査は「無記名式」で実施し、ご回答については細心の注意を持って取り扱い、結果はすべて統計的に処理いたしますので、個人名やひとりひとりの回答内容が公になることはありません。
また、ご回答いただいたものを、調査以外の目的に使用することもございません。
ご多忙中とは思いますが、ぜひご協力くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
- 同封の【配偶者用】調査票につきましては、封筒の宛名の方の配偶者の方がご記入ください（配偶者がおられない場合は【配偶者用】調査票の記入・返送は不要です）。
調査票への記入が終了しましたら、【本人用】調査票は緑色の封筒に、【配偶者用】調査票は黄色の封筒にそれぞれ封入のうえ、緑色の封筒と黄色の封筒の両方（ただし配偶者がおられない場合は緑色の封筒のみ）を返信用封筒に封入し、ご投函願います。
- なお、この調査の実施は社団法人中央調査社に委託しました。内容や書き方など調査に関するお問い合わせは、以下にお願いいたします。

社団法人 中央調査社 管理部
東京都品川区西五反田 7-1-1 住友五反田ビル
電話 03-5487-2314

記入上の注意

- 1) この調査のご回答は、封筒の宛名の方ご本人がご記入ください。
- 2) 回答は、すべてこの調査用紙に直接記入してください。
- 3) 問 1 から順にお答えください。回答は、あてはまる番号に○をつけるところと、記入していただくところがあります。

〔例 1〕 1. はい 2. いいえ

〔例 2〕 | 年

- 4) とくに断りがないときは、1 問につき○は 1 つだけです。
- 5) 「その他」を選んだときは、番号に○をつけたうえで、() に具体的に記入してください。

11月7日（水）までにご投函ください。

■ふだんの生活についておうかがいします。

問1. あなたは日頃、近隣の人々と、どんなつきあいをしていますか。

1. ほとんどつきあいはない	6.0	4. 互いに訪問したり、何かを一緒にする	9.7
2. 顔が合えば挨拶をする	44.4	5. お互いの事情がわかり、困ったときに相談したり助け合う	6.1
3. たまには立ち話をする	32.7		NA 1.1

問2. あなたが現在所属して、実際に活動しているグループ・団体はどれですか。(○はいくつでも)

1. 趣味やスポーツのクラブ・サークル	37.3	7. 町内会・自治会や防災・防犯協会	19.9
2. 学習・研究会や教養教室	10.0	8. 老人クラブや地域の同好会	6.1
3. 職場・職場関係の団体・グループ	19.9	9. 消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	3.9
4. 定年退職者の会など、旧職場の集まり	17.0	10. 宗教団体・政治団体	3.6
5. PTA・父母会や子供会・青少年団体	4.7	11. その他()	4.3
6. 難病や障害児・者を持つ家族の会	0.6	12. いずれもない	29.9
		→ 問3へお進みください	
			NA 3.4

付問. その中で、あなたが役職や世話役、リーダーをしたことのあるのはどれですか。上で○をつけた中から、あてはまる番号を記入してください。(いくつでも)

現在しているもの		過去に経験のあるもの	
----------	--	------------	--

問3. あなたは、地域活動やボランティアなど、何か社会に役立つ活動に参加していますか。団体活動でも個人の活動でもかまいません。

1. 定期的に参加している	12.4	3. 以前に参加したことがある	9.8
2. ときどき参加している	11.7	4. 参加していない	56.1
			NA 10.1

付問1. どのような分野の活動ですか。

(n=767) (○はいくつでも)

1. 地域の生活環境を守る活動	37.5
2. 地域のイベントや“村おこし”の活動	29.1
3. 趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	29.6
4. 児童や青少年活動の世話役としての活動	10.8
5. 地域の文化財や伝統を守る活動	7.6
6. 消費者活動や生活向上のための活動	3.3
7. 障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	10.4
8. 行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	10.8
9. 自然保護や環境保全の活動	12.3
10. 国際交流に関する活動	6.3
11. その他()	8.2
	NA 1.0

付問2. 活動に参加した理由は何ですか。

(n=767) (○は3つまで)

1. 地域や社会に貢献したい	55.5
2. 自分の知識や経験を活かしたい	27.9
3. 社会への見聞を広げたい	15.3
4. 友人や仲間を増やしたい	30.8
5. 生活にはりあいを持たせたい	20.9
6. 身近な人に誘われた	15.9
7. 会社の勧めや命令	6.1
8. 社会人として当然と思った	24.6
9. 何となく	0.9
10. その他()	5.2
	NA 1.8

付問3. 現在参加していない理由は何ですか。

(n=2,100) (○は3つまで)

1. 時間がない	53.0
2. 経済的余裕がない	8.2
3. 精神的なゆとりがない	18.5
4. 健康や体力に自信がない	10.0
5. 家族など周囲の理解や協力が得られない	1.0
6. 自分にあった活動の場がない	17.3
7. いっしょにやる仲間がない	9.4
8. 何から始めるか、きっかけがつかめない	34.7
9. 興味がない、関心がない	10.3
10. その他()	5.7
	NA 3.4

付問4. 今後参加したいと思いますか。

(n=2,100) (○は1つ)

1. 積極的に参加したい	6.5
2. 条件によっては参加してもよい	60.1
3. 参加するつもりはない	9.7
4. わからない	22.1
	NA 1.5

問4. 現在のあなたの生活で、以下のことがどの程度満たされていると思いますか。(1)～(12)のそれぞれについてお答えください。

	十分に満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	NA
(1) 健康	12.9	57.5	12.9	13.9	1.6	1.2
(2) 時間的ゆとり	11.9	36.3	17.8	25.7	6.7	1.6
(3) 経済的ゆとり	4.4	43.4	28.2	18.4	3.6	1.9
(4) 精神的ゆとり	6.7	43.1	28.4	16.8	2.8	2.1
(5) 家族の理解・愛情	24.8	54.4	13.4	3.8	1.0	2.6
(6) 友人・仲間	12.0	55.4	22.4	7.1	1.2	1.8
(7) 熱中できる趣味	15.2	40.5	20.6	16.8	4.8	2.0
(8) 仕事のはりあい	7.5	41.6	28.7	10.9	4.9	6.4
(9) 社会的地位	3.7	33.1	41.0	9.9	7.3	4.9
(10) 自然とのふれあい	8.9	38.4	24.4	20.8	5.0	2.6
(11) 近隣との交流	3.1	24.0	30.8	27.9	12.4	1.8
(12) 社会の役に立つこと	1.9	15.5	35.7	30.6	14.0	2.3

問5. [自由時間についておうかがいします]

仕事や通勤や仕事上のつきあいの時間、睡眠時間、食事や入浴などの生活必需時間を除いて、あなたが日頃、自由に使える時間は十分にあると思いますか。

1. 十分にある	19.6	2. まあまあ	42.8	3. 不十分である	33.9	4. まったくない	2.3	NA	1.4
----------	------	---------	------	-----------	------	-----------	-----	----	-----

→ 問6へお進みください

付問. 日頃の自由時間を、主にどんなことに使っていますか。(○は3つまで)

(n = 3,072)			
1. 仕事仲間とのプライベートなつきあい	9.8	9. 行楽・ドライブなど	28.0
2. 仕事に関する勉強や残務整理	12.2	10. 庭いじりや家事など家庭内のこと	36.0
3. テレビ・ゴロ寝やパチンコ、酒など	32.1	11. 家庭との団らんや家庭サービス	31.3
4. 考えごとやめい想	3.6	12. 近隣の人とのつきあいや地域の用事	6.2
5. ひとりで趣味・スポーツ・学習など	28.5	13. ボランティアなどの社会活動	4.0
6. 仲間と趣味・スポーツ・学習など	30.7	14. 宗教活動・政治活動	2.0
7. パソコン通信やインターネットなど	12.6	15. その他 ()	3.4
8. 個人的な友人・仲間とのつきあい	26.4	16. 特に何もしない	0.6
			NA 0.5

問6. 生活やつきあいの場を「家庭」、「仕事」などのようにいくつかに分けた場合、(1)～(9)にあてはまるものを、それぞれ2つまで選んでください。

	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	NA
(1) 生活にはりあいや活力をもたらしてくれるのはどこですか	70.6	46.3	5.9	22.8	6.0	4.9	0.8	3.6
(2) 生活のどの場で、リズムやメリハリがつかますか	48.1	55.9	6.5	15.8	8.7	5.3	1.7	6.1
(3) 心の安らぎや気晴らしを感じるのは、どこが多いですか	78.1	6.2	4.9	40.6	3.3	11.4	0.9	4.7
(4) 生活のどの場で、喜びや満足感を感じる人が多いですか	65.6	38.0	5.9	21.9	6.5	8.8	1.4	5.7
(5) あなたの人生観や価値観に影響を与えているのは、どこの人ですか	34.6	39.9	5.5	29.0	26.5	7.1	2.8	6.7
(6) 生活の目標や目的は、どこにあると感じますか	70.4	35.2	5.5	5.3	15.5	7.5	1.9	6.7
(7) どの場での生活が自分自身を向上させていると考えますか	21.7	58.5	8.7	15.4	29.0	7.2	1.8	6.7
(8) 自分の可能性を実現したり、何かをやりとげたと感じるのは、どの場でのことが多いですか	22.9	63.8	9.9	5.7	19.3	10.0	3.5	6.0
(9) 自分が役に立っていると感じたり、評価を得ているのは、どの場でのことが多いですか	39.1	60.3	11.6	9.8	13.2	5.4	4.3	5.5

問7. 現在あなたは、以下の立場をどの程度重視していますか。(1)～(5)のそれぞれにお答えください。

	大変重視している	少し重視している	あまり重視していない	まったく重視していない	NA
(1) 親、夫または妻、一家の主など、家庭人の立場	66.1	24.4	5.7	1.7	2.0
(2) ○○会社員、○○の専門家(だった)など、職業人の立場	18.7	37.9	30.2	9.2	4.0
(3) ○○地域の住民、○○の隣人など、地域人の立場	5.6	30.4	46.9	13.5	3.5
(4) ○○のメンバー、○○の仲間など、グループ員の立場	10.9	37.9	36.2	11.8	3.2
(5) 社会の一員、地球に住む人間としての立場	19.0	46.6	27.0	4.7	2.7

問8. 以下の(1)～(13)は、あなたにどの程度あてはまりますか。(1)～(13)のそれぞれについてお答えください。

	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	NA
(1) 人との関係やつながりを大切にする	52.8	40.3	5.7	0.4	0.8
(2) 自分の世界や個性を大切にする	32.6	48.8	16.1	0.8	1.7
(3) いつも目標に向かって進む	18.7	48.8	28.3	2.4	1.9
(4) 無理をせずマイペースで進む	24.9	53.0	19.0	1.6	1.4
(5) 他人にはない自分なりの価値観を持っている	23.4	49.1	24.3	1.6	1.6
(6) 自分には他人にない優れたところがある	9.8	43.1	41.3	3.9	1.8
(7) いろいろなことに興味を持ちチャレンジする	16.0	41.5	36.6	4.4	1.5
(8) 一つのことじつくり取り組む	15.7	43.5	35.9	3.1	1.8
(9) 指導者的立場に立とうとする	6.5	32.2	45.2	14.2	1.9
(10) 新しいグループの中に、わりと気軽に入れる	9.4	38.0	42.8	8.2	1.7
(11) いろいろな人の話や意見をよく聞く	22.2	59.9	15.2	1.2	1.5
(12) 上下の立場や関係を尊重する	25.0	54.1	17.1	2.4	1.5
(13) どんなところでも結構楽しみを見出す	14.9	50.4	30.7	2.6	1.4

■生きがいについておうかがいします。

問9. よく「生きがい」と言われますが、次の中で「生きがい」を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。
あなたのお考えに最も近いものから2つまで選んでください。

1. 生活の活力やはりあい	26.1	6. 生きる目標や目的	17.5
2. 生活のリズムやメリハリ	10.2	7. 自分自身の向上	18.3
3. 心の安らぎや気晴らし	26.7	8. 自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	28.2
4. 生きる喜びや満足感	40.5	9. 他人や社会の役に立っていると感じる事	17.1
5. 人生観や価値観の形成	8.7	10. その他 (_____)	0.6
			NA 0.5

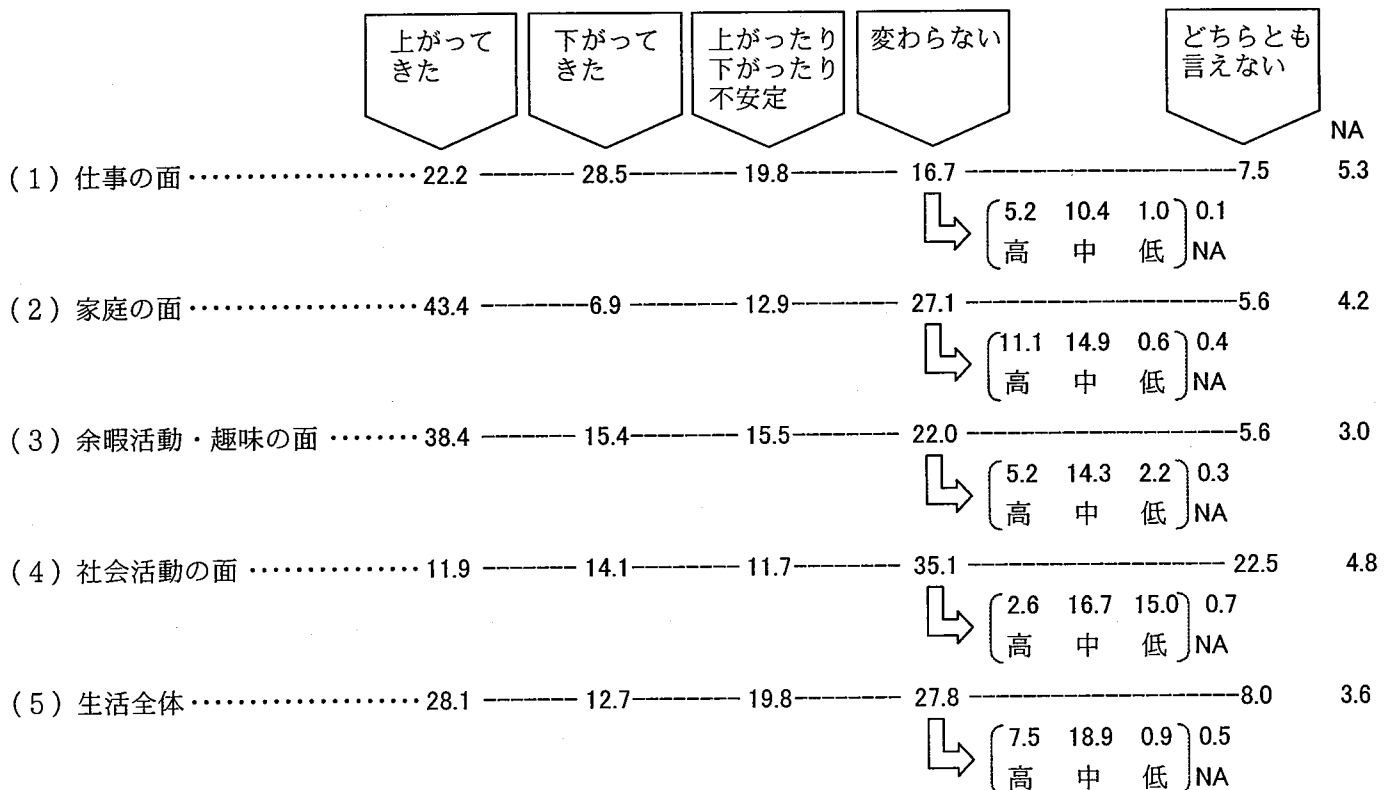
付問. そのような生きがいを、あなたは現在持っていますか。

1. 持っている	67.3	3. 持っていない	8.4
2. 前は持っていたが、今は持っていない	7.1	4. わからない	15.6
			NA 1.7

問10. あなたは現在、どのようなことに生きがいを感じますか。(○は3つまで)

1. 仕事	35.2	8. 子ども・孫・親などの家族・家庭	55.3
2. 趣味	43.9	9. 友人など家族以外の人との交流	18.7
3. スポーツ	14.6	10. 自分自身の健康づくり	18.3
4. 学習活動	5.7	11. ひとりで気ままに過ごすこと	10.8
5. 社会活動	5.8	12. 自分自身の内面の充実	12.6
6. 自然とのふれあい	18.4	13. その他 (_____)	1.0
7. 配偶者・結婚生活	23.0	NA 0.8	

問11. この10年間、あなたの生きがい度はどのように変化したと感じますか。(1)～(5)のそれぞれについて、あなたの感じ方に最も近いものを1つずつ選んでください。「4 変わらない」を選んだ場合には、その水準が高いか、中くらいか、低いか、いずれかに○をつけてください。



■友人や配偶者との関係についておうかがいします。

問12. あなたには、生涯を通じてつきあえる友人や仲間がいますか。

1. いる 84.5 2. いない 14.4 問13へお進みください NA 1.0

付問1. どのような関係で知り合った方々ですか。(○はいくつでも)

(n = 2,696)

1. 幼なじみ・学生時代の友人・仲間	64.1
2. 職場や仕事を通じて知り合った友人・仲間	73.3
3. 近隣の人、地域で知り合った友人・仲間	22.4
4. 趣味・パソコン教室・スポーツや学習を通じて知り合った友人・仲間	26.5
5. 電子メール、パソコンネット、携帯電話などを通じて知り合った友人・仲間	0.9
6. 社会活動を通じて知り合った友人・仲間	10.0
7. 宗教活動を通じて知り合った友人・仲間	2.9
8. 家族や親戚・縁戚関係を通じて知り合った友人・仲間	18.9
9. 戦友	0.3
10. その他 ()	0.7
	NA 0.7

付問2. [定年退職を経験した方におうかがいします。]

この中に、あなたが定年後につきあうようになった友人・仲間がいますか。
あてはまる番号を記入してください。(いくつでも)

→

問13. [配偶者がいらっしゃる方におうかがいします。]

話は変わりますが、日頃の配偶者との関係について、どう感じていますか。(1)～(11)のそれぞれについてお答えください。

(n = 2,597)

	まったく そのとおり	まあ そのとおり	あまり そうでない	まったく 違う	NA
(1) 自分は配偶者を頼りにしている	55.1	36.5	5.9	0.4	2.1
(2) 自分は配偶者を理解している	32.3	55.4	9.8	0.5	2.0
(3) 自分は配偶者を愛している	49.4	41.9	5.6	0.6	2.5
(4) 配偶者と価値観・考え方が似ている	12.4	41.9	37.5	5.7	2.5
(5) 共通の趣味がある	11.2	28.8	42.7	14.6	2.6
(6) 対話がある	29.1	49.6	17.4	1.3	2.5
(7) よく一緒に出かける	34.2	37.4	22.8	3.0	2.6
(8) 配偶者の独自の趣味や行動を尊重している	41.1	46.9	8.5	1.2	2.4
(9) 自分は配偶者を助けている	22.0	51.8	22.4	1.2	2.5
(10) 配偶者は自分によりかかりすぎる	5.2	24.9	59.5	7.9	2.5
(11) 配偶者と家事を分担している	6.9	28.1	45.3	17.6	2.2

問14. それでは、配偶者との関係について、以下のことはあなたご自身にとってどの程度大切ですか。(1)～(10)のそれぞれについてお答えください。

(n = 2,597)

	とても 大切	やや大切	わから ない	あまり大切 ではない	NA
(1) 配偶者と互いに頼りにしあうこと	63.5	30.9	3.0	1.2	1.4
(2) 配偶者と互いに理解しあうこと	73.7	22.7	1.8	0.4	1.4
(3) 配偶者から愛情が感じられること	61.5	30.3	5.9	0.7	1.7
(4) 価値観や考え方を共有すること	32.8	47.6	12.7	4.9	1.9
(5) 共通の趣味を持つこと	19.8	44.5	20.2	13.8	1.8
(6) 対話を持つこと	60.8	34.2	2.6	0.7	1.7
(7) 一緒に行動すること	29.6	51.1	11.4	6.1	1.8
(8) 互いに独自の趣味や行動を尊重すること	49.8	41.8	5.1	1.5	1.8
(9) 配偶者と助け合うこと	67.8	28.2	2.0	0.6	1.5
(10) 配偶者と家事を分担し合うこと	19.1	49.9	19.0	10.6	1.5

■家族の介護等についておうかがいします。

問 15. 自分または家族が、寝たきりや痴呆（以下「寝たきり等」という）になった場合の対応について、あなたのお考えにもっとも近いものを、(1)～(4)のそれぞれについてお答えください。

(1) 「自分の親」が寝たきり等になった場合

1. 自分自身が中心になって介護する	27.9	4. 老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	15.8
2. 配偶者が中心になって介護する	20.3	5. その他 ()	11.1
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	11.0	NA	13.9

(2) 「配偶者の親」が寝たきり等になった場合

1. 自分自身が中心になって介護する	9.2	4. 老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	14.2
2. 配偶者が中心になって介護する	34.7	5. その他 ()	11.8
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	9.0	NA	21.1

(3) 配偶者が寝たきり等になった場合

1. 自分自身が中心になって介護する	66.8	4. 老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	4.7
2. 子ども等が中心になって介護する	1.9	5. 夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	4.8
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	6.4	6. その他 ()	2.4
		NA	13.0

(4) 自分が寝たきり等になった場合

1. 配偶者が中心になって介護する	46.1	4. 一人で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	25.9
2. 子ども等が中心になって介護する	2.5	5. 夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	7.5
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	10.4	6. その他 ()	2.9
		NA	4.6

付問. 高齢者介護の負担は、まだまだ重いと言われますが、家族の介護が必要になった場合、以下のことについてどう思いますか。一番近いものに○をつけてください。

(1) 介護の負担により、既存の自分の生活や人生の目的などを犠牲にしたくない

1. そう思う	17.5	2. どちらとも言えない	56.6	3. そうは思わない	23.4	NA	2.5
---------	------	--------------	------	------------	------	----	-----

(2) 介護し、共に生きていくことが、自分自身にとっても生きる喜びや目的になる

1. そう思う	33.8	2. どちらとも言えない	56.3	3. そうは思わない	7.3	NA	2.6
---------	------	--------------	------	------------	-----	----	-----

問 16. 長寿についておうかがいします。

(1) わが国は世界のトップレベルの長寿国ですが、長寿についてどのように受けとめていますか。

1. 生きられるなら、いつまでも生きたい	13.0
2. 生き長らえるのは健康なうちだけでよい	83.8
3. その他 ()	1.9
NA 1.3	

(2) いくつくらいまで生きたら、長生きをしたと思いますか。

	歳以上
平均 = 81.2 歳	(NA 1.9)

■仕事や定年後の生活についておうかがいします。

問 17. 「定年退職」と聞いてあなたがイメージするものを、次の中から選んでください。(○は3つまで)

1. わずらわしい人間関係から解放される	24.2	7. 接触する人や情報が減る	16.6
2. 所属する組織や肩書がなくなる	15.1	8. 新しい人生が開ける	34.8
3. 家庭サービスができる	14.1	9. 社会から取り残される	3.2
4. 経済的に苦しくなる	38.5	10. 決まりきった行動パターンから解放される	19.7
5. 自由な時間が増え、自分を取り戻す	51.5	11. 自己実現の場や機会がなくなる	2.8
6. 生活の目標や気持ちの張りがなくなる	15.7	12. 精神的に楽になる	33.3
		NA	2.4

問 18. 職業生活から引退する年齢について、どのように考えていますか。

1. 引退にふさわしい年齢がある	49.6	→ (引退にふさわしい年齢は <u>平均 = 63.4 才</u> くらい)
2. 健康な限りは何才まででも働きたい	29.7	
3. 引退にふさわしい年齢はない	15.1	
4. その他 ()	2.7	
		NA 3.0

問 19. [全員におうかがいします]

あなたは定年を経験しましたか。定年は何才ですか。

(定年を2回以上経験した場合は最初の定年の年齢を記入してください)

1. まだ定年前……	60.2	→ 定年は (平均=59.9) 才	→ 問 20 へお進みください
2. 定年前に退職した	7.1	→ 退職は (平均=55.6) 才のとき	→ 10ページの問 21 へお進みください
3. 定年退職した	32.4	→ 定年は (平均=59.8) 才のとき	
		NA	0.3

問 20. [定年前の方にお聞きします]

(1) あなたは、定年退職後をどう過ごすかの生活設計(仕事、家庭生活、余暇など)を考えていますか。

(n = 1,920)

1. ほとんど設計ができています	1.9	4. 気にはしているが、あまり深く考えていない	55.2
2. ある程度設計ができています	9.7	5. まったく考えていない	18.0
3. 考えてはいる	13.8	NA	1.4

(2) 定年後の生活費を、主に何によってまかなおうと考えていますか。(○は3つまで)

(n = 1,920)

1. 公的年金	72.1	6. 就労による収入	30.3
2. 企業年金	52.4	7. 子ども等からの経済的支援	0.9
3. 退職金	41.3	8. その他 ()	1.9
4. 生命保険の保険金や個人年金	20.1	9. わからない・考えたことがない	3.5
5. 預貯金の取りくずし	25.6	NA	1.2

(3) 定年後の生活について不安に感じることはありますか。(○はいくつでも)

(n = 1,920)

1. 生計維持の困難	52.3	9. 所属や肩書がなくなる	1.9
2. 住宅の問題	13.1	10. 今までの人的交流や情報量が減る	12.6
3. 自分や配偶者の健康	55.6	11. 世の中の情報化の進展についていけない	4.4
4. 配偶者や親の介護	22.3	12. 社会から取り残される	3.6
5. 配偶者に先立たれる	15.8	13. 時間をもてあます	18.4
6. 再就職の問題	24.8	14. 地域社会にとけこめない	5.2
7. 家族との人間関係が悪くなる	0.8	15. その他 ()	1.0
8. 生活のはりや生きがいなくなる	16.2	16. 特に不安を感じない	10.0
		NA	1.6

(4) あなたが希望する定年後の生活は、どのような生活ですか。(○は3つまで)

(n = 1,920)

1. 健康に恵まれた生活	76.8	8. 好きな仕事を続ける生活	6.7
2. 時間的にゆとりのある生活	14.2	9. それまでの知識や経験を活かす生活	7.7
3. 経済的にゆとりのある生活	43.2	10. 自然とのふれあいのある生活	18.1
4. 精神的にゆとりのある生活	28.9	11. 社会のために役立つ生活	8.3
5. 夫婦関係や家族関係を大切にす生活	37.9	12. その他 ()	0.4
6. 友人や仲間とのつきあいを大切にす生活	17.2	13. 特にな	0.3
7. 好きな趣味にうち込む生活	25.8	NA	0.9

(5) 今の会社に定年まで勤めたいと思いますか。

(n = 1,920)

1. 定年まで勤めたい	78.4	2. 定年前に退職したい	18.6	→ (あと 平均 = 6.1 年 くらいで)
				NA 3.0

(6) 定年退職後または定年前の退職後に、仕事をどのようにしたいと思いますか。(○は1つだけ)

(n = 1,920)

1. 退職とともに職業生活から引退したい	25.5
2. 退職後も再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤めたい	14.5
3. 退職後は出向先に移籍したい	2.6
4. 退職後は別の企業に再就職したい	14.6
5. 退職後は自分で事業や商売を始めたい (自由業を含む)	12.2
6. 退職後は家業を手伝いたい	1.3
7. 退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をしたい	12.2
8. その他 ()	2.8
9. わからない・考えたことがない	13.0
NA 1.3	

(7) それでは、実際には定年退職後 (または定年前の退職) の後、あなたの仕事のしかたはどのようになると
 思いますか。(○は1つだけ)

(n = 1,920)

1. 退職とともに職業生活から引退する	25.8
2. 退職後も再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める	11.8
3. 退職後は出向先に移籍する	4.1
4. 退職後は別の企業に再就職する	14.9
5. 退職後は自分で事業や商売を始める (自由業を含む)	7.7
6. 退職後は家業を手伝う	1.7
7. 退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をする	8.4
8. その他 ()	2.1
9. わからない	21.8
NA 1.7	

→ 12 ページの問 22 へお進みください

問 21. [定年退職または定年前の退職を経験した人におうかがいします]

(1) 定年前・退職前のあなたの職種は次のどれでしたか。(○は1つだけ)

(n = 1,258)

1. 専門技術職 (研究職・技師等)	4.0	5. 技能職・技術補助・生産工程従事・作業者	12.8
2. 管理職 (役員・課長以上の管理職)	52.7	6. サービス職 (添乗員・ホテルマン等)	0.9
3. 事務職 (一般事務・営業・経理事務等)	20.7	7. その他 ()	4.0
4. 販売職 (店員・セールス等)	2.5	NA	2.5

(2) 定年前・退職前の勤務先の従業員数は会社全体でどれくらいでしたか。(支店や営業所を含めた合計)

(n = 1,258)

1. 1~29人	7.0	2. 30~99人	6.4	3. 100~299人	8.2	4. 300~999人	7.9	5. 1000人以上	68.0
NA 2.5									

(3) 定年・退職の直前の仕事や職場について、どのように感じていますか。1)~7)のそれぞれについてお答えください。

	とても満足 している	やや満足 している	どちらとも いえない	やや不満 である	とても不満 である	NA
1) 仕事の内容	31.6	45.1	13.4	5.5	1.5	3.0
2) 就業形態	23.2	46.5	18.6	6.1	1.4	4.2
3) 職場での地位の高さ	20.7	41.3	24.1	6.7	2.8	4.5
4) 賃金	15.1	41.5	22.9	13.0	3.7	3.7
5) 福利厚生	20.2	44.4	21.1	8.2	2.5	3.7
6) 職場の人間関係・雰囲気	18.1	44.3	23.1	8.8	2.2	3.5
7) 全体として	19.6	48.2	19.4	7.6	1.7	3.7

(4) 定年後・退職後に仕事につきましたか。(○は1つだけ)

(n = 1,258)

1. 退職とともに職業生活から引退した	32.0
2. 退職後も再雇用や勤務延長制度等により、前の会社に勤めた	16.5
3. 退職後は出向先に移籍した	12.3
4. 退職後は別の企業に再就職した	23.8
5. 退職後は自分で事業や商売を始めた (自由業を含む)	3.3
6. 退職後は家業を手伝うようになった	1.0
7. 退職後はシルバー人材センターで仕事するようになった	2.5
8. その他 ()	6.4
NA 2.1	

(5) あなたが50歳の頃に、定年後の仕事をどのようにしたいと思っていましたか。(○は1つだけ)

(n = 1,258)

1. 退職とともに職業生活から引退する	29.7
2. 退職後も再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める	18.2
3. 退職後は出向先に移籍する	8.5
4. 退職後は別の企業に再就職する	17.6
5. 退職後は自分で事業や商売を始める (自由業を含む)	5.6
6. 退職後は家業を手伝う	0.9
7. 退職後はシルバー人材センターなどで簡単な仕事をする	3.7
8. その他 ()	2.3
9. わからない・考えたことがなかった	11.7
NA 1.7	

(6) あなたが50歳の頃に、定年退職後をどう過ごすかの生活設計(仕事、家庭生活、余暇など)を考えていましたか。

(n = 1,258)

1. ほとんど設計ができていた	4.3	4. 気にはしていたが、あまり深くは考えていなかった	49.4
2. ある程度設計ができていた	17.6	5. まったく考えていなかった	9.1
3. 考えてはいた	17.6		NA 2.0

(7) 50才頃に、定年後の生活について不安に感じていたことがありましたか。(○はいくつでも)

(n = 1,258)

1. 生計維持の困難	29.6	9. 所属や肩書きがなくなる	4.5
2. 住宅の問題	8.1	10. 今までの人的交流や情報量が減る	19.4
3. 自分や配偶者の健康	37.4	11. 世の中の情報化の進展についていけない	5.2
4. 配偶者や親の介護	11.0	12. 社会に取り残される	6.3
5. 配偶者に先立たれる	8.2	13. 時間をもてあます	17.5
6. 再就職の問題	23.3	14. 地域社会にとけこめない	4.7
7. 家族との人間関係が悪くなる	0.6	15. その他()	1.0
8. 生活のほりや生きがいなくなる	18.5	16. 特に不安を感じない	23.0
		NA	2.6

(8) では実際に定年から今までに次のようなことがありましたか。(○はいくつでも)

(n = 1,258)

1. 経済的に苦しくなった	30.7	9. 所属や肩書きがなくなり、淋しい思いをした	7.9
2. 住宅問題で困った	3.2	10. 今までの人的交流や情報量が減って困った	16.9
3. 自分や配偶者の健康や体力が衰えた	32.9	11. 世の中の情報化の進展についていけず困った	6.0
4. 配偶者や親の介護が必要になった	11.1	12. 社会から取り残されてしまった	1.9
5. 配偶者に先立たれた	3.5	13. 時間をもてあました	11.6
6. 再就職のことで困った	9.1	14. 地域社会にとけこめなかった	4.8
7. 家族との人間関係が悪くなった	1.7	15. その他()	3.1
8. 生活のほりや生きがいなくなった	9.6	16. 特に問題はなかった	27.9
		NA	4.5

付問. その中で、特に定年が契機になっておこったことはどれですか。上で○をつけた中から、あてはまる番号を記入してください。(3つまで)

定年が契機になっておこったこと	□	□	□
-----------------	---	---	---

(9) 50才頃にあなたが希望していた定年後の生活は、どのような生活ですか。(○は3つまで)

(n = 1,258)

1. 健康に恵まれた生活	65.3	8. 好きな仕事を続ける生活	9.5
2. 時間的にゆとりのある生活	23.8	9. それまでの知識や経験を活かす生活	12.9
3. 経済的にゆとりのある生活	32.4	10. 自然とのふれあいのある生活	15.4
4. 精神的にゆとりのある生活	24.4	11. 社会のために役立つ生活	11.2
5. 夫婦関係や家族関係を大切にする生活	28.2	12. その他()	0.5
6. 友人や仲間とのつきあいを大切にする生活	17.6	13. 特になかった	2.1
7. 好きな趣味にうち込む生活	35.9		NA 2.6

問 22.〔全員におうかがいします〕

定年退職に向けて、どのようなことが必要だと思いますか。(1)～(4)のそれぞれについてお答えください。

(1) 個人としては、定年前にどのようなことが必要だと思いますか。(〇は2つまで)

1. 健康の維持・増進を心がける	63.1	6. 友人や仲間との交流を深める	9.4
2. 貯蓄・住宅など、経済的基盤をつくる	47.7	7. 近隣や地域の人との交流を深める	5.3
3. 生涯楽しめる趣味などを持つ	29.6	8. 会社以外の活動の場をつくっておく	11.5
4. 定年後も活かせる専門的技術を身につける	12.7	9. その他 ()	0.2
5. 夫婦・家族の関係を大切にする	16.4	10. 特に何も必要ない	0.2
		NA	1.9

付問. それでは、実際にあなた自身が準備したり心がけたりしている(した)ことがありますか。

〔定年前の方〕あなた自身が現在準備したり心がけていることをお答えください。

〔定年後・退職後の方〕あなた自身が定年前・退職前に準備したり心がけていたことをお答えください。

(〇はいくつでも)

1. 健康の維持・増進を心がける	61.7	6. 友人や仲間との交流を深める	27.4
2. 貯蓄・住宅など、経済的基盤をつくる	47.9	7. 近隣や地域の人との交流を深める	13.3
3. 生涯楽しめる趣味などを持つ	37.3	8. 会社以外の活動の場をつくっておく	11.5
4. 定年後も活かせる専門的技術を身につける	11.9	9. その他 ()	1.2
5. 夫婦・家族の関係を大切にする	30.7	10. 特に何も必要ない	5.7
		NA	2.9

(2) 企業としては、どのような条件の整備が必要だと思いますか。(〇は2つまで)

1. 退職準備教育や退職相談を充実させる	23.4		
2. 企業年金の充実や持家取得の援助など、社員の経済的基盤充実に力を入れる	42.0		
3. 労働時間短縮などで、社員の個人的生活にゆとりを持たせる	14.0		
4. 中高年者の能力再開発の研修制度を充実させる	17.2		
5. 希望者には定年年齢を延長させる	26.9		
6. 定年後の再雇用など、再就職の場を用意する	31.8		
7. ボランティア休暇など、社会活動や余暇活動奨励や支援の制度を設ける	9.5		
8. 定年前の“ならし運転”のための休暇制度を設ける	6.5		
9. その他 ()	0.9		
10. 特に何も必要ない	4.2		
		NA	2.8

(3) 社会としては、どのような条件の整備が必要だと思いますか。(〇は2つまで)

1. できるだけ本人の希望する年齢まで働ける雇用環境をつくる	49.9		
2. 定年退職者の能力を活かす場を増やす	47.5		
3. サラリーマン〇Bが気軽に出入りできる交流の場をつくる	9.8		
4. 趣味・学習や社会活動のための機会や情報を提供する	24.8		
5. 中高年者の能力再開発の研修機会や施設を設ける	20.0		
6. 退職後の生活をよりよくするための研究や提案に力を入れる	15.1		
7. その他 ()	1.1		
8. 特に何も必要ない	3.1		
		NA	2.4

(4) 以上のほかに、定年退職に向けて、または定年後の生活をよりよくするためのご意見やご提案がありましたら、お書きください。個人、企業、社会のいずれに関することでも結構です。

問 23. [全員におうかがいします]

仕事や会社とのかわりについて、どう感じていますか。(1)～(13)のそれぞれについてお答えください。

	まったく そのとおり	まあ そのとおり	あまり そうでない	まったく 違う	NA
(1) 仕事の中でこそ自己実現が図れる……………	9.7	44.7	37.4	3.8	4.4
(2) 仕事は生計を立てるための手段に過ぎない……………	12.5	50.2	29.2	4.4	3.8
(3) どの会社でも十分通用する職業能力がある……………	5.3	35.8	49.0	5.9	4.0
(4) 会社は自分を正当に評価している(していた)……………	4.6	54.5	33.6	3.4	3.9
(5) 自分の会社には尽くしたい……………	15.4	59.6	17.7	2.7	4.5
(6) 脱サラを考えたことがある・脱サラしたい……………	3.5	21.0	41.6	29.0	4.9
(7) 上司や同僚とは仕事を離れてもつき合いたい……………	4.8	34.1	46.8	9.9	4.4
(8) 仕事のためには個人の生活を犠牲にすることがあっても やむを得ない……………	4.9	44.5	37.1	9.2	4.4
(9) 仕事をするからには多少無理しても出世したい……………	2.4	26.7	55.1	11.6	4.2
(10) 出世よりも興味のある仕事に専念したい……………	11.8	51.1	28.9	3.7	4.5
(11) 定年まで会社に勤められるかどうか不安だ(だった)……………	7.6	29.2	41.9	17.0	4.3
(12) 会社は定年退職後の社員へのめんどうみもよい……………	4.2	30.7	43.8	16.9	4.4
(13) 定年後は会社の世話になりたくない……………	17.5	42.9	29.4	6.0	4.2

付問. [現在職業についている方におたずねします]

現在の仕事や職場について、どのように感じていますか。(1)～(7)のそれぞれについてお答えください。

	とても満足 している	やや満足 している	どちらとも いえない	やや不満 である	とても不満 である	NA
(n = 2,349)						
(1) 仕事の内容……………	13.3	49.0	22.7	8.0	2.4	4.4
(2) 就業形態……………	13.2	46.1	21.8	11.6	2.6	4.8
(3) 職場での地位の高さ……………	9.9	36.4	35.1	10.0	3.4	5.1
(4) 賃 金……………	6.4	31.1	26.0	22.9	8.8	4.9
(5) 福利厚生……………	6.5	33.0	31.8	17.2	6.2	5.2
(6) 職場の人間関係・雰囲気……………	7.5	40.7	30.0	12.1	4.8	4.8
(7) 全体として……………	7.0	44.9	28.1	12.6	2.6	4.7

[フェイスシート]

最後に、今までお聞きしたことを分析する上で必要な事項についておうかがいします。

F 1. 性別 1. 男 74.4 2. 女 24.3 年齢(平成13年11月1日現在) 才
 NA 1.3
 平均 = 54.9才 (NA 2.5)

F 2. 居住地 _____ 都道府県 _____ 市区町村

F 3. 現在お住まいの地域(市区町村)に住んで何年になりますか。単身赴任等で一時離れた場合も、家族が継続して住んでいた期間は年数に含めてください。

1. 5年未満	10.3	3. 10年以上～20年未満	18.3	5. 30年以上	37.6
2. 5年以上～10年未満	11.0	4. 20年以上～30年未満	21.2	NA	1.7

F 4. あなたが最後に卒業された学校は、次のどれですか。

1. 小学校・高等小学校・新制中学校	9.0	4. 大学・大学院	40.0
2. 旧制中学校・旧制高等女学校・ 旧制実業学校・新制高等学校	36.4	5. 専門学校・専修学校	4.3
3. 旧制高等学校・高等師範学校・新制短大	5.1	6. その他 (_____)	0.3
			NA 4.8

F 5. 未既婚

1. 未婚	11.6	2. 既婚(配偶者あり)	81.4	3. 既婚(離別)	2.2	4. 既婚(死別)	3.3
							NA 1.5

F 6. 現在ごいっしょにお住まいの世帯の構成

1. ひとり暮らし	8.8
2. 自分たち夫婦だけ	23.8
3. 自分たち夫婦(または自分)と未婚の子	38.4
4. 自分たち夫婦(または自分)と子ども夫婦(ほかに孫や未婚の子がいる場合を含む)	4.5
5. 自分たち夫婦(または自分)と親(ほかに子や孫がいる場合を含む)	17.7
6. その他(具体的に _____)	2.3
	NA 4.5

F 7. 現在お住まいの住居は、次のどれですか。

1. 持ち家(一戸建て)	66.6	4. 公社・公団・公営の賃貸住宅	3.5
2. 持ち家(分譲マンション等)	14.8	5. 民間の借家・マンション・アパート	6.3
3. 社宅・会社の寮	3.9	6. その他(具体的に _____)	0.4
			NA 4.5

付問. 住宅ローンを支払っていますか。

1. 払っている	32.0 (残りはあと 平均 = 15.4 年)	2. 払っていない	61.5
			NA 6.5

F 8. 現在のあなたの健康状態

1. 非常に健康	10.6	4. 注意する点があり、日常生活に制限がある	3.4
2. まあ健康	51.5	5. 病気がち・療養中	1.7
3. 注意する点はあるが、日常生活に支障はない	28.4		NA 4.4

F 9. 過去5年間に、次のようなできごとがありましたか。(○はいくつでも)

1. 子どもや孫の誕生	26.8	8. 配偶者の死	1.1
2. 子どもの成人・就職	17.4	9. その他の家族の死	20.5
3. 子どもや孫との別居	7.6	10. 昇進・昇格	22.0
4. 子どもの結婚	19.0	11. 出向・転職・退職	20.4
5. 自分自身の入院	16.1	12. 災害等による資産の減少・経済的困難	1.7
6. 配偶者の入院	11.8	13. 自宅の購入・建て替え	16.0
7. その他の家族の入院	22.0	14. いずれもない	10.6
			NA 5.1

F 10. 昨年1年間のあなたの世帯の年収（年金や副業等も含めて、税込でお答えください）

1. 200万円未満	2.8	6. 600万円以上～800万円未満	19.1
2. 200万円以上～300万円未満	6.1	7. 800万円以上～1000万円未満	14.8
3. 300万円以上～400万円未満	9.6	8. 1000万円以上～1500万円未満	17.8
4. 400万円以上～500万円未満	10.6	9. 1500万円以上	3.3
5. 500万円以上～600万円未満	10.1		NA 5.9

付問1. 主たる収入源は何ですか。（○は1つだけ）

1. 給与	68.4	4. 利息・配当金収入	0.0
2. 年金収入（公的・企業・個人年金）	25.8	5. その他	0.5
3. 不動産収入	0.7		NA 4.5

付問2. それは生活する上で十分な収入ですか。

1. 十分に余裕がある	6.8	2. ほぼ十分である	50.8	3. やや不足する	31.5	4. 非常に不足する	6.1
NA 4.7							

F 11. 現在の経済的な暮らしについてどのように感じていますか。

1. とても楽だ	6.3	2. 少し楽だ	54.3	3. 苦しい	30.9	4. とても苦しい	2.9
NA 5.5							

F 12. あなたの現在の就業形態（正規の社員、嘱託、自営業など）は、次のどれですか。

1. 正規の社員・従業員	60.1	5. シルバー人材センター（高齢者事業団）	0.8
2. 派遣・嘱託・パートタイマーなど	10.4	6. 無職⇨（最後に職を離れてから平均 = 4.8年）	17.4
3. 自営業・自由業・家族従業員	2.1	7. その他（_____）	0.1
4. 内職	0.2		NA 8.8

F 13. [現在職業についている方におうかがいします。]

(1) あなたの職種は次のどれですか。

(n = 2,349)

1. 専門技術職（研究職・技師等）	6.3	5. 技能職・技術補助・生産工程従事・作業員	9.8
2. 管理職（役員・課長以上の管理職）	39.2	6. サービス職（添乗員・ホテルマン等）	2.3
3. 事務職（一般事務・営業・経理事務等）	37.0	7. その他（_____）	0.9
4. 販売職（店員・セールス等）	2.6		NA 1.8

(2) 勤務先の従業員数は会社全体でどのくらいですか。（支店や営業所がある場合は合計）

(n = 2,349)

1. 1～29人	16.3	2. 30～99人	10.9	3. 100～299人	9.9	4. 300～999人	10.7	5. 1000人以上	49.4
NA 2.8									

(3) あなたの1週間の勤務日数..... 日 (n = 2,349)
 (週によって異なる場合は平均を四捨五入してください)

平均 = 5.0日

(4) あなたの1日の勤務時間（所定の拘束時間）..... 時間 (n = 2,349)
 (日によって異なる場合は平均を四捨五入してください)

平均 = 8.3時間

この調査全体についてのご感想やご意見がありましたら、お書きください。

以上で終了です。ご協力ありがとうございました。記入もれがないかどうかお確かめの上、緑色の回収用封筒に封入のうえ、配偶者の方の調査票を封入した黄色の封筒とともに（ただし配偶者のおられない方は黄色の封筒は不要で、緑色の封筒のみ）、返信用封筒にてご返送ください。

※ なおのちに、この調査に関連して、別途ご意見をうかがう機会を設けたいと考えております。

これに応じてもよいと思われる方は、お名前、ご住所、電話番号をお書きください。

〔別の意見聴取に応じてもよい方〕

お名前		電話番号	()
ご住所	都道府県		

特にことわりのない場合 n = 2,525。 NAは無回答。

「サラリーマンの生きがい」に関する調査【配偶者用】

平成13年10月
財団法人 シニアプラン開発機構

記入上の注意

- 1) この調査のご回答は、封筒の宛名の方の配偶者の方がご記入ください。
- 2) 回答は、すべてこの調査用紙に直接記入してください。
- 3) 問1から順にお答えください。回答は、あてはまる番号に○をつけるのと、記入していただくところがあります。

〔例1〕

①	はい	2.	いいえ
---	----	----	-----

〔例2〕

1	2	年
---	---	---

- 4) とくに断りがないときは、1問につき○は1つだけです。
- 5) 「その他」を選んだときは、番号に○をつけたうえで、() に具体的に記入してください。

11月7日(水)までにご投函ください。

問1. あなたは日頃、近隣の人々と、どんなつきあいをしていますか。

1. ほとんどつきあいはない	2.4	4. 互いに訪問したり、何かを一緒にする	15.9
2. 顔が合えば挨拶をする	23.7	5. お互いの事情がわかり、困ったときに相談したり助け合う	13.0
3. たまには立ち話をする	43.8	NA	1.1

問2. あなたが現在所属して、実際に活動しているグループ・団体はどれですか。(○はいくつでも)

1. 趣味やスポーツのクラブ・サークル	43.4	7. 町内会・自治会や防災・防犯協会	19.7
2. 学習・研究の会や教養教室	13.3	8. 老人クラブや地域の同好会	4.4
3. 職場・職域関係の団体・グループ	10.6	9. 消費者団体やボランティア、NPOなど社会活動団体	6.1
4. 定年退職者の会など、旧職場の集まり	3.6	10. 宗教団体・政治団体	4.5
5. PTA・父母会や子供会・青少年団体	15.8	11. その他 ()	2.5
6. 難病や障害児・者を持つ家族の会	1.3	12. いずれもない	23.0
			NA 4.7

付問. その中で、あなたが役職や世話役、リーダーをしたことのあるのはどれですか。上で○をつけた中から、あてはまる番号を記入してください。(いくつでも)

現在しているもの	過去に経験のあるもの
----------	------------

問3. あなたは、地域活動やボランティアなど、何か社会に役立つ活動に参加していますか。団体活動でも個人の活動でもかまいません。

1. 定期的に参加している	14.9	3. 以前に参加したことがある	12.7
2. ときどき参加している	12.2	4. 参加していない	49.9
		NA	10.3

付問1. どのような分野の活動ですか。

付問3. 現在参加していない理由は何ですか。

(n = 683) (〇はいくつでも)

1. 地域の生活環境を守る活動	31.0
2. 地域のイベントや“村おこし”の活動	21.8
3. 趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	24.3
4. 児童や青少年活動の世話役としての活動	15.4
5. 地域の文化財や伝統を守る活動	4.0
6. 消費者活動や生活向上のための活動	8.9
7. 障害者・老人の手助けなどの社会福祉活動	23.4
8. 行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	6.0
9. 自然保護や環境保全の活動	4.5
10. 国際交流に関する活動	3.8
11. その他 ()	7.0
NA	0.7

(n = 1,582) (〇は3つまで)

1. 時間がない	45.4
2. 経済的余裕がない	7.1
3. 精神的なゆとりがない	17.9
4. 健康や体力に自信がない	20.2
5. 家族など周囲の理解や協力が得られない	1.4
6. 自分にあった活動の場がない	17.6
7. いっしょにやる仲間がない	9.1
8. 何から始めるか、きっかけがつかめない	28.1
9. 興味がない、関心がない	11.6
10. その他 ()	5.8
NA	3.2

付問2. 活動に参加した理由は何ですか。

付問4. 今後参加したいと思いますか。(〇は1つ)

(n = 683) (〇は3つまで)

1. 地域や社会に貢献したい	51.7
2. 自分の知識や経験を活かしたい	24.6
3. 社会への見聞を広げたい	17.7
4. 友人や仲間を増やしたい	29.4
5. 生活にはりあいを持たせたい	24.0
6. 身近な人に誘われた	21.2
7. 会社の勧めや命令	1.8
8. 社会人として当然と思った	18.0
9. 何となく	0.9
10. その他 ()	7.0
NA	0.6

(n = 1,582)

1. 積極的に参加したい	5.0
2. 条件によっては参加してもよい	54.8
3. 参加するつもりはない	11.6
4. わからない	27.0
NA	1.6

問4. 生活やつきあいの場を「家庭」、「仕事」などのようにいくつかに分けた場合、(1)～(9)にあてはまるものを、それぞれ2つまで選んでください。

	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	NA
(1) 生活にはりあいや活力をもたらしてくれるのはどこですか	76.4	24.0	9.6	33.9	5.4	6.6	1.0	4.4
(2) 生活のどの場で、リズムやメリハリがつきますか	55.6	33.6	11.8	22.3	8.5	7.2	1.7	7.4
(3) 心の安らぎや気晴らしを感じるの、どこが多いですか	74.7	4.5	5.5	48.9	2.6	11.3	1.1	5.5
(4) 生活のどの場で、喜びや満足感を感じる人が多いですか	73.2	18.5	7.0	27.3	6.0	10.6	1.6	7.2
(5) あなたの人生観や価値観に影響を与えているのは、どの人ですか	49.8	16.9	8.5	35.3	21.3	9.1	2.1	8.8
(6) 生活の目標や目的は、どこにあると感じますか	72.2	17.0	6.5	6.8	16.1	8.4	1.1	10.5
(7) どの場での生活が自分自身を向上させていると考えますか	34.2	30.9	14.2	18.8	24.8	9.7	3.8	10.1
(8) 自分の可能性を実現したり、何かをやりとげたと感じるの、どの場でのことが多いですか	39.9	34.5	14.2	8.0	16.0	11.4	5.7	8.8
(9) 自分が役に立っていると感じたり、評価を得ているのは、どの場でのことが多いですか	61.9	31.5	15.9	12.1	8.5	6.9	4.1	6.0

問5. よく「生きがい」と言われますが、次の中で「生きがい」を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。あなたのお考えに最も近いものから2つまで選んでください。

1. 生活の活力やはりあい	26.0	6. 生きる目標や目的	18.0
2. 生活のリズムやメリハリ	9.6	7. 自分自身の向上	21.2
3. 心の安らぎや気晴らし	26.7	8. 自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる事	26.0
4. 生きる喜びや満足感	40.2	9. 他人や社会の役に立っていると感じる事	13.5
5. 人生観や価値観の形成	6.6	10. その他 ()	0.8
		NA	1.8

付問. そのような生きがいを、あなたは現在持っていますか。

1. 持っている	71.4	3. 持っていない	7.1
2. 前は持っていたが、今は持っていない	5.1	4. わからない	14.3
		NA	2.1

問6. あなたは現在、どのようなことに生きがいを感じますか。(○は3つまで)

1. 仕事	18.0	6. 自然とのふれあい	18.5	11. ひとりで気ままに過ごすこと	10.9
2. 趣味	42.2	7. 配偶者・結婚生活	29.6	12. 自分自身の内面の充実	16.2
3. スポーツ	9.0	8. 子ども・孫・親などの家族・家庭	56.1	13. その他 ()	1.6
4. 学習活動	5.3	9. 友人など家族以外の人との交流	25.8		
5. 社会活動	5.1	10. 自分自身の健康づくり	16.3	NA	2.0

問7. 話は変わりますが、日頃の配偶者との関係について、どう感じていますか。(1)～(11)のそれぞれについてお答えください。

	まったく そのとおり	まあ そのとおり	あまり そうでない	まったく 違う	NA
(1) 配偶者は私を頼りにしてくれている	34.2	50.2	12.4	1.1	2.1
(2) 配偶者は私を理解している	25.0	50.3	20.1	2.0	2.6
(3) 配偶者は私を愛している	31.4	50.7	12.8	1.9	3.2
(4) 配偶者と価値観・考え方が似ている	12.4	40.3	35.4	9.1	2.7
(5) 共通の趣味がある	12.8	28.0	37.1	19.3	2.7
(6) 対話がある	27.8	48.0	19.0	2.7	2.5
(7) よく一緒に出かける	32.6	36.2	24.0	4.5	2.8
(8) 配偶者は私の趣味や行動を尊重している	32.6	49.7	12.9	2.1	2.7
(9) 配偶者は私を助けてくれる	35.4	45.3	14.1	2.1	3.0
(10) 配偶者は私によりかかりすぎる	6.6	21.3	55.2	14.0	3.0
(11) 配偶者と家事を分担している	7.5	25.8	43.6	20.8	2.2

問8. それでは、配偶者との関係について、以下のことはあなたご自身にとってどの程度大切ですか。(1)～(10)のそれぞれについてお答えください。

	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	NA
(1) 配偶者と互いに頼りにしあうこと	58.0	34.7	3.7	1.5	2.1
(2) 配偶者と互いに理解しあうこと	70.8	23.6	3.0	0.4	2.2
(3) 配偶者からの愛情が感じられること	58.9	31.4	6.4	0.8	2.5
(4) 価値観や考え方を共有すること	36.0	46.7	11.3	3.4	2.6
(5) 共通の趣味を持つこと	19.1	49.4	15.2	13.6	2.7
(6) 対話を持つこと	65.0	29.5	2.6	0.5	2.4
(7) 一緒に行動すること	25.2	54.5	10.5	7.0	2.8
(8) 互いに独自の趣味や行動を尊重すること	51.2	40.8	4.3	1.3	2.4
(9) 配偶者と助け合うこと	69.7	25.7	2.1	0.5	2.0
(10) 配偶者と家事を分担し合うこと	22.8	52.4	13.3	9.3	2.2

問9. 自分または家族が、寝たきりや痴呆(以下「寝たきり等」という)になった場合の対応について、あなたのお考えにもっとも近いものを、(1)～(4)のそれぞれについてお答えください。

(1)「自分の親」が寝たきり等になった場合

1. 自分自身が中心になって介護する	42.9	4. 老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	12.4
2. 配偶者が中心になって介護する	7.7	5. その他 ()	17.6
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	9.4	NA	10.1

(2)「配偶者の親」が寝たきり等になった場合

1. 自分自身が中心になって介護する	30.5	4. 老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	13.2
2. 配偶者が中心になって介護する	16.0	5. その他 ()	16.7
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	10.2	NA	13.4

(3) 配偶者が寝たきり等になった場合

1. 自分自身が中心になって介護する	74.8	4. 老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	5.0
2. 子ども等が中心になって介護する	1.0	5. 夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	7.4
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	5.5	6. その他 ()	3.5
		NA	2.8

(4) 自分が寝たきり等になった場合

1. 配偶者が中心になって介護する	37.6	4. 一人で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	22.3
2. 子ども等が中心になって介護する	5.3	5. 夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	12.6
3. 主にホームヘルパー等に介護をまかせる	14.5	6. その他 ()	3.7
		NA	3.9

付問. 高齢者介護の負担は、まだまだ重いと言われますが、家族の介護が必要になった場合、以下のことについてどう思いますか。一番近いものに○をつけてください。

(1) 介護の負担により、既存の自分の生活や人生の目的などを犠牲にしたくない

1. そう思う	20.0	2. どちらとも言えない	60.9	3. そうは思わない	17.8	NA	1.3
---------	------	--------------	------	------------	------	----	-----

(2) 介護し、共に生きていくことが、自分自身にとっても生きる喜びや目的になる

1. そう思う	30.9	2. どちらとも言えない	57.9	3. そうは思わない	10.1	NA	1.2
---------	------	--------------	------	------------	------	----	-----

問 10. 長寿についておうかがいします。

(1) わが国は世界のトップレベルの長寿国ですが、長寿についてどのように受けとめていますか。

1. 生きられるなら、いつまでも生きたい	10.9		
2. 生き長らえるのは健康なうちだけでよい	84.2		
3. その他 ()	3.4	NA	1.5

(2) いくつくらいまで生きたら、長生きをしたと思いますか。



平均 = 81.2 歳 (NA 2.3)

問 11. 配偶者が職業生活から引退する年齢について、どのように考えていますか。

1. 引退にふさわしい年齢がある	40.6	⇒ (引退にふさわしい年齢は 平均 = 64.2 才くらい)	
2. 健康な限りは何才まででも働いてほしい	35.5		
3. 引退にふさわしい年齢はない	17.8		
4. その他 ()	4.1	NA	2.0

問 12. [配偶者が定年前の方におうかがいします]

(1) お宅では、配偶者の方の定年退職後の生活設計（仕事、家庭生活、余暇など）について、ご夫婦で話し合うことがありますか。

(n = 1,495)						
1. よくある	6.7	2. たまにある	45.8	3. まったくない	40.1	NA 7.4

(2) 配偶者の定年後の生活について、不安に感じることがありますか。(○はいくつでも)

(n = 1,495)						
1. 生計維持の困難	46.8	9. 所属や肩書がなくなる	0.7			
2. 住宅の問題	10.6	10. 今までの人的交流や情報量が減る	6.6			
3. 自分や配偶者の健康	56.6	11. 世の中の情報化の進展についていけない	3.5			
4. 配偶者や親の介護	28.0	12. 社会から取り残される	3.2			
5. 配偶者に先立たれる	22.5	13. 時間をもてあます	22.9			
6. 再就職の問題	19.8	14. 地域社会にとけこめない	6.2			
7. 家族との人間関係が悪くなる	2.8	15. その他 ()	0.9			
8. 生活のほりや生きがいなくなる	16.4	16. 特に不安を感じない	8.9			
					NA	6.6

問 13. [配偶者が定年退職または定年前の退職を経験した方におうかがいします]

(1) お宅では、配偶者の方の定年前に、定年後をどう過ごすかの生活設計（仕事、家庭生活、余暇など）について、ご夫婦で話し合ったことがありましたか。

(n = 1,012)						
1. よくあった	15.6	2. たまにあった	59.0	3. まったくなかった	16.8	NA 8.6

(2) あなたから見て、配偶者の方には定年から今までに、次のようなことがありましたか。(○はいくつでも)

(n = 1,012)						
1. 経済的に苦しくなった	23.7	9. 所属や肩書がなくなり、淋しい思いをした	5.5			
2. 住宅問題で困った	2.9	10. 今までの人的交流や情報量が減って困った	7.2			
3. 自分や配偶者の健康や体力が衰えた	37.2	11. 世の中の情報化の進展についていけず困った	2.2			
4. 配偶者や親の介護が必要になった	11.7	12. 社会から取り残されてしまった	1.1			
5. 配偶者に先立たれた	1.5	13. 時間をもてあました	12.5			
6. 再就職のことで困った	5.8	14. 地域社会にとけこめなかった	5.3			
7. 家族との人間関係が悪くなった	2.4	15. その他 ()	1.4			
8. 生活のほりや生きがいなくなった	8.9	16. 特に問題はなかった	30.7			
					NA	7.6

問 14. あなたの性別

1. 男	13.2	2. 女	85.0
		NA	1.9

年齢(平成 13 年 11 月 1 日現在)

--	--	--	--	--	--	--

才

平均 = 53.0 才 (NA 2.4)

問 15. あなたの現在の就業形態（正規の社員、嘱託、自営業など）は、次のどれですか。

1. 正規の社員・従業員	14.2	5. シルバー人材センター（高齢者事業団）	0.2	
2. 派遣・嘱託・パートタイマーなど	23.6	6. 無職 ⇨ (最後に職を離れてから 平均 14.7 年)	40.6	
3. 自営業・自由業・家族従業員	4.5	7. その他 ()	6.8	
4. 内職	2.3			NA 7.8

以上で終了です。ご協力ありがとうございました。記入もれがないかどうかお確かめの上、黄色の回収用封筒に入れて、配偶者の方にお渡しください。

《単純集計結果》

【本人調査】

問1. 近所づきあいの程度

	総数	ほとんどつきあいはない	顔が合えば挨拶をする	たまには立ち話をする	互いに訪問したり、何かを一緒にする	お互いの事情がわかり困ったときに相談したり助け合う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	190.0	1415.0	1042.0	310.0	196.0	36.0
(%)	100	6.0	44.4	32.7	9.7	6.1	1.1
《第2回調査(平成8年)》	2909	133.0	1153.0	1069.0	330.0	186.0	38.0
(%)	100	4.6	39.6	36.7	11.3	6.4	1.3
《第1回調査(平成3年)》	3051	108.0	1266.0	1056.0	331.0	199.0	91.0
(%)	100	3.5	41.5	34.6	10.8	6.5	3.0

問2. 所属・活動団体

	総数	趣味やスポーツのクラブ・サークル	学習・研究会や教養教室	職場・職域関係の団体・グループ	定年退職者の会など、旧職場の集まり	PTA・父母会や子供会・青少年団体	難病や障害児・者を持つ家族の会	町内会・自治会や防災・防犯協会	老人クラブや地域の同好会	消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	宗教団体・政治団体	その他	いずれもない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	1189.0	320.0	636.0	543.0	149.0	19.0	636.0	193.0	125.0	114.0	138.0	952.0	110.0
(%)	100	37.3	10.0	19.9	17.0	4.7	0.6	19.9	6.1	3.9	3.6	4.3	29.9	3.4
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	1174.0	302.0	883.0	485.0	149.0	18.0	534.0	174.0	106.0	150.0	75.0	724.0	215.0
(%)	100	38.5	9.9	28.9	15.9	4.9	0.6	17.5	5.7	3.5	4.9	2.5	23.7	7.0

問2付問. リーダー経験(現在)

	該当数	趣味やスポーツのクラブ・サークル	学習・研究会や教養教室	職場・職域関係の団体・グループ	定年退職者の会など、旧職場の集まり	PTA・父母会や子供会・青少年団体	難病や障害児・者を持つ家族の会	町内会・自治会や防災・防犯協会	老人クラブや地域の同好会	消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	宗教団体・政治団体	その他	リーダーをしている所属・活動団体がある(計)	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2127	348.0	57.0	177.0	137.0	50.0	9.0	239.0	61.0	38.0	43.0	59.0	914.0	1213.0
(%)	100	16.4	2.7	8.3	6.4	2.4	0.4	11.2	2.9	1.8	2.0	2.8	43.0	57.0
《第2回調査(平成8年)》	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2112	353.0	85.0	335.0	173.0	60.0	8.0	195.0	56.0	50.0	62.0	42.0	1026.0	1086.0
(%)	100	16.7	4.0	15.9	8.2	2.8	0.4	9.2	2.7	2.4	2.9	2.0	48.6	51.4

問2付問. リーダー経験(過去)

	総数	趣味やスポーツのクラブ・サークル	学習・研究会や教養教室	職場・職域関係の団体・グループ	定年退職者の会など、旧職場の集まり	PTA・父母会や子供会・青少年団体	難病や障害児・者を持つ家族の会	町内会・自治会や防災・防犯協会	老人クラブや地域の同好会	消費者団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	宗教団体・政治団体	その他	リーダーをしたことのある団体がある(計)	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	213.0	32.0	142.0	68.0	97.0	2.0	295.0	22.0	18.0	12.0	16.0	739.0	2450.0
(%)	100	6.7	1.0	4.5	2.1	3.0	0.1	9.3	0.7	0.6	0.4	0.5	23.2	76.8
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	281.0	80.0	333.0	62.0	135.0	6.0	314.0	16.0	28.0	39.0	16.0	952.0	2099.0
(%)	100	9.2	2.6	10.9	2.0	4.4	0.2	10.3	0.5	0.9	1.3	0.5	31.2	68.8

問3. 社会活動参加状況

	総数	定期的に参加している	ときどき参加している	以前に参加したことがある	参加していない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	395.0	372.0	311.0	1789.0	322.0
(%)	100	12.4	11.7	9.8	56.1	10.1
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	372.0	383.0	301.0	1918.0	77.0
(%)	100	12.2	12.6	9.9	62.9	2.5

問3付問1. 社会活動参加分野

	該当数	地域の生活環境を守る活動	地域のイベントや"村おこし"の活動	趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	児童や青少年活動の世話役としての活動	地域の文化財や伝統を守る活動	消費者活動や生活向上のための活動	障害者・老人の助けなどの社会福祉活動	行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	自然保護や環境保全の活動	国際交流に関する活動	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	767	288.0	223.0	227.0	83.0	58.0	25.0	80.0	83.0	94.0	48.0	63.0	8.0
(%)	100	37.5	29.1	29.6	10.8	7.6	3.3	10.4	10.8	12.3	6.3	8.2	1.0
《第2回調査(平成8年)》	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	755	321.0	177.0	256.0	128.0	62.0	38.0	96.0	-	93.0	44.0	40.0	22.0
(%)	100	42.5	23.4	33.9	17.0	8.2	5.0	12.7	-	12.3	5.8	5.3	2.9

問3付問2. 社会活動参加理由

	該当数	地域や社会に貢献したい	自分の知識や経験を活かしたい	社会への見聞を広げたい	友人や仲間を増やしたい	生活にはりあいをせたい	身近な人に誘われた	会社の勤めや命令	社会人として当然と思った	何となく	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	767	428.0	214.0	117.0	236.0	160.0	122.0	47.0	189.0	7.0	40.0	14.0
(%)	100	55.5	27.9	15.3	30.8	20.9	15.9	6.1	24.6	0.9	5.2	1.8
《第2回調査(平成8年)》	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	755	398.0	245.0	149.0	192.0	173.0	138.0	35.0	264.0	7.0	21.0	14.0
(%)	100	52.7	32.5	19.7	25.4	22.9	18.3	4.6	35.0	0.9	2.8	1.9

問3付問3. 社会活動不参加理由

	該当数	時間がない	経済的余裕がない	精神的なゆとりがない	健康や体力に自信がない	家族など周囲の理解や協力が得られない	自分にあつた活動の場がない	いっしょにやる仲間がない	何から始めるか、きっかけがつかめない	興味がないう、関心がない	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2100	1114.0	172.0	389.0	211.0	20.0	363.0	197.0	728.0	216.0	119.0	71.0
(%)	100	53.0	8.2	18.5	10.0	1.0	17.3	9.4	34.7	10.3	5.7	3.4
《第2回調査(平成8年)》	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2219	986.0	214.0	363.0	258.0	31.0	572.0	281.0	799.0	397.0	70.0	98.0
(%)	100	44.4	9.6	16.4	11.6	1.4	25.8	12.7	36.0	17.9	3.2	4.4

問3付問4. 社会活動不参加者の今後の活動意向

	該当数	積極的に参加したい	条件によっては参加してもよい	参加するつもりはない	わからない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2100	137.0	1262.0	204.0	465.0	32.0
(%)	100	6.5	60.1	9.7	22.1	1.5
≪第2回調査(平成8年)≫	-	-	-	-	-	-
(%)	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	2219	159.0	1332.0	254.0	440.0	34.0
(%)	100	7.2	60.0	11.4	19.8	1.5

問4. 生活充足感

(1)健康

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	411.0	1834.0	412.0	444.0	51.0	37.0
(%)	100	12.9	57.5	12.9	13.9	1.6	1.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	488.0	1708.0	325.0	324.0	38.0	26.0
(%)	100	16.8	58.7	11.2	11.1	1.3	0.9
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	473.0	1819.0	314.0	386.0	32.0	27.0
(%)	100	15.5	59.6	10.3	12.7	1.0	0.9

問4. 生活充足感

(2)時間的ゆとり

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	381.0	1157.0	567.0	821.0	213.0	50.0
(%)	100	11.9	36.3	17.8	25.7	6.7	1.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	426.0	1297.0	440.0	578.0	132.0	36.0
(%)	100	14.6	44.6	15.1	19.9	4.5	1.2
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	452.0	1275.0	499.0	655.0	135.0	35.0
(%)	100	14.8	41.8	16.4	21.5	4.4	1.1

問4. 生活充足感

(3)経済的ゆとり

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	141.0	1384.0	900.0	587.0	116.0	61.0
(%)	100	4.4	43.4	28.2	18.4	3.6	1.9
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	146.0	1398.0	750.0	493.0	85.0	37.0
(%)	100	5.0	48.1	25.8	16.9	2.9	1.3
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	142.0	1421.0	812.0	535.0	98.0	43.0
(%)	100	4.7	46.6	26.6	17.5	3.2	1.4

問4. 生活充足感

(4)精神的ゆとり

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	214.0	1376.0	906.0	537.0	88.0	68.0
(%)	100	6.7	43.1	28.4	16.8	2.8	2.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	240.0	1465.0	689.0	396.0	64.0	55.0
(%)	100	8.3	50.4	23.7	13.6	2.2	1.9
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	236.0	1505.0	754.0	451.0	56.0	49.0
(%)	100	7.7	49.3	24.7	14.8	1.8	1.6

問4. 生活充足感

(5)家族の理解・愛情

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	792.0	1736.0	426.0	122.0	31.0	82.0
(%)	100	24.8	54.4	13.4	3.8	1.0	2.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	700.0	1639.0	382.0	102.0	24.0	62.0
(%)	100	24.1	56.3	13.1	3.5	0.8	2.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	751.0	1821.0	313.0	88.0	20.0	58.0
(%)	100	24.6	59.7	10.3	2.9	0.7	1.9

問4. 生活充足感

(6)友人・仲間

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	383.0	1768.0	715.0	227.0	38.0	58.0
(%)	100	12.0	55.4	22.4	7.1	1.2	1.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	411.0	1665.0	569.0	202.0	33.0	29.0
(%)	100	14.1	57.2	19.6	6.9	1.1	1.0
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	373.0	1762.0	631.0	214.0	32.0	39.0
(%)	100	12.2	57.8	20.7	7.0	1.0	1.3

問4. 生活充足感

(7)熱中できる趣味

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	486.0	1293.0	657.0	536.0	153.0	64.0
(%)	100	15.2	40.5	20.6	16.8	4.8	2.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	515.0	1222.0	557.0	475.0	109.0	31.0
(%)	100	17.7	42.0	19.1	16.3	3.7	1.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	477.0	1254.0	546.0	585.0	147.0	42.0
(%)	100	15.6	41.1	17.9	19.2	4.8	1.4

問4. 生活充足感

(8)仕事のはりあい

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	240.0	1326.0	914.0	349.0	157.0	203.0
(%)	100	7.5	41.6	28.7	10.9	4.9	6.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	293.0	1333.0	738.0	271.0	122.0	152.0
(%)	100	10.1	45.8	25.4	9.3	4.2	5.2
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	336.0	1439.0	779.0	255.0	115.0	127.0
(%)	100	11.0	47.2	25.5	8.4	3.8	4.2

問4. 生活充足感
(9) 社会的地位

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	118.0	1057.0	1309.0	317.0	232.0	156.0
(%)	100	3.7	33.1	41.0	9.9	7.3	4.9
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	139.0	1049.0	1132.0	303.0	180.0	106.0
(%)	100	4.8	36.1	38.9	10.4	6.2	3.6
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	132.0	1154.0	1127.0	329.0	198.0	111.0
(%)	100	4.3	37.8	36.9	10.8	6.5	3.6

問4. 生活充足感
(10) 自然とのふれあい

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	285.0	1223.0	777.0	662.0	158.0	84.0
(%)	100	8.9	38.4	24.4	20.8	5.0	2.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	319.0	1243.0	631.0	547.0	131.0	38.0
(%)	100	11.0	42.7	21.7	18.8	4.5	1.3
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	296.0	1241.0	635.0	704.0	128.0	47.0
(%)	100	9.7	40.7	20.8	23.1	4.2	1.5

問4. 生活充足感
(11) 近隣との交流

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	100.0	765.0	981.0	890.0	396.0	57.0
(%)	100	3.1	24.0	30.8	27.9	12.4	1.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	115.0	835.0	838.0	758.0	327.0	36.0
(%)	100	4.0	28.7	28.8	26.1	11.2	1.2
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	130.0	930.0	830.0	865.0	262.0	34.0
(%)	100	4.3	30.5	27.2	28.4	8.6	1.1

問4. 生活充足感
(12) 社会の役に立つこと

	総数	十分満たされている	まあ満たされている	どちらともいえない	やや欠けている	まったく欠けている	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	60.0	493.0	1138.0	976.0	448.0	74.0
(%)	100	1.9	15.5	35.7	30.6	14.0	2.3
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	85.0	601.0	1121.0	755.0	306.0	41.0
(%)	100	2.9	20.7	38.5	26.0	10.5	1.4
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	89.0	679.0	1113.0	790.0	315.0	65.0
(%)	100	2.9	22.3	36.5	25.9	10.3	2.1

問5. 自由時間の有無

	総数	十分にある	まあまあ	不十分である	まったくない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	626.0	1365.0	1081.0	72.0	45.0
(%)	100	19.6	42.8	33.9	2.3	1.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	646.0	1374.0	811.0	46.0	32.0
(%)	100	22.2	47.2	27.9	1.6	1.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	575.0	1234.0	1053.0	146.0	43.0
(%)	100	18.8	40.4	34.5	4.8	1.4

問5付問. 自由時間の過ごし方

該当数	仕事仲間とのプライベートなつきあい	仕事に関する勉強や残務整理	テレビ・コロシアムやパチンコ、酒など	考えごとやめい想	ひとりで趣味・スポーツ・学習など	仲間と趣味・スポーツ・学習など	パソコン通信やインターネットなど	個人的な友人・仲間とのつきあい	行楽・ドライブなど	庭いじりや家事など家庭内のこと	家庭との団らんや家庭サービス	近隣の人のつきあいや地域の用事	ボランティアなどの社会活動	
≪第3回調査(平成13年)≫	3072	302.0	374.0	986.0	110.0	874.0	944.0	388.0	811.0	861.0	1106.0	962.0	191.0	123.0
(%)	100	9.8	12.2	32.1	3.6	28.5	30.7	12.6	26.4	28.0	36.0	31.3	6.2	4.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2831	280.0	317.0	909.0	86.0	839.0	829.0	72.0	754.0	827.0	1083.0	936.0	198.0	126.0
(%)	100	9.9	11.2	32.1	3.0	29.6	29.3	2.5	26.6	29.2	38.3	33.1	7.0	4.5
≪第1回調査(平成3年)≫	2862	535.0	483.0	1239.0	193.0	904.0	477.0	-	602.0	335.0	961.0	1014.0	190.0	100.0
(%)	100	18.7	16.9	43.3	6.7	31.6	16.7	-	21.0	11.7	33.6	35.4	6.6	3.5

問5付問. 自由時間の過ごし方

	宗教活動・政治活動	その他	特に何もしない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	62.0	105.0	18.0	16.0
(%)	2.0	3.4	0.6	0.5
≪第2回調査(平成8年)≫	46.0	82.0	17.0	21.0
(%)	1.6	2.9	0.6	0.7
≪第1回調査(平成3年)≫	54.0	70.0	51.0	15.0
(%)	1.9	2.4	1.8	0.5

問6. 生きがい構成要素取得の場
(1) 生活にはりあいや活力をもたらしてくれるのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2252.0	1477.0	188.0	728.0	192.0	155.0	26.0	115.0
(%)	100	70.6	46.3	5.9	22.8	6.0	4.9	0.8	3.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1970.0	1372.0	170.0	558.0	162.0	118.0	28.0	207.0
(%)	100	67.7	47.2	5.8	19.2	5.6	4.1	1.0	7.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	2087.0	1750.0	136.0	477.0	214.0	87.0	26.0	135.0
(%)	100	68.4	57.4	4.5	15.6	7.0	2.9	0.9	4.4

問6. 生きがい構成要素取得の場
(2) 生活のどの場で、リズムやメリハリがつけますか

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1535.0	1782.0	208.0	505.0	276.0	170.0	54.0	196.0
(%)	100	48.1	55.9	6.5	15.8	8.7	5.3	1.7	6.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1316.0	1605.0	189.0	386.0	292.0	148.0	45.0	330.0
(%)	100	45.2	55.2	6.5	13.3	10.0	5.1	1.5	11.3
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-

問6. 生きがい構成要素取得の場
(3)心の安らぎや気晴らしを感じるのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2492.0	198.0	157.0	1295.0	104.0	364.0	29.0	149.0
(%)	100	78.1	6.2	4.9	40.6	3.3	11.4	0.9	4.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	2280.0	167.0	159.0	1037.0	131.0	314.0	16.0	211.0
(%)	100	78.4	5.7	5.5	35.6	4.5	10.8	0.6	7.3
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	2487.0	273.0	154.0	1138.0	132.0	308.0	16.0	148.0
(%)	100	81.5	8.9	5.0	37.3	4.3	10.1	0.5	4.9

問6. 生きがい構成要素取得の場
(4)どの場で喜びや満足感を感じる人が多いですか

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2093.0	1213.0	188.0	699.0	206.0	280.0	44.0	182.0
(%)	100	65.6	38.0	5.9	21.9	6.5	8.8	1.4	5.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1828.0	1096.0	171.0	525.0	182.0	238.0	36.0	305.0
(%)	100	62.8	37.7	5.9	18.0	6.3	8.2	1.2	10.5
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	1818.0	1516.0	156.0	392.0	250.0	210.0	55.0	242.0
(%)	100	59.6	49.7	5.1	12.8	8.2	6.9	1.8	7.9

問6. 生きがい構成要素取得の場
(5)人生観や価値観に影響を与えているのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1102.0	1274.0	174.0	924.0	845.0	228.0	89.0	214.0
(%)	100	34.6	39.9	5.5	29.0	26.5	7.1	2.8	6.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	912.0	1095.0	181.0	809.0	768.0	179.0	87.0	318.0
(%)	100	31.4	37.6	6.2	27.8	26.3	6.2	3.0	10.9
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	707.0	1355.0	190.0	865.0	992.0	192.0	78.0	267.0
(%)	100	23.2	44.4	6.2	28.4	32.5	6.3	2.6	8.8

問6. 生きがい構成要素取得の場
(6)生活の目標や目的は、どこにあると感じますか

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2245.0	1121.0	176.0	169.0	493.0	240.0	59.0	213.0
(%)	100	70.4	35.2	5.5	5.3	15.5	7.5	1.9	6.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1970.0	995.0	183.0	124.0	481.0	168.0	42.0	307.0
(%)	100	67.7	34.2	6.3	4.3	16.5	5.8	1.4	10.6
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	2095.0	1221.0	151.0	86.0	538.0	156.0	41.0	271.0
(%)	100	68.7	40.0	4.9	2.8	17.6	5.1	1.3	8.9

問6. 生きがい構成要素取得の場
(7)どの場での生活が自分自身を向上させていると...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	691.0	1865.0	279.0	490.0	925.0	231.0	58.0	213.0
(%)	100	21.7	58.5	8.7	15.4	29.0	7.2	1.8	6.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	583.0	1642.0	255.0	394.0	852.0	173.0	62.0	328.0
(%)	100	20.0	56.4	8.8	13.5	29.3	5.9	2.1	11.2
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	434.0	1908.0	263.0	404.0	1117.0	153.0	52.0	266.0
(%)	100	14.2	62.5	8.6	13.2	36.6	5.0	1.7	8.7

問6. 生きがい構成要素取得の場
(8)可能性を表現したり、やりとげたと感じるのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	730.0	2036.0	316.0	183.0	616.0	320.0	111.0	191.0
(%)	100	22.9	63.8	9.9	5.7	19.3	10.0	3.5	6.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	649.0	1854.0	262.0	126.0	551.0	240.0	97.0	318.0
(%)	100	22.3	63.7	9.0	4.3	18.9	8.3	3.3	10.9
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	572.0	2109.0	280.0	129.0	624.0	230.0	127.0	261.0
(%)	100	18.7	69.1	9.2	4.2	20.5	7.5	4.2	8.6

問6. 生きがい構成要素取得の場
(9)役に立っていると感じたり評価を得ているのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1248.0	1922.0	370.0	313.0	421.0	173.0	136.0	174.0
(%)	100	39.1	60.3	11.6	9.8	13.2	5.4	4.3	5.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1077.0	1789.0	328.0	217.0	383.0	144.0	111.0	256.0
(%)	100	37.0	61.5	11.3	7.5	13.2	5.0	3.8	8.8
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	962.0	2079.0	346.0	254.0	471.0	132.0	106.0	219.0
(%)	100	31.5	68.1	11.3	8.3	15.4	4.3	3.5	7.2

問7. 重視している立場
(1)親、夫または妻、一家の主など、家庭人の立場

	総数	大変重視している	少し重視している	あまり重視していない	まったく重視していない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2109.0	779.0	182.0	54.0	65.0
(%)	100	66.1	24.4	5.7	1.7	2.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1913.0	751.0	154.0	30.0	61.0
(%)	100	65.8	25.8	5.3	1.0	2.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	2149.0	665.0	123.0	18.0	96.0
(%)	100	70.4	21.8	4.0	0.6	3.1

問7. 重視している立場
(2)〇〇会社員、〇〇の専門家など、職業人の立場

	総数	大変重視している	少し重視している	あまり重視していない	まったく重視していない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	597.0	1208.0	962.0	294.0	128.0
(%)	100	18.7	37.9	30.2	9.2	4.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	528.0	1140.0	910.0	208.0	123.0
(%)	100	18.2	39.2	31.3	7.2	4.2
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	699.0	1195.0	809.0	177.0	171.0
(%)	100	22.9	39.2	26.5	5.8	5.6

問7. 重視している立場

(3)〇〇地域の住民、〇〇の隣人など、地域人の立場

	総数	大変重視している	少し重視している	あまり重視していない	まったく重視していない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	177.0	971.0	1497.0	431.0	113.0
(%)	100	5.6	30.4	46.9	13.5	3.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	215.0	924.0	1340.0	330.0	100.0
(%)	100	7.4	31.8	46.1	11.3	3.4
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	276.0	1085.0	1295.0	247.0	148.0
(%)	100	9.0	35.6	42.4	8.1	4.9

問7. 重視している立場

(4)〇〇のメンバー、仲間など、グループ員の立場

	総数	大変重視している	少し重視している	あまり重視していない	まったく重視していない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	348.0	1210.0	1153.0	376.0	102.0
(%)	100	10.9	37.9	36.2	11.8	3.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	389.0	1151.0	977.0	296.0	96.0
(%)	100	13.4	39.6	33.6	10.2	3.3
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	401.0	1168.0	1085.0	244.0	153.0
(%)	100	13.1	38.3	35.6	8.0	5.0

問7. 重視している立場

(5)社会の一員、地球に住む人間としての立場

	総数	大変重視している	少し重視している	あまり重視していない	まったく重視していない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	607.0	1486.0	860.0	151.0	85.0
(%)	100	19.0	46.6	27.0	4.7	2.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	564.0	1410.0	731.0	127.0	77.0
(%)	100	19.4	48.5	25.1	4.4	2.6
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	657.0	1380.0	755.0	120.0	139.0
(%)	100	21.5	45.2	24.7	3.9	4.6

問8. 性格

(1)人との関係やつながりを大切にする

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1685.0	1286.0	181.0	13.0	24.0
(%)	100	52.8	40.3	5.7	0.4	0.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1608.0	1110.0	151.0	10.0	30.0
(%)	100	55.3	38.2	5.2	0.3	1.0
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	1534.0	1249.0	179.0	8.0	81.0
(%)	100	50.3	40.9	5.9	0.3	2.7

問8. 性格

(2)自分の世界や個性を大切にする

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1041.0	1556.0	514.0	25.0	53.0
(%)	100	32.6	48.8	16.1	0.8	1.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	968.0	1408.0	468.0	22.0	43.0
(%)	100	33.3	48.4	16.1	0.8	1.5
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	870.0	1487.0	506.0	23.0	165.0
(%)	100	28.5	48.7	16.6	0.8	5.4

問8. 性格

(3)いつも目標に向かってつき進む

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	596.0	1556.0	901.0	77.0	59.0
(%)	100	18.7	48.8	28.3	2.4	1.9
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	584.0	1429.0	804.0	46.0	46.0
(%)	100	20.1	49.1	27.6	1.6	1.6
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	623.0	1414.0	802.0	53.0	159.0
(%)	100	20.4	46.3	26.3	1.7	5.2

問8. 性格

(4)無理をせずマイペースで進む

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	795.0	1691.0	607.0	52.0	44.0
(%)	100	24.9	53.0	19.0	1.6	1.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	740.0	1541.0	545.0	50.0	33.0
(%)	100	25.4	53.0	18.7	1.7	1.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	885.0	1548.0	468.0	36.0	114.0
(%)	100	29.0	50.7	15.3	1.2	3.7

問8. 性格

(5)他人にはない自分なりの価値観を持っている

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	746.0	1567.0	775.0	51.0	50.0
(%)	100	23.4	49.1	24.3	1.6	1.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	729.0	1514.0	588.0	36.0	42.0
(%)	100	25.1	52.0	20.2	1.2	1.4
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 性格
(6)自分には他人にない優れたところがある

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	314.0	1375.0	1318.0	125.0	57.0
(%)	100	9.8	43.1	41.3	3.9	1.8
《第2回調査(平成8年)》	2909	364.0	1346.0	1058.0	98.0	43.0
(%)	100	12.5	46.3	36.4	3.4	1.5
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 性格
(7)いろいろなことに興味を持ちチャレンジする

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	511.0	1323.0	1167.0	139.0	49.0
(%)	100	16.0	41.5	36.6	4.4	1.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	512.0	1187.0	1064.0	110.0	36.0
(%)	100	17.6	40.8	36.6	3.8	1.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	501.0	1172.0	1092.0	134.0	152.0
(%)	100	16.4	38.4	35.8	4.4	5.0

問8. 性格
(8)一つのことにとじっくり取り組む

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	500.0	1387.0	1144.0	100.0	58.0
(%)	100	15.7	43.5	35.9	3.1	1.8
《第2回調査(平成8年)》	2909	468.0	1283.0	1034.0	86.0	38.0
(%)	100	16.1	44.1	35.5	3.0	1.3
《第1回調査(平成3年)》	3051	521.0	1335.0	954.0	90.0	151.0
(%)	100	17.1	43.8	31.3	2.9	4.9

問8. 性格
(9)指導者の立場に立とうとする

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	207.0	1027.0	1443.0	453.0	59.0
(%)	100	6.5	32.2	45.2	14.2	1.9
《第2回調査(平成8年)》	2909	257.0	1093.0	1171.0	343.0	45.0
(%)	100	8.8	37.6	40.3	11.8	1.5
《第1回調査(平成3年)》	3051	269.0	1039.0	1192.0	388.0	163.0
(%)	100	8.8	34.1	39.1	12.7	5.3

問8. 性格
(10)新しいグループの中に、わりと気軽に入れる

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	299.0	1211.0	1365.0	261.0	53.0
(%)	100	9.4	38.0	42.8	8.2	1.7
《第2回調査(平成8年)》	2909	349.0	1177.0	1123.0	225.0	35.0
(%)	100	12.0	40.5	38.6	7.7	1.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	310.0	1084.0	1251.0	256.0	150.0
(%)	100	10.2	35.5	41.0	8.4	4.9

問8. 性格
(11)いろいろな人の話や意見をよく聞く

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	708.0	1911.0	485.0	37.0	48.0
(%)	100	22.2	59.9	15.2	1.2	1.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	778.0	1655.0	410.0	31.0	35.0
(%)	100	26.7	56.9	14.1	1.1	1.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	805.0	1720.0	349.0	42.0	135.0
(%)	100	26.4	56.4	11.4	1.4	4.4

問8. 性格
(12)上下の立場や関係を尊重する

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	796.0	1725.0	544.0	76.0	48.0
(%)	100	25.0	54.1	17.1	2.4	1.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	810.0	1512.0	502.0	45.0	40.0
(%)	100	27.8	52.0	17.3	1.5	1.4
《第1回調査(平成3年)》	3051	993.0	1450.0	399.0	55.0	154.0
(%)	100	32.5	47.5	13.1	1.8	5.0

問8. 性格
(13)どんなところでも結構楽しみを見出す

	総数	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	476.0	1606.0	980.0	83.0	44.0
(%)	100	14.9	50.4	30.7	2.6	1.4
《第2回調査(平成8年)》	2909	478.0	1413.0	904.0	74.0	40.0
(%)	100	16.4	48.6	31.1	2.5	1.4
《第1回調査(平成3年)》	3051	459.0	1462.0	915.0	72.0	143.0
(%)	100	15.0	47.9	30.0	2.4	4.7

問9. 生きがいの意味

	総数	生活の活 力やほりあ い	生活のリズ ムやメリハ リ	心の安らぎ や気晴らし	生きる喜び や満足感	人生活や 価値観の 形成	生きる目標 や目的	自分自身 の向上	自分の可 能性の実 現や何かを やりとげた と感じること	他人や社 会の役に 立っていると 感じること	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	831.0	325.0	851.0	1291.0	277.0	559.0	582.0	898.0	544.0	20.0	16.0
(%)	100	26.1	10.2	26.7	40.5	8.7	17.5	18.3	28.2	17.1	0.6	0.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	761.0	281.0	723.0	1270.0	230.0	592.0	459.0	719.0	557.0	9.0	33.0
(%)	100	26.2	9.7	24.9	43.7	7.9	20.4	15.8	24.7	19.1	0.3	1.1
《第1回調査(平成3年)》	3051	1073.0	217.0	760.0	1433.0	297.0	597.0	679.0	-	777.0	8.0	30.0
(%)	100	35.2	7.1	24.9	47.0	9.7	19.6	22.3	-	25.5	0.3	1.0

問9付問. 生きがいの有無

	総数	持っている	前は持っ ていたが、今 は持ってい ない	持ってい ない	わからない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	2145.0	228.0	267.0	496.0	53.0
(%)	100	67.3	7.1	8.4	15.6	1.7
《第2回調査(平成8年)》	2909	2280.0	151.0	194.0	248.0	36.0
(%)	100	78.4	5.2	6.7	8.5	1.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	2021.0	282.0	400.0	297.0	51.0
(%)	100	66.2	9.2	13.1	9.7	1.7

問10. 生きがいの内容

	総数	仕事	趣味	スポーツ	学習活動	社会活動	自然とのふ れあい	配偶者・結 婚生活	子ども・孫 親などの家 族・家庭	友人など家 族以外の 人との交流	自分自身 の健康づ くり	ひとりで 気ままに 過ごすこ と	自分自身 の内面の 充実	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	1124.0	1400.0	466.0	182.0	185.0	588.0	733.0	1762.0	595.0	584.0	345.0	403.0	33.0	27.0
(%)	100	35.2	43.9	14.6	5.7	5.8	18.4	23.0	55.3	18.7	18.3	10.8	12.6	1.0	0.8
《第2回調査(平成8年)》	2909	944.0	1094.0	352.0	136.0	205.0	516.0	498.0	1051.0	401.0	463.0	204.0	310.0	16.0	5.0
(%)	100	32.5	37.6	12.1	4.7	7.0	17.7	17.1	36.1	13.8	15.9	7.0	10.7	0.6	0.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問11. 生きがい度の変化

(1) 仕事の面

	総数	上がって きた	下がって きた	上がった り下が ったり 不安定	変わら ない	*高	*中	*低	*無回 答	どちら とも 言え ない	無回 答
《第3回調査(平成13年)》	3189	708.0	910.0	632.0	533.0	165.0	333.0	31.0	4.0	238.0	168.0
(%)	100	22.2	28.5	19.8	16.7	5.2	10.4	1.0	0.1	7.5	5.3
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問11. 生きがい度の変化

(2) 家庭の面

	総数	上がって きた	下がって きた	上がった り下が ったり 不安定	変わら ない	*高	*中	*低	*無回 答	どちら とも 言え ない	無回 答
《第3回調査(平成13年)》	3189	1383.0	219.0	412.0	863.0	355.0	476.0	19.0	13.0	177.0	135.0
(%)	100	43.4	6.9	12.9	27.1	11.1	14.9	0.6	0.4	5.6	4.2
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問11. 生きがい度の変化

(3) 余暇活動・趣味の面

	総数	上がって きた	下がって きた	上がった り下が ったり 不安定	変わら ない	*高	*中	*低	*無回 答	どちら とも 言え ない	無回 答
《第3回調査(平成13年)》	3189	1225.0	492.0	493.0	703.0	165.0	456.0	71.0	11.0	179.0	97.0
(%)	100	38.4	15.4	15.5	22.0	5.2	14.3	2.2	0.3	5.6	3.0
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問11. 生きがい度の変化

(4) 社会活動の面

	総数	上がって きた	下がって きた	上がった り下が ったり 不安定	変わら ない	*高	*中	*低	*無回 答	どちら とも 言え ない	無回 答
《第3回調査(平成13年)》	3189	378.0	450.0	373.0	1119.0	84.0	534.0	478.0	23.0	716.0	153.0
(%)	100	11.9	14.1	11.7	35.1	2.6	16.7	15.0	0.7	22.5	4.8
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問11. 生きがい度の変化

(5) 生活全体

	総数	上がって きた	下がって きた	上がった り下が ったり 不安定	変わら ない	*高	*中	*低	*無回 答	どちら とも 言え ない	無回 答
《第3回調査(平成13年)》	3189	895.0	405.0	631.0	887.0	238.0	603.0	29.0	17.0	256.0	115.0
(%)	100	28.1	12.7	19.8	27.8	7.5	18.9	0.9	0.5	8.0	3.6
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問12. 友人・仲間の有無

	総数	いる	いない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2696.0	460.0	33.0
(%)	100	84.5	14.4	1.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	2467.0	429.0	13.0
(%)	100	84.8	14.7	0.4
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	2559.0	472.0	20.0
(%)	100	83.9	15.5	0.7

問12付問1. 友人・仲間に知り合った関係

該当数	幼なじみ・学生時代の友人・仲間	職場や仕事を通じて知り合った友人・仲間	近隣の地域で知り合った友人・仲間	趣味・パソコン教室などを通じて知り合った友人・仲間	電子メールなどを通じて知り合った友人・仲間	社会活動を通じて知り合った友人・仲間	宗教活動を通じて知り合った友人・仲間	家族や親戚・縁戚関係を通じて知り合った友人・仲間	戦友	その他	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	2696	1729.0	1975.0	605.0	715.0	23.0	269.0	77.0	510.0	7.0	18.0	18.0
(%)	100	64.1	73.3	22.4	26.5	0.9	10.0	2.9	18.9	0.3	0.7	0.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2467	1615.0	1903.0	624.0	692.0	-	270.0	92.0	543.0	54.0	24.0	12.0
(%)	100	65.5	77.1	25.3	28.1	-	10.9	3.7	22.0	2.2	1.0	0.5
≪第1回調査(平成3年)≫	2559	1557.0	1975.0	612.0	960.0	-	273.0	126.0	626.0	178.0	20.0	7.0
(%)	100	60.8	77.2	23.9	37.5	-	10.7	4.9	24.5	7.0	0.8	0.3

問12付問2. 定年後に知り合った友人・仲間の関係

該当数	幼なじみ・学生時代の友人・仲間	職場や仕事を通じて知り合った友人・仲間	近隣の地域で知り合った友人・仲間	趣味・パソコン教室などを通じて知り合った友人・仲間	電子メールなどを通じて知り合った友人・仲間	社会活動を通じて知り合った友人・仲間	宗教活動を通じて知り合った友人・仲間	家族や親戚・縁戚関係を通じて知り合った友人・仲間	戦友	その他	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1095	145.0	325.0	243.0	318.0	11.0	137.0	23.0	84.0	3.0	10.0	349.0
(%)	100	13.2	29.7	22.2	29.0	1.0	12.5	2.1	7.7	0.3	0.9	31.9
≪第2回調査(平成8年)≫	893	94.0	234.0	145.0	209.0	-	72.0	19.0	37.0	9.0	5.0	317.0
(%)	100	10.5	26.2	16.2	23.4	-	8.1	2.1	4.1	1.0	0.6	35.5
≪第1回調査(平成3年)≫	913	95.0	244.0	113.0	206.0	-	70.0	27.0	44.0	26.0	8.0	383.0
(%)	100	10.4	26.7	12.4	22.6	-	7.7	3.0	4.8	2.8	0.9	41.9

問13. 夫婦関係の現状

(1) 自分は配偶者を頼りにしている

該当数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	1431.0	949.0	152.0	11.0	54.0
(%)	100	55.1	36.5	5.9	0.4	2.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	1438.0	866.0	110.0	11.0	52.0
(%)	100	58.1	35.0	4.4	0.4	2.1
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	1475.0	963.0	149.0	14.0	136.0
(%)	100	53.9	35.2	5.4	0.5	5.0

問13. 夫婦関係の現状

(2) 自分は配偶者を理解している

該当数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	839.0	1439.0	255.0	12.0	52.0
(%)	100	32.3	55.4	9.8	0.5	2.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	863.0	1318.0	239.0	4.0	53.0
(%)	100	34.8	53.2	9.6	0.2	2.1
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	934.0	1414.0	225.0	6.0	158.0
(%)	100	34.1	51.7	8.2	0.2	5.8

問13. 夫婦関係の現状

(3) 自分は配偶者を愛している

該当数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	1284.0	1089.0	145.0	15.0	64.0
(%)	100	49.4	41.9	5.6	0.6	2.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	1230.0	1061.0	119.0	10.0	57.0
(%)	100	49.7	42.8	4.8	0.4	2.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問13. 夫婦関係の現状

(4) 配偶者と価値観・考え方が似ている

該当数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	321.0	1089.0	974.0	148.0	65.0
(%)	100	12.4	41.9	37.5	5.7	2.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	301.0	1044.0	944.0	127.0	61.0
(%)	100	12.2	42.1	38.1	5.1	2.5
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問13. 夫婦関係の現状

(5) 共通の趣味がある

該当数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	292.0	749.0	1108.0	380.0	68.0
(%)	100	11.2	28.8	42.7	14.6	2.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	245.0	691.0	1154.0	326.0	61.0
(%)	100	9.9	27.9	46.6	13.2	2.5
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	259.0	638.0	1330.0	339.0	171.0
(%)	100	9.5	23.3	48.6	12.4	6.2

問13. 夫婦関係の現状

(6) 対話がある

該当数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	756.0	1289.0	452.0	34.0	66.0
(%)	100	29.1	49.6	17.4	1.3	2.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	678.0	1308.0	413.0	22.0	56.0
(%)	100	27.4	52.8	16.7	0.9	2.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	675.0	1412.0	459.0	24.0	167.0
(%)	100	24.7	51.6	16.8	0.9	6.1

問13. 夫婦関係の現状

(7)よく一緒に出かける

	該当数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	889.0	971.0	593.0	77.0	67.0
(%)	100	34.2	37.4	22.8	3.0	2.6
《第2回調査(平成8年)》	2477	776.0	984.0	584.0	70.0	63.0
(%)	100	31.3	39.7	23.6	2.8	2.5
《第1回調査(平成3年)》	2737	704.0	1030.0	767.0	71.0	165.0
(%)	100	25.7	37.6	28.0	2.6	6.0

問13. 夫婦関係の現状

(8)配偶者の独自の趣味や行動を尊重している

	該当数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	1067.0	1217.0	221.0	30.0	62.0
(%)	100	41.1	46.9	8.5	1.2	2.4
《第2回調査(平成8年)》	2477	949.0	1218.0	237.0	14.0	59.0
(%)	100	38.3	49.2	9.6	0.6	2.4
《第1回調査(平成3年)》	2737	923.0	1350.0	284.0	16.0	164.0
(%)	100	33.7	49.3	10.4	0.6	6.0

問13. 夫婦関係の現状

(9)自分は配偶者を助けている

	該当数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	572.0	1345.0	582.0	32.0	66.0
(%)	100	22.0	51.8	22.4	1.2	2.5
《第2回調査(平成8年)》	2477	541.0	1311.0	557.0	13.0	55.0
(%)	100	21.8	52.9	22.5	0.5	2.2
《第1回調査(平成3年)》	2737	497.0	1336.0	719.0	32.0	153.0
(%)	100	18.2	48.8	26.3	1.2	5.6

問13. 夫婦関係の現状

(10)配偶者は自分によりかかりすぎる

	該当数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	136.0	646.0	1545.0	204.0	66.0
(%)	100	5.2	24.9	59.5	7.9	2.5
《第2回調査(平成8年)》	2477	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2737	161.0	779.0	1478.0	156.0	163.0
(%)	100	5.9	28.5	54.0	5.7	6.0

問13. 夫婦関係の現状

(11)配偶者と家事を分担している

	該当数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	178.0	729.0	1177.0	457.0	56.0
(%)	100	6.9	28.1	45.3	17.6	2.2
《第2回調査(平成8年)》	2477	268.0	663.0	1109.0	382.0	55.0
(%)	100	10.8	26.8	44.8	15.4	2.2
《第1回調査(平成3年)》	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと

(1)配偶者と互いに頼りにしあうこと

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	1649.0	803.0	79.0	30.0	36.0
(%)	100	63.5	30.9	3.0	1.2	1.4
《第2回調査(平成8年)》	2477	1744.0	645.0	54.0	16.0	18.0
(%)	100	70.4	26.0	2.2	0.6	0.7
《第1回調査(平成3年)》	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと

(2)配偶者と互いに理解しあうこと

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	1913.0	590.0	48.0	10.0	36.0
(%)	100	73.7	22.7	1.8	0.4	1.4
《第2回調査(平成8年)》	2477	1818.0	593.0	44.0	3.0	19.0
(%)	100	73.4	23.9	1.8	0.1	0.8
《第1回調査(平成3年)》	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと

(3)配偶者から愛情が感じられること

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	1597.0	787.0	153.0	17.0	43.0
(%)	100	61.5	30.3	5.9	0.7	1.7
《第2回調査(平成8年)》	2477	1460.0	843.0	145.0	7.0	22.0
(%)	100	58.9	34.0	5.9	0.3	0.9
《第1回調査(平成3年)》	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと

(4)価値観や考え方を共有すること

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2597	852.0	1236.0	331.0	128.0	50.0
(%)	100	32.8	47.6	12.7	4.9	1.9
《第2回調査(平成8年)》	2477	748.0	1259.0	355.0	88.0	27.0
(%)	100	30.2	50.8	14.3	3.6	1.1
《第1回調査(平成3年)》	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと
(5)共通の趣味を持つこと

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	513.0	1155.0	525.0	358.0	46.0
(%)	100	19.8	44.5	20.2	13.8	1.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	503.0	1158.0	513.0	281.0	22.0
(%)	100	20.3	46.8	20.7	11.3	0.9
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと
(6)対話を持つこと

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	1580.0	887.0	68.0	19.0	43.0
(%)	100	60.8	34.2	2.6	0.7	1.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	1543.0	834.0	66.0	9.0	25.0
(%)	100	62.3	33.7	2.7	0.4	1.0
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと
(7)一緒に行動すること

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	768.0	1328.0	295.0	158.0	48.0
(%)	100	29.6	51.1	11.4	6.1	1.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	762.0	1302.0	254.0	132.0	27.0
(%)	100	30.8	52.6	10.3	5.3	1.1
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと
(8)互いに独自の趣味や行動を尊重すること

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	1293.0	1086.0	132.0	40.0	46.0
(%)	100	49.8	41.8	5.1	1.5	1.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	1212.0	1080.0	138.0	25.0	22.0
(%)	100	48.9	43.6	5.6	1.0	0.9
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと
(9)配偶者と助け合うこと

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	1761.0	732.0	51.0	15.0	38.0
(%)	100	67.8	28.2	2.0	0.6	1.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	1732.0	678.0	42.0	5.0	20.0
(%)	100	69.9	27.4	1.7	0.2	0.8
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問14. 夫婦関係で大切なこと
(10)配偶者と家事を分担し合うこと

	該当数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2597	495.0	1295.0	494.0	275.0	38.0
(%)	100	19.1	49.9	19.0	10.6	1.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2477	462.0	1188.0	573.0	234.0	20.0
(%)	100	18.7	48.0	23.1	9.4	0.8
≪第1回調査(平成3年)≫	2737	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問15(1). 自分の親が寝たきり等になった場合の対応

	総数	自分自身が中心になって介護する	配偶者が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	890.0	646.0	352.0	504.0	353.0	444.0
(%)	100	27.9	20.3	11.0	15.8	11.1	13.9
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問15(2). 配偶者の親が寝たきり等になった場合の対応

	総数	自分自身が中心になって介護する	配偶者が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	292.0	1108.0	288.0	454.0	375.0	672.0
(%)	100	9.2	34.7	9.0	14.2	11.8	21.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問15(3). 配偶者が寝たきり等になった場合の対応

	総数	自分自身が中心になって介護する	子ども等が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2129.0	62.0	203.0	150.0	152.0	78.0	415.0
(%)	100	66.8	1.9	6.4	4.7	4.8	2.4	13.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-

問15(4). 自分が寝たきり等になった場合

	総数	配偶者が中心になって介護する	子ども等が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	一人で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1471.0	79.0	333.0	827.0	240.0	93.0	146.0
(%)	100	46.1	2.5	10.4	25.9	7.5	2.9	4.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-

問15付問(1). 介護の負担と自分の生活

	総数	そう思う	どちらとも言えない	そうは思わない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	559.0	1804.0	747.0	79.0
(%)	100	17.5	56.6	23.4	2.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-

問15付問(2). 介護と共生

	総数	そう思う	どちらとも言えない	そうは思わない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1079.0	1794.0	233.0	83.0
(%)	100	33.8	56.3	7.3	2.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-

問16(1). 長生きについての受けとめ方

	総数	生きられるなら、いつまでも生きたい	生き長らえるのは健康なうちだけでよい	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	416.0	2673.0	59.0	41.0
(%)	100	13.0	83.8	1.9	1.3
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-

問16(2). 長生きの年齢

	総数	60歳未満	60~69歳	70~79歳	80~89歳	90~99歳	100歳以上	無回答	平均(歳)
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	3.0	33.0	646.0	1922.0	417.0	107.0	61.0	81.2
(%)	100	0.1	1.0	20.3	60.3	13.1	3.4	1.9	81.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-

問17. 定年のイメージ

	総数	わずらわしい人間関係から解放される	所属する組織や肩書がなくなる	家庭サービスができる	経済的に苦しくなる	自由な時間が増え、自分を取り戻す	生活の目標や気持ちが減る	接する人や情報が減る	新しい人生が開ける	社会から取り残される	決まりきった行動パターンから解放される	自己実現の場や機会がなくなる	精神的に楽になる	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	772.0	481.0	449.0	1227.0	1641.0	502.0	529.0	1111.0	102.0	629.0	89.0	1061.0	78.0
(%)	100	24.2	15.1	14.1	38.5	51.5	15.7	16.6	34.8	3.2	19.7	2.8	33.3	2.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	742.0	506.0	429.0	1023.0	1452.0	490.0	660.0	954.0	84.0	586.0	89.0	884.0	48.0
(%)	100	25.5	17.4	14.7	35.2	49.9	16.8	22.7	32.8	2.9	20.1	3.1	30.4	1.7
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	797.0	570.0	497.0	1012.0	1386.0	566.0	635.0	971.0	136.0	662.0	124.0	945.0	69.0
(%)	100	26.1	18.7	16.3	33.2	45.4	18.6	20.8	31.8	4.5	21.7	4.1	31.0	2.3

問18. 職業生活からの引退時期についての年齢規範

	総数	引退にふさわしい年齢がある	健康な限りは何才まででも働きたい	引退にふさわしい年齢はない	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1581.0	946.0	480.0	87.0	95.0
(%)	100	49.6	29.7	15.1	2.7	3.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1401.0	965.0	418.0	67.0	58.0
(%)	100	48.2	33.2	14.4	2.3	2.0
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

※問18. 職業生活からの引退時期についての年齢規範(年齢)

	該当数	50歳未満	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~69歳	70~74歳	75歳以上	無回答	平均(歳)
≪第3回調査(平成13年)≫	1581	2.0	20.0	98.0	484.0	812.0	153.0	9.0	3.0	63.4
(%)	100	0.1	1.3	6.2	30.6	51.4	9.7	0.6	0.2	63.4
≪第2回調査(平成8年)≫	1401	3.0	18.0	64.0	481.0	726.0	86.0	12.0	11.0	63.2
(%)	100	0.2	1.3	4.6	34.3	51.8	6.1	0.9	0.8	63.2
≪第1回調査(平成3年)≫	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問19. 定年経験の有無、定年・退職年齢

	総数	まだ定年前	定年前に退職した	定年退職した	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1920.0	226.0	1032.0	11.0
(%)	100	60.2	7.1	32.4	0.3
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1832.0	184.0	860.0	33.0
(%)	100	63.0	6.3	29.6	1.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	1778.0	198.0	877.0	198.0
(%)	100	58.3	6.5	28.7	6.5

※問19. 定年経験の有無・定年・退職年齢(「定年前」の定年)

該当数	50歳未満	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~99歳	70~74歳	75歳以上	無回答	平均(歳)	
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	5.0	11.0	125.0	1476.0	81.0	11.0	1.0	210.0	59.9
(%)	100	0.3	0.6	6.5	76.9	4.2	0.6	0.1	10.9	59.9
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	5.0	5.0	136.0	1382.0	62.0	4.0	3.0	235.0	59.9
(%)	100	0.3	0.3	7.4	75.4	3.4	0.2	0.2	12.8	59.9
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	0.0	1.0	299.0	1320.0	79.0	0.0	0.0	79.0	59.6
(%)	100	0.0	0.1	16.8	74.2	4.4	0.0	0.0	4.4	59.6

※問19. 定年経験の有無・定年・退職年齢(「定年前に退職」の退職年齢)

該当数	50歳未満	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~99歳	70~74歳	75歳以上	無回答	平均(歳)	
≪第3回調査(平成13年)≫	226	16.0	54.0	120.0	25.0	4.0	0.0	0.0	7.0	55.6
(%)	100	7.1	23.9	53.1	11.1	1.8	0.0	0.0	3.1	55.6
≪第2回調査(平成8年)≫	184	8.0	42.0	89.0	34.0	9.0	1.0	0.0	1.0	56.5
(%)	100	4.3	22.8	48.4	18.5	4.9	0.5	0.0	0.5	56.5
≪第1回調査(平成3年)≫	198	0.0	52.0	102.0	31.0	2.0	0.0	0.0	11.0	56.3
(%)	100	0.0	26.3	51.5	15.7	1.0	0.0	0.0	5.6	56.3

※問19. 定年経験の有無・定年・退職年齢(「定年退職」の定年)

該当数	50歳未満	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~99歳	70~74歳	75歳以上	無回答	平均(歳)	
≪第3回調査(平成13年)≫	1032	1.0	16.0	181.0	725.0	69.0	6.0	0.0	34.0	59.8
(%)	100	0.1	1.6	17.5	70.3	6.7	0.6	0.0	3.3	59.8
≪第2回調査(平成8年)≫	860	1.0	5.0	210.0	557.0	74.0	7.0	0.0	6.0	59.7
(%)	100	0.1	0.6	24.4	64.8	8.6	0.8	0.0	0.7	59.7
≪第1回調査(平成3年)≫	877	0.0	20.0	367.0	423.0	56.0	0.0	0.0	11.0	58.7
(%)	100	0.0	2.3	41.8	48.2	6.4	0.0	0.0	1.3	58.7

問20(1). 定年後の生活設計の有無(現役)

該当数	ほとんど設計ができていない	ある程度設計ができていない	考えてはいる	気にはしているが、あまり深く考えていない	まったく考えていない	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	36.0	187.0	265.0	1059.0	346.0	27.0
(%)	100	1.9	9.7	13.8	55.2	18.0	1.4
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	46.0	228.0	298.0	916.0	290.0	54.0
(%)	100	2.5	12.4	16.3	50.0	15.8	2.9
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	47.0	188.0	354.0	896.0	288.0	5.0
(%)	100	2.6	10.6	19.9	50.4	16.2	0.3

問20(2). 定年後の経済基礎として重視するもの(現役)

該当数	公的年金	企業年金	退職金	生命保険の保険金や個人年金	預貯金の取りぐすし	就労による収入	子ども等からの経済的支援	その他	わからない・考えたことがない	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	1385.0	1007.0	793.0	385.0	491.0	582.0	17.0	37.0	68.0	23.0
(%)	100	72.1	52.4	41.3	20.1	25.6	30.3	0.9	1.9	3.5	1.2
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	1426.0	979.0	708.0	470.0	321.0	573.0	12.0	44.0	72.0	23.0
(%)	100	77.8	53.4	38.6	25.7	17.5	31.3	0.7	2.4	3.9	1.3
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問20(3). 定年後の不安(現役)

該当数	生計維持の困難	住宅の問題	自分や配偶者の健康	配偶者や親の介護	配偶者に先立たれる	再就職の問題	家族との人間関係が悪くなる	生活のほりや生きがいなくなる	所属や肩書がなくなる	今までの人的交流や情報量が減る	世の中の情報化の進展についていけない	社会から取り残される	時間をもてあます	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	1004.0	251.0	1067.0	429.0	303.0	477.0	15.0	311.0	36.0	242.0	85.0	70.0	353.0
(%)	100	52.3	13.1	55.6	22.3	15.8	24.8	0.8	16.2	1.9	12.6	4.4	3.6	18.4
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	762.0	223.0	1009.0	359.0	301.0	451.0	24.0	356.0	59.0	371.0	92.0	83.0	341.0
(%)	100	41.6	12.2	55.1	19.6	16.4	24.6	1.3	19.4	3.2	20.3	5.0	4.5	18.6
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	704.0	216.0	909.0	-	251.0	517.0	17.0	398.0	95.0	407.0	-	85.0	396.0
(%)	100	39.6	12.1	51.1	-	14.1	29.1	1.0	22.4	5.3	22.9	-	4.8	22.3

問20(3). 定年後の不安(現役)

該当数	地域社会にとけこめない	その他	特に不安を感じない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	99.0	20.0	192.0	30.0
(%)	5.2	1.0	10.0	1.6
≪第2回調査(平成8年)≫	84.0	21.0	203.0	29.0
(%)	4.6	1.1	11.1	1.6
≪第1回調査(平成3年)≫	101.0	17.0	239.0	16.0
(%)	5.7	1.0	13.4	0.9

問20(4). 希望する定年後の生活(現役)

該当数	健康に恵まれた生活	時間的にゆとりのある生活	経済的にゆとりのある生活	精神的にゆとりのある生活	夫婦関係や家族関係を大切にする生活	友人や仲間とのつきあいを大切にする生活	好きな趣味にうち込む生活	好きな仕事を続ける生活	それまでの知識や経験を活かす生活	自然とのふれあいのある生活	社会のために役立つ生活	その他	特にな	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	1474.0	273.0	830.0	555.0	728.0	331.0	496.0	129.0	147.0	347.0	160.0	7.0	5.0	18.0
(%)	100	76.8	14.2	43.2	28.9	37.9	17.2	25.8	6.7	7.7	18.1	8.3	0.4	0.3	0.9
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	1439.0	213.0	757.0	522.0	699.0	332.0	462.0	165.0	133.0	302.0	186.0	7.0	6.0	15.0
(%)	100	78.5	11.6	41.3	28.5	38.2	18.1	25.2	9.0	7.3	16.5	10.2	0.4	0.3	0.8
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	1375.0	225.0	807.0	444.0	690.0	315.0	609.0	-	210.0	249.0	168.0	4.0	3.0	5.0
(%)	100	77.3	12.7	45.4	25.0	38.8	17.7	34.3	-	11.8	14.0	9.4	0.2	0.2	0.3

問20(5). 定年までの勤務希望(現役)

該当数	定年まで勤めたい	定年前に退職したい	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	1506.0	357.0	57.0
(%)	100	78.4	18.6	3.0
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	1465.0	264.0	103.0
(%)	100	80.0	14.4	5.6
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	1440.0	303.0	35.0
(%)	100	81.0	17.0	2.0

※問20(5). 定年までの勤務希望(退職までの希望年数)(現役)

	該当数	5年未満	5~10年 未満	10~15年 未満	15~20年 未満	20年以上	0年	無回答	平均(年) *0年含む
≪第3回調査(平成13年)≫	357	125.0	93.0	78.0	15.0	5.0	0.0	41.0	6.1
(%)	100	35.0	26.1	21.8	4.2	1.4	0.0	11.5	6.1
≪第2回調査(平成8年)≫	264	97.0	81.0	45.0	13.0	2.0	5.0	21.0	5.6
(%)	100	36.7	30.7	17.0	4.9	0.8	1.9	8.0	5.6
≪第1回調査(平成3年)≫	303	94.0	94.0	55.0	12.0	3.0	0.0	45.0	5.8
(%)	100	31.0	31.0	18.2	4.0	1.0	0.0	14.9	5.8

単純集計 13/28ページ

問20(6). 退職後の就業希望(現役)

該当数	退職とともに 職業生活 から引退す たい	再雇用や 勤務延長 制度等によ り、今の会 社に勤めたい	退職後は 出向先に移 籍したい	退職後は 別の企業に 再就職したい	退職後は 自分で事業 や商売を始 めたい(自由 業を含む)	退職後は 家業を手伝 いたい	退職後はシ ルバー人材 センターで 簡単な仕事 をしたい	その他	わからない ・考えた ことがない	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	490.0	279.0	50.0	281.0	235.0	24.0	234.0	53.0	250.0	24.0
(%)	100	25.5	14.5	2.6	14.6	12.2	1.3	12.2	2.8	13.0	1.3
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	452.0	321.0	47.0	283.0	189.0	25.0	184.0	46.0	238.0	47.0
(%)	100	24.7	17.5	2.6	15.4	10.3	1.4	10.0	2.5	13.0	2.6
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	442.0	252.0	55.0	295.0	262.0	24.0	149.0	39.0	232.0	28.0
(%)	100	24.9	14.2	3.1	16.6	14.7	1.3	8.4	2.2	13.0	1.6

問20(7). 退職後の就業予想(現役)

該当数	退職ととも に職業生活 から引退す る	再雇用や 勤務延長 制度等によ り、今の会 社に勤める	退職後は 出向先に移 籍する	退職後は 別の企業に 再就職する	退職後は 自分で事業 や商売を始 める(自由 業を含む)	退職後は 家業を手伝 う	退職後はシ ルバー人材 センターな どで簡単な 仕事をする	その他	わからない	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1920	495.0	226.0	79.0	287.0	147.0	33.0	162.0	40.0	419.0	32.0
(%)	100	25.8	11.8	4.1	14.9	7.7	1.7	8.4	2.1	21.8	1.7
≪第2回調査(平成8年)≫	1832	495.0	218.0	63.0	306.0	117.0	31.0	135.0	35.0	368.0	64.0
(%)	100	27.0	11.9	3.4	16.7	6.4	1.7	7.4	1.9	20.1	3.5
≪第1回調査(平成3年)≫	1778	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問21(1). 退職前の職種(OB)

該当数	専門技術 職(研究 職・技師 等)	管理職(役 員・課長以 上の管理 職)	事務職(一 般事務・営 業・経理事 務等)	販売職(店 員・セール ス等)	技能職・技 術補助・生 産工程従 事・作業者	サービス職 (添乗員・ホ テルマン 等)	その他	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	50.0	663.0	260.0	32.0	161.0	11.0	50.0	31.0
(%)	100	4.0	52.7	20.7	2.5	12.8	0.9	4.0	2.5
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	48.0	573.0	174.0	14.0	132.0	12.0	33.0	58.0
(%)	100	4.6	54.9	16.7	1.3	12.6	1.1	3.2	5.6
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	39.0	606.0	173.0	13.0	157.0	5.0	19.0	63.0
(%)	100	3.6	56.4	16.1	1.2	14.6	0.5	1.8	5.9

問21(2). 退職前の勤務先の企業規模(OB)

該当数	1~29人	30~99人	100~29 9人	300~99 9人	1000人以 上	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	88.0	81.0	103.0	99.0	856.0	31.0
(%)	100	7.0	6.4	8.2	7.9	68.0	2.5
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	55.0	76.0	91.0	110.0	661.0	51.0
(%)	100	5.3	7.3	8.7	10.5	63.3	4.9
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	60.0	81.0	103.0	130.0	665.0	36.0
(%)	100	5.6	7.5	9.6	12.1	61.9	3.3

問21(3). 定年前の就業状況についての満足度(OB)

1) 仕事の内容

該当数	とても満足 している	やや満足し ている	どちらとも いえない	やや不満で ある	とても不満 である	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	397.0	567.0	168.0	69.0	19.0	38.0
(%)	100	31.6	45.1	13.4	5.5	1.5	3.0
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	336.0	452.0	137.0	53.0	12.0	54.0
(%)	100	32.2	43.3	13.1	5.1	1.1	5.2
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問21(3). 定年前の就業状況についての満足度(OB)

2) 就業形態

該当数	とても満足 している	やや満足し ている	どちらとも いえない	やや不満で ある	とても不満 である	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	292.0	585.0	234.0	77.0	17.0	53.0
(%)	100	23.2	46.5	18.6	6.1	1.4	4.2
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	255.0	494.0	160.0	50.0	13.0	72.0
(%)	100	24.4	47.3	15.3	4.8	1.2	6.9
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問21(3). 定年前の就業状況についての満足度(OB)

3) 職場での地位の高さ

該当数	とても満足 している	やや満足し ている	どちらとも いえない	やや不満で ある	とても不満 である	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	261.0	519.0	303.0	84.0	35.0	56.0
(%)	100	20.7	41.3	24.1	6.7	2.8	4.5
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	216.0	445.0	214.0	83.0	22.0	64.0
(%)	100	20.7	42.6	20.5	8.0	2.1	6.1
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問21(3). 定年前の就業状況についての満足度(OB)

4) 賃金

該当数	とても満足 している	やや満足し ている	どちらとも いえない	やや不満で ある	とても不満 である	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	190.0	522.0	288.0	164.0	47.0	47.0
(%)	100	15.1	41.5	22.9	13.0	3.7	3.7
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	164.0	407.0	228.0	148.0	37.0	60.0
(%)	100	15.7	39.0	21.8	14.2	3.5	5.7
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問21(3). 定年前の就業状況についての満足度(OB)

5) 福利厚生

	該当数	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1258	254.0	558.0	265.0	103.0	31.0	47.0
(%)	100	20.2	44.4	21.1	8.2	2.5	3.7
《第2回調査(平成8年)》	1044	206.0	470.0	208.0	72.0	22.0	66.0
(%)	100	19.7	45.0	19.9	6.9	2.1	6.3
《第1回調査(平成3年)》	1075	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問21(3). 定年前の就業状況についての満足度(OB)

6) 職場の人間関係・雰囲気

	該当数	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1258	228.0	557.0	290.0	111.0	28.0	44.0
(%)	100	18.1	44.3	23.1	8.8	2.2	3.5
《第2回調査(平成8年)》	1044	191.0	487.0	209.0	82.0	16.0	59.0
(%)	100	18.3	46.6	20.0	7.9	1.5	5.7
《第1回調査(平成3年)》	1075	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問21(3). 定年前の就業状況についての満足度(OB)

7) 全体として

	該当数	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1258	246.0	606.0	244.0	95.0	21.0	46.0
(%)	100	19.6	48.2	19.4	7.6	1.7	3.7
《第2回調査(平成8年)》	1044	195.0	524.0	189.0	63.0	15.0	58.0
(%)	100	18.7	50.2	18.1	6.0	1.4	5.6
《第1回調査(平成3年)》	1075	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問21(4). 退職後の就業の有無・形態(OB)

	該当数	退職とともに職業生活から引退した	再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤めた	退職後は出向先に移籍した	退職後は別の企業に再就職した	退職後は自分で事業や商売を始めた(自由業を含む)	退職後は家族を手伝うようになった	退職後はヘルパー人材センターで仕事するようになった	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1258	402.0	208.0	155.0	300.0	42.0	13.0	31.0	80.0	27.0
(%)	100	32.0	16.5	12.3	23.8	3.3	1.0	2.5	6.4	2.1
《第2回調査(平成8年)》	1044	290.0	182.0	108.0	272.0	42.0	20.0	22.0	60.0	48.0
(%)	100	27.8	17.4	10.3	26.1	4.0	1.9	2.1	5.7	4.6
《第1回調査(平成3年)》	1075	237.0	220.0	113.0	328.0	37.0	19.0	13.0	34.0	74.0
(%)	100	22.0	20.5	10.5	30.5	3.4	1.8	1.2	3.2	6.9

問21(5). 希望していた定年後の就業(OB)

	該当数	退職とともに職業生活から引退する	再雇用や勤務延長制度等により、今の会社に勤める	退職後は出向先に移籍する	退職後は別の企業に再就職する	退職後は自分で事業や商売を始める(自由業を含む)	退職後は家族を手伝う	退職後はヘルパー人材センターなどで簡単な仕事をする	その他	わからない・考えなかった	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1258	374.0	229.0	107.0	221.0	71.0	11.0	47.0	29.0	147.0	22.0
(%)	100	29.7	18.2	8.5	17.6	5.6	0.9	3.7	2.3	11.7	1.7
《第2回調査(平成8年)》	1044	256.0	229.0	72.0	211.0	68.0	10.0	39.0	22.0	103.0	34.0
(%)	100	24.5	21.9	6.9	20.2	6.5	1.0	3.7	2.1	9.9	3.3
《第1回調査(平成3年)》	1075	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問21(6). 定年後の生活設計の有無(OB)

	該当数	ほとんど設計ができていた	ある程度設計ができていた	考えてはいた	気にはしていたが、あまり深くは考えていなかった	まったく考えていなかった	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1258	54.0	222.0	222.0	621.0	114.0	25.0
(%)	100	4.3	17.6	17.6	49.4	9.1	2.0
《第2回調査(平成8年)》	1044	50.0	169.0	207.0	491.0	94.0	33.0
(%)	100	4.8	16.2	19.8	47.0	9.0	3.2
《第1回調査(平成3年)》	1075	55.0	175.0	244.0	463.0	115.0	23.0
(%)	100	5.1	16.3	22.7	43.1	10.7	2.1

問21(7). 定年後の不安(OB)

	該当数	生計維持の困難	住宅の問題	自分や配偶者の健康	配偶者や親の介護	配偶者に先立たれる	再就職の問題	家族との人間関係が悪くなる	生活のほりや生きがいなくなる	所属や肩書きがなくなる	今までの人的交流や情報量が減る	世の中の情報化の進展についていけない	社会に取り残される	時間をもてあます
《第3回調査(平成13年)》	1258	372.0	102.0	470.0	139.0	103.0	293.0	7.0	233.0	56.0	244.0	65.0	79.0	220.0
(%)	100	29.6	8.1	37.4	11.0	8.2	23.3	0.6	18.5	4.5	19.4	5.2	6.3	17.5
《第2回調査(平成8年)》	1044	295.0	98.0	427.0	115.0	80.0	281.0	15.0	178.0	63.0	230.0	56.0	46.0	146.0
(%)	100	28.3	9.4	40.9	11.0	7.7	26.9	1.4	17.0	6.0	22.0	5.4	4.4	14.0
《第1回調査(平成3年)》	1075	330.0	112.0	381.0	-	78.0	360.0	10.0	205.0	85.0	204.0	-	88.0	156.0
(%)	100	30.7	10.4	35.4	-	7.3	33.5	0.9	19.1	7.9	19.0	-	8.2	14.5

問21(7). 定年後の不安(OB)

	該当数	地域社会にとけこめない	その他	特に不安を感じない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1258	59.0	13.0	289.0	33.0
(%)	100	4.7	1.0	23.0	2.6
《第2回調査(平成8年)》	1044	41.0	7.0	227.0	44.0
(%)	100	3.9	0.7	21.7	4.2
《第1回調査(平成3年)》	1075	38.0	11.0	251.0	34.0
(%)	100	3.5	1.0	23.3	3.2

問21(8). 定年後の生活問題(OB)

該当数	経済的に苦しくなった	住宅問題で困った	自分や配偶者の健康や体力が衰えた	配偶者や親の介護が必要になった	配偶者に先立たれた	再就職のことで困った	家族との人間関係が悪くなった	生活のはりや生きがいや生きがいがなくなった	所属や肩書がなくなり、淋しい思いをした	今までの人的交流や情報量が減って困った	世の中の情報化の進展についていけず困った	社会から取り残されてしまった	時間をもてあました
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	386.0	40.0	414.0	140.0	115.0	22.0	121.0	100.0	213.0	75.0	24.0	146.0
(%)	100	30.7	3.2	32.9	11.1	9.1	1.7	9.6	7.9	16.9	6.0	1.9	11.6
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	247.0	28.0	341.0	103.0	86.0	17.0	80.0	86.0	148.0	43.0	16.0	100.0
(%)	100	23.7	2.7	32.7	9.9	8.2	1.6	7.7	8.2	14.2	4.1	1.5	9.6
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	258.0	26.0	313.0	-	44.0	82.0	21.0	115.0	174.0	-	25.0	106.0
(%)	100	24.0	2.4	29.1	-	4.1	7.6	2.0	10.7	16.2	-	2.3	9.9

問21(8). 定年後の生活問題(OB)

	地域社会にとけこめなかった	その他	特に問題はなかった	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	60.0	39.0	351.0	56.0
(%)	4.8	3.1	27.9	4.5
≪第2回調査(平成8年)≫	43.0	10.0	296.0	65.0
(%)	4.1	1.0	28.4	6.2
≪第1回調査(平成3年)≫	39.0	14.0	357.0	61.0
(%)	3.6	1.3	33.2	5.7

問21(8)付問. 定年が契機になって起こった不安

該当数	経済的に苦しくなった	住宅問題で困った	自分や配偶者の健康や体力が衰えた	配偶者や親の介護が必要になった	配偶者に先立たれた	再就職のことで困った	家族との人間関係が悪くなった	生活のはりや生きがいや生きがいがなくなった	所属や肩書がなくなり、淋しい思いをした	今までの人的交流や情報量が減って困った	世の中の情報化の進展についていけず困った	社会から取り残されてしまった	時間をもてあました
≪第3回調査(平成13年)≫	851	291.0	34.0	217.0	76.0	20.0	90.0	16.0	72.0	63.0	148.0	13.0	104.0
(%)	100	34.2	4.0	25.5	8.9	2.4	10.6	1.9	8.5	7.4	17.4	1.5	12.2
≪第2回調査(平成8年)≫	683	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	657	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問21(8)付問. 定年が契機になって起こった不安

	地域社会にとけこめなかった	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	36.0	24.0	187.0
(%)	4.2	2.8	22.0
≪第2回調査(平成8年)≫	-	-	-
(%)	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	-	-	-
(%)	-	-	-

問21(9). 希望していた定年後の生活(OB)

該当数	健康に恵まれた生活	時間的にゆとりのある生活	経済的にゆとりのある生活	精神的にゆとりのある生活	夫婦関係や家族関係を大切に生活	友人や仲間とのつきあいを大切にする生活	好きな趣味にうち込む生活	好きな仕事を続ける生活	それまでの知識や経験を活かす生活	自然とのふれあいのある生活	社会のために役立つ生活	その他	特になかった	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	1258	822.0	300.0	408.0	307.0	355.0	221.0	452.0	119.0	162.0	194.0	141.0	6.0	26.0	33.0
(%)	100	65.3	23.8	32.4	24.4	28.2	17.6	35.9	9.5	12.9	15.4	11.2	0.5	2.1	2.6
≪第2回調査(平成8年)≫	1044	705.0	211.0	348.0	211.0	296.0	167.0	353.0	116.0	139.0	131.0	93.0	6.0	31.0	38.0
(%)	100	67.5	20.2	33.3	20.2	28.4	16.0	33.8	11.1	13.3	12.5	8.9	0.6	3.0	3.6
≪第1回調査(平成3年)≫	1075	699.0	210.0	401.0	239.0	313.0	144.0	428.0	-	176.0	121.0	121.0	5.0	38.0	32.0
(%)	100	65.0	19.5	37.3	22.2	29.1	13.4	39.8	-	16.4	11.3	11.3	0.5	3.5	3.0

問22(1). 定年退職へ向けて必要な個人的対応

総数	健康の維持・増進を心がける	貯蓄・住宅など、経済的基盤をつくる	生涯楽しめる趣味などを持つ	定年後も活かせる専門的技術を身につける	夫婦・家族の関係を大切に生活	友人や仲間との交流を深める	近隣や地域の人の交流を深める	会社以外の活動の場をつくっておく	その他	特に何も必要ない	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2012.0	1520.0	945.0	406.0	524.0	299.0	170.0	367.0	5.0	7.0	59.0
(%)	100	63.1	47.7	29.6	12.7	16.4	9.4	5.3	11.5	0.2	0.2	1.9
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1800.0	1297.0	895.0	340.0	498.0	257.0	173.0	291.0	2.0	15.0	73.0
(%)	100	61.9	44.6	30.8	11.7	17.1	8.8	5.9	10.0	0.1	0.5	2.5
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	1929.0	1518.0	1002.0	414.0	409.0	256.0	182.0	305.0	6.0	15.0	46.0
(%)	100	63.2	49.8	32.8	13.6	13.4	8.4	6.0	10.0	0.2	0.5	1.5

問22(1)付問. 定年退職へ向けて準備している(していた)こと

総数	健康の維持・増進を心がける	貯蓄・住宅など、経済的基盤をつくる	生涯楽しめる趣味などを持つ	定年後も活かせる専門的技術を身につける	夫婦・家族の関係を大切に生活	友人や仲間との交流を深める	近隣や地域の人の交流を深める	会社以外の活動の場をつくっておく	その他	特に何も必要ない	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1969.0	1527.0	1189.0	379.0	978.0	874.0	425.0	366.0	39.0	183.0	94.0
(%)	100	61.7	47.9	37.3	11.9	30.7	27.4	13.3	11.5	1.2	5.7	2.9
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1957.0	1536.0	1265.0	367.0	1102.0	964.0	487.0	436.0	22.0	130.0	86.0
(%)	100	67.3	52.8	43.5	12.6	37.9	33.1	16.7	15.0	0.8	4.5	3.0
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	1891.0	1621.0	1297.0	411.0	929.0	933.0	496.0	419.0	27.0	184.0	148.0
(%)	100	62.0	53.1	42.5	13.5	30.4	30.6	16.3	13.7	0.9	6.0	4.9

問22(2). 定年退職へ向けて必要な企業の対応

総数	退職準備教育や退職相談を充実させる	企業年金の充実など社員の経済的基盤を充実させる	労働時間の短縮で、社員の個人的生活にゆとりを持たせる	中高年者の能力再開発の研修制度を充実させる	希望者には定年年齢を延長させる	定年後の再雇用など、再就職の場を用意する	社会活動や余暇活動奨励や支援の制度を設ける	定年前の“ならし運転”のための休暇制度を設ける	その他	特に何も必要ない	無回答	
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	747.0	1339.0	447.0	547.0	858.0	1015.0	302.0	208.0	29.0	133.0	88.0
(%)	100	23.4	42.0	14.0	17.2	26.9	31.8	9.5	6.5	0.9	4.2	2.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	747.0	1342.0	457.0	500.0	728.0	827.0	258.0	169.0	11.0	76.0	149.0
(%)	100	25.7	46.1	15.7	17.2	25.0	28.4	8.9	5.8	0.4	2.6	5.1
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	687.0	1617.0	622.0	464.0	681.0	911.0	285.0	170.0	13.0	51.0	119.0
(%)	100	22.5	53.0	20.4	15.2	22.3	29.9	9.3	5.6	0.4	1.7	3.9

問22(3). 定年退職へ向けて必要な社会的対応

	総数	できるだけ希望する年齢まで働ける雇用環境をつくる	定年退職者の能力を活かす場を増やす	サラリーマンOBが入り交わることができる交流の場をつくる	趣味・学習や社会活動のための機会や情報を提供する	中高年者の能力再開発の研修機会や施設を設ける	退職後の生活をよくするための研究や提案に力を入れる	その他	特に何も必要ない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	1592.0	1516.0	313.0	790.0	638.0	481.0	35.0	98.0	76.0
(%)	100	49.9	47.5	9.8	24.8	20.0	15.1	1.1	3.1	2.4
《第2回調査(平成8年)》	2909	1514.0	1275.0	387.0	761.0	595.0	393.0	20.0	59.0	142.0
(%)	100	52.0	43.8	13.3	26.2	20.5	13.5	0.7	2.0	4.9
《第1回調査(平成3年)》	3051	1554.0	1457.0	497.0	734.0	567.0	547.0	11.0	33.0	117.0
(%)	100	50.9	47.8	16.3	24.1	18.6	17.9	0.4	1.1	3.8

問22(4). 定年に関する意見・提案

	総数	回答あり	回答なし
《第3回調査(平成13年)》	3189	401.0	2788.0
(%)	100	12.6	87.4
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-
(%)	100	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-
(%)	100	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方

(1) 仕事の中でこそ自己実現が図れる

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	308.0	1425.0	1193.0	122.0	141.0
(%)	100	9.7	44.7	37.4	3.8	4.4
《第2回調査(平成8年)》	2909	358.0	1279.0	1027.0	105.0	140.0
(%)	100	12.3	44.0	35.3	3.6	4.8
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方

(2) 仕事は生計を立てるための手段に過ぎない

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	398.0	1601.0	931.0	139.0	120.0
(%)	100	12.5	50.2	29.2	4.4	3.8
《第2回調査(平成8年)》	2909	355.0	1491.0	834.0	115.0	114.0
(%)	100	12.2	51.3	28.7	4.0	3.9
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方

(3) どの会社でも十分通用する職業能力がある

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	169.0	1141.0	1582.0	188.0	129.0
(%)	100	5.3	35.8	49.0	5.9	4.0
《第2回調査(平成8年)》	2909	160.0	1191.0	1312.0	124.0	122.0
(%)	100	5.5	40.9	45.1	4.3	4.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方

(4) 会社は自分を正当に評価している(していた)

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	148.0	1738.0	1070.0	110.0	123.0
(%)	100	4.6	54.5	33.6	3.4	3.9
《第2回調査(平成8年)》	2909	178.0	1532.0	1002.0	89.0	108.0
(%)	100	6.1	52.7	34.4	3.1	3.7
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方

(5) 自分の会社には尽くしたい

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	491.0	1902.0	564.0	87.0	145.0
(%)	100	15.4	59.6	17.7	2.7	4.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	477.0	1739.0	513.0	67.0	113.0
(%)	100	16.4	59.8	17.6	2.3	3.9
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方

(6) 脱サラを考えたことがある・脱サラしたい

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	112.0	669.0	1328.0	925.0	155.0
(%)	100	3.5	21.0	41.6	29.0	4.9
《第2回調査(平成8年)》	2909	133.0	542.0	1084.0	1012.0	138.0
(%)	100	4.6	18.6	37.3	34.8	4.7
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方

(7) 上司や同僚とは仕事を離れてもつき合いたい

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	154.0	1086.0	1494.0	315.0	140.0
(%)	100	4.8	34.1	46.8	9.9	4.4
《第2回調査(平成8年)》	2909	198.0	1071.0	1266.0	260.0	114.0
(%)	100	6.8	36.8	43.5	8.9	3.9
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方
(8) 仕事のためには個人を犠牲にしてもやむを得ない

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	155.0	1418.0	1183.0	292.0	141.0
(%)	100	4.9	44.5	37.1	9.2	4.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	166.0	1238.0	1099.0	292.0	114.0
(%)	100	5.7	42.6	37.8	10.0	3.9
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方
(9) 仕事をするからには多少無理しても出したい

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	77.0	850.0	1757.0	371.0	134.0
(%)	100	2.4	26.7	55.1	11.6	4.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	92.0	852.0	1515.0	333.0	117.0
(%)	100	3.2	29.3	52.1	11.4	4.0
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方
(10) 出世よりも興味のある仕事に専念したい

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	375.0	1631.0	923.0	117.0	143.0
(%)	100	11.8	51.1	28.9	3.7	4.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	330.0	1468.0	880.0	102.0	129.0
(%)	100	11.3	50.5	30.3	3.5	4.4
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方
(11) 定年まで会社に勤められるかどうか不安だ

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	243.0	931.0	1335.0	542.0	138.0
(%)	100	7.6	29.2	41.9	17.0	4.3
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	148.0	670.0	1294.0	666.0	131.0
(%)	100	5.1	23.0	44.5	22.9	4.5
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方
(12) 会社は定年退職後の社員へのめんどうもよい

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	135.0	978.0	1397.0	539.0	140.0
(%)	100	4.2	30.7	43.8	16.9	4.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	154.0	857.0	1259.0	508.0	131.0
(%)	100	5.3	29.5	43.3	17.5	4.5
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23. 会社とのかかわりについての考え方
(13) 定年後は会社の世話になりたくない

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	558.0	1369.0	939.0	190.0	133.0
(%)	100	17.5	42.9	29.4	6.0	4.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	486.0	1153.0	915.0	234.0	121.0
(%)	100	16.7	39.6	31.5	8.0	4.2
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問23付問. 現在の就業状況についての満足度
(1) 仕事の内容

	該当数	とても満足 している	やや満足し ている	どちらとも いえない	やや不満で ある	とても不満 である	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2349	313.0	1152.0	534.0	189.0	57.0	104.0
(%)	100	13.3	49.0	22.7	8.0	2.4	4.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2250	398.0	1098.0	484.0	171.0	50.0	49.0
(%)	100	17.7	48.8	21.5	7.6	2.2	2.2
≪第1回調査(平成3年)≫	2461	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問23付問. 現在の就業状況についての満足度
(2) 就業形態

	該当数	とても満足 している	やや満足し ている	どちらとも いえない	やや不満で ある	とても不満 である	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2349	309.0	1083.0	511.0	272.0	62.0	112.0
(%)	100	13.2	46.1	21.8	11.6	2.6	4.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2250	356.0	1052.0	498.0	240.0	44.0	60.0
(%)	100	15.8	46.8	22.1	10.7	2.0	2.7
≪第1回調査(平成3年)≫	2461	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問23付問. 現在の就業状況についての満足度
(3) 職場での地位の高さ

	該当数	とても満足 している	やや満足し ている	どちらとも いえない	やや不満で ある	とても不満 である	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2349	232.0	856.0	824.0	236.0	81.0	120.0
(%)	100	9.9	36.4	35.1	10.0	3.4	5.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2250	259.0	833.0	813.0	211.0	60.0	74.0
(%)	100	11.5	37.0	36.1	9.4	2.7	3.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2461	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問23付問. 現在の就業状況についての満足度

(4) 賃金

	該当数	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2349	151.0	730.0	610.0	537.0	207.0	114.0
(%)	100	6.4	31.1	26.0	22.9	8.8	4.9
《第2回調査(平成8年)》	2250	144.0	690.0	653.0	529.0	170.0	64.0
(%)	100	6.4	30.7	29.0	23.5	7.6	2.8
《第1回調査(平成3年)》	2461	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問23付問. 現在の就業状況についての満足度

(5) 福利厚生

	該当数	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2349	153.0	776.0	747.0	405.0	145.0	123.0
(%)	100	6.5	33.0	31.8	17.2	6.2	5.2
《第2回調査(平成8年)》	2250	175.0	737.0	688.0	408.0	163.0	79.0
(%)	100	7.8	32.8	30.6	18.1	7.2	3.5
《第1回調査(平成3年)》	2461	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問23付問. 現在の就業状況についての満足度

(6) 職場の人間関係・雰囲気

	該当数	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2349	177.0	956.0	705.0	285.0	113.0	113.0
(%)	100	7.5	40.7	30.0	12.1	4.8	4.8
《第2回調査(平成8年)》	2250	244.0	913.0	657.0	272.0	104.0	60.0
(%)	100	10.8	40.6	29.2	12.1	4.6	2.7
《第1回調査(平成3年)》	2461	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問23付問. 現在の就業状況についての満足度

(7) 全体として

	該当数	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	やや不満である	とても不満である	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2349	164.0	1055.0	661.0	297.0	62.0	110.0
(%)	100	7.0	44.9	28.1	12.6	2.6	4.7
《第2回調査(平成8年)》	2250	190.0	1089.0	603.0	255.0	57.0	56.0
(%)	100	8.4	48.4	26.8	11.3	2.5	2.5
《第1回調査(平成3年)》	2461	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

フェイスシート

F1. 性別・年齢(性別)

	総数	男	女	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	2372.0	776.0	41.0
(%)	100	74.4	24.3	1.3
《第2回調査(平成8年)》	2909	2296.0	547.0	66.0
(%)	100	78.9	18.8	2.3
《第1回調査(平成3年)》	3051	2440.0	578.0	33.0
(%)	100	80.0	18.9	1.1

F1. 性別・年齢(年齢)

	総数	35歳未満	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~69歳	70~74歳	75歳以上	無回答	平均(歳)
《第3回調査(平成13年)》	3189	0.0	341.0	331.0	358.0	419.0	448.0	407.0	556.0	248.0	0.0	81.0	54.9
(%)	100	0.0	10.7	10.4	11.2	13.1	14.0	12.8	17.4	7.8	0.0	2.5	54.9
《第2回調査(平成8年)》	2909	0.0	262.0	336.0	348.0	314.0	405.0	399.0	521.0	214.0	0.0	110.0	55.2
(%)	100	0.0	9.0	11.6	12.0	10.8	13.9	13.7	17.9	7.4	0.0	3.8	55.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	0.0	265.0	426.0	362.0	360.0	425.0	439.0	472.0	230.0	0.0	72.0	54.6
(%)	100	0.0	8.7	14.0	11.9	11.8	13.9	14.4	15.5	7.5	0.0	2.4	54.6

F2. 居住地(都道府県)

	総数	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	248.0	1322.0	484.0	574.0	236.0	252.0	73.0
(%)	100	7.8	41.5	15.2	18.0	7.4	7.9	2.3
《第2回調査(平成8年)》	2909	195.0	796.0	825.0	580.0	221.0	176.0	116.0
(%)	100	6.7	27.4	28.4	19.9	7.6	6.1	4.0
《第1回調査(平成3年)》	3051	271.0	1131.0	436.0	589.0	316.0	234.0	74.0
(%)	100	8.9	37.1	14.3	19.3	10.4	7.7	2.4

F2. 居住地(市町村)

	総数	東京23区・政令指定都市	その他の市	郡部	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	879.0	1942.0	256.0	112.0
(%)	100	27.6	60.9	8.0	3.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	804.0	1661.0	274.0	170.0
(%)	100	27.6	57.1	9.4	5.8
《第1回調査(平成3年)》	3051	865.0	1780.0	300.0	106.0
(%)	100	28.4	58.3	9.8	3.5

F3. 居住年数

	総数	5年未満	5年以上~10年未満	10年以上~20年未満	20年以上~30年未満	30年以上	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	328.0	350.0	584.0	675.0	1198.0	54.0
(%)	100	10.3	11.0	18.3	21.2	37.6	1.7
《第2回調査(平成8年)》	2909	304.0	244.0	660.0	636.0	968.0	97.0
(%)	100	10.5	8.4	22.7	21.9	33.3	3.3
《第1回調査(平成3年)》	3051	347.0	313.0	818.0	548.0	992.0	33.0
(%)	100	11.4	10.3	26.8	18.0	32.5	1.1

F4. 最終学歴

	総数	小学校・高等学校・新制中学校	旧制中学校・高等女学校・実業学校・新制高等学校	旧制高等学校・高等師範学校・新制短大	大学・大学院	専門学校・専修学校	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	287.0	1162.0	164.0	1276.0	138.0	10.0	152.0
(%)	100	9.0	36.4	5.1	40.0	4.3	0.3	4.8
《第2回調査(平成8年)》	2909	346.0	1193.0	170.0	952.0	103.0	44.0	101.0
(%)	100	11.9	41.0	5.8	32.7	3.5	1.5	3.5
《第1回調査(平成3年)》	3051	449.0	1336.0	222.0	843.0	116.0	23.0	62.0
(%)	100	14.7	43.8	7.3	27.6	3.8	0.8	2.0

F5. 未既婚

	総数	未婚	既婚(配偶者あり)	既婚(離別)	既婚(死別)	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	370.0	2597.0	70.0	105.0	47.0
(%)	100	11.6	81.4	2.2	3.3	1.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	248.0	2477.0	43.0	99.0	42.0
(%)	100	8.5	85.1	1.5	3.4	1.4
《第1回調査(平成3年)》	3051	176.0	2737.0	41.0	65.0	32.0
(%)	100	5.8	89.7	1.3	2.1	1.0

F6. 世帯構成

	総数	ひとり暮らし	自分たち夫婦だけ	自分たち夫婦(または自分)と未婚の子	自分たち夫婦(または自分)と子ども夫婦	自分たち夫婦(または自分)と親子	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	281.0	759.0	1226.0	143.0	564.0	72.0	144.0
(%)	100	8.8	23.8	38.4	4.5	17.7	2.3	4.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	191.0	701.0	1136.0	148.0	461.0	171.0	101.0
(%)	100	6.6	24.1	39.1	5.1	15.8	5.9	3.5
《第1回調査(平成3年)》	3051	174.0	780.0	1282.0	194.0	411.0	84.0	126.0
(%)	100	5.7	25.6	42.0	6.4	13.5	2.8	4.1

F7. 住居形態

	総数	持ち家(一戸建て)	持ち家(分譲マンション等)	社宅・会社の寮	公社・公団・公営の賃貸住宅	民間の借家・マンション・アパート	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	2125.0	471.0	123.0	113.0	201.0	12.0	144.0
(%)	100	66.6	14.8	3.9	3.5	6.3	0.4	4.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	2057.0	338.0	100.0	102.0	187.0	30.0	95.0
(%)	100	70.7	11.6	3.4	3.5	6.4	1.0	3.3
《第1回調査(平成3年)》	3051	2210.0	283.0	140.0	114.0	229.0	27.0	48.0
(%)	100	72.4	9.3	4.6	3.7	7.5	0.9	1.6

F7付問. 住宅ローンの有無

	総数	払っている	払っていない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	1019.0	1962.0	208.0
(%)	100	32.0	61.5	6.5
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-	-
(%)	100	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	1041.0	1373.0	79.0
(%)	100	34.1	45.0	2.0

※F7付問. 住宅ローンの有無(残り支払年数)

	該当数	5年未満	5~10年未満	10~15年未満	15~20年未満	20年以上	0年	無回答	平均(年) *0年含む
《第3回調査(平成13年)》	1019	96.0	164.0	213.0	152.0	333.0	0.0	61.0	15.4
(%)	100	9.4	16.1	20.9	14.9	32.7	0.0	6.0	15.4
《第2回調査(平成8年)》	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	1041	154.0	209.0	203.0	176.0	255.0	7.0	37.0	12.8
(%)	100	14.8	20.1	19.5	16.9	24.5	0.7	3.6	12.8

F8. 現在の健康状態

	総数	非常に健康	まあ健康	注意する点はあるが、日常生活に支障はない	注意する点があり、日常生活に制限がある	病気がち・療養中	無回答
《第3回調査(平成13年)》	3189	339.0	1642.0	907.0	108.0	53.0	140.0
(%)	100	10.6	51.5	28.4	3.4	1.7	4.4
《第2回調査(平成8年)》	2909	410.0	1455.0	841.0	71.0	38.0	94.0
(%)	100	14.1	50.0	28.9	2.4	1.3	3.2
《第1回調査(平成3年)》	3051	388.0	1514.0	950.0	89.0	54.0	56.0
(%)	100	12.7	49.8	31.1	2.9	1.8	1.8

F9. 過去5年間に経験したライフイベント

	総数	子どもや孫の誕生	子どもの成人・就職	子どもや孫との別居	子どもの結婚	自分自身の入院	配偶者の入院	その他の家族の入院	配偶者の死	その他の家族の死	昇進・昇格	出向・転職・退職	災害等による資産の減少・経済的困難	自宅の購入・建て替え
《第3回調査(平成13年)》	3189	854.0	556.0	243.0	605.0	515.0	376.0	703.0	36.0	653.0	702.0	651.0	55.0	511.0
(%)	100	26.8	17.4	7.6	19.0	16.1	11.8	22.0	1.1	20.5	22.0	20.4	1.7	16.0
《第2回調査(平成8年)》	2909	795.0	561.0	218.0	558.0	489.0	353.0	536.0	43.0	500.0	604.0	544.0	70.0	449.0
(%)	100	27.3	19.3	7.5	19.2	16.8	12.1	18.4	1.5	17.2	20.8	18.7	2.4	15.4
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

F9. 過去5年間に経験したライフイベント

	いずれもない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	338.0	164.0
(%)	10.6	5.1
《第2回調査(平成8年)》	304.0	125.0
(%)	10.5	4.3
《第1回調査(平成3年)》	-	-
(%)	-	-

F10. 世帯年収

	総数	200万円未満	200万円以上～300万円未満	300万円以上～400万円未満	400万円以上～500万円未満	500万円以上～600万円未満	600万円以上～800万円未満	800万円以上～1000万円未満	1000万円以上～1500万円未満	1500万円以上	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	88.0	195.0	305.0	337.0	322.0	610.0	471.0	569.0	105.0	187.0
(%)	100	2.8	6.1	9.6	10.6	10.1	19.1	14.8	17.8	3.3	5.9
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	42.0	144.0	273.0	277.0	297.0	605.0	466.0	555.0	121.0	129.0
(%)	100	1.4	5.0	9.4	9.5	10.2	20.8	16.0	19.1	4.2	4.4
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

F10付問1. 主な収入源

	総数	給与	年金収入(公的・企業・個人年金)	不動産収入	利息・配当金収入	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	2182.0	823.0	23.0	0.0	16.0	145.0
(%)	100	68.4	25.8	0.7	0.0	0.5	4.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

F10付問2. 収入の充足程度

	総数	十分で余裕がある	ほぼ十分である	やや不足する	非常に不足する	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	217.0	1621.0	1004.0	196.0	151.0
(%)	100	6.8	50.8	31.5	6.1	4.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

F11. 現在の経済的な暮らし向き

	総数	とても楽だ	少し楽だ	苦しい	とても苦しい	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	202.0	1733.0	984.0	94.0	176.0
(%)	100	6.3	54.3	30.9	2.9	5.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

F12. 現在の就業形態

	総数	正規の社員・従業員	派遣・嘱託・パートタイマーなど	自営業・自由業・家族従業員	内職	シルバー人材センター(高齢者事業団)	無職	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	3189	1917.0	333.0	67.0	6.0	26.0	554.0	4.0	282.0
(%)	100	60.1	10.4	2.1	0.2	0.8	17.4	0.1	8.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2909	1853.0	274.0	80.0	13.0	30.0	509.0	55.0	95.0
(%)	100	63.7	9.4	2.8	0.4	1.0	17.5	1.9	3.3
≪第1回調査(平成3年)≫	3051	2047.0	303.0	80.0	8.0	23.0	506.0	-	84.0
(%)	100	67.1	9.9	2.6	0.3	0.8	16.6	-	2.8

※F12. 現在の就業形態(退職後経過年数)

	該当数	5年未満	5～10年未満	10～15年未満	15～20年未満	20年以上	0年	無回答	平均(年)*0年含む
≪第3回調査(平成13年)≫	554	284.0	188.0	45.0	15.0	2.0	1.0	19.0	4.8
(%)	100	51.3	33.9	8.1	2.7	0.4	0.2	3.4	4.8
≪第2回調査(平成8年)≫	509	279.0	130.0	60.0	9.0	2.0	4.0	25.0	4.7
(%)	100	54.8	25.5	11.8	1.8	0.4	0.8	4.9	4.7
≪第1回調査(平成3年)≫	506	207.0	141.0	62.0	10.0	0.0	19.0	67.0	5.0
(%)	100	40.9	27.9	12.3	2.0	0.0	3.8	13.2	5.0

F13(1). 現在の職種

	該当数	専門技術職(研究職・技師等)	管理職(役員・課長以上の管理職)	事務職(一般事務・営業・経理事務等)	販売職(店員・セールス等)	技能職・技術補助・生産工程従事・作業者	サービス職(添乗員・ホテルマン等)	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2349	149.0	920.0	869.0	62.0	231.0	54.0	21.0	43.0
(%)	100	6.3	39.2	37.0	2.6	9.8	2.3	0.9	1.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2250	100.0	923.0	747.0	49.0	224.0	36.0	105.0	66.0
(%)	100	4.4	41.0	33.2	2.2	10.0	1.6	4.7	2.9
≪第1回調査(平成3年)≫	2461	119.0	1126.0	700.0	56.0	245.0	35.0	79.0	101.0
(%)	100	4.8	45.8	28.4	2.3	10.0	1.4	3.2	4.1

F13(2). 現在の勤務先の企業規模

	該当数	1～29人	30～99人	100～299人	300～999人	1000人以上	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2349	383.0	256.0	232.0	252.0	1161.0	65.0
(%)	100	16.3	10.9	9.9	10.7	49.4	2.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2250	342.0	274.0	254.0	250.0	1059.0	71.0
(%)	100	15.2	12.2	11.3	11.1	47.1	3.2
≪第1回調査(平成3年)≫	2461	395.0	272.0	328.0	316.0	1060.0	90.0
(%)	100	16.1	11.1	13.3	12.8	43.1	3.7

F13(3). 現在の1週間の勤務日数

	該当数	1日未満	1～2日未満	2～3日未満	3～4日未満	4～5日未満	5～6日未満	6～7日未満	7日以上	0日	無回答	平均(日)*0日含む
≪第3回調査(平成13年)≫	2349	0.0	19.0	36.0	60.0	52.0	1884.0	228.0	20.0	0.0	50.0	5.0
(%)	100	0.0	0.8	1.5	2.6	2.2	80.2	9.7	0.9	0.0	2.1	5.0
≪第2回調査(平成8年)≫	2250	1.0	13.0	22.0	44.0	36.0	1787.0	267.0	10.0	1.0	69.0	5.0
(%)	100	0.0	0.6	1.0	2.0	1.6	79.4	11.9	0.4	0.0	3.1	5.0
≪第1回調査(平成3年)≫	2461	0.0	20.0	30.0	40.0	38.0	1520.0	687.0	22.0	0.0	104.0	5.2
(%)	100	0.0	0.8	1.2	1.6	1.5	61.8	27.9	0.9	0.0	4.2	5.2

F13(4). 現在の1日の勤務時間

	該当数	1時間未満	1~2時間 未満	2~3時間 未満	3~4時間 未満	4~5時間 未満	5~6時間 未満	6~7時間 未満	7~8時間 未満	8~9時間 未満	9~10時 間未満	10~12 時間未満	12~15時 間未満	15時間以 上
《第3回調査(平成13年)》	2349	0.0	0.0	9.0	19.0	25.0	34.0	53.0	191.0	1328.0	255.0	254.0	112.0	12.0
(%)	100	0.0	0.0	0.4	0.8	1.1	1.4	2.3	8.1	56.5	10.9	10.8	4.8	0.5
《第2回調査(平成8年)》	2250	1.0	2.0	3.0	15.0	25.0	34.0	48.0	451.0	1141.0	195.0	160.0	65.0	8.0
(%)	100	0.0	0.1	0.1	0.7	1.1	1.5	2.1	20.0	50.7	8.7	7.1	2.9	0.4
《第1回調査(平成3年)》	2461	0.0	2.0	5.0	19.0	15.0	28.0	48.0	278.0	1330.0	285.0	208.0	62.0	97.0
(%)	100	0.0	0.1	0.2	0.8	0.6	1.1	2.0	11.3	54.0	11.6	8.5	2.5	3.9

F13(4). 現在の1日の勤務時間

	0時間	無回答	平均(時 間)*0時 間含む
《第3回調査(平成13年)》	0.0	57.0	8.3
(%)	0.0	2.4	8.3
《第2回調査(平成8年)》	1.0	101.0	8.1
(%)	0.0	4.5	8.1
《第1回調査(平成3年)》	1.0	83.0	9.4
(%)	0.0	3.4	9.4

調査についての自由回答

	総数	回答あり	回答なし
《第3回調査(平成13年)》	3189	397.0	2792.0
(%)	100	12.4	87.6
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-
(%)	100	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-
(%)	100	-	-

別の意見聴取に応じてよい方

	総数	回答あり	回答なし
《第3回調査(平成13年)》	3189	573.0	2616.0
(%)	100	18.0	82.0
《第2回調査(平成8年)》	2909	-	-
(%)	100	-	-
《第1回調査(平成3年)》	3051	-	-
(%)	100	-	-

【配偶者調査】

問1. 近所づきあいの程度

	総数	ほとんどつきあいはない	顔が合えば挨拶をする	たまには立ち話をする	互いに訪問したり、何かを一緒にする	お互いの事情がわかり困ったときに相談したり助け合う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	60	598	1107	402	329	29
(%)	100	2.4	23.7	43.8	15.9	13.0	1.1
《第2回調査(平成8年)》	2430	41	465	1057	517	336	14
(%)	100	1.7	19.1	43.5	21.3	13.8	0.6
《第1回調査(平成3年)》	2573	36	458	1041	568	365	105
(%)	100	1.4	17.8	40.5	22.1	14.2	4.1

問2. 所属・活動団体

	総数	趣味やスポーツのクラブ・サークル	学習・研究の会や養教室	職場・職域関係の団体・グループ	定年退職者の会など、旧職場の集まり	PTA・父母会や子供会・青少年団体	難病や障害児・者を持つ家族の会	町内会・自治会や防災・防犯協会	老人クラブや地域の同好会	消費者団体やボランティア、NPOなど社会活動団体	宗教団体・政治団体	その他	いずれもない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	1097	337	268	92	399	32	498	111	154	113	63	581	119
(%)	100	43.4	13.3	10.6	3.6	15.8	1.3	19.7	4.4	6.1	4.5	2.5	23	4.7
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	1097	396	293	205	378	25	468	135	179	175	58	551	97
(%)	100	42.6	15.4	11.4	8	14.7	1	18.2	5.2	7	6.8	2.3	21.4	3.8

問2付問. リーダー経験(現在)

	該当数	趣味やスポーツのクラブ・サークル	学習・研究の会や養教室	職場・職域関係の団体・グループ	定年退職者の会など、旧職場の集まり	PTA・父母会や子供会・青少年団体	難病や障害児・者を持つ家族の会	町内会・自治会や防災・防犯協会	老人クラブや地域の同好会	消費者団体やボランティア、NPOなど社会活動団体	宗教団体・政治団体	その他	リーダーをしている所属・活動団体がある(計)	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1825	222	66	44	14	135	6	132	14	44	34	14	564	1261
(%)	100	12.2	3.6	2.4	0.8	7.4	0.3	7.2	0.8	2.4	1.9	0.8	30.9	69.1
《第2回調査(平成8年)》	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	1925	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問2付問. リーダー経験(過去)

	総数	趣味やスポーツのクラブ・サークル	学習・研究の会や養教室	職場・職域関係の団体・グループ	定年退職者の会など、旧職場の集まり	PTA・父母会や子供会・青少年団体	難病や障害児・者を持つ家族の会	町内会・自治会や防災・防犯協会	老人クラブや地域の同好会	消費者団体やボランティア、NPOなど社会活動団体	宗教団体・政治団体	その他	リーダーをしたことのある団体がある(計)	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	190	46	40	9	324	6	237	13	28	16	12	696	1829
(%)	100	7.5	1.8	1.6	0.4	12.8	0.2	9.4	0.5	1.1	0.6	0.5	27.6	72.4
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問3. 社会活動参加状況

	総数	定期的に参加している	ときどき参加している	以前に参加したことがある	参加していない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	376	307	321	1261	260
(%)	100	14.9	12.2	12.7	49.9	10.3
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	283	437	398	1360	95
(%)	100	11	17	15.5	52.9	3.7

問3付問1. 社会活動参加分野

	該当数	地域の生活環境を守る活動	地域のイベントや“村おこし”の活動	趣味・スポーツや学習グループのリーダーとしての活動	児童や青少年活動の世話役としての活動	地域の文化財や伝統を守る活動	消費者活動や生活向上のための活動	障害者・老人の助けなどの社会福祉活動	行政の委員、民生委員、保護司、人権擁護委員等の活動	自然保護や環境保全の活動	国際交流に関する活動	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	683	212	149	166	105	27	61	160	41	31	26	48	5
(%)	100	31	21.8	24.3	15.4	4	8.9	23.4	6	4.5	3.8	7	0.7
《第2回調査(平成8年)》	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	720	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問3付問2. 社会活動参加理由

	該当数	地域や社会に貢献したい	自分の知識や経験を活かしたい	社会への見聞を広げたい	友人や仲間を増やしたい	生活にはりあいを持たせたい	身近な人に話われた	会社の勤めや命令	社会人として当然と思った	何となく	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	683	353	168	121	201	164	145	12	123	6	48	4
(%)	100	51.7	24.6	17.7	29.4	24	21.2	1.8	18	0.9	7	0.6
《第2回調査(平成8年)》	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	720	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問3付問3. 社会活動不参加理由

	該当数	時間がない	経済的余裕がない	精神的なゆとりがない	健康や体力に自信がない	家族など周囲の理解や協力が得られない	自分にあつた活動の場がない	いっしょにやる仲間がない	何から始めるか、きっかけがつかめない	興味が無い、関心がない	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1582	718	112	283	320	22	278	144	445	183	91	51
(%)	100	45.4	7.1	17.9	20.2	1.4	17.6	9.1	28.1	11.6	5.8	3.2
《第2回調査(平成8年)》	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	1758	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問3付問4. 社会活動不参加者の今後の活動意向

	該当数	積極的に参加したい	条件によっては参加してもよい	参加するつもりはない	わからない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	1582	79	867	183	427	26
(%)	100	5	54.8	11.6	27	1.6
≪第2回調査(平成8年)≫	0	-	-	-	-	-
(%)	0	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	1758	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問4. 生きがい構成要素取得の場

(1) 生活にはりあいや活力をもたらしてくれるのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1930	605	243	855	136	167	26	111
(%)	100	76.4	24	9.6	33.9	5.4	6.6	1	4.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1872	620	235	695	134	129	10	106
(%)	100	77	25.5	9.7	28.6	5.5	5.3	0.4	4.4
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1959	678	313	871	143	152	18	106
(%)	100	76.1	26.4	12.2	26.1	5.6	5.9	0.7	4.1

問4. 生きがい構成要素取得の場

(2) 生活のどの場で、リズムやメリハリがつかますか

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1404	849	299	563	215	183	43	186
(%)	100	55.6	33.6	11.8	22.3	8.5	7.2	1.7	7.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1359	770	310	485	219	159	37	213
(%)	100	55.9	31.7	12.8	20	9	6.5	1.5	8.8
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-

問4. 生きがい構成要素取得の場

(3) 心の安らぎや気晴らしを感じるのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1885	113	138	1234	65	286	27	140
(%)	100	74.7	4.5	5.5	48.9	2.6	11.3	1.1	5.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1824	116	177	1029	98	225	20	138
(%)	100	75.1	4.8	7.3	42.3	4	9.3	0.8	5.7
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1959	164	242	1051	113	286	12	119
(%)	100	76.1	6.4	9.4	40.8	4.4	11.1	0.5	4.6

問4. 生きがい構成要素取得の場

(4) どの場で喜びや満足感を感じる人が多いですか

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1849	466	178	689	152	267	41	181
(%)	100	73.2	18.5	7	27.3	6	10.6	1.6	7.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1786	440	199	546	137	229	29	195
(%)	100	73.5	18.1	8.2	22.5	5.6	9.4	1.2	8
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1791	513	253	495	143	232	55	226
(%)	100	69.6	19.9	9.8	19.2	5.6	9	2.1	8.8

問4. 生きがい構成要素取得の場

(5) 人生観や価値観に影響を与えているのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1257	427	214	892	539	231	53	221
(%)	100	49.8	16.9	8.5	35.3	21.3	9.1	2.1	8.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1175	386	264	864	469	185	59	202
(%)	100	48.4	15.9	10.9	35.6	19.3	7.6	2.4	8.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1089	440	326	854	629	197	55	217
(%)	100	42.3	17.1	12.7	33.2	24.4	7.7	2.1	8.4

問4. 生きがい構成要素取得の場

(6) 生活の目標や目的は、どこにあると感じますか

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1823	430	165	171	406	211	27	266
(%)	100	72.2	17	6.5	6.8	16.1	8.4	1.1	10.5
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1830	441	190	142	344	199	30	200
(%)	100	75.3	18.1	7.8	5.8	14.2	8.2	1.2	8.2
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1974	436	223	124	428	176	30	211
(%)	100	76.7	16.9	8.7	4.8	16.6	6.8	1.2	8.2

問4. 生きがい構成要素取得の場

(7) どの場での生活が自分自身を向上させていると...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	864	779	358	474	625	246	97	254
(%)	100	34.2	30.9	14.2	18.8	24.8	9.7	3.8	10.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	797	720	423	478	612	221	61	226
(%)	100	32.8	29.6	17.4	19.7	25.2	9.1	2.5	9.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	656	744	524	479	786	223	66	242
(%)	100	25.5	28.9	20.4	18.6	30.5	8.7	2.6	9.4

問4. 生きがい構成要素取得の場

(8) 可能性を實現したり、やりとげたと感じるのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1008	872	358	202	405	289	143	223
(%)	100	39.9	34.5	14.2	8	16	11.4	5.7	8.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	970	830	415	152	378	289	131	219
(%)	100	39.9	34.2	17.1	6.3	15.6	11.9	5.4	9
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	986	853	439	182	402	295	178	237
(%)	100	38.3	33.2	17.1	7.1	15.6	11.5	6.9	9.2

問4. 生きがい構成要素取得の場
(9)役に立っていると感じたり評価を得ているのは...

	総数	家庭	仕事・会社	地域・近隣	個人的友人	世間・社会	その他	どこにもない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1564	795	401	306	214	175	104	152
(%)	100	61.9	31.5	15.9	12.1	8.5	6.9	4.1	6
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1511	760	423	218	218	149	93	165
(%)	100	62.2	31.3	17.4	9	9	6.1	3.8	6.8
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1460	813	487	270	236	147	121	186
(%)	100	56.7	31.6	18.9	10.5	9.2	5.7	4.7	7.2

問5. 生きがいの意味

	総数	生活の活力やほろい	生活のリズムやメリハリ	心の安らぎや晴らし	生きる喜びや満足感	人生観や価値観の形成	生きる目標や目的	自分自身の向上	自分の可能性の現実や何かをやりとげたと感じること	他人や社会の役に立っていると感じること	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	657	242	673	1015	167	454	535	656	341	21	45
(%)	100	26	9.6	26.7	40.2	6.6	18	21.2	26	13.5	0.8	1.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	632	212	686	949	149	438	503	632	381	12	40
(%)	100	26	8.7	28.2	39.1	6.1	18	20.7	26	15.7	0.5	1.6
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	934	209	814	1079	155	434	679	-	413	7	49
(%)	100	36.3	8.1	31.6	41.9	6	16.9	26.4	-	16.1	0.3	1.9

問5付問. 生きがいの有無

	総数	持っている	前は持っていたが、今は持っていない	持っていない	わからない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1804	130	179	360	52
(%)	100	71.4	5.1	7.1	14.3	2.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1982	107	96	206	39
(%)	100	81.6	4.4	4	8.5	1.6
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1670	203	344	285	71
(%)	100	64.9	7.9	13.4	11.1	2.8

問6. 生きがいの内容

	総数	仕事	趣味	スポーツ	学習活動	社会活動	自然とのふれあい	配偶者・結婚生活	子ども・孫・親などの家族・家庭	友人など家の交流	自分自身の健康づくり	ひとりで気ままに過ごすこと	自分自身の内面の充実	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	454	1066	227	135	130	467	748	1416	651	412	275	410	40	50
(%)	100	18	42.2	9	5.3	5.1	18.5	29.6	56.1	25.8	16.3	10.9	16.2	1.6	2
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	442	950	171	96	144	377	589	1096	562	388	179	328	14	8
(%)	100	18.2	39.1	7	4	5.9	15.5	24.2	45.1	23.1	16	7.4	13.5	0.6	0.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問7. 夫婦関係の現状

(1) 配偶者は私を頼りにしてくれている

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	863	1267	313	28	54
(%)	100	34.2	50.2	12.4	1.1	2.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	920	1173	255	18	64
(%)	100	37.9	48.3	10.5	0.7	2.6
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	1015	1166	278	25	89
(%)	100	39.4	45.3	10.8	1	3.5

問7. 夫婦関係の現状

(2) 配偶者は私を理解している

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	631	1271	508	50	65
(%)	100	25	50.3	20.1	2	2.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	675	1294	381	23	57
(%)	100	27.8	53.3	15.7	0.9	2.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	843	1257	359	30	84
(%)	100	32.8	48.9	14	1.2	3.3

問7. 夫婦関係の現状

(3) 配偶者は私を愛している

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	792	1279	324	48	82
(%)	100	31.4	50.7	12.8	1.9	3.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	804	1234	293	27	72
(%)	100	33.1	50.8	12.1	1.1	3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問7. 夫婦関係の現状

(4) 配偶者と価値観・考え方が似ている

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	312	1018	895	231	69
(%)	100	12.4	40.3	35.4	9.1	2.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	303	1033	849	174	71
(%)	100	12.5	42.5	34.9	7.2	2.9
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問7. 夫婦関係の現状

(5) 共通の趣味がある

	総数	まったくそのとおり	まあそのとおり	あまりそうでない	まったく違う	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	324	707	938	487	69
(%)	100	12.8	28	37.1	19.3	2.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	287	598	1032	436	77
(%)	100	11.8	24.6	42.5	17.9	3.2
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	317	571	1048	518	119
(%)	100	12.3	22.2	40.7	20.1	4.6

問7. 夫婦関係の現状
(6) 対話がある

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	701	1212	479	69	64
(%)	100	27.8	48	19	2.7	2.5
《第2回調査(平成8年)》	2430	721	1169	433	37	70
(%)	100	29.7	48.1	17.8	1.5	2.9
《第1回調査(平成3年)》	2573	758	1162	513	42	98
(%)	100	29.5	45.2	19.9	1.6	3.8

問7. 夫婦関係の現状
(7) よく一緒に出かける

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	822	914	605	114	70
(%)	100	32.6	36.2	24	4.5	2.8
《第2回調査(平成8年)》	2430	747	945	587	77	74
(%)	100	30.7	38.9	24.2	3.2	3
《第1回調査(平成3年)》	2573	815	870	686	103	99
(%)	100	31.7	33.8	26.7	4	3.8

問7. 夫婦関係の現状
(8) 配偶者は私の趣味や行動を尊重している

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	824	1255	326	53	67
(%)	100	32.6	49.7	12.9	2.1	2.7
《第2回調査(平成8年)》	2430	757	1192	366	45	70
(%)	100	31.2	49.1	15.1	1.9	2.9
《第1回調査(平成3年)》	2573	827	1229	360	54	103
(%)	100	32.1	47.8	14	2.1	4

問7. 夫婦関係の現状
(9) 配偶者は私を助けてくれる

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	894	1144	356	54	77
(%)	100	35.4	45.3	14.1	2.1	3
《第2回調査(平成8年)》	2430	865	1134	340	29	62
(%)	100	35.6	46.7	14	1.2	2.6
《第1回調査(平成3年)》	2573	975	1117	358	32	91
(%)	100	37.9	43.4	13.9	1.2	3.5

問7. 夫婦関係の現状
(10) 配偶者は私によりかかりすぎる

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	166	538	1393	353	75
(%)	100	6.6	21.3	55.2	14	3
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	177	591	1375	328	102
(%)	100	6.9	23	53.4	12.7	4

問7. 夫婦関係の現状
(11) 配偶者と家事を分担している

	総数	まったくそ のとおり	まあそのと おり	あまりそう でない	まったく違う	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	190	651	1102	526	56
(%)	100	7.5	25.8	43.6	20.8	2.2
《第2回調査(平成8年)》	2430	248	659	1012	454	57
(%)	100	10.2	27.1	41.6	18.7	2.3
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(1) 配偶者と互いに頼りにしあうこと

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	1465	876	93	38	53
(%)	100	58	34.7	3.7	1.5	2.1
《第2回調査(平成8年)》	2430	1616	671	71	20	52
(%)	100	66.5	27.6	2.9	0.8	2.1
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(2) 配偶者と互いに理解しあうこと

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	1787	596	76	11	55
(%)	100	70.8	23.6	3	0.4	2.2
《第2回調査(平成8年)》	2430	1761	556	57	7	49
(%)	100	72.5	22.9	2.3	0.3	2
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(3) 配偶者からの愛情が感じられること

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切 ではない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	1487	792	162	21	63
(%)	100	58.9	31.4	6.4	0.8	2.5
《第2回調査(平成8年)》	2430	1430	753	160	19	68
(%)	100	58.8	31	6.6	0.8	2.8
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(4) 価値観や考え方を共有すること

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	910	1179	285	85	66
(%)	100	36	46.7	11.3	3.4	2.6
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	900	1096	298	62	74
(%)	100	37	45.1	12.3	2.6	3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(5) 共通の趣味を持つこと

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	483	1248	384	343	67
(%)	100	19.1	49.4	15.2	13.6	2.7
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	537	1162	409	258	64
(%)	100	22.1	47.8	16.8	10.6	2.6
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(6) 対話を持つこと

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1640	746	66	13	60
(%)	100	65	29.5	2.6	0.5	2.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1581	731	51	12	55
(%)	100	65.1	30.1	2.1	0.5	2.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(7) 一緒に行動すること

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	636	1377	264	177	71
(%)	100	25.2	54.5	10.5	7	2.8
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	731	1296	211	120	72
(%)	100	30.1	53.3	8.7	4.9	3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(8) 互いに独自の趣味や行動を尊重すること

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1294	1029	108	34	60
(%)	100	51.2	40.8	4.3	1.3	2.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1262	962	115	29	62
(%)	100	51.9	39.6	4.7	1.2	2.6
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(9) 配偶者と助け合うこと

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1759	650	53	13	50
(%)	100	69.7	25.7	2.1	0.5	2
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	1785	544	35	9	57
(%)	100	73.5	22.4	1.4	0.4	2.3
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問8. 夫婦関係で大切なこと
(10) 配偶者と家事を分担し合うこと

	総数	とても大切	やや大切	わからない	あまり大切ではない	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	575	1322	337	236	55
(%)	100	22.8	52.4	13.3	9.3	2.2
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	573	1261	343	191	62
(%)	100	23.6	51.9	14.1	7.9	2.6
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

問9(1). 自分の親が寝たきり等になった場合

	総数	自分自身が中心になって介護する	配偶者が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	1082	194	238	313	444	254
(%)	100	42.9	7.7	9.4	12.4	17.6	10.1
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問9(2). 配偶者の親が寝たきり等になった場合

	総数	自分自身が中心になって介護する	配偶者が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	その他	無回答
≪第3回調査(平成13年)≫	2525	769	404	258	334	422	338
(%)	100	30.5	16	10.2	13.2	16.7	13.4
≪第2回調査(平成8年)≫	2430	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-
≪第1回調査(平成3年)≫	2573	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-

問9(3). 配偶者が寝たきり等になった場合

	総数	自分自身が中心になって介護する	子ども等が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	老人ホーム等の施設に入れて、介護をまかせる	夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	1888	25	140	127	186	88	71
(%)	100	74.8	1	5.5	5	7.4	3.5	2.8
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-

問9(4). 自分が寝たきり等になった場合

	総数	配偶者が中心になって介護する	子ども等が中心になって介護する	主にホームヘルパー等に介護をまかせる	一人で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	夫婦で老人ホーム等の施設に入り、介護を受ける	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	950	135	366	564	319	93	98
(%)	100	37.6	5.3	14.5	22.3	12.6	3.7	3.9
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-

問9付問(1). 介護の負担と自分の生活

	総数	そう思う	どちらとも言えない	そうは思わない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	506	1538	449	32
(%)	100	20	60.9	17.8	1.3
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-

問9付問(2). 介護と共生

	総数	そう思う	どちらとも言えない	そうは思わない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	779	1462	254	30
(%)	100	30.9	57.9	10.1	1.2
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-

問10(1). 長寿についての受けとめ方

	総数	生きられるなら、いつまでも生きたい	生き長らえるのは健康なうちだけでよい	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	276	2127	85	37
(%)	100	10.9	84.2	3.4	1.5
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-

問10(2). 長生きの年齢

	総数	60歳未満	60~69歳	70~79歳	80~89歳	90~99歳	100歳以上	無回答	平均(歳)
《第3回調査(平成13年)》	2525	0	24	475	1553	349	66	58	81.2
(%)	100	0	1	18.8	61.5	13.8	2.6	2.3	81.2
《第2回調査(平成8年)》	2430	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-

問11. 配偶者の職業生活からの引退時期についての年齢規範

	総数	引退にふさわしい年齢がある	健康な限りは何才までも働いてほしい	引退にふさわしい年齢はない	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	1025	896	450	103	51
(%)	100	40.6	35.5	17.8	4.1	2
《第2回調査(平成8年)》	2430	832	1038	384	60	116
(%)	100	34.2	42.7	15.8	2.5	4.8
《第1回調査(平成3年)》	2573	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-

※問11. 配偶者の職業生活からの引退時期についての年齢規範(年齢)

	該当数	50歳未満	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~69歳	70~74歳	75歳以上	無回答	平均(歳)
《第3回調査(平成13年)》	1025	0	11	31	270	553	141	9	10	64.2
(%)	100	0	1.1	3	26.3	54	13.8	0.9	1	64.2
《第2回調査(平成8年)》	832	2	14	29	226	453	88	6	14	63.7
(%)	100	0.2	1.7	3.5	27.2	54.4	10.6	0.7	1.7	63.7
《第1回調査(平成3年)》	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問12(1). 定年後の生活設計と夫婦の話し合い(現役)

	該当数	よくある	たまにある	まったくない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1495	100	684	600	111
(%)	100	6.7	45.8	40.1	7.4
《第2回調査(平成8年)》	1516	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	1493	149	752	429	163
(%)	100	10	50.4	28.7	10.9

問12(2). 配偶者の定年後の不安(現役)

	該当数	生計維持の困難	住宅の問題	自分や配偶者の健康	配偶者や親の介護	配偶者に先立たれる	再就職の問題	家族との人間関係が悪くなる	生活のほりや生きがいがない	所属や肩書がなくなる	今までの人的交流や情報量が減る	世の中の情報化の進展についていけない	社会から取り残される	時間をもてあます
《第3回調査(平成13年)》	1495	700	159	846	419	337	296	42	245	11	98	52	48	342
(%)	100	46.8	10.6	56.6	28	22.5	19.8	2.8	16.4	0.7	6.6	3.5	3.2	22.9
《第2回調査(平成8年)》	1516	505	103	860	361	352	294	40	328	22	113	20	48	393
(%)	100	33.3	6.8	56.7	23.8	23.2	19.4	2.6	21.6	1.5	7.5	1.3	3.2	25.9
《第1回調査(平成3年)》	1493	437	128	879	-	310	277	34	266	21	126	-	42	295
(%)	100	29.3	8.6	58.9	-	20.8	18.6	2.3	17.8	1.4	8.4	-	2.8	19.8

問12(2). 配偶者の定年後の不安(現役)

	該当数	地域社会に とけこめな い	その他	特に不安を 感じない	無回答
《第3回調査(平成13年)》	93	13	133	99	
(%)	6.2	0.9	8.9	6.6	
《第2回調査(平成8年)》	104	9	132	191	
(%)	6.9	0.6	8.7	12.6	
《第1回調査(平成3年)》	91	2	176	157	
(%)	6.1	0.1	11.8	10.5	

問13(1). 定年後の生活設計と夫婦の話し合い(OB)

	該当数	よくあった	たまにあった	まったくなかった	無回答
《第3回調査(平成13年)》	1012	158	597	170	87
(%)	100	15.6	59	16.8	8.6
《第2回調査(平成8年)》	891	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-
《第1回調査(平成3年)》	893	203	452	109	129
(%)	100	22.7	50.6	12.2	14.4

問13(2). 配偶者の定年後の生活問題(OB)

	該当数	経済的に苦しくなった	住宅問題で困った	自分や配偶者の健康や体力が衰えた	配偶者や親の介護が必要になった	配偶者に先立たれた	再就職のことで困った	家族との人間関係が悪くなった	生活のほりや生きがいがない	所属や肩書がなくなり、淋しい思いをした	今までの人的交流や情報量が減って困った	世の中の情報化の進展についていけず困った	社会から取り残されてしまった	時間をもてあました
《第3回調査(平成13年)》	1012	240	29	376	118	15	59	24	90	56	73	22	11	126
(%)	100	23.7	2.9	37.2	11.7	1.5	5.8	2.4	8.9	5.5	7.2	2.2	1.1	12.5
《第2回調査(平成8年)》	891	205	22	290	66	-	42	21	47	54	58	19	8	114
(%)	100	23	2.5	32.5	7.4	-	4.7	2.4	5.3	6.1	6.5	2.1	0.9	12.8
《第1回調査(平成3年)》	893	180	27	314	-	-	55	18	47	70	79	-	16	94
(%)	100	20.2	3	35.2	-	-	6.2	2	5.3	7.8	8.8	-	1.8	10.5

問13(2). 配偶者の定年後の生活問題(OB)

	該当数	地域社会に とけこめな かった	その他	特に問題は なかった	無回答
《第3回調査(平成13年)》	54	14	311	77	
(%)	5.3	1.4	30.7	7.6	
《第2回調査(平成8年)》	36	7	243	161	
(%)	4	0.8	27.3	18.1	
《第1回調査(平成3年)》	37	10	283	120	
(%)	4.1	1.1	31.7	13.4	

問14. 性別・年齢(性別)

	総数	男	女	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	333	2145	47
(%)	100	13.2	85	1.9
《第2回調査(平成8年)》	2430	241	2145	44
(%)	100	9.9	88.3	1.8
《第1回調査(平成3年)》	2573	271	2299	3
(%)	100	10.5	89.4	0.1

問14. 性別・年齢(年齢)

	総数	～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75歳以上	無回答	平均(歳)
《第3回調査(平成13年)》	2525	104	238	275	292	391	370	411	259	102	22	61	53
(%)	100	4.1	9.4	10.9	11.6	15.5	14.7	16.3	10.3	4	0.9	2.4	5.3
《第2回調査(平成8年)》	2430	115	219	268	348	327	396	384	256	73	14	30	52.6
(%)	100	4.7	9	11	14.3	13.5	16.3	15.8	10.5	3	0.6	1.2	52.6
《第1回調査(平成3年)》	2573	103	261	375	319	372	397	390	249	56	7	44	51.8
(%)	100	4	10.1	14.6	12.4	14.5	15.4	15.2	9.7	2.2	0.3	1.7	51.8

問15. 現在の就業形態

	総数	正規の社員・従業員	派遣・嘱託・パートタイマーなど	自営業・自由業・家族従業員	内職	シルバー人材センター(高齢者事業団)	無職	その他	無回答
《第3回調査(平成13年)》	2525	358	597	113	57	5	1025	172	198
(%)	100	14.2	23.6	4.5	2.3	0.2	40.6	6.8	7.8
《第2回調査(平成8年)》	2430	386	543	99	75	12	889	239	187
(%)	100	15.9	22.3	4.1	3.1	0.5	36.6	9.8	7.7
《第1回調査(平成3年)》	2573	358	551	130	111	2	1353	-	68
(%)	100	13.9	21.4	5.1	4.3	0.1	52.6	-	2.6

※問15. 現在の就業形態(退職後経過年数)

	該当数	5年未満	5～10年未満	10～15年未満	15～20年未満	20年以上	0年	無回答	平均(年) *0年含む
《第3回調査(平成13年)》	1025	225	174	134	74	264	3	151	14.7
(%)	100	22	17	13.1	7.2	25.8	0.3	14.7	14.7
《第2回調査(平成8年)》	889	178	136	133	62	237	5	138	15
(%)	100	20	15.3	15	7	26.7	0.6	15.5	15
《第1回調査(平成3年)》	1353	-	-	-	-	-	-	-	-
(%)	100	-	-	-	-	-	-	-	-

財団法人シニアプラン開発機構は…

厚生労働省、厚生年金基金連合会および民間企業の協力により昭和62年11月に設立された財団です。当財団では、おおむね50歳以上の企業在職者および企業退職者の方々を〈シニア〉と位置付け、豊かな人生経験を持ち、広範な分野で活躍できるこの年代の方々がその持てる力を活かして、充実したシニア生活を送るためのシステム〈シニアプラン〉を企画開発し、社会に提案しています。

【主な事業】

- サラリーマンの生きがい、社会活動、生涯学習等の研究
- 年金生活設計(PLP)セミナーの研究開発
- 企業福祉に関する調査研究
- シニアプランフォーラム等、豊かなシニアライフに向けた啓発活動

この調査研究事業は、社会福祉・医療事業団〈長寿社会福祉基金〉の交付金により財団法人長寿社会開発センターが助成したものです。

少子高齢社会における

サラリーマンの生活・就業スタイルの多様化に関する研究

平成15年3月

財団法人 シニアプラン開発機構

東京都新宿区西新宿 4-34-1 東京年金基金センター2階

TEL: 03-5371-2022(代表)

FAX: 03-5371-2100